

茨城県教育財団文化財調査報告第146集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 4

前田村遺跡 G・H・I区
(下 卷)

平成 11 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

210.271

Y67

3

(NK)

茨城県教育財団文化財調査報告第146集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画 整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 4

ま え だ む ら

前田村遺跡 G・H・I区

(下 卷)

平成 11 年 3 月



茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

00603031

目 次

一 下 巻 一

第5節 I区の遺構と遺物	681
(2) 炉跡	681
(3) 集石遺構	683
(4) 土坑	684
(5) 遺物包含層	781
2 平安時代の遺構と遺物	807
(1) 竪穴住居跡	807
3 中・近世の遺構と遺物	819
(1) 墳墓	819
(2) 土坑	821
(3) 地下式竈	822
(4) 井戸	825
(5) 溝	827
4 その他の遺構と遺物	829
(1) 方形竪穴状遺構	829
(2) 土坑	832
(3) 焼土遺構	833
5 遺構外出土遺物	834
第6節 まとめ	849
1 旧石器時代	849
2 縄文時代	849
3 古墳時代	852
4 平安時代	852
5 中世	852
付 章	861
前田村遺跡D・G・H・I区出土の人骨と動物遺体	861
前田村遺跡出土縄文土器の胎土分析	868
前田村遺跡から出土した和鏡の自然科学的研究	883
鉛同位体比による産地推定の原理	890

插图目次

- 第586图 第1号炉跡·出土遺物実測図 681
- 第587图 第2号炉跡·出土遺物実測図 682
- 第588图 第3号炉跡·出土遺物実測図 683
- 第589图 第1号集石·出土遺物実測図 684
- 第590图 第2533号土坑·出土遺物実測図 685
- 第591图 第2540号土坑·出土遺物実測図 687
- 第592图 第2532·2546·2551号土坑,
第2546号土坑出土遺物実測図 689
- 第593图 第2548号土坑·出土遺物実測図 690
- 第594图 第2550号土坑·出土遺物実測図(1) ... 691
- 第595图 第2550号土坑出土遺物実測図(2) 692
- 第596图 第2552·2556号土坑,
第2552号土坑出土遺物実測図 693
- 第597图 第2559·2560号土坑·
出土遺物実測図 695
- 第598图 第2560土坑出土遺物実測図 696
- 第599图 第2561号土坑·出土遺物実測図(1) ... 697
- 第600图 第2561号土坑出土遺物実測図(2) 698
- 第601图 第2562号土坑·出土遺物実測図 699
- 第602图 第2565号土坑·出土遺物実測図 700
- 第603图 第2569·2570号土坑,
第2569号土坑出土遺物実測図 701
- 第604图 第2570号土坑出土遺物実測図 702
- 第605图 第2571号土坑·出土遺物実測図 703
- 第606图 第2575·2576·2601号土坑,
第2576号土坑出土遺物実測図 705
- 第607图 第2574 A·B·2578号土坑,
第2578号土坑出土遺物実測図 706
- 第608图 第2579号土坑·出土遺物実測図 707
- 第609图 第2580号土坑·出土遺物実測図 708
- 第610图 第2581号土坑·出土遺物実測図 709
- 第611图 第2582号土坑·出土遺物実測図 710
- 第612图 第2584号土坑·出土遺物実測図 710
- 第613图 第2585号土坑·出土遺物実測図 712
- 第614图 第2586 A·B·2596号土坑,
第2586 A号土坑出土遺物実測図 713
- 第615图 第2589·2590 A·B·2591·2629号土坑,
第2589号土坑出土遺物実測図 714
- 第616图 第2590 A号土坑出土遺物実測図 716
- 第617图 第2592号土坑·出土遺物実測図 717
- 第618图 第2595号土坑·出土遺物実測図 718
- 第619图 第2597号土坑·出土遺物実測図 719
- 第620图 第2599号土坑·出土遺物実測図 720
- 第621图 第2600号土坑·出土遺物実測図 721
- 第622图 第2601号土坑出土遺物実測図 722
- 第623图 第2603号土坑·出土遺物実測図 722
- 第624图 第2604 A·B号土坑,
第2604 A号土坑出土遺物実測図 724
- 第625图 第2605·2633号土坑,
第2605号土坑出土遺物実測図 725
- 第626图 第2607号土坑·出土遺物実測図(1) ... 727
- 第627图 第2607号土坑出土遺物実測図(2) 728
- 第628图 第2608号土坑·出土遺物実測図 729
- 第629图 第2611号土坑·出土遺物実測図 730
- 第630图 第2618号土坑·出土遺物実測図 731
- 第631图 第2616·2622号土坑,
第2622号土坑出土遺物実測図 733
- 第632图 第2628号土坑·出土遺物実測図 734
- 第633图 第2633号土坑出土遺物実測図 735
- 第634图 第2619·2620·2635号土坑,
第2635号土坑出土遺物実測図 736
- 第635图 第2639号土坑·出土遺物実測図 737
- 第636图 第2640 A·B·2666·2667·2668号土坑,
第2640 A号土坑出土遺物実測図 739
- 第637图 第2640 A号土坑出土遺物実測図 740
- 第638图 第2640 B号土坑出土遺物実測図 742
- 第639图 第2641 A·B号土坑,
第2641 A号土坑出土遺物実測図 743
- 第640图 第2652号土坑·出土遺物実測図 744

第641图	第2661·2664号土坑, 第2661号土坑出土遺物実測図	745	第674图	第3号遺物包含層 出土遺物実測図(2)	785
第642图	第2646·2662号土坑, 第2662号土坑出土遺物実測図(1)	747	第675图	第4号遺物包含層実測図(1)	786
第643图	第2662号土坑出土遺物実測図(2)	748	第676图	第4号遺物包含層実測図(2)	787
第644图	第2664号土坑出土遺物実測図	749	第677图	第4号遺物包含層実測図(3)	788
第645图	第2665号土坑·出土遺物実測図	749	第678图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(1)	793
第646图	第2666号土坑出土遺物実測図	750	第679图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(2)	794
第647图	第2667号土坑出土遺物実測図	751	第680图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(3)	795
第648图	第2668号土坑出土遺物実測図	752	第681图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(4)	796
第649图	第2669号土坑·出土遺物実測図	753	第682图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(5)	797
第650图	第2670·2671号土坑, 第2670号土坑 出土遺物実測図	754	第683图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(6)	798
第651图	第2681号土坑·出土遺物実測図	755	第684图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(7)	799
第652图	第2684号土坑·出土遺物実測図	756	第685图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(8)	800
第653图	第2687·2688号土坑, 第2688号土坑出土遺物実測図	757	第686图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(9)	801
第654图	第2693号土坑·出土遺物実測図	758	第687图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(9)	802
第655图	第2698号土坑·出土遺物実測図	759	第688图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(1)	803
第656图	第2699号土坑·出土遺物実測図	761	第689图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(2)	804
第657图	第2710号土坑·出土遺物実測図	762	第690图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(3)	805
第658图	第2723号土坑·出土遺物実測図	763	第691图	第4号遺物包含層 出土遺物実測図(4)	806
第659图	第2724号土坑·出土遺物実測図	764	第692图	第459号住居跡·出土遺物実測図	808
第660图	第2727号土坑·出土遺物実測図	765	第693图	第461号住居跡実測図	809
第661图	第2752号土坑·出土遺物実測図	766	第694图	第461号住居跡出土遺物実測図	811
第662图	第2757号土坑·出土遺物実測図	767	第695图	第462号住居跡·出土遺物実測図	813
第663图	縄文土坑実測図(1)	769	第696图	第473号住居跡·出土遺物実測図	814
第664图	縄文土坑実測図(2)	770			
第665图	縄文土坑実測図(3)	771			
第666图	縄文土坑実測図(4)	772			
第667图	縄文土坑実測図(5)	773			
第668图	縄文土坑実測図(6)	774			
第669图	縄文土坑実測図(7)	775			
第670图	縄文土坑実測図(8)	776			
第671图	縄文土坑実測図(9)	777			
第672图	第3号遺物包含層実測図	782			
第673图	第3号遺物包含層 出土遺物実測図(1)	784			

第697図	第474号住居跡・出土遺物実測図 ……	816	第713図	遺構外出土遺物実測図(1) ……	837
第698図	第502号住居跡・出土遺物実測図 ……	818	第714図	遺構外出土遺物実測図(2) ……	838
第699図	第1号墳墓・出土遺物実測図 ……	820	第715図	遺構外出土遺物実測図(3) ……	839
第700図	第2729号土坑実測図 ……	821	第716図	遺構外出土遺物実測図(4) ……	840
第701図	第29号地下式竈実測図 ……	822	第717図	遺構外出土遺物実測図(5) ……	841
第702図	第30号地下式竈実測図 ……	823	第718図	遺構外出土遺物実測図(6) ……	842
第703図	第31号地下式竈実測図 ……	825	第719図	遺構外出土遺物実測図(7) ……	843
第704図	第31号井戸・出土遺物実測図 ……	826	第720図	遺構外出土遺物実測図(8) ……	844
第705図	第32号井戸実測図 ……	826	第721図	遺構外出土遺物実測図(9) ……	845
第706図	第121号溝・出土遺物実測図 ……	827	第722図	遺構外出土遺物実測図(10) ……	846
第707図	第120・122・123・124・125号 溝実測図 ……	828	第723図	縄文時代遺構変遷図(1) ……	854
第708図	第12号方形竪穴状遺構実測図 ……	830	第724図	縄文時代遺構変遷図(2) ……	855
第709図	第13号方形竪穴状遺構実測図 ……	831	第725図	縄文時代遺構変遷図(3) ……	856
第710図	その他の土坑実測図 ……	832	第726図	縄文時代遺構変遷図(4) ……	857
第711図	第3号焼土遺構実測図 ……	833	第727図	縄文時代遺構変遷図(5) ……	858
第712図	第4号焼土遺構実測図 ……	833	第728図	縄文時代遺構変遷図(6) ……	859
			第729図	縄文時代遺構変遷図(7) ……	860

表 目 次

表18	前田村遺跡Ⅰ区縄文時代土坑一覧表 ……	768
表19	前田村遺跡Ⅰ区平安時代住居跡一覧表 ……	819
表20	前田村遺跡Ⅰ区中・近世溝一覧表 ……	829
表21	前田村遺跡Ⅰ区その他の土坑一覧表 ……	832

写真図版目次

G区遺構		P L 7	第399号住居跡, 第400号住居跡遺物出土状況, 第407号住居跡
P L 1	遺跡全景	P L 8	第1898号土坑, 第2003号土坑遺物出土状況, 第2078号土坑, 第2093号土坑, 第2085号土坑土層断面・遺物出土状況, 第2085号土坑遺物出土状況, 第2169号土坑土層断面・遺物出土状況, 第2169号土坑
P L 2	遺跡遠景(西から), G区南西部全景	P L 9	第2211号土坑遺物出土状況, 第2232号土坑, 第2256号土坑遺物出土状況, 第2260号土坑遺物出土状況, 第2266号土坑土層断面, 第2266号土坑3層遺物出土状況, 第
P L 3	第2266号土坑遺物出土状況, 第27号井戸馬骨出土状況		
P L 4	テストビット土層断面, 第354・355号住居跡, 第356号住居跡		
P L 5	第357号住居跡, 第358号住居跡, 第385号住居跡		
P L 6	第386号住居跡, 第389号住居跡土器埋設炉, 第397号住居跡		

2304号土坑遺物出土狀況, 第2306号土坑
P L 10 第1号掘立柱建物跡, 第3号掘立柱建物
跡遺物出土狀況, 第2号方形竅穴狀遺構,
第3号方形竅穴狀遺構, 第23号井戸, 第
24号井戸, 第26号井戸土層断面, 第101号
溝土層断面

G区出土遺物

P L 11 第336·338·340·341·342·343·344号
住居跡出土遺物
P L 12 第347·350·351号住居跡出土遺物
P L 13 第352·358·362号住居跡出土遺物
P L 14 第363·364A·365·367号住居跡出土遺
物
P L 15 第367·370·374·375·377·378·380号
住居跡出土遺物
P L 16 第381·384·385号住居跡出土遺物
P L 17 第385·386·389·392·393·397·400·
403号住居跡出土遺物
P L 18 第393·418号住居跡, 第1901·1908·1915
号土坑出土遺物
P L 19 第1915·1917·1920·1927·1932号土坑出
土遺物
P L 20 第1932·1944·1948·1952·1954·1970号
土坑出土遺物
P L 21 第1982号土坑出土遺物
P L 22 第1982·1989·2003·2005·2007号土坑出
土遺物
P L 23 第2007·2015·2016号土坑出土遺物
P L 24 第2016·2026·2035·2043·2045·2047·
2052号土坑出土遺物
P L 25 第2054·2060·2064·2068A·2078号土坑
出土遺物
P L 26 第2078·2085·2093·2104·2119·2126·
2129号土坑出土遺物
P L 27 第2129·2143·2147·2153号土坑出土遺物
P L 28 第2147·2153·2155·2169·2173·2179·
2211·2228号土坑出土遺物

P L 29 第2115·2232·2243号土坑出土遺物
P L 30 第2215·2228·2231·2233·2260·2266号
土坑出土遺物
P L 31 第2265·2266·2274·2276·2278号土坑出
土遺物
P L 32 第2288·2304·2311·2313·2324A·2330
号土坑出土遺物
P L 33 第1号土器施設遺構, 第3号掘立柱建物
跡, 第107·111号溝, 遺構外出土遺物
P L 34 第342号住居跡出土遺物, 第357号住居跡
出土遺物
P L 35 第1898号土坑出土遺物, 第2078号土坑出
土遺物
P L 36 第2316号土坑出土遺物, 遺構外出土遺物
P L 37 第1983号土坑出土遺物(1), 第1983号土坑
出土遺物(2)

H区遺構

P L 38 H区南部全景, 第3号遺構群全景
P L 39 第419号住居跡遺物出土狀況, 第421号住
居跡遺物出土狀況, 第424号住居跡
P L 40 第427·428号住居跡, 第429号住居跡遺物
出土狀況, 第431号住居跡
P L 41 第433·435·436号住居跡, 第436号住居跡
埋設土器, 第2493号土坑遺物出土狀況
P L 42 第501号住居跡, 第2463号土坑人骨出土狀
況
P L 43 第2357号土坑遺物出土狀況, 第2366号土
坑, 第2370号土坑, 第2388号土坑遺物出
土狀況, 第2394号土坑, 第2396·2397·2404
号土坑遺物出土狀況, 第2415·2435·2463
号土坑, 第2429号土坑
P L 44 第2524号土坑, 第2528号土坑, 第2529号土
坑, 第2855号土坑遺物出土狀況, 第2909
·2910·2915号土坑, 第2912号土坑遺物
出土狀況, 第2960号土坑遺物出土狀況, 第
2号土器施設遺構

P L 45 第485号住居跡, 第488号住居跡, 第492号住居跡, 第495号住居跡, 第496号住居跡, 第488号住居跡掘り方, 第492号住居跡掘り方, 第495号住居跡掘り方

P L 46 第486住居跡, 第489号住居跡, 第490号住居跡

P L 47 第491号住居跡, 第494号住居跡, 第498号住居跡

P L 48 第4号方形竪穴状遺構, 第5・6・8号方形竪穴状遺構, 第7号方形竪穴状遺構, 第9号方形竪穴状遺構, 第10号方形竪穴状遺構, 第11号方形竪穴状遺構, 第2756号土坑, 第2759号土坑

P L 49 第2761号土坑, 第2879号土坑, 第2883号土坑, 第2940A号土坑, 第25号地下式竈, 第26号地下式竈, 第27号地下式竈, 第28号地下式竈

P L 50 第29号井戸, 第1号堀, 遺構外遺物出土状況

H区出土遺物

P L 51 第424・427・429・431号住居跡出土遺物

P L 52 第432・433・435・436・439・452・499・501号住居跡出土遺物

P L 53 第2364号土坑出土遺物

P L 54 第2365・2372・2378・2380・2388・2390・2394号土坑出土遺物

P L 55 第2396・2397・2399・2401号土坑出土遺物

P L 56 第2408・2415・2427・2429・2432・2446・2451・2461・2462号土坑出土遺物

P L 57 第2462・2468・2472・2474・2475・2486・2493号土坑出土遺物

P L 58 第2493・2497・2499・2502・2507・2510・2512号土坑出土遺物

P L 59 第2521・2524・2541・2764・2773・2775・2799号土坑出土遺物

P L 60 第2807・2826・2840・2841・2844号土坑出土遺物

P L 61 第2844・2853・2854・2859号土坑出土遺物

P L 62 第2862・2867・2870・2899・2910・2912号土坑出土遺物

P L 63 第2931・2932・2939号土坑出土遺物

P L 64 第2945号土坑出土遺物

P L 65 第2945・2946・2952・2960・2966号土坑出土遺物, 第2号土器埋設遺構出土遺物

P L 66 第485・488・489・490・491・492号住居跡出土遺物

P L 67 第492・494・495号住居跡出土遺物

P L 68 第495・496号住居跡出土遺物

P L 69 第498号住居跡, 第11号方形竪穴状遺構, 第1号堀出土遺物

P L 70 第29号井戸, 第2号堀A・B, 第137号溝, 遺構外出土遺物

I区遺構

P L 71 I区全景, I区南西部全景

P L 72 第4号遺物包含層全景, 第4号遺物包含層土層断面

P L 73 第447号住居跡, 第448号住居跡, 第463号住居跡

P L 74 第463号住居跡遺物出土状況, 第464A・B号住居跡, 第464A号住居跡遺物出土状況

P L 75 第467号住居跡, 第475号住居跡, 第2497号土坑遺物出土状況

P L 76 第2546号土坑遺物出土状況, 第2600号土坑, 第2604A・B号土坑

P L 77 第2618号土坑, 第2661・2664・2665・2681・2684号土坑, 第2681号土坑遺物出土状況

P L 78 第2698号土坑遺物出土状況, 第3号遺物包含層全景, 第4号遺物包含層土層断面

P L 79 第4号遺物包含層遺物出土状況, 第461号住居跡, 第462号住居跡

P L 80 第462号住居跡竈, 第473号住居跡, 第12号方形竪穴状遺構

P L 81 第1号墳墓, 第31号地下式竈, 第120・121・122号溝

I 区出土遺物

- P L 82 第446·448·450·453号住居跡出土遺物
- P L 83 第454·457·463号住居跡出土遺物
- P L 84 第463·464A·475号住居跡出土遺物
- P L 85 第464A·B·475号住居跡出土遺物
- P L 86 第2·3号 炉跡, 第2533·2540·2550号
土坑出土遺物
- P L 87 第2550·2552·2560号土坑出土遺物
- P L 88 第2561·2585号土坑出土遺物
- P L 89 第2590A·2595·2597·2601·2604A号
土坑出土遺物
- P L 90 第2607·2622·2640A号土坑出土遺物
- P L 91 第2640A·B号土坑出土遺物
- P L 92 第2661·2662·2664·2665·2667号土坑
出土遺物
- P L 93 第2681·2684·2698·2723·2727·2752
号土坑, 第3号遺物包層出土遺物
- P L 94 第4号遺物包含層出土遺物
- P L 95 第4号遺物包含層出土遺物
- P L 96 第4号遺物包含層出土遺物
- P L 97 第4号遺物包含層出土遺物, 遺構外出土
遺物
- P L 98 遺構外, 第463·464A号住居跡出土遺物
- P L 99 第464A·B号住居跡, 第2581号土坑, 第
4号遺物包含層, 遺構外出土遺物
- P L 100 第2640A·2669号土坑, 第4号遺物包含
層, 遺構外出土遺物
- P L 101 第454号住居跡出土遺物, 第463号住居跡
出土遺物
- P L 102 第464A号住居跡出土遺物, 第2559·2607
号土坑, 第4号遺物包含層, 遺構外出土
遺物
- P L 103 第450·475号住居跡, 第2540·2607·2662
号土坑, 遺構外出土遺物, 第464号住居跡,
遺構外出土遺物
- P L 104 第464号住居跡, 第2579·2590A·2597·
2599·2639号土坑, 第4号遺物包含層出
土遺物, 遺構外出土遺物
- P L 105 第446·450·464B号住居跡, 遺構外出土
遺物, 第2662号土坑, 遺構外出土遺物
- P L 106 第464A·475号住居跡, 第4号遺物包含
層, 遺構外出土遺物, 第464A号住居跡,
第2699号土坑, 第4号遺物包含層, 遺構
外出土遺物
- P L 107 第459·461·462号住居跡出土遺物
- P L 108 試料1~8 電子顕微鏡写真
- P L 109 試料9~13, 15~17 電子顕微鏡写真
- P L 110 試料18·19 電子顕微鏡写真
試料1·2·3·5·12·14 黑雲母分
析位置顕微鏡写真

第5節 1区の遺構と遺物

(2) 炉跡

1区では、縄文時代の炉跡3基を調査した。炉跡は、周囲に住居跡の掘り込みやピットを確認していないことから屋外炉とも考えられるが、調査した3基は傾斜地に立地しているため掘り込みやピットを確認できなかった可能性も否定できない。それゆえ、ここでは炉跡という表現を使用した。

第1号炉跡 (第586図)

位置 調査区の北西部, E14c3区。

確認状況 深鉢の胴部片を埋設した土器片埋設炉で、周囲に掘り込みやピットは確認できなかった。

規模と平面形 長径40cm, 短径36cmのほぼ円形で、深さ10cmである。埋設土器は深鉢の胴部片で、炉の東部だけに残存している。掘り方は、長径50cm, 短径46cmのほぼ円形で、深さ10cmである。

炉床 平坦で、ロームを炉床としている。炉床面には、被熱の痕跡がわずかに認められる。

覆土 3層に分層される。第3層は掘り方の覆土である。

土層解説

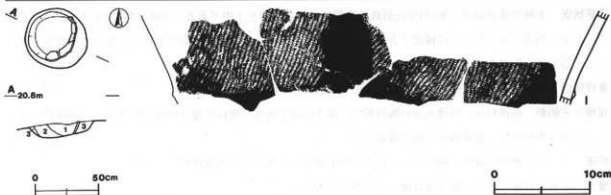
- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

遺物 埋設土器1点が出土している。1は深鉢の胴部片で、埋設土器である。

所見 本跡の時期は、埋設土器から縄文時代中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。

第1号炉跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第586図 1	深鉢 縄文土器	B(8.3)	胴部片。胴部は外傾する。微染帯により文様を掻出し、R.Lの単純縄文を光耀している。	砂粒 褐色 普通	P192 5% 埋設土器 加曾利EⅢ式



第586図 第1号炉跡・出土遺物実測図

第2号炉跡 (第587図)

位置 調査区の北西部, E14c4区。

確認状況 深鉢の胴部を埋設した土器埋設炉で、周囲に掘り込みやピットは確認できなかった。

規模と平面形 長径26cm, 短径24cmのほぼ円形で、深さ4cmである。埋設土器は深鉢の胴部片で、断続的に巡

らしている。掘り方は、径29cmの円形で、深さ4cmである。

炉床 平坦で、ロームを炉床としている。炉床面は、火熱によりわずかに赤変硬化している。

覆土 2層に分層される。第2層は掘り方の覆土である。

土層解説

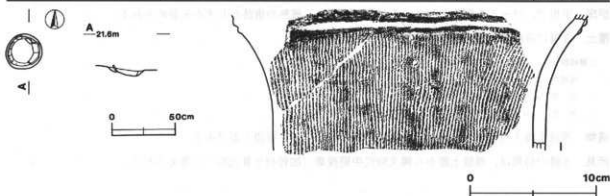
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

遺物 埋設土器1点が出土している。1は深鉢の胴部で、埋設土器である。

所見 本跡の時期は、埋設土器から縄文時代中期後葉（加曾利EⅠ式期）と考えられる。

第2号炉跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第587図 1	深鉢 縄文土器	B (11.0)	胴部、胴部は外反する。熱赤文を地文とし、沈線を有する隆帯を巡らしている。	粘土・色調・焼成 石英・炭石・雲母 黒褐色 普通	P193 5% PL86 埋設土器 加曾利EⅠ式



第587図 第2号炉跡・出土遺物実測図

第3号炉跡（第588図）

位置 調査区の北部，E14h4区。

確認状況 本跡の確認面は、第451号住居跡の南側に堆積する褐色土中である。本跡は第455号住居跡として調査したが、周辺に床やピットは確認できなかったことから炉跡と改称した。炉の形態は、深鉢の胴部片を埋設した土器片囲い炉である。中央部は耕作の攪乱により残存していない。

重複関係 本跡は第451号住居跡と重複するが、重複関係は不明である。

規模と平面形 長径44cm，短径36cmの楕円形で、深さ16cmである。埋設土器は深鉢の胴部片で、断続的に巡らしている。掘り方は、北東部の一部で確認した。

炉床 ロームを掘りくぼめ、炉床としている。炉床面は、火熱により赤変硬化している。

覆土 3層に分層される。第3層は掘り方の覆土である。

土層解説

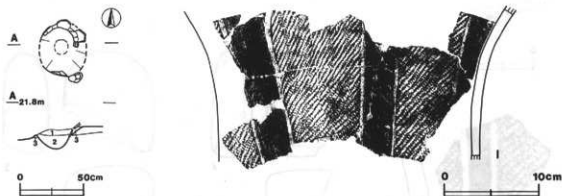
- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量 第1層より色調が明るい
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量 第1層より色調が明るい

遺物 埋設土器1点が出土している。1は深鉢の胴部片で、埋設土器である。埋設土器に使用された土器片は、同一個体である。内面は被熱し、赤変している。

所見 本跡の時期は、埋設土器から縄文時代中期後葉（加曾利EⅡ式期）と考えられる。

第3号炉跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備 考
第588図 1	深鉢 縄文土器	B (17.5)	胴部片。胴部は外反する。R Lの単節縄文を地文とし、沈線による幅広い懸垂文間を磨り消している。	粘土・色調・焼成 砂粒 によい黄褐色 普通	P16 10% PL86 埋設土器 加曾利EⅡ式



第588図 第3号炉跡・出土遺物実測図

(3) 集石遺構

I区では、縄文時代の集石遺構1基を調査した。集石遺構は、周辺に掘り込みやピットを確認していないことから屋外施設と考えられる。

第1号集石遺構 (第589図)

位置 調査区の中央部, E14:7区。

確認状況 第447号住居跡の覆土上面で確認した。本跡に伴う掘り込みやピットは周辺に確認できなかった。

重複関係 本跡は第447号住居跡の覆土上面に付設していることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長径50cm, 短径46cmのほぼ円形に広がっている。

覆土 1層で、第447号住居跡の覆土と近似しており、本跡の覆土と分層することができなかった。

土層解説

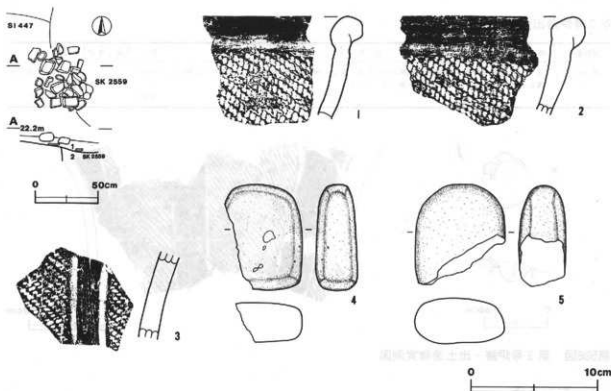
1 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 円礫及び角礫が29点, 磨石3点, 凹石片1点, 石皿片1点, 縄文土器片6点が出土している。礫及び石器の石材は安山岩, 砂岩, 凝灰岩で、そのほとんどが被熱して赤変している。1・2は深鉢の口縁部片で、同一個体である。口唇部は肥厚し、R L Rの複節縄文を施している。3は深鉢の胴部片で、L Rの単節縄文を地文とし、沈線による懸垂文間を磨り消している。4・5は磨石である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅡ式期)と考えられる。

第1号集石遺構出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第589図 4	磨 石	8.6	(6.0)	3.3	(260)	安山岩	Q3 覆土
5	磨 石	(8.0)	7.2	3.7	(278)	安山岩	Q4 覆土



第589図 第1号集石遺構・出土遺物実測図

(4) 土坑

I区では、縄文時代の土坑174基を調査した。土坑は、遺物の出土状況や遺構の残存状況が良好なものについて解説を加え、それ以外のものは一覧表で記載した。第2551・2574・2577・2586・2598・2640・2641・2647・2660・2689・2722号土坑については、調査の過程で2基の土坑が重複していることが判明したため、A号土坑とB号土坑とに分けた。

第2533号土坑 (第590図)

位置 調査区の北部, E14 e6区。

規模と平面形 長径2.52m, 短径2.24mの楕円形で, 深さは92cmである。

長径方向 N-10°-E

壁 内傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 4か所。P₁は中央部に位置し, 長径28cm, 短径26cmのほぼ円形で, 深さ59cmである。P₂~P₄は, 長径50~66cm, 短径38~58cmの楕円形で, 深さ26~52cmである。性格は不明である。

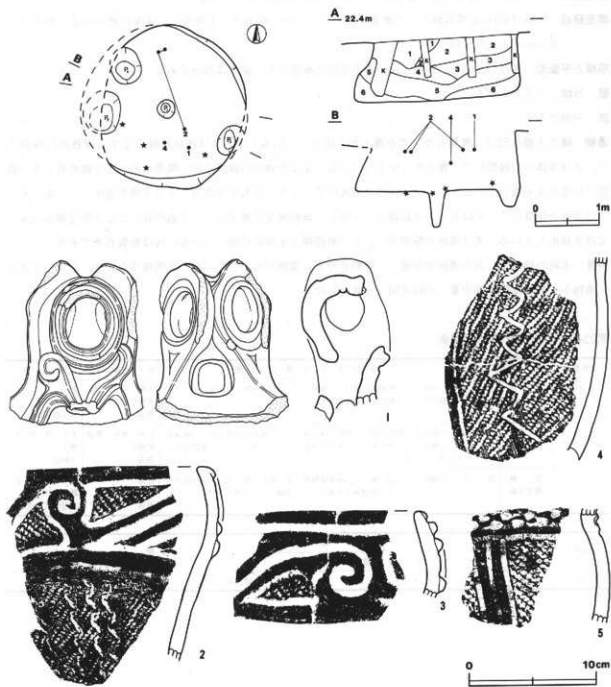
覆土 6層に分層され, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化物少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化物中量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 炭化物少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化物中量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化物少量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化物少量, 獣骨片 |

遺物 縄文土器片1245点、獣骨片が出土している。1は深鉢の把手部片で、覆土上層から出土している。2・3は深鉢の口縁部片、4・5は深鉢の胴部片で、2・4は覆土上層から出土している。2・3は2本一組の隆帯により端部に渦巻文を有するモチーフを施している。地文は、口縁部にはRLの単節縄文を横位に、胴部にはRLの単節縄文を縦位に施している。2の胴部に施している縄文は結節させている。4はRLの単節縄文を地文とし、沈線による懸垂文を施している。5はLRLの複節縄文を地文とし、交互刺突による連続口の字状文を巡らしている。獣骨片はイノシシの顎骨で、第6層から出土している。

所見 本跡は、形状や出土遺物から、縄文時代中期後葉（加曾利EⅠ式期）の袋状土坑と考えられる。



第590図 第2533号土坑・出土遺物実測図

第2533号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第590図 1	深鉢 縄文土器	B (12.9)	把手部片。襷状把手で、内面は環線状を呈する。沈線を有する隆帯により文様を描出している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P77 5% PL86 覆土上層 加賀利E1式

第2540号土坑 (第591図)

位置 調査区の北部, E14f7区。

重複関係 本跡は第446号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

調査経過 本跡は第444号住居跡として調査を進めていたが、炉ヤビットがなく、底面に踏み固まりがないことから、第2540号土坑と改称した。

規模と平面形 長径(3.00)m, 短径2.70mの不定形と推定され、深さは24cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

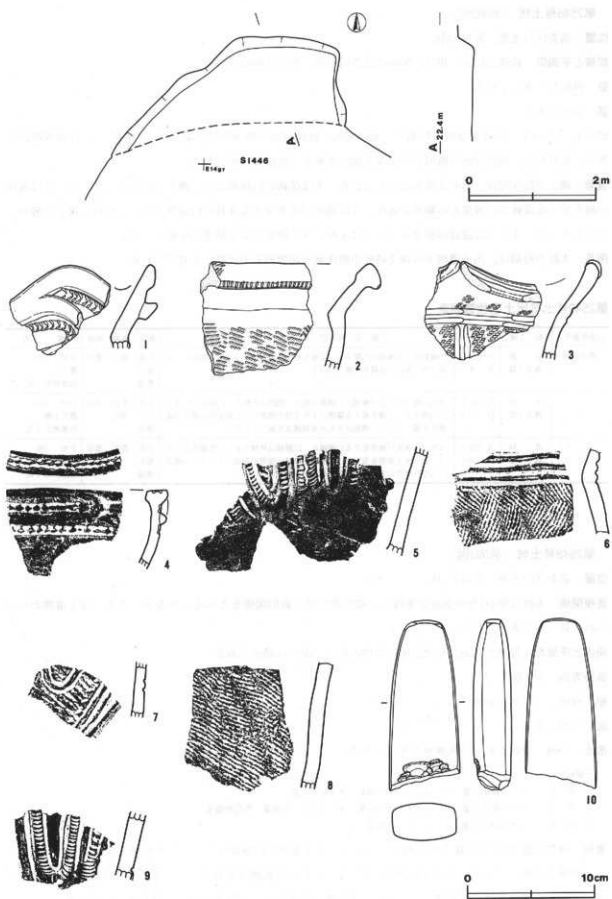
遺物 縄文土器片52点, 磨製石斧1点が覆土から出土している。1・3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、2は深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。4は深鉢の口縁部片で、隆帯に沿って半截竹管により結節平行沈線文を施している。5・9は深鉢の胴部片で、キザミを有する隆帯により文様を描出している。6・7は深鉢の胴部片で、6はRLの単節縄文、7はLの無節縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文により文様を描出している。8は深鉢の胴部片で、Lの無節縄文を縦位に施している。10は磨製石斧である。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少量で、時期差のある遺物が出土しているため明確でないが、主体となる出土遺物から縄文時代中期中葉(中峙式期)と考えられる。

第2540号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第591図 1	深鉢 縄文土器	B (7.1)	口縁部片。口縁部は外傾する。隆帯により文様を描出し、隆帯に沿って半截竹管による結節平行沈線文を施している。	石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P79 5% 覆土 河玉台Ⅱ式
2	深鉢 縄文土器	B (9.0)	口縁部から胴部の破片。胴部はほぼ直立し、口縁部は外傾する。口縁部部の断面形は三角形を呈し、キザミを施している。胴部にはLの無節縄文を施している。	石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P3 5% PL86 覆土 中峙式
3	深鉢 縄文土器	B (7.9)	口縁部から胴部の破片。口縁部は外傾する。波状口縁を呈し、波頂部は反傾となる。RLの単節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。	砂粒 焼灰色 普通	P4 5% PL86 覆土 加賀利E1式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第591図 10	磨製石斧	(15.3)	5.6	3.0	(379)	緑色凝灰岩	Q1 覆土 PL103



第591图 第2540号土坑·出土遗物实测图

第2546号土坑 (第592図)

位置 調査区の北部, E14 f8区。

規模と平面形 長径2.10m, 短径2.00mのほぼ円形で, 深さは90cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 2か所。P₁は東壁際に位置し, 長径56cm, 短径44cmの楕円形で, 深さ17cmである。P₂は西壁際に位置し, 長径44cm, 短径32cmの楕円形で, 深さ18cmである。性格は不明である。

遺物 縄文土器片92点, 磨石1点が出土している。1は深鉢の口縁部片で, 覆土から出土している。2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片, 3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で, いずれも覆土上層から出土している。4・5は深鉢の胴部片で, 4は沈線, 5は隆帯による懸垂文を施している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EⅠ式期)と考えられる。

第2546号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第592図 1	深鉢 縄文土器	A [31.6] B (6.1)	口縁部片。口縁部は内彎する。沈線を有する隆帯により文様を描出し, 区画文内に縦位の沈線を充満している。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P81 5% 覆土上層 加曾利EⅠ式
2	深鉢 縄文土器	A [24.6] B [10.9]	波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。胴部は外傾し, 口縁部はわずかに内彎する。沈線を有する隆帯により文様を描出し, 区画文内に縦位の沈線を充満している。胴部はRシの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P80 5% 覆土上層 加曾利EⅠ式
3	深鉢 縄文土器	A [20.6] B (6.0)	4単位の波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部直下にキザミを有する隆帯を画らし, 幅狭の口縁部文様帯を形成している。口縁部には交互刻みによる連続コの字状文を施している。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P82 5% 覆土上層 加曾利EⅠ式

第2548号土坑 (第593図)

位置 調査区の北部, E14 e6区。

重複関係 本跡は第441号住居跡と重複し, 切り合いでは新旧関係をとらえられなかったが, 出土遺物からは本跡が新しいと考えられる。

規模と平面形 長径2.86m, 短径2.60mの楕円形で, 深さは48cmである。

長径方向 N-65°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

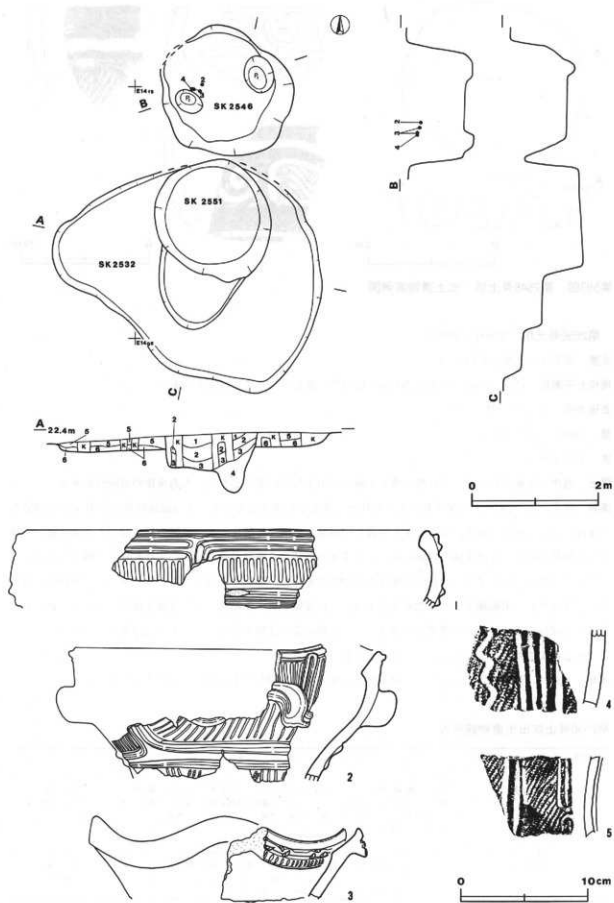
覆土 3層に分層され, 自然堆積と考えられる。

土層解説

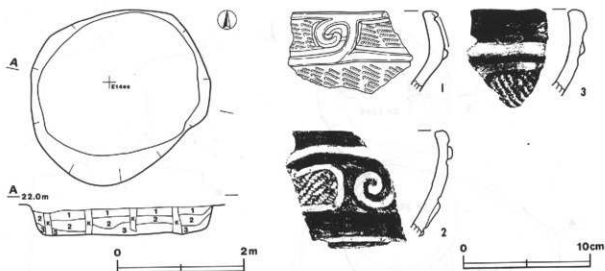
- 1 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック微量, 炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量

遺物 縄文土器片232点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で, Lの無節縄文を地文とし, 隆帯により渦巻文を施している。2は深鉢の口縁部片で, LRの単節縄文を地文とし, 隆帯により渦巻文と区画文を施している。3は深鉢の口縁部片で, LRの単節縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第592图 第2532·2546·2551号土坑, 第2546号土坑出土遗物实测图



第593図 第2548号土坑・出土遺物実測図

第2550号土坑 (第594・595図)

位置 調査区の北部, E14hs区。

規模と平面形 長径1.86m, 短径[1.60]mの楕円形と推定され, 深さは96cmである。

長径方向 N-84°-W

壁 内傾して立ち上がる。

底 平皿である。

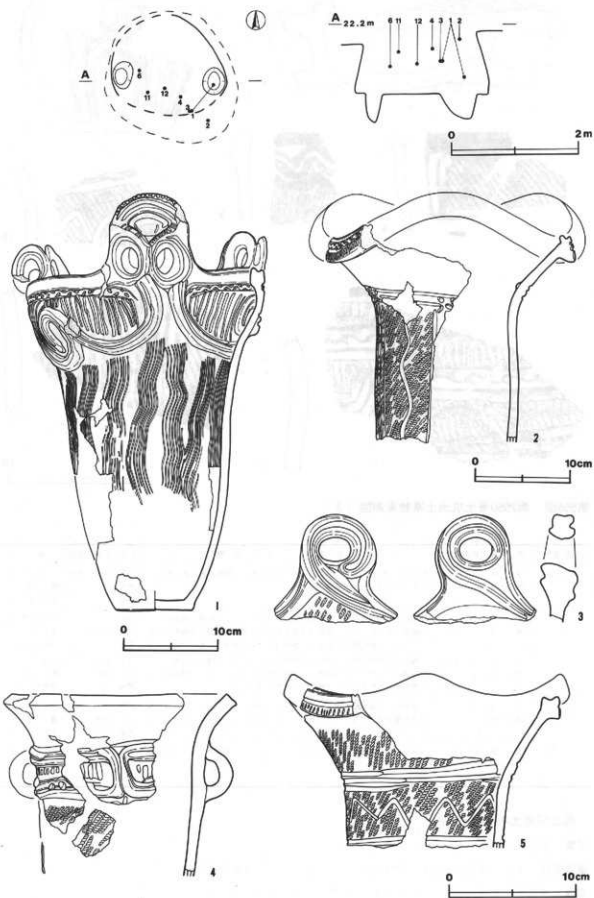
覆土 遺物が投棄されたような状態で覆土上層から出土していることから, 人為堆積の可能性がある。

遺物 縄文土器片183点が投棄されたような状態で覆土から出土している。1は眼鏡状把手を有するほは完形の深鉢, 2は3単位の波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片, 3は深鉢の把手部片, 4は深鉢の口縁部から胴部の破片, 6は深鉢の口縁部片, 7は深鉢の底部から胴部の破片で, いずれも覆土上層から出土している。5は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で, 覆土から出土している。8・9は深鉢の口縁部片で, 8はRLの単節縄文, 9は撚糸文を地文とし, 沈線を有する縹帯により文様を描出している。10・11は深鉢の口縁部片で, RLの単節縄文を地文とし, 沈線により文様を描出している。12は深鉢の口縁部片で, RLの単節縄文を地文とし, 沈線により懸垂文を施している。

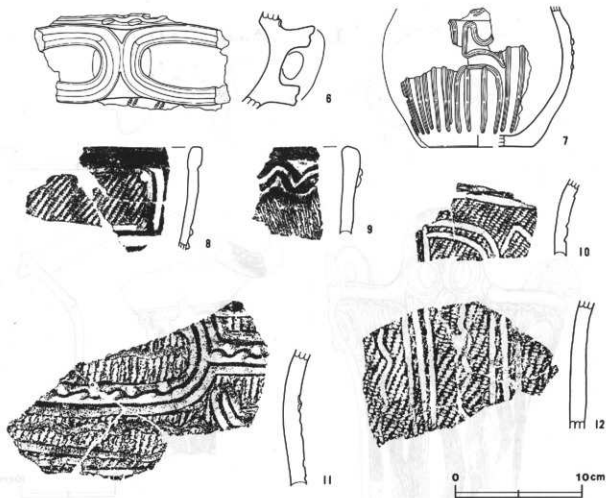
所見 本跡は, 形状や出土遺物から, 縄文時代中期後葉(加曾利E I式期)の袋状土坑と考えられる。

第2550号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第594図 1	深鉢 縄文土器	A 23.0 B 43.4 C 8.0	胴部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに内彎する。3単位の眼鏡状把手を有し, 内1単位は大形である。口唇部直下には交互刺突による連続口の字状文を巡らしている。口縁部は沈線を有する縹帯により文様を描出し, 区画文内に縦位の沈線を光噴している。胴部には眼鏡状工具による波状文を垂下させている。	石英・長石・雲母 褐色色 普通	P83 70% PL86 覆土上層 中幹式併行
2	深鉢 縄文土器	A [26.0] B 23.2	3単位の波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり, 口縁部は外屈する。口唇部直下に出させた幅状の口縁部文様帯を形成している。口縁部には交互刺突による連続口の字状文を施している。胴部はRLの単節縄文を地文とし, 沈線による懸垂文を施している。	石英・砂粒 にぶい褐色 普通	P84 40% PL87 覆土上層 加曾利E I式



第594图 第2550号土坑·出土遗物实测图(1)



第595図 第2550号土坑出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第594図 3	深鉢 縄文土器	B (8.6)	把手部片。円孔を有し、円孔に沿って沈線を有する隆帯を裏手状に施している。地文はLRの単筋縄文である。	石英・長石・雲母 褐色色 普通	P88 5% PL86 覆土上層 加曽利E I式
4	深鉢 縄文土器	A (16.5) B (14.3)	口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部は無文である。胴部は沈線を有する隆帯により胴部文様帯を形成し、4単位幅の横状把手を有する。胴部はRLの単筋縄文を地文としている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P85 40% PL87 覆土上層 中鉢式併行
5	深鉢 縄文土器	A (21.2) B (12.7)	口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部直下に突出させた幅状の口縁部文様帯を形成している。胴部はRLの単筋縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。	石英・長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P86 20% 覆土上層 加曽利E I式
第595図 6	深鉢 縄文土器	B (7.6)	口縁部片。口縁部は内傾し、口唇部直下で折折して外反する。口縁部は連続する横状把手を有し、その直上には交互刺突による連続コノ字状文を高らしている。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P87 5% PL86 覆土上層 中鉢式
7	深鉢 縄文土器	B (11.2) C (8.8)	底部から胴部の破片。胴部は内傾して立ち上がる。縦隆帯により文様を描出している。	石英・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P89 5% PL87 覆土上層 中鉢式併行

第2552号土坑 (第596図)

位置 調査区の北部、E14h5区。

重複関係 本跡が第2556号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.14m、短径1.06mの円形で、深さは144cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 8層に分層され、自然堆積と考えられる。

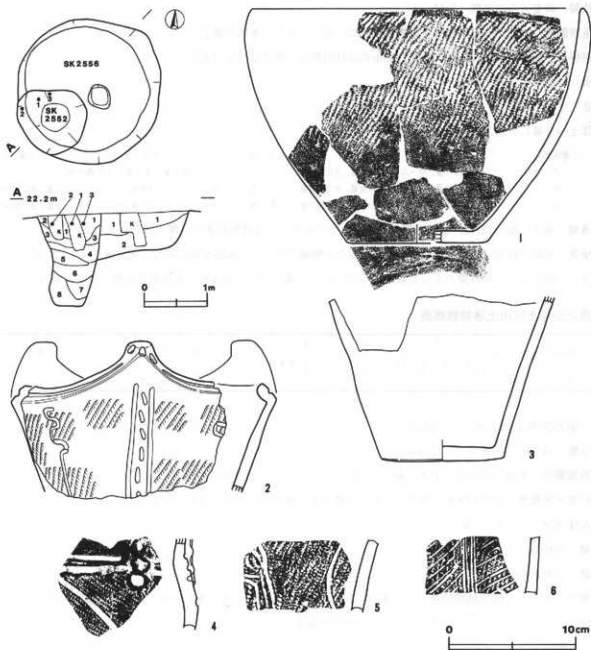
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック中量
- 4 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化物微量

- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 7 明褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 8 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、第6層より色調が明るい

遺物 縄文土器片1245点が出土している。1は鉢の口縁部から底部の破片、2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、3は深鉢の底部から胴部の破片で、覆土上層から出土している。4は深鉢の頸部片で、頸部に沈線を巡らし、端部に円形刺突文を有する隆帯を垂下させている。5・6は深鉢の胴部片で、LRの単筋縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内Ⅰ式期）と考えられる。



第596図 第2552・2556号土坑，第2552号土坑出土遺物実測図

第2552号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第596図 1	鉢 縄文土器	A (26.2)	口縁部から底部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。LRの單節縄文を施している。	砂粒 にぶい灰色 普通	P91 5% PL87 覆土上層 瓶之内I式
		B 18.6			
		C (11.2)			
2	深鉢 縄文土器	A (18.6)	3單位の底状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり、口唇部直下で内傾する。口唇部直下には波頂部を起点に比喩を施している。胴部はLの無節縄文を施文とし、比喩により文様を描出している。	砂粒 灰黄褐色 普通	P90 10% PL87 覆土上層 瓶之内I式
		B (12.4)			
3	深鉢 縄文土器	B (12.8)	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	P92 20% PL87 覆土上層 瓶之内I式
		C 9.7			

第2559号土坑 (第597図)

位置 調査区の中央部, E14h7区。

重複関係 本跡が第2560号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.86m, 短径1.80mのほぼ円形で、深さは74cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 6層に分層され、自然堆積と考えられる。

土層解説			4	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量, 第2層より色調が暗い
1 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化物少量				
2 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量	5	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化物中量	
3 褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量	6	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量	

遺物 縄文土器片137点, 磨製石斧1点が出土している。1は磨製石斧で、覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少量であるため明確でないが、本跡が第2560号土坑を掘り込んでいることと、覆土が縄文時代中期後葉のものと同様であることから、縄文時代中期後葉(加曾利E式期)と考えられる。

第2559号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第597図 1	打製石斧	8.6	5.4	1.3	72	安山岩	Q32 覆土 P L102

第2560号土坑 (第597・598図)

位置 調査区の中央部, E14h8区。

重複関係 本跡は第2559号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長径2.06m, 短径[1.64]mの楕円形と推定され、深さは34cmである。

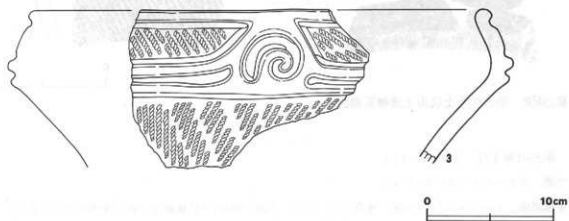
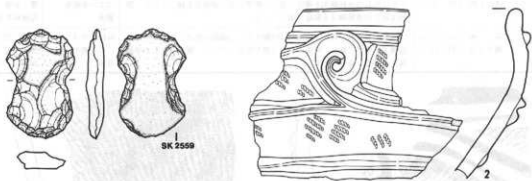
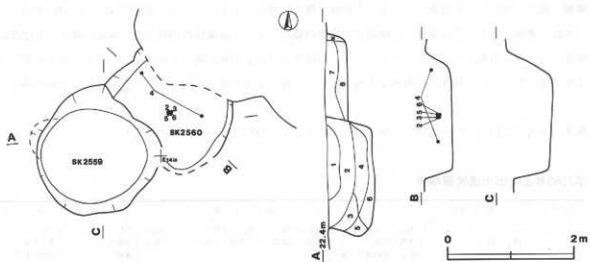
長径方向 N-46°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 第1～6層は第2559号土坑の覆土であり、第7・8層が本跡の覆土である。遺物が投棄されたような状態で出土していることから、人為堆積の可能性がある。

土層解説	
7 にぶい褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化物中量
8 褐色	ローム粒子中量, ロームブロック中量, 炭化物少量



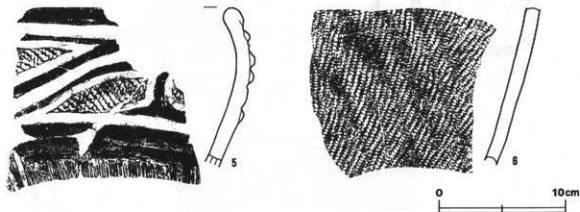
第597图 第2559·2560号土坑·出土物实测图

遺物 縄文土器片24点が投棄されたような状態で覆土上層から出土している。第597図2～4、第598図5・6は本跡の遺物である。2は深鉢の口縁部から頸部の破片、3～5は深鉢の口縁部から胴部の破片、6は深鉢の胴部片で、覆土中層から出土している。5は、口縁部にはR Lの単節縄文を地文とし、2本一組の隆帯により文様を描出している。胴部には条線文を地文とし、沈線による懸垂文を施している。6はR Lの単節縄文を施している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅡ式期）と考えられる。

第2560号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第597図 2	深鉢 縄文土器	B (14.2)	口縁部から頸部の破片。口縁部は内彎する。胴部に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。口縁部には隆帯により渦巻文を施している。地文はR Lの単節縄文である。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	P93 5% 覆土中層 加曾利EⅡ式
3	深鉢 縄文土器	A (35.0) B (12.5)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾し、口縁部は内彎する。口縁部は地文としてR Lの単節縄文を横位に施し、隆帯により渦巻文を施している。胴部はR Lの単節縄文を縦位に施している。	砂粒・スコリア ぶい赤褐色 普通	P94 5% PL87 覆土中層 加曾利EⅡ式
4	深鉢 縄文土器	A (42.0) B (11.3)	口縁部から胴部の破片。口縁部は内彎する。口縁部は地文としてR Lの単節縄文を横位に施し、隆帯により文様を描出している。胴部はR Lの単節縄文を縦位に施している。	砂粒・スコリア ぶい褐色 普通	P95 5% PL87 覆土中層 加曾利EⅡ式



第598図 第2560号土坑出土遺物実測図

第2561号土坑（第599・600図）

位置 調査区の中央部、E14h8区。

重複関係 本跡は第447号住居跡と重複しているが、本跡と第447号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径(1.70)m、短径1.30mの楕円形と推定され、深さは104cmである。

長径方向 N-84°-W

壁 内傾して立ち上がる。

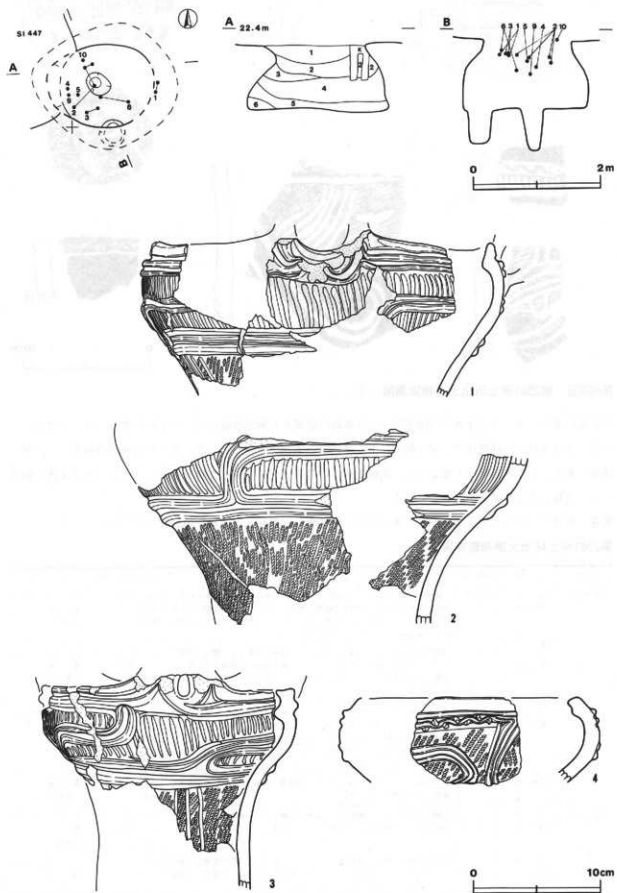
底 平坦である。

覆土 6層に分層され、遺物が投棄されたような状態で出土していることから、人為堆積の可能性がある。

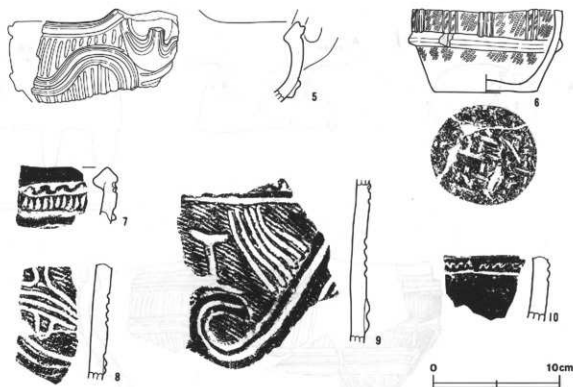
土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	4 褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック微量、炭化物少量	5 褐色	ローム粒子多量、ロームブロック微量
3 褐色	ローム粒子微量、ロームブロック少量	6 褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量

遺物 縄文土器片210点が、投棄されたような状態で、覆土上層から出土している。1～3は深鉢の口縁部か



第599图 第2561号土坑·出土遗物实测图(1)



第600図 第2561号土坑出土遺物実測図(2)

ら胴部の破片, 4・5は深鉢の口縁部片, 6は深鉢の底部から胴部の破片で, いずれも覆土上層から出土している。7は深鉢の口縁部片で, 交互刺突による連続コの字状文を施している。8・9は深鉢の胴部片で, 同一個体である。Lは無節縄文を地文とし, 沈線を有する隆帯と沈線により文様を描出している。10は深鉢の胴部片で, 沈線による波状文を巡らしている。

所見 本跡は, 形状や出土遺物から, 縄文時代中期後葉(加曾利E I式期)の袋状土坑と考えられる。

第2561号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第599図 1	深鉢 縄文土器	A (34.8) B (17.6)	口縁部から胴部の破片。口縁部は内彎する。3単位の縦線状把手を有する。胴部に隆帯を巡らし, 口縁部文様帯を形成している。口縁部は縦位の沈線文を地文とし, 沈線を有する隆帯によりクランク文を施している。胴部はR Lの単節縄文を地文とし, 沈線文を垂下させている。	石英・長石 黒褐色 普通	P96 30% PL88 覆土上層 加曾利E I式
2	深鉢 縄文土器	B (16.1)	口縁部から胴部の破片。胴部は外反し, 口縁部は内彎する。胴部に隆帯を巡らし, 口縁部文様帯を形成している。口縁部は縦位の沈線文を地文とし, 沈線を有する隆帯によりクランク文を施している。胴部はR Lの単節縄文を施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P97 30% PL88 覆土上層 加曾利E I式
3	深鉢 縄文土器	A (19.8) B (17.1)	把手及び胴下半部欠損。胴部は外反し, 口縁部は内彎する。3単位の縦線状把手を有する。胴部に隆帯を巡らし, 口縁部文様帯を形成している。口縁部は縦位の沈線文を地文とし, 沈線を有する隆帯によりクランク文を施している。胴部はR Lの単節縄文を地文とし, 沈線文を垂下させている。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P98 70% PL88 覆土上層 加曾利E I式
4	深鉢 縄文土器	A (17.0) B (6.9)	口縁部破片。口縁部は内彎する。口唇部直下には交互刺突による連続コの字状文を巡らしている。口縁部はR Lの単節縄文を地文とし, 沈線を有する隆帯により文様を描出している。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P99 50% PL88 覆土上層 加曾利E I式
第600図 5	深鉢 縄文土器	A (22.5) B (7.5)	縦線状把手を有する口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部は縦位の沈線文を地文とし, 沈線を有する隆帯により文様を描出している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P100 5% PL88 覆土上層 加曾利E I式
6	深鉢 縄文土器	B (6.9) C 8.1	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。R Lの単節縄文を地文とし, 胴部中央に隆帯を巡らしている。胴部には隆帯による縦垂文と沈線による無垂文とを交互に施している。底面に削代痕がある。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P101 10% PL88 覆土上層 加曾利E I式

第2562号土坑 (第601図)

位置 調査区の北部, E14h6区。

重複関係 本跡が第471号住居跡の炉を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径0.98m, 短径0.92mのほぼ円形で, 深さは50cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 7層に分層され, 自然堆積と考えられる。

土層解説

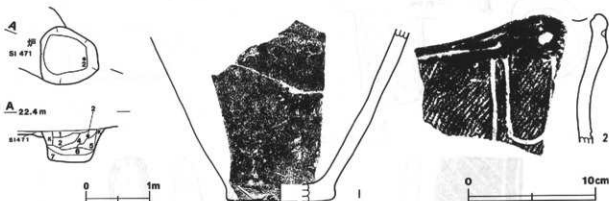
- | | | |
|---|-----|-------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小アブロック微量, 焼土粒子少量, 炭化物中量 |
| 2 | 赤褐色 | ローム粒子中量, ローム小アブロック微量, 焼土粒子多量, 炭化物中量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小アブロック微量, 焼土粒子少量, 炭化物少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小アブロック中量, 焼土粒子中量, 炭化物中量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小アブロック中量, 炭化物中量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子少量, ローム小アブロック少量, 炭化物微量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子微量, ローム小アブロック微量 |

遺物 縄文土器片125点が出土している。1は深鉢の底部から胴部片で, 覆土から出土している。2は覆土上層から出土した, 波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で, 波頂部直下に円形刺突文を施し, Rの無節縄文を地文として, 沈線により文様を描出している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期前葉(堀之内I式期)と考えられる。

第2562号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第601図 1	深鉢 縄文土器	B (13.4) C 8.4	底部から胴部の破片。胴縁は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 にぶい赤褐色	P102 5% 覆土 堀之内式



第601図 第2562号土坑・出土遺物実測図

第2565号土坑 (第602図)

位置 調査区の北部, E14g4区。

重複関係 本跡は第448号住居跡と重複し, 切り合いでは新旧関係はとらえられなかったが, 出土遺物から本跡が新しいと考えられる。

規模と平面形 長径1.44m, 短径1.14mの楕円形で, 深さは138cmである。

長径方向 N-24°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 11層に分層され、自然堆積と考えられる。

土層解張

1 暗褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量、炭化物中量	6 暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化物中量
2 褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化物中量	7 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量、炭化物少量	8 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック中量
4 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化物中量	9 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
5 褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化物少量	10 ぶい褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化物少量
		11 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

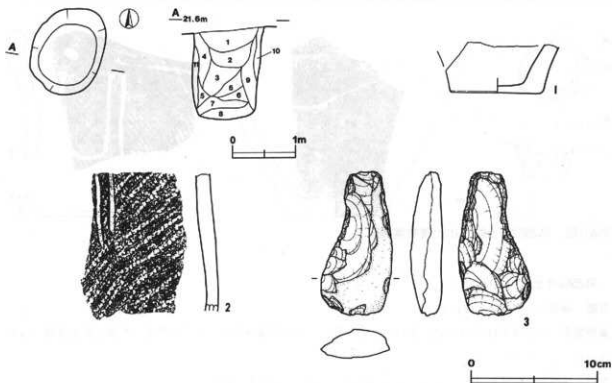
遺物 縄文土器片62点、磨製石斧1点が覆土から出土している。1は深鉢の底部片である。2は深鉢の胴部片で、LRの単節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。3は刃部だけを磨いた磨製石斧である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内I式期）と考えられる。

第2565号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第602図 1	深鉢 縄文土器	B (3.3) C 7.3	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 黒褐色 普通	P103 5% 覆土 堀之内式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第602図	3	磨製石斧	11.4	4.7	2.5	167	ホルンフェルス Q 33 覆土



第602図 第2565号土坑・出土遺物実測図

第2569号土坑（第603図）

位置 調査区の中央部，E14j7区。

重複関係 本跡は第2570号土坑と重複するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径[2.28]m，短径2.00mの楕円形と推定され，深さは42cmである。

長径方向 N-36°-E

壁 外傾して立ち上がる。

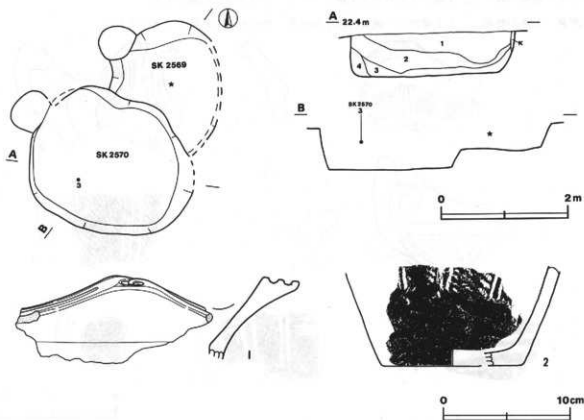
底 平坦である。

遺物 縄文土器片84点，獣骨片が覆土から出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。2は深鉢の底部から胴部の破片で，LRの単節縄文を地文として，2本一組の沈線による懸垂文を施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。

第2569号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色澤・焼成	備考
第603図 1	深鉢 縄文土器	B (6.9)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は大きく外傾する。口唇部に沈線を基らし，波頭部では渦巻文となる。無文。	砂粒 黒褐色 普通	P104 5% 覆土 加曾利E I式



第603図 第2569・2570号土坑，第2569号土坑出土遺物実測図

第2570号土坑 (第603・604図)

位置 調査区の中央部, E14j7区。

重複関係 本跡は第2569号と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.68m, 短径2.14mの楕円形で, 深さは70cmである。

長径方向 N-64°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

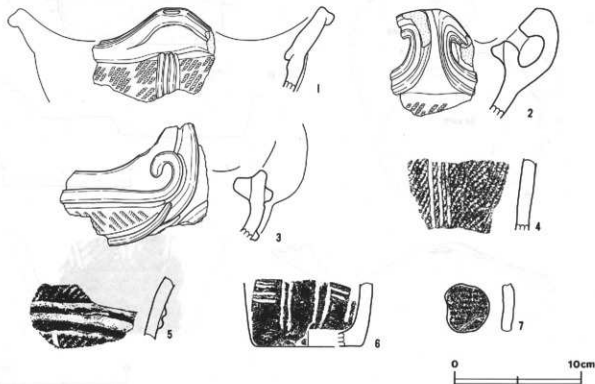
覆土 4層に分層され, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|----------------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化物少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化物微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量 |

遺物 縄文土器片137点, 土器片円盤1点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片, 2は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で, いずれも覆土から出土している。3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で, 覆土上層から出土している。4は深鉢の胴部片で, R Lの単節縄文を地文とし, 沈線による懸垂文を施している。5は深鉢の頸部片で, R Lの単節縄文を地文とし, 沈線を有する隆帯を巡らしている。6は深鉢の底部から胴部の破片で, 沈線による懸垂文を施している。7は土器片円盤である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第604図 第2570号土坑出土遺物実測図

第2570号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第604図 1	深鉢 縄文土器	A (23.8) B (7.5)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。R Lの単節縄文を地文とし, 波頂部下より隆帯を垂下させている。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P107 5% 覆土 加曾利E I式

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第604図 2	深鉢 縄文土器	B (8.7)	皿縁状を呈する把手部及び口縁部の破片。口縁部は内彎する。口縁部はR Lの単筋縄文を施している。	石英・長石 褐色 普通	P105 5% 覆土 加曽利E I式
3	深鉢 縄文土器	B (9.7)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外彎する。口唇部直下の内面に隆帯を帯びている。口縁部はR Lの単筋縄文を施し、隆帯により文様を演出している。	石英・長石 褐色 普通	P105 5% 覆土上層 加曽利E I式

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現 存 率 (%)	形 状 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		長 さ	幅	厚 さ				
第604図 7	土器片内腔	3.9	3.6	0.8	(16)	90	R Lの単筋縄文。	D P23 覆土

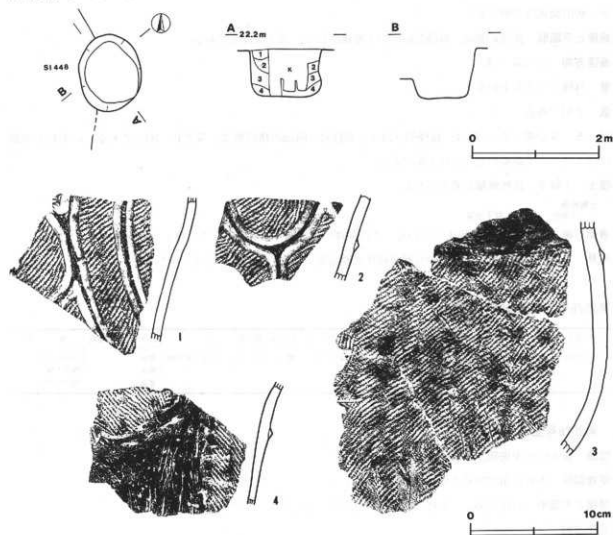
第2571号土坑 (第605図)

位置 調査区の北部, E14r5区。

重複関係 本跡は第448号住居跡と重複し, 切り合いでは新旧関係はとらえられなかったが, 出土遺物から本跡が新しいと考えられる。

規模と平面形 長径1.22m, 短径0.98mの楕円形で, 深さは74cmである。

長径方向 N-3°-W



第605図 第2571号土坑・出土遺物実測図

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 4層に分層され、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック微量、炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片53点が出土している。1・2は深鉢の胴部片で、微隆帯により文様を描出し、文様内にR Lの単節縄文を充填している。3は深鉢の口縁部付近から胴部の破片で、口縁部直下に微隆帯を巡らし、胴部にはR Lの単節縄文を縦位に施している。4は深鉢の胴部片で、微隆帯により文様を描出し、区画文内にLの無節縄文を充填している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅡ式期）と考えられる。

第2576号土坑（第606図）

位置 調査区の北部，E14f0区。

重複関係 本跡は第2601号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。また、第2575号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径3.98m，短径2.80mの不整楕円形で、深さは14cmである。

長径方向 N-54°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 3か所。P₁～P₃は、長径60～74cm，短径44～64cmの楕円形で、深さ43～90cmである。いずれも本跡に伴うピットであるかどうかは不明である。

覆土 1層で、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 縄文土器片229点が出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で、覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内Ⅰ式期）と考えられる。

第2576号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第606図 1	深鉢 縄文土器	B (17.0) C (11.0)	底部から胴部の破片。胴部はわずかに内傾して立ち上がる。L Rの単節縄文を施している。	砂粒 褐色 普通	P106 5% 覆土下層 堀之内Ⅰ式

第2578号土坑（第607図）

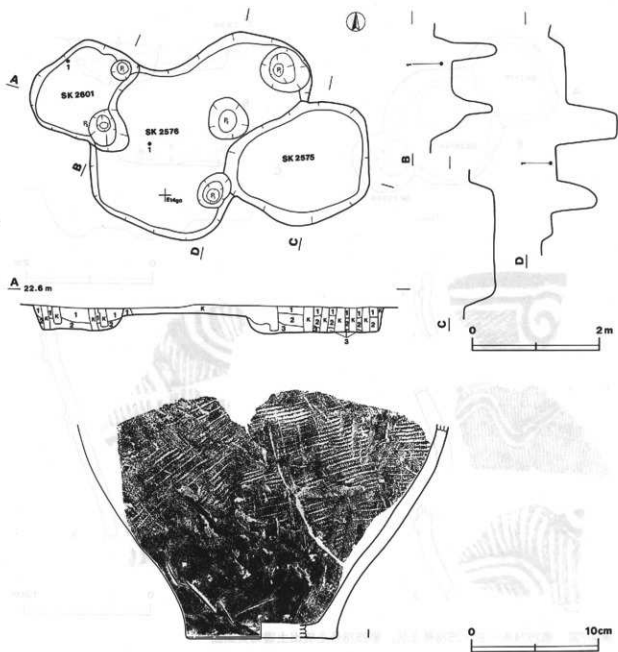
位置 調査区の中央部，E14j5区。

重複関係 本跡は第2574号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.66m，短径[1.44]mの楕円形と推定され、深さは38cmである。

長径方向 N-62°-E

壁 外傾して立ち上がる。



第606図 第2575・2576・2601号土坑，第2576号土坑出土遺物実測図

底 平坦である。

覆土 2層に分層され，自然堆積と考えられる。

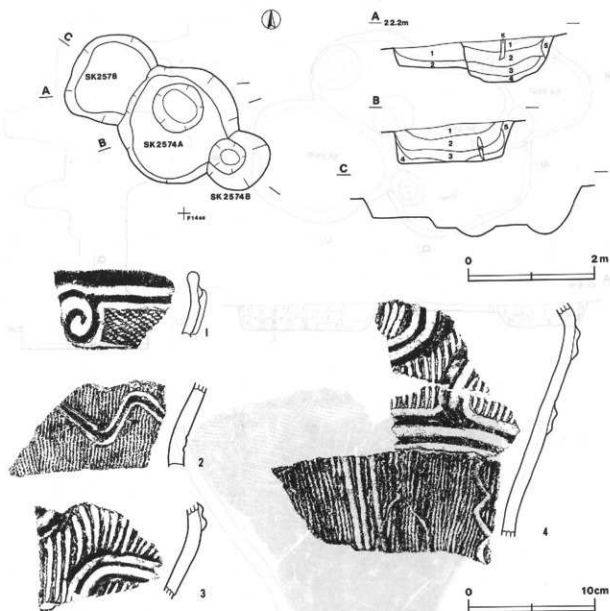
土層解説

1 褐色 ローム粒子中量，ロームブロック少量

2 褐色 ローム粒子中量，ロームブロック中量

遺物 縄文土器片56点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で，L Rの単節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。2は深鉢の胴部片で，撫糸文を地文とし，2本一組の沈線により波状文を施している。3は深鉢の口縁部付近の破片，4は深鉢の口縁部付近から胴部の破片で，同一個体である。口縁部は沈線を有する隆帯により文様を描出し，空白部に縦位の沈線を充填している。胴部はRの無節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E I～II式期）と考えられる。



第607図 第2574 A・B・2578号土坑，第2578号土坑出土遺物実測図

第2579号土坑 (第608図)

位置 調査区の中央部，F14b6区。

規模と平面形 長径2.24m，短径1.90mの楕円形で，深さは94cmである。

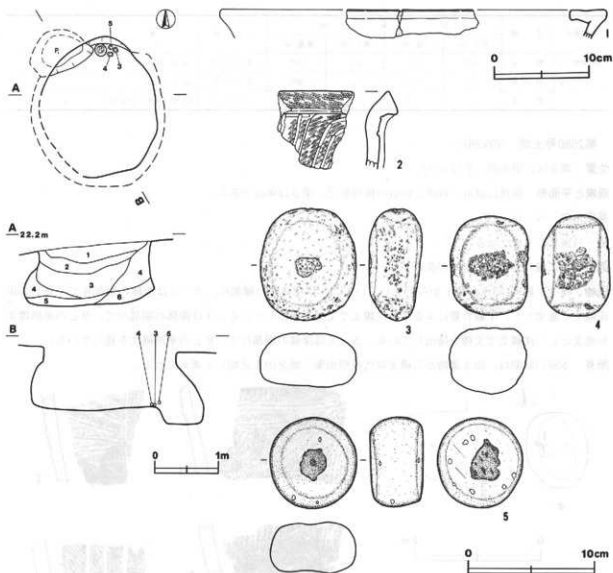
長径方向 N-8°-E

壁 内傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ビット 2か所。P₁・P₂は壁際に位置する。P₁は長径90cm，短径70cmの楕円形で，深さ26cmである。P₂は径19cmの円形で，深さ22cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 6層に分層され，自然堆積と考えられる。



第608図 第2579号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化物微量 |

遺物 縄文土器片30点、磨石3点が出土している。1は口唇部内面に鐮状の隆帯を巡らしている深鉢の口縁部片、2は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。3～5は完形の磨石で、北壁際の底面からまともって出土している。

所見 本跡は、形状と出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅳ式期）の袋状土坑と考えられる。

第2579号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 ビ 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第608図 1	深 鉢 縄文土器	A (40.8) B (2.0)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部内面に鐮状の隆帯を巡らし、口唇部は幅広く平坦である。無文。	石英・長石 にふい赤褐色 普通	P110 5% 覆土 阿玉台Ⅳ式
2	深 鉢 縄文土器	B (6.1)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。隆帯により文様を描出し、隆帯に沿って沈線文を描いている。R.Lの単節縄文を描いている。	長石・砂粒 灰褐色 普通	P108 5% 覆土 阿玉台Ⅳ式

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第608図	磨 石	8.9	7.6	4.2	423	安山岩	Q 34 床面
	磨 石	7.9	6.2	5.2	380	安山岩	Q 35 床面
	磨 石	7.2	6.8	4.2	321	安山岩	Q 36 床面 P.L104

第2580号土坑（第609図）

位置 調査区の中央部，F14as区。

規模と平面形 長径1.24m，短径1.10mの楕円形で，深さは98cmである。

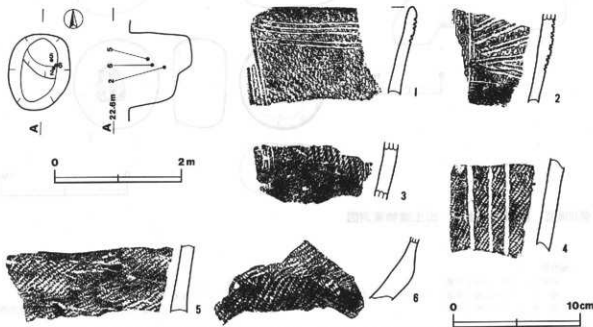
長径方向 N-18°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 二段に掘り込まれ，北側が深い。

遺物 縄文土器片153点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片，2・3は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，半截竹管による平行沈線文で文様を描出している。4は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線文で文様を描出している。5・6は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内I式期）と考えられる。



第609図 第2580号土坑・出土遺物実測図

第2581号土坑（第610図）

位置 調査区の中央部，F14as区。

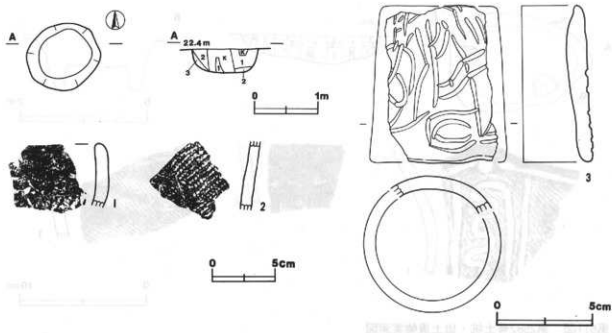
規模と平面形 長径1.14m，短径1.04mの楕円形で，深さは36cmである。

長径方向 N-68°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 3層に分層され，自然堆積である。



第610図 第2581号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片72点, 土製腕輪片1点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片, 2は深鉢の胴部片で, L Rの単節縄文を施している。3は土製腕輪片で, 沈線により文様を描出している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期前葉(堀之内I式期)と考えられる。

第2581号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	形 状 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		長さ	径	厚さ				
第610図	3 土製腕輪	8.2	[7.2]	0.8	(63)	25	円筒形を呈する。沈線文。	DP24 覆土 P.L99

第2582号土坑 (第611図)

位置 調査区の中央部, F14a9区。

規模と平面形 長径2.26m, 短径1.56mの楕円形で, 深さは42cmである。

長径方向 N-90°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

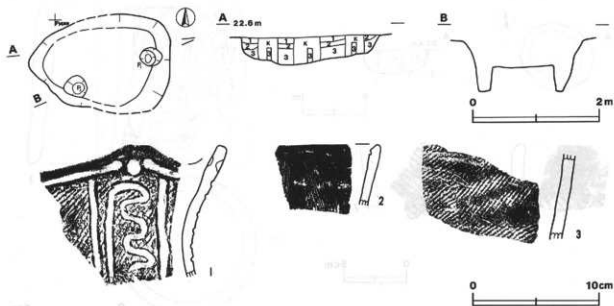
ピット 2か所。P₁・P₂は壁際に位置し, 長径34~36cm, 短径29~34cmの楕円形で, 深さ36~38cmである。

性格は不明である。

覆土 3層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量



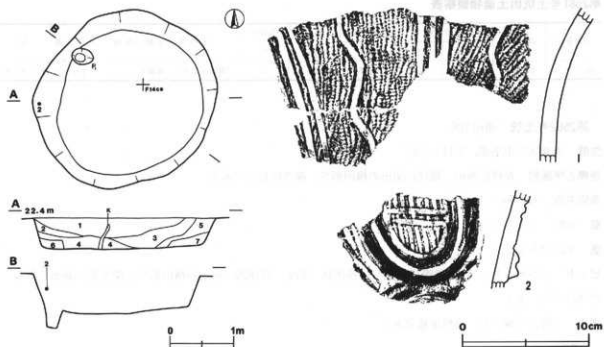
第611図 第2582号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片207点，打裂石斧片1点が覆土から出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，Lの無節縄文を地文とし，波頂部直下には円形刺突文を，口縁部には沈線により蕨手状文を施している。2は深鉢の口縁部片で，櫛歯文を施している。3は深鉢の胴部片で，Lの無節縄文を横位に施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内Ⅰ式期）と考えられる。

第2584号土坑（第612図）

位置 調査区の中央部，F14cs区。



第612図 第2584号土坑・出土遺物実測図

規模と平面形 長径2.92m, 短径2.70mのほぼ円形で、深さは50cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 1か所。P₁は長径34cm, 短径26cmの楕円形で、深さ37cmである。性格は不明である。

覆土 7層に分層され、自然堆積である。

土層解説

1 褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量	5 褐色	ローム粒子少量, 第4層より粘性がある
2 褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量, 炭化物少量	6 褐色	ローム粒子少量, ロームブロック中量
3 褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量	7 褐色	ローム粒子少量, ロームブロック多量
4 褐色	ローム粒子少量		

遺物 縄文土器片85点が覆土から出土している。1は深鉢の胴部片で、RLの単節縄文を地文とし、沈線による3本一組の懸垂文と波状の懸垂文を交互に施している。2は深鉢の口縁部付近の破片で、沈線を有する隆帯により区画文を施し、区画文内に沈線文を充填している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅠ式期）と考えられる。

第2585号土坑（第613図）

位置 調査区の中央部、F14c7区。

規模と平面形 長径2.18m, 短径2.14mのほぼ円形で、深さは18cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 2層に分層され、自然堆積である。

土層解説

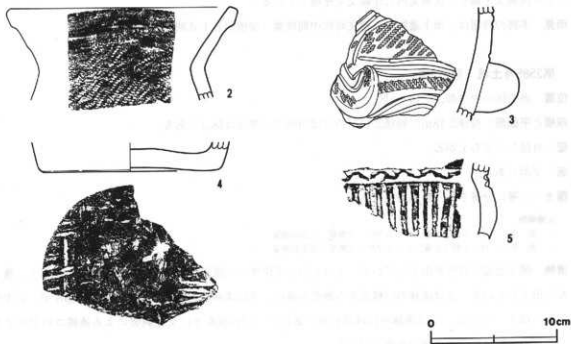
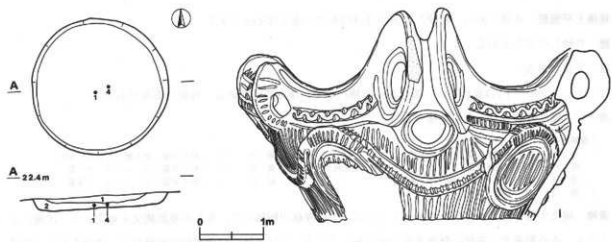
1 褐色	ローム粒子中量, ロームブロック微量, 炭化物微量
2 褐色	ローム粒子少量, ロームブロック微量, 炭化物微量

遺物 縄文土器片17点が出土している。1は大小2単位ずつの眼鏡状把手を有する深鉢の上半部で、覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部の破片、3は深鉢の胴部片、4は深鉢の底部片で、いずれも覆土から出土している。5は深鉢の口縁部付近の破片で、口唇部直下に交互刺突による連続コの字状文を巡らし、その下部に縦位の沈線文を施している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉（中時式期）と考えられる。

第2585号土坑出土遺物観察表

図原番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・沈成	備考
第613図 1	深鉢 縄文土器	A (24.5) B (16.8)	胴上半部欠損。大小2単位ずつの眼鏡状把手を有し、口縁部は内彎する。 口唇部直下には交互刺突による連続コの字状文を巡らしている。口縁部には キザミを有する隆帯により文様を掻出し、地文として縦位の沈線文を施 している。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P111 5% PL88 覆土下層 中時式伊行
2	深鉢 縄文土器	A (17.4) B (7.1)	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。 口唇部は肥厚する。RLの単節縄文を縦位に施している。	砂粒 にぶい褐色 普通	P112 5% PL88 覆土 中時式
3	深鉢 縄文土器	B (9.3)	胴部片。胴部はわずかに外彎する。隆帯により文様を掻出し、隆帯に沿っ て沈線文を施している。RLの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P113 5% 覆土 阿玉台IV式
4	深鉢 縄文土器	B (9.3) C (14.0)	底部片。底面に網代痕がある。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P114 5% 覆土



第613図 第2585号土坑・出土遺物実測図

第2586 A号土坑 (第614図)

位置 調査区の中央部, F14cs区。

重複関係 本跡は第2586号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が古い。また, 第2586B号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.16m, 短径1.66mの楕円形で, 深さは70cmである。

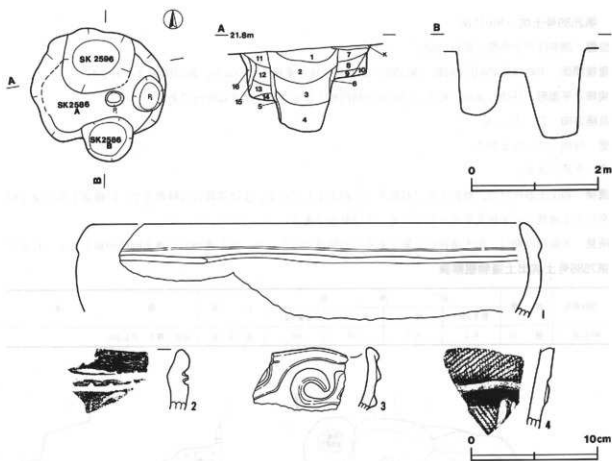
長径方向 N-84°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 2か所。P₁は長径28cm, 短径24cmの楕円形で, 深さ48cmである。P₂は長径56cm, 短径48cmの楕円形で, 深さ18cmである。性格は不明である。

覆土 4層に分層され, 第7~10層が本跡の覆土である。自然堆積である。



第614図 第2586 A・B・2596号土坑，第2586 A号土坑出土遺物実測図

土層解説

7 褐色 ローム粒子中量
8 褐色 ローム粒子中量

9 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック微量
10 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量

遺物 縄文土器片38点，磨石片1点が出土している。1は無文の深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。2は深鉢の口縁部片で，口唇部直下に交互刺突による連続コの字状文を巡らしている。3は小波状口縁を呈する口縁部片で，隆帯により渦巻文を施している。4は深鉢の口縁部から胴部付近の破片で，頸部に隆帯を巡らし，口縁部にLRの単節縄文を横位に，胴部にLRの単節縄文を縦位に施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E I～II式期）と考えられる。

第2586 A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第614図 1	深鉢 縄文土器	A [34.0] B (7.1)	口縁部片。口縁部は内寄する。口唇部に沈線を巡らしている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P115 5% 覆土 加曾利E式

第2589号土坑 (第615図)

位置 調査区の中央部, F14i9区。

重複関係 本跡は第456号住居跡, 第2590・2629号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.28m, 短径(1.50)mの楕円形と推定され, 深さは92cmである。

長径方向 N-4°-E

壁 外傾して立ち上がる。

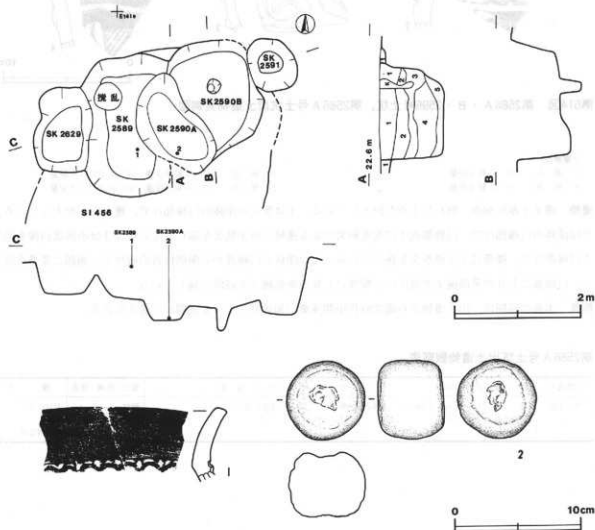
底 平坦である。

遺物 縄文土器片51点, 磨石1点, 石皿片1点が出土している。1は深鉢の口縁部片で, 口縁部下部に交互刺突による連続コの字状文を巡らしている。2は磨石である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物が少量であるため明確ではないが, 出土遺物から縄文時代中期と考えられる。

第2589号土坑出土遺物観察表

図版番号	部 位	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第615図 2	磨 石	6.2	6.2	5.2	246	安山岩	Q37 覆土 PL104



第615図 第2589・2590 A・B・2591・2629号土坑, 第2589号土坑出土遺物実測図

第2590 A号土坑 (第615・616図)

位置 調査区の中北部, F1419区。

重複関係 本跡が第456号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。また, 第2589・2590 B号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.52m, 短径0.94mの楕円形で, 深さは92cmである。

長径方向 N-34°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 5層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|--------------------|-------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量 | | |

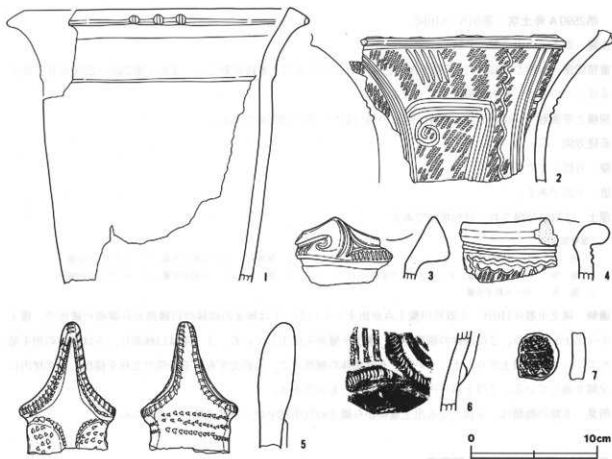
遺物 縄文土器片110点, 土器片円盤1点が出土している。1は無文の深鉢の口縁部から胴部の破片で, 覆土から出土している。2は深鉢の胴部片で, 覆土下層から出土している。3・4は口縁部片, 5は深鉢の把手部片で, いずれも覆土から出土している。6は深鉢の胴部片で, 爪形文を有する隆帯で文様を描出し, 文様内に沈線を描いている。7は土器片円盤で, 混入したものである。

所見 本跡の時期は, 主体となる出土遺物から縄文時代中期中葉(中幹式期)と考えられる。

第2590 A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第616図 1	深鉢 縄文土器	A (21.0) B (21.8)	口縁部から胴部の破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外傾する。口唇部外面の一部にはキザミを描いている。無文。	長石・雲母 黒褐色 普通	P118 20% PL89 覆土 阿玉台IV式
2	深鉢 縄文土器	B (12.1)	胴部片。胴部は外反する。胴部に隆帯を帯びている。胴部にはR.Lの単純縄文を施文とし, 沈線により文様を描出している。	長石・雲母 ふいふ褐色 普通	P119 20% PL89 覆土下層 加藤利E I式
3	深鉢 縄文土器	B (5.2)	液状口縁を遺す口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部は前面三角形を呈し, 幅狭の口縁部文様帯を形成している。沈線により文様を描出し, 口唇部下端にはキザミを描いている。	石英・長石 ふいふ褐色 普通	P120 5% 覆土 中幹式
4	深鉢 縄文土器	B (5.2)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口唇部底下に隆帯を帯びている。隆帯に沿って沈線文を描いている。施文としてR.Lの単純縄文を施している。	石英・長石・雲母 暗褐色 普通	P121 5% 覆土 阿玉台IV式
5	深鉢 縄文土器	B (10.0)	把手部片。山形状を呈し, 胴部が尖る。胴部にはキザミを有する隆帯を描出している。ペン先状の工具により結節沈線文と刺突文を描いている。	石英・長石・雲母 ふいふ褐色 普通	P122 5% 覆土 藤原III式

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	幅	厚さ				
第616図 7	土器片円盤	3.7	3.3	1.1	(19)	90	R.Lの単純縄文。	DP25 覆土



第616図 第2590 A号土坑出土遺物実測図

第2592号土坑 (第617図)

位置 調査区の北部, E14h5区。

重複関係 本跡が第451号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.90m, 短径1.56mの楕円形で, 深さは78cmである。

長径方向 N-38°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

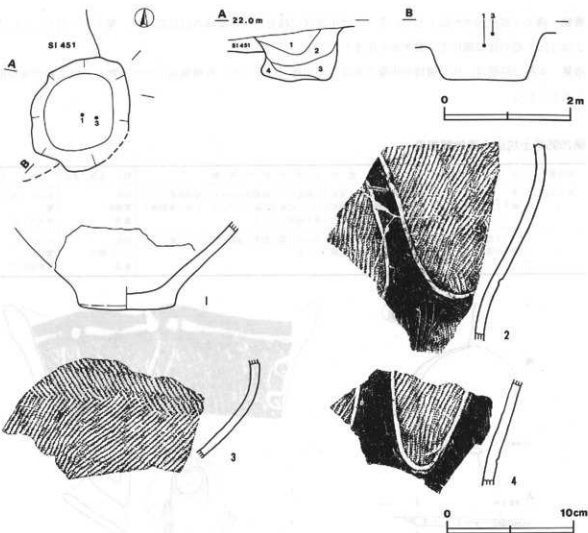
覆土 4層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|---------------------------|------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化物微量 | 3 褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック微量, 炭化物微量 | 4 褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック少量 |

遺物 縄文土器片73点, 獣骨片が出土している。1は深鉢の底部片で, 覆土上層から出土している。2・4は深鉢の胴部片で, 沈線によりU字状文を2帯に構成し, RLの単節縄文を充填している。3は鉢の口縁部付近から胴部の破片で, 覆土上層から出土している。口縁部付近にRLの単節縄文を横位に施し, 胴部にRLの単節縄文を縦位に施して, 羽状に構成している。獣骨片はシカの頭骨で, 覆土から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EⅣ式期)と考えられる。



第617図 第2592号土坑・出土遺物実測図

第2592号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第617図 1	深鉢 縄文土器	B (6.5) C 7.6	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	粘土・色調・焼成 石灰・長石 に多い黄褐色 普通	F123 10% 覆土 加藤利巳式

第2595号土坑 (第618図)

位置 調査区の北部, E1446区。

重複関係 本跡が第441号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 径1.72mの円形と推定され, 深さは16cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 2層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

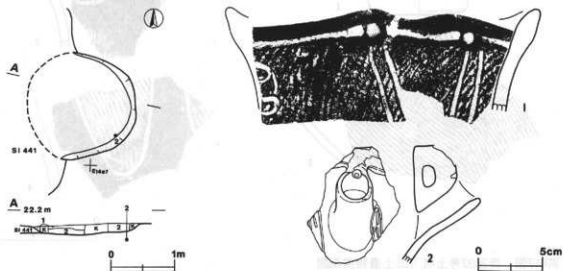
- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片20点が出土している。1は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。2は注口土器の注口部片で、覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少量であるため明確ではないが、重複関係と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

第2595号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第618図 1	深鉢 縄文土器	A (24.8) B (8.2)	反腹の小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部直下に円形刺突文を施し、口唇部に沿って沈線文を巡らしている。LRの単筋縄文を地文とし、沈線により文様を抽出している。	砂粒 黒褐色 普通	P124 5% PL89 覆土 堀之内I式
2	注口土器 縄文土器	B (8.2)	注口部及び口縁部の破片。注口部と横状把手が連結している。沈線による区画文内に短沈線を充満している。	砂粒 にぶい灰色 普通	P124 5% 覆土 赤名寺II式



第618図 第2595号土坑・出土遺物実測図

第2597号土坑 (第619図)

位置 調査区の中央部, F14c4区。

確認状況 本跡の西部は調査区域外となり、東部のみを確認した。

規模と平面形 長径3.98m, 短径(2.60)mの楕円形と推定され、深さは28cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 3層に分層され、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量, 炭化物微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量, 炭化物微量 | | |

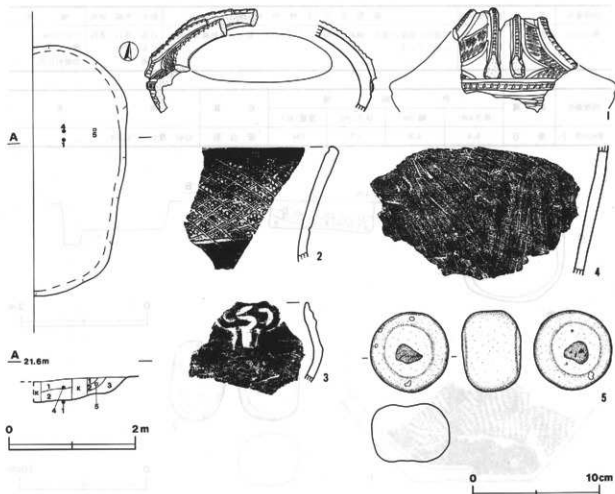
遺物 縄文土器片114点、磨石片1点が出土している。1は吊り手土器の吊り手部片で、底面から出土している。2は粗製深鉢の口縁部片で、RLの単筋縄文を地文とし、条線による格子状文を施している。4は粗製深鉢の胴部片で、無文である。3は鉢の口縁部片で、微隆帯による対弧文を施している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期中葉(加曾利B2式期)と考えられる。

第2597号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第619図 1	吊り手土器 縄文土器	B (8.2)	吊り手部から胴部の破片。吊り手部は内彎する。吊り手部と胴部の境にはキザミを有する隆帯を巡らしている。2単位の内窓を有し、内窓の縁に沿ってキザミを有する隆帯を施している。沈線により文様を描出し、区画文内にLRの草書織文を完填している。	砂粒 黒褐色 普通	P126 5% PL89 床面 加藤判B 2式

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第619図 5	磨石	6.3	6.2	4.6	279	安山岩	Q39 覆土 P L104



第619図 第2597号土坑・出土遺物実測図

第2599号土坑 (第620図)

位置 調査区の北部, E14 f7区。

確認状況 耕作による擾乱が著しく、残存状況は不良である。

規模と平面形 長径1.74m, 短径1.68mのほぼ円形で、深さは44cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 1か所。P₁は北壁際に位置し、長径34cm, 短径24cmの楕円形で、深さは23cmである。性格は不明である。

覆土 3層に分層され、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ロームブロック微量 3 褐色 ローム粒子少量
 2 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック微量

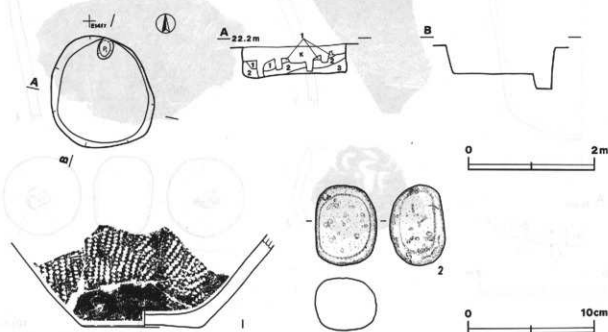
遺物 縄文土器片80点、磨石1点、石皿片1点、石錘片1点が出土している。1は深鉢の底部から胴部片で、覆土から出土している。2は磨石で、覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E式期）と考えられる。

第2599号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第620図 1	深鉢 縄文土器	B (6.6) C 9.4	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。RLの単純縄文を縦位に施している。	石英・長石・雲母 に多い褐色 普通	P127 10% 覆土 加曾利E式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第620図 2	磨石	6.4	4.8	4.3	194	安山岩	Q40 覆土 P.L104



第620図 第2599号土坑・出土遺物実測図

第2600号土坑（第621図）

位置 調査区の北部，E14h9区。

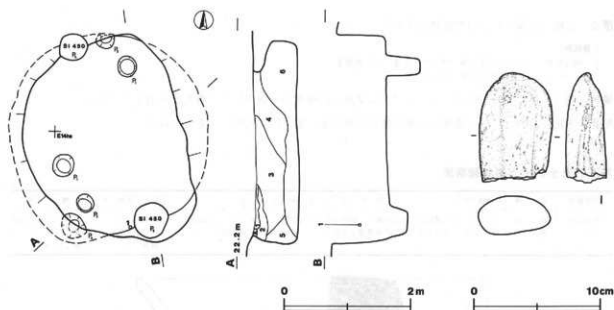
重複関係 第450号住居跡が本跡の上面を貼床としていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長径2.96m，短径2.54mの楕円形で、深さは68cmである。

長径方向 N-20°-W

壁 内傾して立ち上がる。

底 平坦である。



第621図 第2600号土坑・出土遺物実測図

ピット 5か所。P₁～P₅は壁際に位置し、長径28～40cm、短径24～34cmの楕円形で、深さ20～53cmである。性格は不明である。

覆土 6層に分層され、自然堆積である。第1層は第450号住居跡の貼床で、特に締まりがある。

土層解説		4 褐色	
1 褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量	4 褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量、第3層より粘性がある
2 褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量	5 褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
3 褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量	6 褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量

遺物 縄文土器片79点、敲石片1点が出土している。1は敲石片で、覆土から出土している。

所見 本跡は、形状と出土遺物と重複関係から、縄文時代中期の袋状土坑と考えられる。

第2600号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第621図 1	敲石	(8.7)	5.8	3.2	(225)	安山岩	Q41 覆土

第2601号土坑 (第606・622図)

位置 調査区の北部、E14f9区。

重複関係 本跡が第2576号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.60m、短径1.12mの不整楕円形で、深さは38cmである。

長径方向 N-34°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 2か所。P₁は壁際に位置し、径30cmの円形で、深さ73cmである。P₂は壁際に位置し、長径58cm、短径44cmの楕円形で、深さ60cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 2層に分層され、自然堆積である。

土層解説

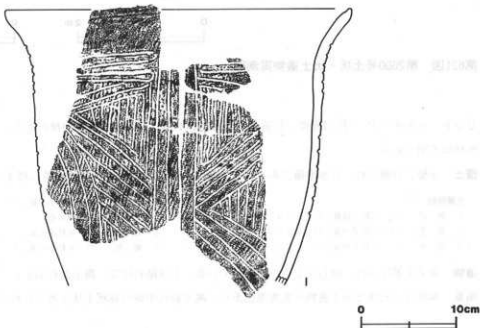
- 1 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子中量、炭化物微量
- 2 赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物 縄文土器片71点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部片で、覆土から出土している。

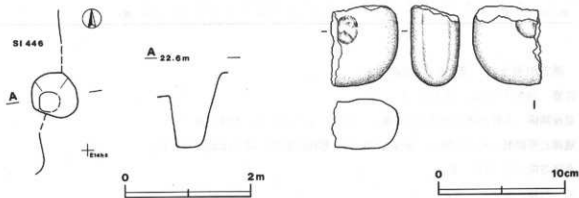
所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内Ⅰ式期）と考えられる。

第2601号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第622図 1	深鉢 縄文土器	A [36.0] B (29.4)	口縁部から胴部の破片。胴部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。し灰の早期縄文を胎土とし、沈線により文様を描出している。	砂粒 に多い赤褐色 普通	P128 15% PL89 覆土 堀之内Ⅰ式



第622図 第2601号土坑出土遺物実測図



第623図 第2603号土坑・出土遺物実測図

第2603号土坑 (第623図)

位置 調査区の北部, E14g7区。

重複関係 本跡が第446号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径0.78m, 短径0.72mの不整形で, 深さは80cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

遺物 縄文土器片112点, 磨石1点が出土している。1は磨石で, 覆土から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物が少量であるため明確ではないが, 土坑の形態と出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

第2603号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第623図 1	磨 石	(6.4)	(5.3)	3.9	(206)	安山岩	Q43 覆土

第2604A号土坑 (第624図)

位置 調査区の中央部, E14i0区。

重複関係 本跡が第2604B号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径0.96m, 短径0.80mの楕円形で, 深さは132cmである。

長径方向 N-10°-E

壁 ほほ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 6層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

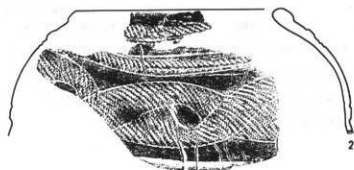
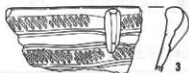
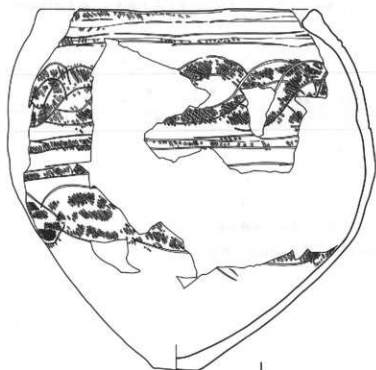
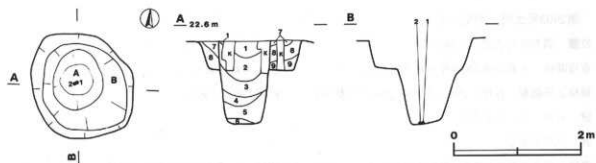
- | | | | |
|-------|--------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量, 炭化物微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック微量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子少量, 炭化物中量 |

遺物 縄文土器片121点が出土している。1は深鉢の口縁部から底部の破片, 2は深鉢の口縁部部片で, 底面から出土している。3は深鉢の口縁部で, 4・5は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で, いずれも覆土から出土している。6・7は粗製深鉢の口縁部片で, 条線文を地文とし, 口唇部直下にキザミを施している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行1式期)と考えられる。

第2604A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 624 図 1	深 鉢 縄文土器	A (21.7)	口縁部から唇部の破片。唇部は内彎して立ち上がり, 口縁部は内傾する。	砂粒 にふい色褐色 良好	P130 30% PL89 底面 安行1式
		B 28.7	口縁部には細沈線により入組風線文を施し, 唇部には粗線文を施している。		
		C 3.7	地文はR.Lの単純縄文である。		
2	深 鉢 縄文土器	A (16.0)	口縁部は内傾する。口縁部には細沈線により入組風線文を施している。	砂粒 暗赤褐色 良好	P134 5% PL89 底面 安行1式
		B 9.9	地文はR.Lの単純縄文である。		
3	深 鉢 縄文土器	B (5.3)	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部にはR.Lの単純縄文による帯縄文を施している。短長の船付文を施している。	砂粒 にふい色 良好	P131 5% 覆土 安行1式



第624図 第2604 A・B号土坑，第2604 A号土坑出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	深鉢 縄文土器	B (7.2)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外張する。口縁部にはR Lの早稲縄文による帯縄文を巡らしている。波頂部直下には縦長の貼付文を施している。	赤粒 明赤褐色 良好	P132 5% 覆土 安行1式
5	深鉢 縄文土器	B (5.9)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外張する。口縁部にはRの無節縄文による帯縄文を巡らしている。波頂部直下には縦長の貼付文を施している。	赤粒 黒色 良好	P133 5% 覆土 安行1式

第2605号土坑 (第625図)

位置 調査区の中央部, E15ii区。

重複関係 本跡は第2633号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.74m, 短径2.66mの不整形円形と推定され, 深さは78cmである。

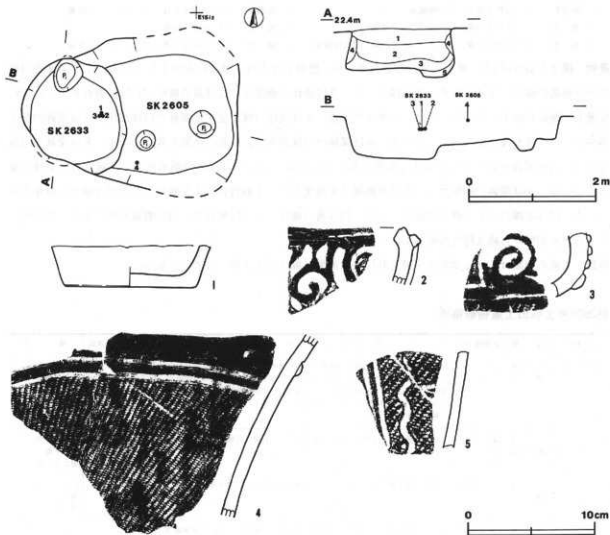
壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 2か所。P₁は長径32cm, 短径28cmの楕円形で, 深さ16cmである。P₂は長径42cm, 短径40cmのほぼ円形で, 深さ20cmである。いずれも性格は不明である。

遺物 縄文土器片162点が出土している。1は深鉢の底部片, 2・3は深鉢の口縁部片, 5は深鉢の胴部片で, 覆土から出土している。4は深鉢の頸部から胴部の破片で, 覆土上層から出土している。2・3はRLの単節縄文を地文とし, 隆帯により渦巻文を施している。4は頸部と胴部の境に隆帯を巡らし, 頸部は無文帯としている。胴部はRLの単節縄文を縦位に施している。5はRLの単節縄文を地文とし, 沈線により懸垂文を施している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第625図 第2605・2633号土坑, 第2605号土坑出土遺物実測図

第2605号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第625図 1	深鉢 縄文土器	B (3.5) C 10.0	底破片。無文。	石英・炭石・雲母 にふい褐色 普通	P135 5% 覆土 加賀利B式

第2607号土坑 (第626・627図)

位置 調査区の中央部, E1417区。

規模と平面形 攪乱が著しく詳細は不明であるが, 残存部から, 長径(1.36)m, 短径(1.20)mの楕円形と推定され, 深さは70cmである。

長径方向 [N-50°-W]

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

ビット 1か所。P₁は壁際に位置し, 長径32cm, 短径26cmの楕円形で, 深さ38cmである。性格は不明である。

覆土 6層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

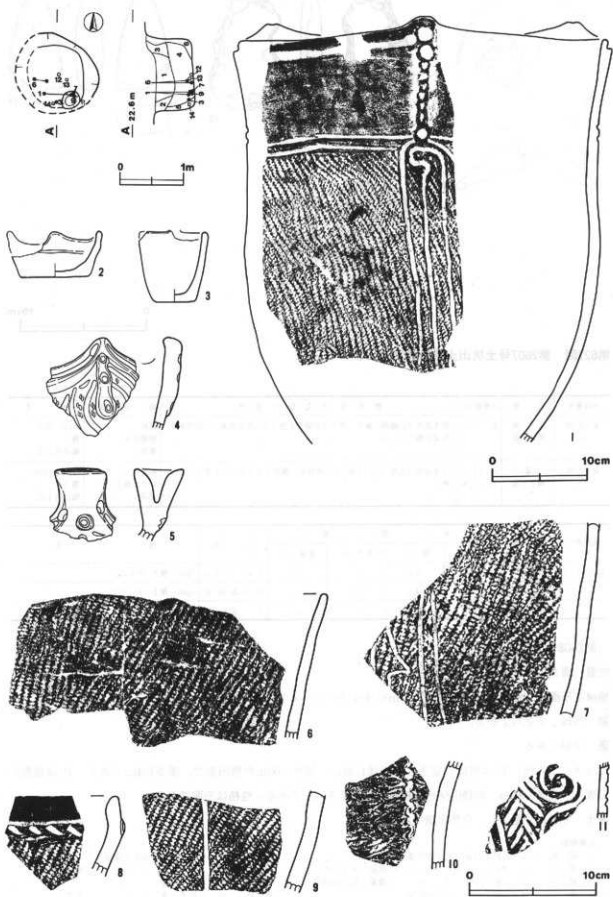
1 暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物微量	4 暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック微量
2 褐色	ローム粒子中量, ロームブロック微量	5 褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量, 炭化物微量	6 褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量

遺物 縄文土器片611点, 磨石1点, 打製石斧1点, 磨製石斧1点, 獣骨片が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片, 3はミニチュア土器で, 7・9は深鉢の胴部片, 12は蓋の破片, 13は打製石斧で, いずれも覆土下層から出土している。2はミニチュア土器, 4は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片, 5は深鉢の把手部片で, いずれも覆土から出土している。6は深鉢の口縁部片で, L Rの単帯を施している。8は深鉢の口縁部片で, 口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。7・9は深鉢の胴部片で, 沈線による文様を描出している。10は深鉢の胴部片で, Lの無節縄文を地文とし, 半截竹管により蛇行した平行沈線を懸垂させている。11は沈線により文様を描出している。12は蓋の破片, 13は打製石斧, 14は磨製石斧である。15は砥石で, 石材や形態から縄文時代後期のものと考えられる。

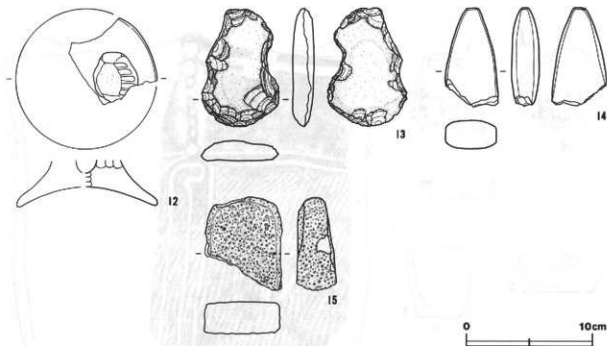
所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期前葉(堀之内I式期)と考えられる。

第2607号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第626図 1	深鉢 縄文土器	A (38.0) B (45.0)	波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。胴部はわずかに内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。胴部に沈線を巡らし, 無文の口縁部文様帯を形成している。波頂部直下には輪部に円形刺突文を施した隆帯を垂下させている。胴部はR L Rの複節縄文を地文とし, 波頂部に沈線による刺突文を施している。	砂粒 にふい黄褐色 普通	P136 30% P L 90 覆土下層 堀之内I式
2	にふい土器 縄文土器	A [7.1] B 3.7 C 5.4	口縁部一部欠損。4車窓の波状口縁を呈し, 口縁部は外傾する。無文。	砂粒 にふい褐色 普通	P137 70% 覆土下層 堀之内I式
3	にふい土器 縄文土器	A [5.2] B 5.6 C 3.3	口縁部一部欠損。波状口縁を呈し, 口縁部はわずかに外傾する。無文。	砂粒 にふい黄褐色 普通	P138 70% 覆土 堀之内I式
4	深鉢 縄文土器	B (7.9)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。R Lの単節縄文を地文とし, 沈線により文様を描出している。波頂部直下には円形刺突文を有する隆帯を垂下させている。	砂粒 灰褐色 普通	P139 5% 覆土 堀之内I式



第626图 第2607号土坑·出土遗物实例图(1)



第627図 第2607号土坑出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第625図 5	深鉢 縄文土器	B (5.7)	把手部及び口縁部の破片。把手は円筒形を呈する。把手部直下には円形刺突文を施している。	砂粒 暗褐色 普通	P140 5% 覆土 堀之内I式
第627図 12	蓋 縄文土器	A [11.0] B (3.8)	つまみ部は欠損しているが、その痕跡から形状を呈することが考えられる。無文。	砂粒 にふい褐色 普通	DP26 20% 覆土 堀之内I式

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第627図 13	打製石斧	9.4	6.3	1.7	(124)	ホルンフェルス	Q46 覆土 PL102
14	磨製石斧	(7.8)	4.3	2.2	(111)	緑色 凝灰岩	Q45 覆土 PL103
15	砥石	(7.4)	6.2	3.2	(120)	安山岩	Q47 覆土

第2608号土坑 (第628図)

位置 調査区の中央部, F14es区。

規模と平面形 長径1.86m, 短径1.70mのほぼ円形で, 深さは34cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

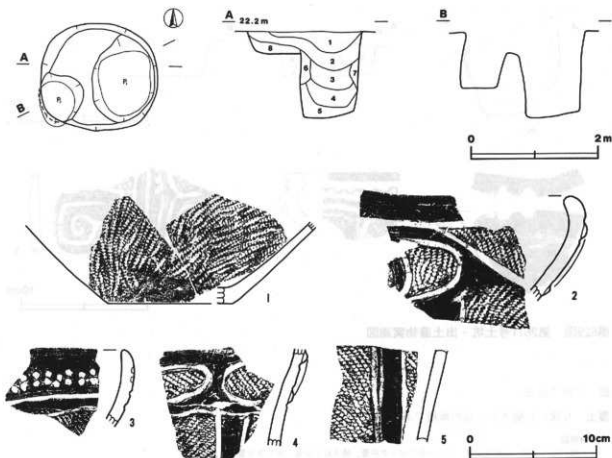
底 平坦である。

ビット 2か所。P₁は壁際に位置し, 長径1.38m, 短径1.00mの楕円形で, 深さ104cmである。P₂は壁際に位置し, 長径0.80m, 短径0.66mの楕円形で, 深さ57cmである。性格は不明である。

覆土 8層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

1	褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量	5	褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量
2	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化物微量	6	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
3	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化物微量	7	褐色	ローム粒子多量
4	褐色	ローム粒子中量, 炭化物微量	8	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量



第628図 第2608号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片129点が覆土から出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で、覆土から出土している。2・4は深鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部には沈線により区画文を施し、RLの単節縄文を充填している。胴部には沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。3は深鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部下部に沈線を巡らし、口縁部には2列の円形刺突文を巡らしている。5は深鉢の胴部片で、LRLの複節縄文を地文とし、沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。

第2608号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第268図 1	深鉢 縄文土器	B(6.1) C(10.0)	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。RLの単節縄文を縦位に施している。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	P141 5% 覆土 加曾利E式

第2611号土坑（第629図）

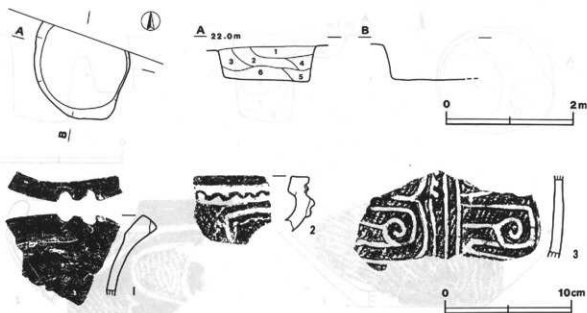
位置 調査区の北部，E14b7区。

確認状況 本跡の北部は調査区域外となり，本跡の南部のみを確認した。

規模と平面形 長径(1.74)m，短径1.48mの楕円形と推定され，深さは50cmである。

長径方向 N-4°-W

壁 外傾して立ち上がる。



第629図 第2611号土坑・出土遺物実測図

底 平坦である。

覆土 6層に分層され、自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|----|---------------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化物少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック中量、炭化物中量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化物中量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック中量、炭化物微量 |

遺物 縄文土器片44点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で、無文で、口唇部に指頭による押圧文を施している。2は深鉢の口縁部片で、口唇部直下に沈線間を交互刺突による連続コの字状文を巡らし、沈線を有する隆帯により文様を描出している。3は深鉢の胴部片で、R Lの単節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉（中幹式期）と考えられる。

第2618号土坑（第630図）

位置 調査区の北部、E14es区。

規模と平面形 攪乱が著しく詳細は不明であるが、残存部から、長径(1.72)m、短径(1.48)mの楕円形と推定され、深さは76cmである。

長径方向 [N-16°-W]

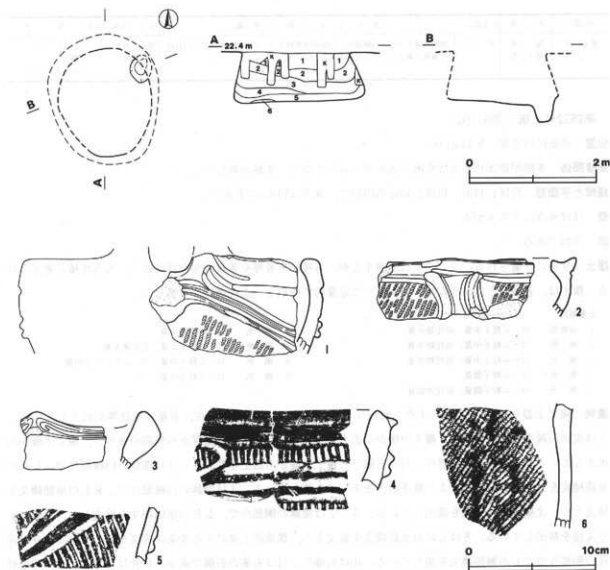
壁 内傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 6層に分層され、自然堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|----|--------------------------|---|----|-------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、炭化物微量 | 4 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量 | 5 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 6 | 褐色 | ローム粒子微量、ロームブロック中量 |



第630図 第2618号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片386点，獣骨片が覆土から出土している。1は眼鏡状把手を有していたと考えられる深鉢の口縁部片，2は深鉢の口縁部片，3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。4は深鉢の口縁部片，5は頸部片で，いずれも沈線を有する隆帯により文様を描出し，口縁部文様帯内には縦位の沈線を充填している。6は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を縦位に施している。

所見 本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅠ式期）の袋状土坑と考えられる。

第2618号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第630図 1	深鉢 縄文土器	A (22.8) B (8.3)	把手部が欠損する口縁部片。口縁部がわずかに内彎する。把手を起点に比 線を有する隆帯により文様を描出している。RLの単節縄文を施している。	砂粒 にふい赤褐色 普通	P143 5% 覆土 加曾利EⅠ式
2	深鉢 縄文土器	B (4.8)	口縁部片。口縁部は内彎する。地文はRLの単節縄文で，隆帯により文様 を描出している。	灰石・砂粒 にふい赤褐色 普通	P142 5% 覆土 加曾利EⅠ式

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第630図 3	深鉢 縄文土器	B(4.5)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部は肥厚し、口唇部に瓣部が葉手状となる沈線を高らしている。	灰石・砂粒 明赤褐色 普通	P144 5% 覆土 加曽利Ⅱ式

第2622号土坑 (第631図)

位置 調査区の北部, E14e0区。

重複関係 本跡が第2616号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.44m, 短径1.40mの円形で, 深さは148cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 9層に分層される。レンズ状に堆積するが, 各層に魚骨等を多量に含む状況から, 人為堆積と考えられる。覆土は, 各層ごとにコラムサンプルとして定量的に採取し, 水洗選別を実施した。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量	6 褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ローム粒子中量, 炭化物少量	7 褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量
3 褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量	8 褐色	ローム粒子中量, ロームブロック中量
4 褐色	ローム粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量
5 褐色	ローム粒子微量, 炭化物微量		

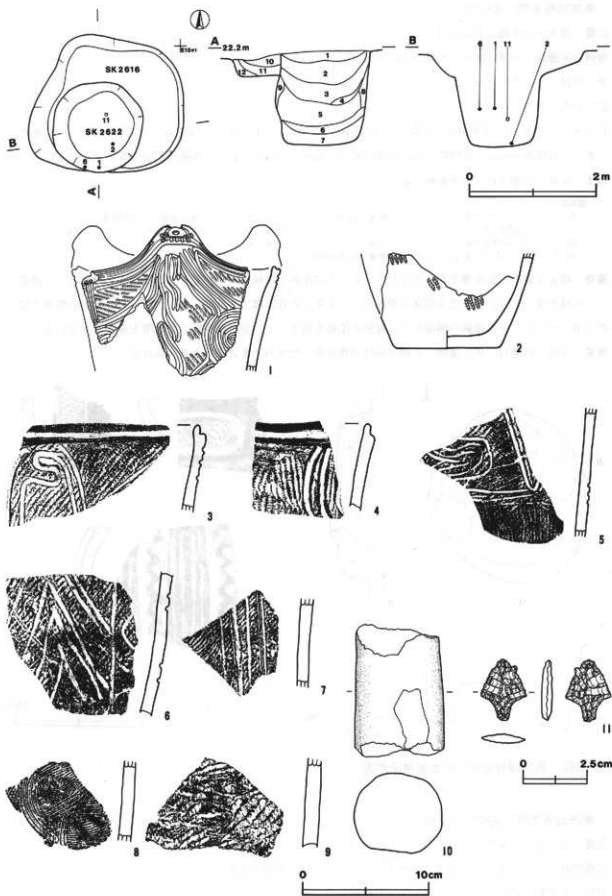
遺物 縄文土器片324点, 石皿片1点, 磨石片1点, 石棒片1点, 石鏃1点, 多量の魚骨等が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢で, 覆土中層から出土している。2は深鉢の底部から胴部の破片で, 覆土下層から出土している。6は深鉢の胴部片, 11は石鏃で, 覆土中層から出土している。3は深鉢の口縁部片で, LRの単節縄文を地文とし, 沈線により葉手状のモチーフを施している。4は深鉢の口縁部片で, RLの単節縄文を地文とし, 沈線により文様を描出している。5~7は深鉢の胴部片で, LRの単節縄文を地文とし, 沈線により文様を描出している。8はLRの単節縄文を地文とし, 櫛歯状工具による多条沈線文を施している。9は深鉢の胴部片で, Lの無節縄文を施している。10は石棒片, 11は有茎の石鏃である。魚骨は, コイ・フナの椎骨と同定された。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期前葉(堀之内Ⅰ式期)と考えられる。

第2622号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第631図 1	深鉢 縄文土器	A(15.8) B(12.3)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部には凹形刺突文を中心に, 瓣部に凹形刺突文を施した沈線を高らしている。口唇部は葉の無節縄文を地文とし, 波頂部を結点に沈線により文様を描出している。	砂粒 黒褐色 普通	P145 5% PL50 覆土中層 堀之内Ⅰ式
2	深鉢 縄文土器	B(7.5) C 8.5	底部から胴部の破片。胴部はわずかに外傾して立ち上がる。LRの単節縄文を施している。	砂粒 ふいふ褐色 普通	P146 10% 覆土下層 堀之内Ⅰ式

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第630図 10	石 棒	(10.5)	7.0	6.4	(888)	緑泥片岩	Q48 覆土中層
11	石 鏃	2.4	1.8	0.4	1.4	石 英	Q49 覆土



第631图 第2616·2622号土坑，第2622号土坑出土文物实测图

第2628号土坑 (第632図)

位置 調査区の北部, E15a1区。

規模と平面形 長径2.66m, 短径2.52mのはほぼ円形で, 深さは58cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 5か所。P₁は中央部に位置し, 長径40cm, 短径34cmの楕円形で, 深さ48cmである。P₂~P₅は壁際に位置し, 長径38~82cm, 短径31~56cmの楕円形で, 深さ20~78cmである。性格は不明である。

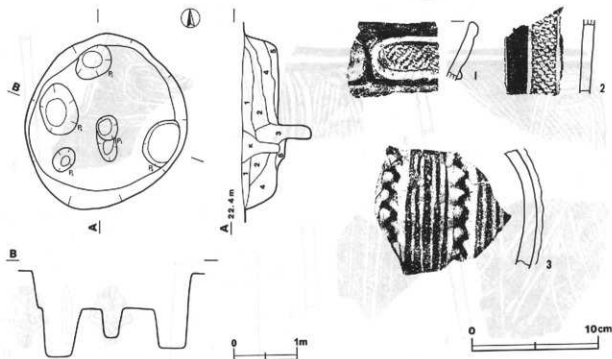
覆土 6層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|------|--------------------------------|------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック微量, 焼土粒子・炭化物少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック微量, 炭化物微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物 縄文土器片41点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で, LRの単節縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出している。2は深鉢の胴部片で, LRLの複節縄文を地文とし, 沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。3は深鉢の胴部片で, 縦位の沈線を地文とし, 交互に押し出した隆帯を垂下させている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第632図 第2628号土坑・出土遺物実測図

第2633号土坑 (第625・633図)

位置 調査区の中央部, E15i1区。

重複関係 本跡は第2605号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.80m, 短径1.56mの楕円形で, 深さは132cmである。

長径方向 N-13°-W

壁 南西壁だけが内傾して立ち上がるが、それ以外は外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ビット 1か所。P₁は、長径50cm、短径44cmの楕円形で、深さ14cmである。性格は不明である。

覆土 5層に分層され、自然堆積である。

土層解説

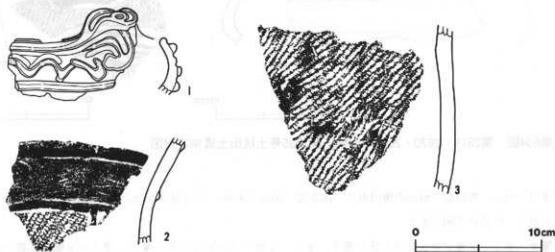
- | | | | |
|------|-------------------|------|-------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、黄土粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック微量 | | |

遺物 縄文土器片67点が覆土から出土している。1は突起を有する深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。2は深鉢の頸部から胴部の破片で、隆帯を巡し頸部に無文帯を形成している。胴部はRLの単節縄文を縦位に施している。3は深鉢の胴部片で、RLの単節縄文を縦位に施している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E1式期）と考えられる。

第2633号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第 633 図 1	深鉢 縄文土器	B(4.5)	突起を有する口縁部片、口縁部は内彎する。突起の頂部には沈線による裏手文を施している。口縁部には隆帯により文様を露出している。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P147 5% 覆土 加曾利E1式併行



第633図 第2633号土坑出土遺物実測図

第2635号土坑（第634図）

位置 調査区の北部、E1449区。

重複関係 本跡は第2619・2620号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

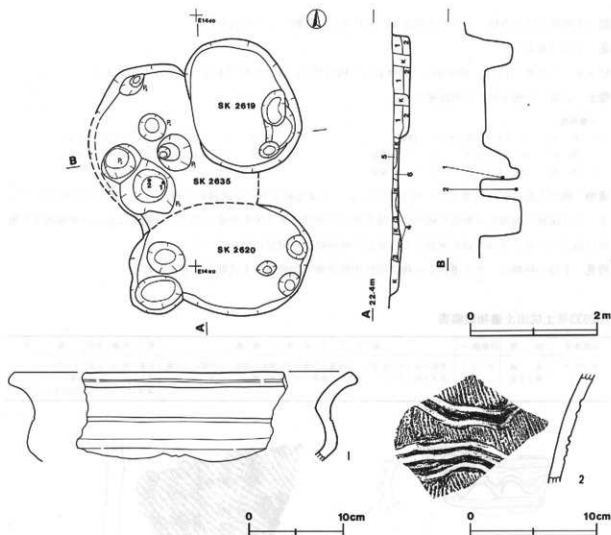
規模と平面形 長径(3.10)m、短径(2.30)mの楕円形と推定され、深さは9cmである。

長径方向 [N-44°-W]

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ビット 5か所。P₁は中央部に位置し、長径58cm、短径54cmのほぼ円形で、深さ58cmである。P₂~P₄は、長



第634図 第2619・2620・2635号土坑，第2635号土坑出土遺物実測図

径44～84cm，短径42～84cmの楕円形で，深さ52～76cmである。P₅は長径48cm，短径28cmの楕円形で，深さ22cmである。性格は不明である。

覆土 第1・2層が第2619号土坑の覆土，第3・4層が第2620号土坑の覆土，第5・6層が本跡の覆土である。2層に分層され，自然堆積である。

土層解説

- 5 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子多量，ロームブロック中量

遺物 縄文土器片36点が出土している。1は赤彩が施されている鉢の口縁部片で，P₂覆土中層から出土している。2はP₂の覆土下層から出土した深鉢の胴部片で，燃糸文を地文とし，沈線による波状文を施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅡ式期）と考えられる。

第2635号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第634図 1	鉢 縄文土器	A [35.0] B (9.3)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾し，胴部でくびれ，口縁部は外反する。無文。内・外面赤彩。	長石・砂粒 にふいば褐色 普通	P148 5% P ₂ 覆土中層 加曾利EⅡ式

第2639号土坑 (第635図)

位置 調査区の中央部, E15j3区。

規模と平面形 長径2.54m, 短径2.18mの楕円形で, 深さは58cmである。

長径方向 N-18°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 5か所。P₁~P₃は中央部に位置し, 重複している。P₁は, 長径32cm, 短径30cmのほぼ円形で, 深さ68cmである。P₂は, 長径[28]cm, 短径24cmの楕円形と推定され, 深さ47cmである。P₃は, 長径[58]cm, 短径52cmの楕円形と推定され, 深さ36cmである。P₄は壁際に位置し, 長径41cm, 短径30cmの楕円形で, 深さ44cmである。P₅は壁際に位置し, 長径30cm, 短径24cmの楕円形で, 深さ10cmである。性格は不明である。

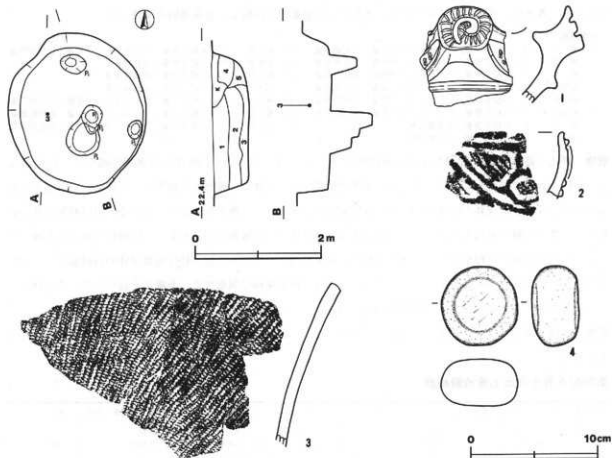
覆土 5層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量 | 4 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量 | 5 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量 |
| 3 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック中量 | |

遺物 縄文土器片349点, 磨石1点が覆土から出土している。1は把手を有する深鉢の口縁部片で, 覆土から出土している。2は深鉢の口縁部片で, RLの単節縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出している。3は深鉢の胴部片で, RLの単節縄文を縦位に施している。4は磨石である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第635図 第2639号土坑・出土遺物実測図

第2639号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第635図 1	深鉢 縄文土器	B(7.6)	把手を有する口縁部片。口縁部は内彎する。把手の頂部にはキザミを有する渦巻文を施している。口縁部には把手を起点に隆帯により文様を描出している。地文はR L Rの連続縄文である。	砂粒 にふい黄褐色 普通	P149 5% 覆土 加賀川E1式移行

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第635図 4	磨石	6.5	6.1	3.7	345	安山岩	Q50 覆土 PL104

第2640 A号土坑 (第636・637図)

位置 調査区の北東部, E14j4区。

重複関係 本跡が第2640 B号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。また, 本跡は2667号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.26m, 短径1.20mのほぼ円形で, 深さは264cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 1か所。P₁は中央部に位置し, 長径46cm, 短径36cmの楕円形で, 深さ10cmである。性格は不明である。

覆土 15層に分層される。レンズ状に堆積するが, 魚骨等を含み, 廃棄されたような状況から, 人為堆積と考えられる。覆土は, 各層ごとにコラムサンプルとして定量的に採取し, 水洗選別を実施した。

土層解説

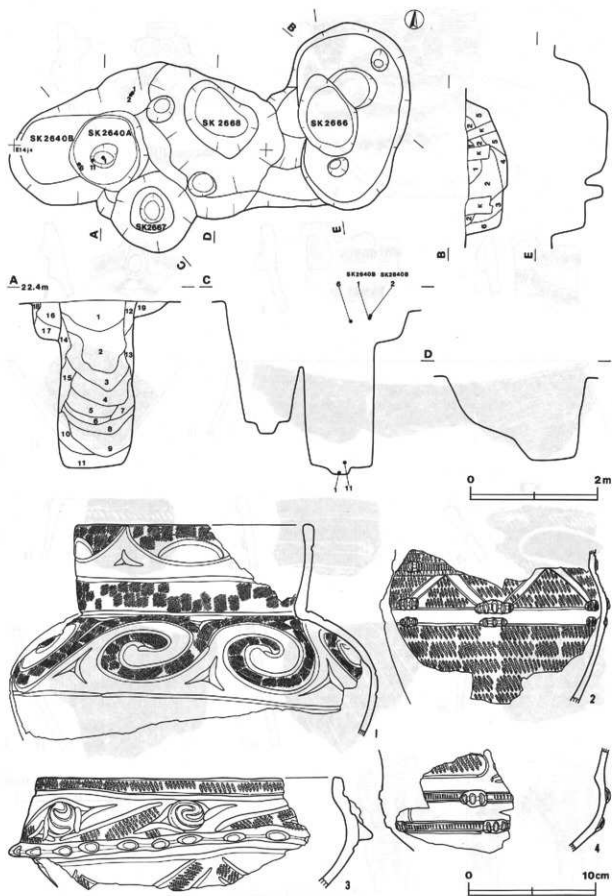
1	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量	9	褐色	ローム粒子多量, ロームブロック微量, 炭化物中量
2	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化物中量	10	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物多量
3	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 炭化物少量	11	褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量
4	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化物中量	12	褐色	ローム粒子中量, 炭化物少量
5	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化物中量	13	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化物少量
6	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 炭化物中量	14	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量
7	褐色	ローム粒子多量, 炭化物少量	15	褐色	ローム粒子中量, ロームブロック中量, 炭化物少量
8	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物微量			

遺物 縄文土器片827点, 土偶片1点, 魚骨等が出土している。1は壺の口縁部から胴部の破片で, P₁の底部から逆位の状態で出土している。2・4は深鉢の胴部片, 3は鉢の口縁部から胴部片, 5は鉢の口縁部から底部の破片, 6~9は深鉢の口縁部片, 10は粗製深鉢の口縁部片で, 覆土から出土している。11は粗製深鉢の底部片で, 覆土下層から出土している。12は浅鉢の口縁部片で, 口縁部に円孔を有し, 口唇部に貼付文を施している。13は台付鉢の口縁部片で, キザミを有する隆帯を巡らしている。14・15は粗製深鉢の口縁部片で, 口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。16・17は粗製深鉢の胴部片で, 条線文を巡らしている。18はミズク形土偶の右足部片である。魚骨は, コイ・フナ・ウナギの椎骨と同定された。

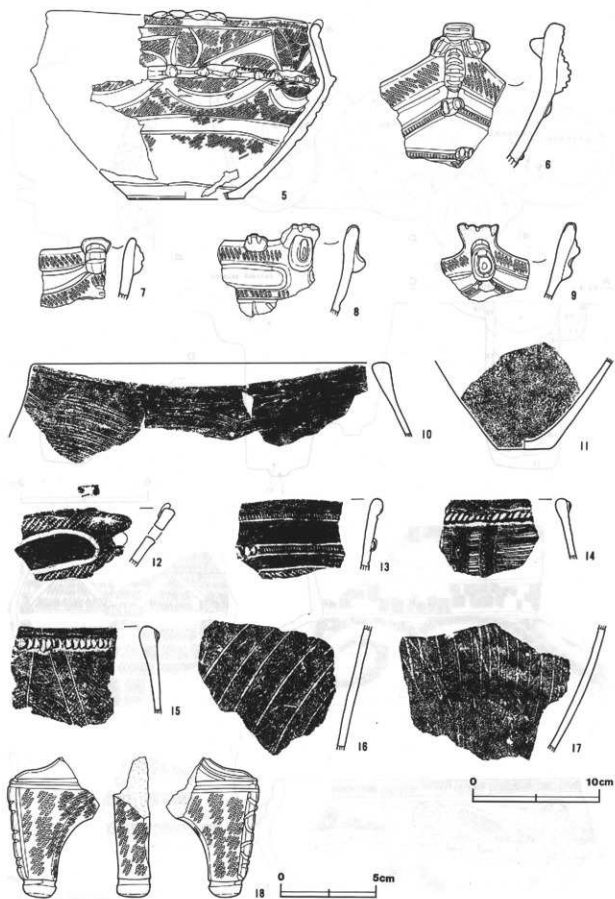
所見 本跡の時期は, 1の壺がP₁の底部から出土していることから縄文時代晩期前葉(安行3a式)と考えられる。

第2640 A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第636図 1	壺 縄文土器	A 18.8 B (17.1)	口縁部の一部及び胴下部欠損。胴部は内彎して立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。口縁部には北條により渦巻文を, 胴部には沈線による幾手文を連続して巡らし, 区画内にはL Rの単純縄文を光環している。空白部には沈線による山文を施している。	砂粒 灰褐色 良好	P151. 80% PL90 P ₁ 底面 安行3a式



第636图 第2640 A · B · 2666 · 2667 · 2668号土坑，第2640 A号土坑出土遗物实测图



第637图 第2640 A号土坑出土遗物实测图

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 636 図 2	深 鉢 縄文土器	B (12.3)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、腹部はわずかにくびれる。R.Lの単筋縄文を地文とし、胴部にはキズミを巡らしている。フタ鼻状の貼付文を起点に沈線による扇状文を施している。	砂粒 黒褐色 良好	P160 10% P.L.90 覆土 安行2式
3	深 鉢 縄文土器	A (23.2) B (8.9)	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部下位に楕円形刺突文を有する隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。沈線には比喩による渦巻文を有する円形の貼付文を施し、その両側に沈線による三叉文を配している。沈線による区画文内にはR.Lの単筋縄文を光填している。	砂粒 灰褐色 良好	P153 15% P.L.90 覆土 安行3a式
4	深 鉢 縄文土器	B (8.1)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、腹部はわずかにくびれる。キズミを有する隆帯を巡らし、フタ鼻状の貼付文を施している。	砂粒 褐色 良好	P161 5% 覆土 安行2式
第 637 図 5	深 鉢 縄文土器	A (21.5) B 15.0 C (9.1)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部下位に楕円形刺突文を有する隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。沈線により文様を露出し、文様内にはR.Lの単筋縄文を光填している。口唇部にはコブ状の貼付文を施している。	砂粒 灰褐色 良好	P159 25% P.L.91 覆土 安行3a式
6	深 鉢 縄文土器	B (11.4)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部にはキズミを有する隆帯を巡らしている。波頂部直下にはキズミを有する縦長の貼付文とフタ鼻状の貼付文を施している。	砂粒 明褐色 良好	P154 5% P.L.91 覆土 安行2式
7	深 鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。波頂部直下にはキズミを有する縦長の貼付文を施している。	砂粒 褐色 良好	P157 5% P.L.91 覆土 安行2式
8	深 鉢 縄文土器	B (7.5)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。波頂部直下には楕円形刺突文を有する。縦長の貼付文を施している。	砂粒 明赤褐色 良好	P155 5% P.L.91 覆土 安行3a式
9	深 鉢 縄文土器	B (7.5)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部には魚尾状の突起を有し、波頂部直下には楕円形刺突文を有する縦長の貼付文を施している。	砂粒 灰褐色 良好	P156 5% P.L.91 覆土 安行3a式
10	複製深鉢 縄文土器	A (26.0) B (6.0)	口縁部片。口縁部は内傾する。扇状文を施している。	砂粒 赤褐色 良好	P158 10% P.L.90 覆土 安行式
11	複製深鉢 縄文土器	B (7.2) C 4.4	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 によい白色 良好	P162 10% 覆土下層 安行式

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現 存 率 (%)	形 状 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		長 さ	幅	厚 さ				
第 637 図 18	土 偶	(7.4)	(4.8)	1.9	(40)	20	ミニズク形土偶の右足部。R.Lの単筋縄文を地文とし、沈線により文様を露出している。	D P 27 覆土 P L100

第2640 B号土坑 (第636・638図)

位置 調査区の北東部、E14j4区。

重複関係 本跡は第2640 A号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

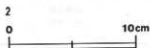
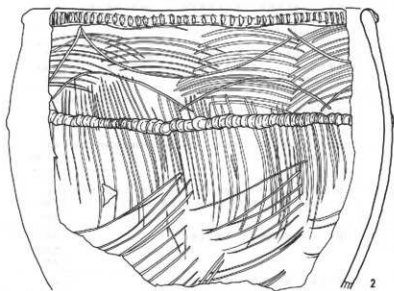
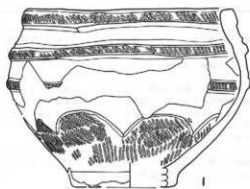
規模と平面形 長径(2.30)m、短径1.64mの楕円形と推定され、深さは66cmである。

長径方向 N-84°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 第1～15層は第2640 A号土坑の覆土であり、第16～19層が本跡の覆土である。4層に分層され、自然堆積と考えられる。



第638図 第2640B号土坑出土遺物実測図

土層解説

- 16 褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量
 17 褐色 ローム粒子多量, 炭化物少量, 第1層より色調が明るい
 18 褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量
 19 褐色 ローム粒子中量, 炭化物微量

遺物 縄文土器2点が出土している。1は鉢の口縁部から胴部の破片, 2は粗製深鉢の口縁部から胴部の破片で、いずれも覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉（安行1式期）と考えられる。

第2640B号土坑出土遺物観察表

図号番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第638図 1	鉢 縄文土器	A〔16.3〕 B〔14.2〕 C〔8.2〕	底部から胴部一部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部にはR1の早期縄文を施した帯縄文を巡らしている。胴部には沈降による風状文を巡らしている。	砂粒 に多い黄褐色 良好	P150 70% PL91 覆土 安行1式
2	粗製深鉢 縄文土器	A〔26.4〕 B〔22.3〕	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部直下及び口縁部下部には指頭を押し出した隆帯を巡らしている。条線文を地文とし、口縁部には沈降による風状文を巡らしている。	砂粒 灰黄褐色 良好	P152 20% PL91 覆土 安行1式

第2641 A号土坑 (第639図)

位置 調査区の北東部, E1514区。

重複関係 本跡が第2641 B号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径0.94m, 短径0.78mの楕円形で, 深さは106cmである。

長径方向 N-2°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

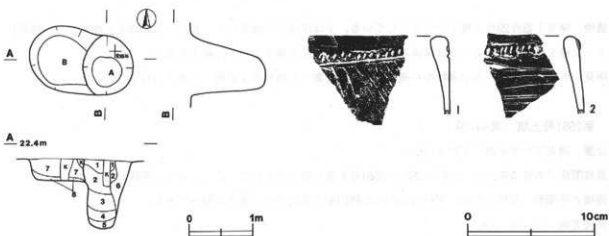
覆土 6層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化物微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化物少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 |

遺物 縄文土器片28点が出土している。1・2は粗製深鉢の口縁部片で, 条線文を地文とし, 口唇部直下にキザミを巡らしている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行2式期)と考えられる。



第639図 第2641 A・B号土坑, 第2641 A号土坑出土遺物実測図

第2652号土坑 (第640図)

位置 調査区の中央部, E15g1区。

重複関係 第464号住居跡が本跡の上面を貼麻としていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長径2.34m, 短径2.28mのほぼ円形で, 深さは42cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

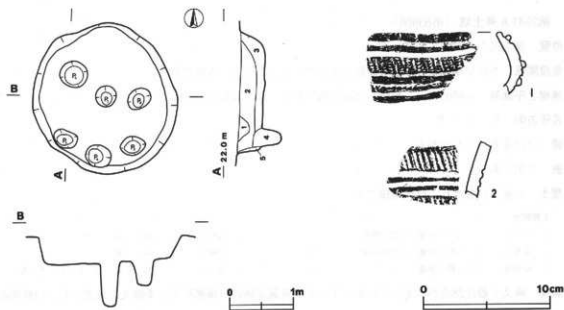
底 平坦である。

ピット 6か所。P₁は中央部に位置し, 長径33cm, 短径30cmのほぼ円形で, 深さ71cmである。P₂~P₆は壁際に位置し, 長径38~44cm, 短径26~40cmの楕円形で, 深さ35~111cmである。性格は不明である。

覆土 5層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| | | 5 褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック中量 |



第640図 第2652号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片29点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で、RLの単節縄文を地文とし、隆帯により文様を描出している。2は深鉢の胴部片で、燃糸文を地文とし、沈線文を巡らしている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅠ式期）と考えられる。

第2661号土坑（第641図）

位置 調査区の中央部、F15a1区。

重複関係 本跡は第2664・2665・2681・2684号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長径1.82m、短径[1.58]mの楕円形と推定され、深さは84cmである。

長径方向 N-40°-E

壁 内傾して立ち上がる。

底 平坦である。

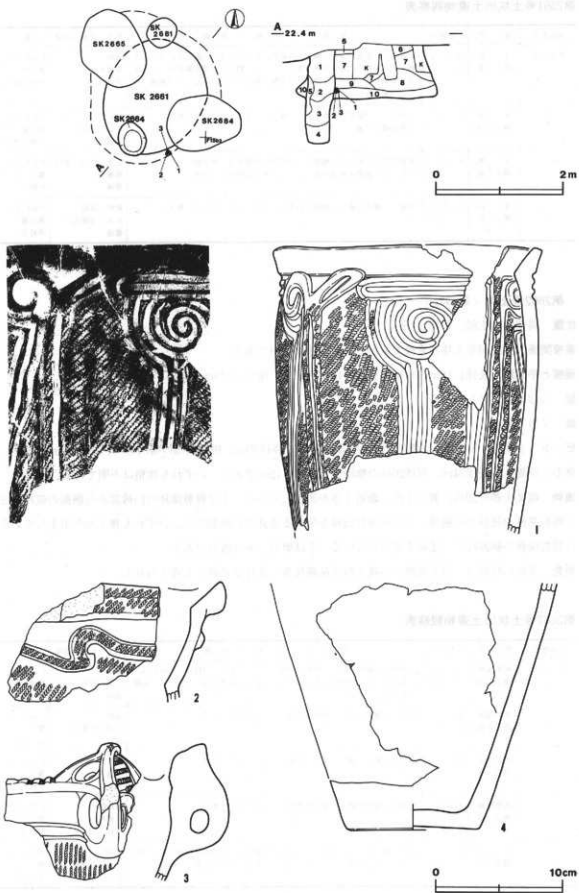
覆土 第1～5層は第2664号土坑の覆土で、第6～10層が本跡の覆土である。5層に分層され、自然堆積である。

土層解説

6 暗褐色	ローム粒子微量、炭化物微量	9 暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
7 暗褐色	ローム粒子中量	10 褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量
8 暗褐色	ローム粒子微量、炭化物少量		

遺物 縄文土器片164点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部片、2は深鉢の口縁部片、3は把手を有する深鉢の口縁部片で、覆土下層（第10層）から出土している。4は深鉢の底部から胴部の破片で、覆土から出土している。

所見 本跡は、形状と出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）の袋状土坑と考えられる。



第641图 第2661·2664号土坑, 第2661号土坑出土玉器实测图

第2661号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第641図 1	深鉢 縄文土器	A (21.4) B (22.8)	口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。口縁部は幅状の無文帯としている。胴部は上端が兼手状となる隆帯を4単位垂下させ、比喩により文様を描出している。R.Lの単節縄文を縦位に施している。	砂粒 灰褐色 普通	P163 30% P.L.92 第10層 中鉢式群行
2	深鉢 縄文土器	B (9.5)	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部には隆帯により文様を描出し、L.Rの単節縄文を施している。	砂粒・スコリア にふい褐色 普通	P164 30% 第10層 中鉢式群行
3	深鉢 縄文土器	B (10.2)	握儀状把手を有する口縁部片。口縁部は外傾する。把手部にはベン先状の工具により節節縄文を描出している。地文は熟赤文である。	石英・長石・雲母 明褐色 普通	P165 5% 裡土 中鉢式
4	深鉢 縄文土器	B (19.6) C 10.5	底部から胴部の破片。胴部はわずかに外傾して立ち上がる。無文。	砂粒・雲母 にふい赤褐色 普通	P166 5% 第10層 中鉢式

第2662号土坑 (第642図)

位置 調査区の北部, E15e2区。

重複関係 第2646号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.18m, 短径1.10mのほぼ円形で、深さは146cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

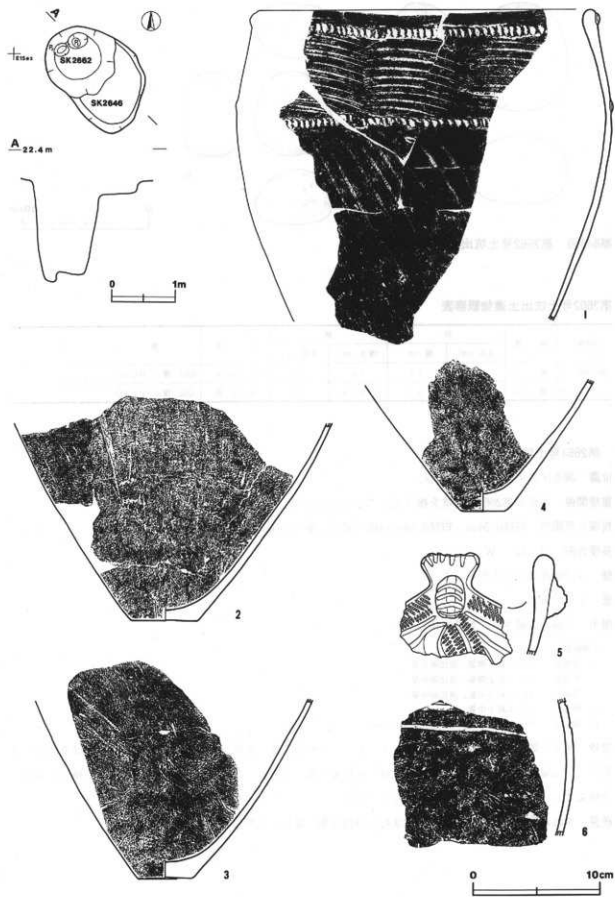
ピット 2か所。P₁・P₂は壁際に位置する。P₁は、長径30cm, 短径24cmの楕円形で、深さ14cmである。P₂は壁際に位置し、長径24cm, 短径20cmの楕円形で、深さ12cmである。いずれも性格は不明である。

遺物 縄文土器片20点, 磨石1点, 礫石1点が出土している。1は粗製深鉢の口縁部から胴部の破片, 2~4は粗製深鉢の底部から胴部, 5は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。6は粗製深鉢の胴部片で、沈線を通らしている。7は磨石, 8は礫石である。

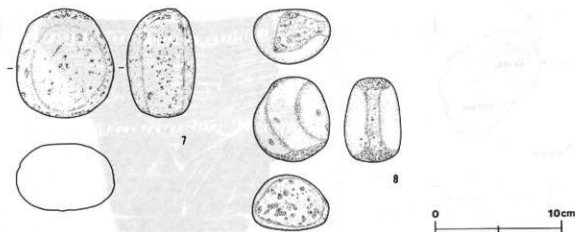
所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉(安行2式期)と考えられる。

第2662号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第642図 1	粗製深鉢 縄文土器	A (26.0) B (24.8)	口縁部から胴部の破片。胴部は内傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部直下及び口縁部下にはキズミを有する隆帯を通らしている。糸織文を地文としている。	砂粒 にふい褐色 良好	P167 10% 覆土 安行2式
2	粗製深鉢 縄文土器	B (15.7) C 5.2	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 にふい赤褐色 良好	P168 10% P.L.87 覆土 安行式
3	粗製深鉢 縄文土器	B (14.2) C 4.4	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 灰褐色 良好	P169 20% 覆土 安行式
4	粗製深鉢 縄文土器	B (10.3) C 3.5	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒 灰褐色 良好	P170 20% 覆土 安行式
5	深鉢 縄文土器	B (10.3)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部には魚尾状の突起を有し、波頂部直下にはキズミを有する隆帯の貼付文を施している。	砂粒 にふい黄褐色 良好	P171 5% 覆土 安行2式



第642图 第2646·2662号土坑，第2662号土坑出土遗物实测图（1）



第643図 第2662号土坑出土遺物実測図(2)

第2662号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第643図 7	磨石	8.7	7.7	5.4	498	安山岩	Q51 覆土 P.L.105
8	磨石	6.7	6.1	4.5	250	安山岩	Q52 覆土 P.L.108

第2664号土坑 (第641・644図)

位置 調査区の中央部, E15a1区。

重複関係 本跡が第2661号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径0.54m, 短径0.49mの楕円形で, 深さは146cmである。

長径方向 N-12°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 5層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量, 炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量

遺物 縄文土器片20点が覆土から出土している。1は粗製深鉢の底部から胴部の破片である。2は深鉢の口縁部片で, 口縁に沿って帯縄文を施し, 縦長の貼付文を施している。3は粗製深鉢の口縁部片で, 横位の条線文を地文とし, 口唇部直下にキザミを巡らしている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行1式期)と考えられる。

第2664号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第644図 1	粗製深鉢 縄文土器	B (9.4) C 2.4	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。条縄文を施している。	砂粒 灰褐色 良好	P172 10% P.L.92 覆土 安行式



第644図 第2664号土坑出土遺物実測図

第2665号土坑 (第645図)

位置 調査区の中央部, E15a1区。

重複関係 本跡が第2661号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.24m, 短径0.96mの楕円形で, 深さは100cmである。

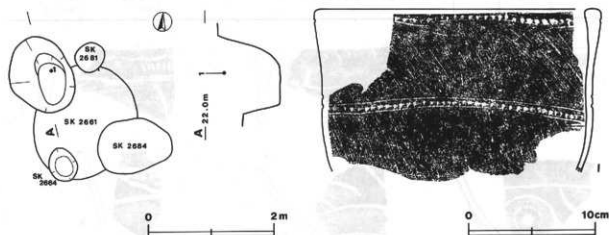
長径方向 N-26°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

遺物 縄文土器片1点が出土している。1は粗製深鉢の口縁部から胴部片で, 覆土から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉 (安行1式期) と考えられる。



第645図 第2665号土坑・出土遺物実測図

第2665号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第645図 1	粗製深鉢 縄文土器	A (22.0) B (13.0)	口縁部から胴部の破片。胴部はわずかに内彎して立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。口唇部直下及び口縁部下部にはキズミを施している。条縄文を地文としている。	砂粒 灰褐色 良好	P173 10% P.L.92 覆土 安行1式

第2666号土坑 (第636・646図)

位置 調査区の北東部, E15is区。

重複関係 本跡は第2668号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.92m, 短径1.92mの楕円形で, 深さは54cmである。

長径方向 N-5°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 4か所。P₁は, 長径134cm, 短径92cmの楕円形で, 深さ28cmである。P₂は, 長径84cm, 短径64cmの楕円形で, 深さ54cmである。P₃・P₄は, 長径34cm, 短径28cmの楕円形で, 深さ20cmである。性格は不明である。

覆土 6層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

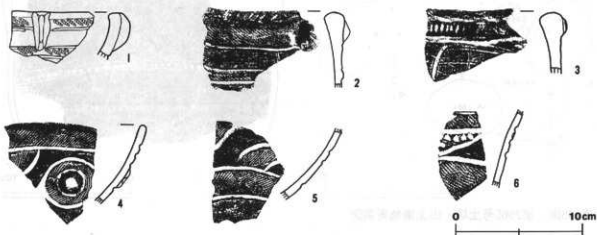
1 黒褐色	ローム粒子微量, 炭化物微量	4 暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物微量
2 黒褐色	ローム粒子微量, 炭化物少量	5 褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子中量	6 褐色	ローム粒子多量

遺物 縄文土器片123点が出土している。1・2は深鉢の口縁部片で, 縦長の貼付文施している。3は粗製深鉢の口縁部片で, 口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。4は浅鉢の口縁部片, 5は浅鉢の胴部片で, 同一個体である。沈線により文様を描出し, 文様内にLRの単節縄文を充填している。6は深鉢の胴部片で, 沈線により文様を描出し, 文様内にLRの単節縄文を充填している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉から晩期前葉と考えられる。

第2666号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第646図 1	深鉢 縄文土器	B(4.0)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。縦長の貼付文を施している。RLの単節縄文を施している縄文帯を巡らしている。	砂粒 灰黄褐色 良好	P174 5% 覆土 実行1式



第646図 第2666号土坑出土遺物実測図

第2667号土坑 (第636・647回)

位置 調査区の北東部, E15j4区。

重複関係 本跡は第2640号土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.24m, 短径1.20mのほぼ円形で, 深さは1.88mである。

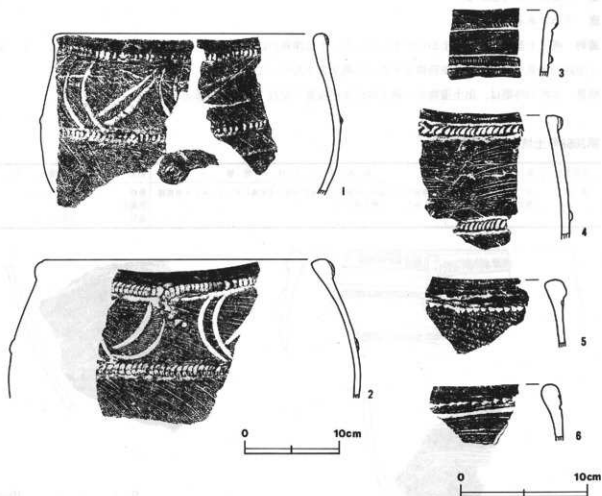
壁 ほほ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 1か所。P₁は中央部に位置し, 長径48cm, 短径40cmの楕円形で, 深さ14cmである。性格は不明である。

遺物 縄文土器片200点が出土している。1・2と4~6は粗製深鉢の口縁部片, 3は台付鉢の口縁部片で, 覆土から出土している。3は刻みを有する隆帯を巡らしている。4は条線文を地文とし, 口唇部直下に指頭による押圧文を有する隆帯を巡らしている。5・6は条線文を地文とし, 口唇部直下に三角形刺突文を巡らしている。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行2式期)と考えられる。



第647回 第2667号土坑出土遺物実測図

第2667号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第647図 1	粗製深鉢 縄文土器	A [28.0] B (16.7)	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。口唇部直下及び口縁部下部にはキザミを有する隆帯を巡らしている。条線文を地文とし、口縁部は比喩により文様を演出している。	砂粒 暗赤褐色 良好	P175 10% PL92 覆土 安行2式
2	粗製深鉢 縄文土器	A [29.0] B (14.7)	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。口唇部直下及び口縁部下部にはキザミを有する隆帯を巡らしている。条線文を地文とし、口縁部は比喩により文様を演出している。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	P176 10% PL92 覆土 安行2式

第2668号土坑 (第636・648図)

位置 調査区の北東部, E1514区。

重複関係 本跡は第2640・2666・2667号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.34m, 短径2.12mのほぼ楕円形で、深さは1.30mである。

長径方向 N-53°-W

壁 外傾して立ち上がる。

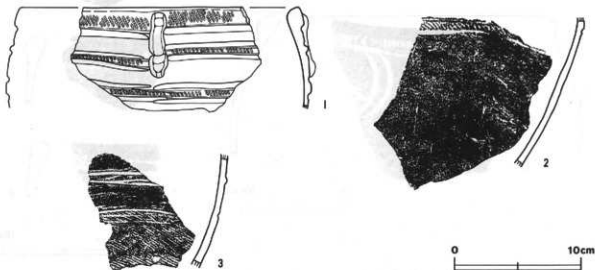
底 平坦である。

遺物 縄文土器片8点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で、縦長の貼付文を施している。2・3は深鉢の胴部片で、RLの単節縄文を施した縄文帯を巡らしている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉(安行1式期)と考えられる。

第2668号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第648図 1	深鉢 縄文土器	A [22.0] B (8.1)	口縁部片。口縁部は内傾する。縦長の貼付文を施している。RLの単節縄文を施している縄文帯を巡らしている。	砂粒 明褐色 良好	P177 10% 覆土 安行1式



第648図 第2668号土坑出土遺物実測図

第2669号土坑 (第649図)

位置 調査区の中央部, E1512区。

規模と平面形 長径1.22m, 短径1.04mの楕円形で, 深さは72cmである。

長径方向 N-64°-W

壁 西壁はテラス状となるが, それ以外は外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

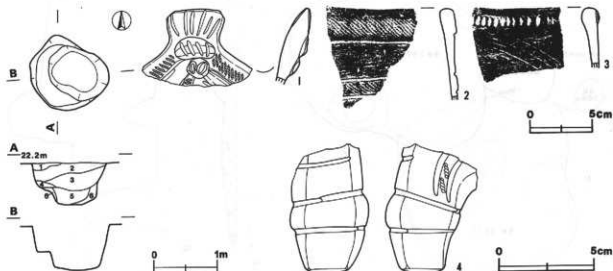
覆土 6層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子少量, 第1層よりも粘性がある。 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | 5 褐色 ローム粒子中量, 第2層よりもしまりがない。 |
| 3 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量 | 6 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量 |

遺物 縄文土器片71点, 土偶片1点が覆土から出土している。1は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で, 波頂部には魚尾状の突起を有している。2は深鉢の口縁部片で, RLの単節縄文を施した縄文帯を巡らしている。3は粗製深鉢の口縁部片で, 条縄文を地文とし, 口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。4は土偶の右足部片である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行2式期)と考えられる。



第649図 第2669号土坑・出土遺物実測図

第2669号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(㎝)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第649図 1	深鉢 縄文土器	B(6.3)	大波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部には魚尾状の突起を有し, 波頂部直下にはキザミを有する隆帯の貼付文とブタ鼻状の貼付文を施している。	砂粒 にふいば色 良好	P178 5% 覆土 安行2式

図版番号	器種	計測値(㎝)			重量 (g)	保存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	幅	厚さ				
第649図	4 土 偶	(6.8)	(4.7)	4.3	(104)	20	右足部。沈線文を施している。	D P 28 覆土 P L 100

第2670号土坑 (第650図)

位置 調査区の中央部, F15a1区。

重複関係 本跡は第2671号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長径3.16m, 短径2.36mの楕円形で, 深さは46cmである。

長径方向 N-76°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 第1・2層は第2671号土坑の覆土で, 第3・4層が本跡の覆土である。2層に分層され, 自然堆積である。

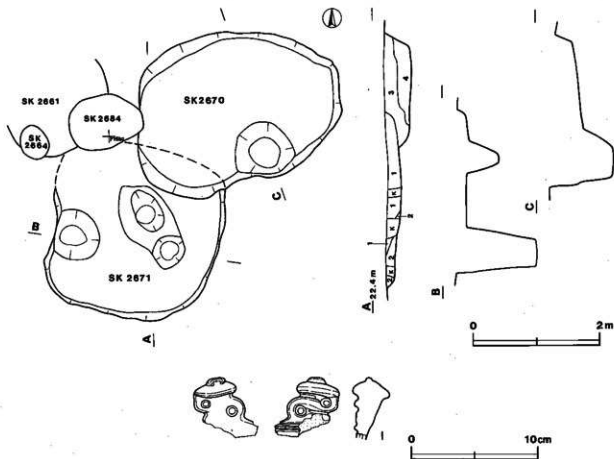
土層解説

3 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量

4 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量, 第3層より色調が明るい

遺物 縄文土器片239点が出土している。1は深鉢の突起部片で, 覆土から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期(堀之内式期)と考えられる。



第650図 第2670・2671号土坑, 第2670号土坑出土遺物実測図

第2670号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 650 図 1	漆 鉢 縄文土器	B (4.9)	突起部片。突起部はわずかに外傾する。頂部は円盤状となり、その下部に縦位の小形楕円状把手が付く。	砂粒 灰黄褐色 普通	P179 5% 覆土 堀之内式

第2681号土坑 (第651図)

位置 調査区の中央部, F15a1区。

重複関係 本跡は第2661号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

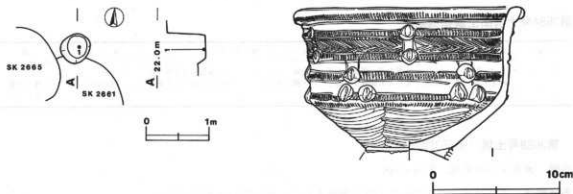
規模と平面形 長径48cm, 短径44cmのほぼ円形で, 深さは62cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

遺物 縄文土器1点が出土している。1は台部が欠損した台付鉢で, 底面から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行2式期)と考えられる。



第651図 第2681号土坑・出土遺物実測図

第2681号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 651 図 1	台付鉢 縄文土器	A 18.9 B (12.1)	台部欠損。胴部は外傾して立ち上がり, 口縁部はほぼ直立する。キズミを有する幾稜帯を巡らし, 楕円形の刺突文を有する貼付文を施している。	砂粒・スコリア に近い赤褐色 良好	P287 70% P L 83 底面 安行2式

第2684号土坑 (第652図)

位置 調査区の中央部, F15a1区。

重複関係 本跡が第2661号土坑を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.16m, 短径0.84mの楕円形で, 深さは2.34mである。

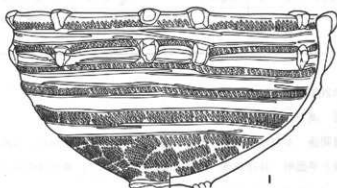
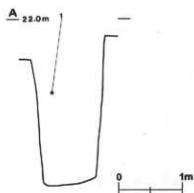
長径方向 N-88°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

遺物 縄文土器1点が出土している。1は台部が欠損した台付鉢で, 覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期後葉(安行1式期)と考えられる。



第652図 第2684号土坑・出土遺物実測図

第2684号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第652図 1	台付鉢 縄文土器	A 24.8 B (14.2)	台部欠損。胴部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。R.Lの単節縄文を施している縄文帯を隔らし、楕円形の貼付文を施している。	砂粒 暗赤褐色 良好	P288 70% P.L.93 覆土中層 逆行1式

第2688号土坑（第653図）

位置 調査区の中央部，F14e0区。

重複関係 本跡は第2687・2705号土坑と重複するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径4.84m，短径2.16mの楕円形で，深さは50cmである。

長径方向 N-50°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 2か所。P₁は，長径70cm，短径68cmのほぼ円形で，深さ47cmである。P₂は，長径48cm，短径42cmの楕円形で，深さ25cmである。性格は不明である。

覆土 第1～3層は第2687号土坑の覆土で，第4～6層が本跡の覆土である。3層に分層され，自然堆積である。

土層解説

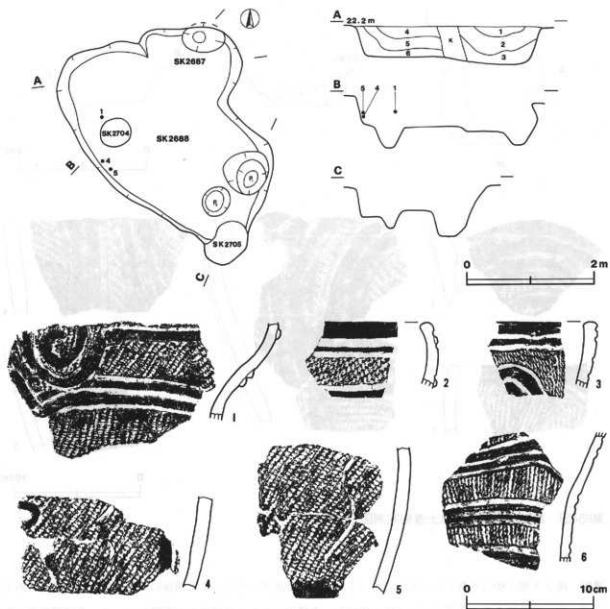
4 褐色 ローム粒子少量，炭化物微量

6 褐色 ローム粒子中層，ロームブロック少量

5 褐色 ローム粒子少量，炭化物微量，第1層より色調が明るい

遺物 縄文土器片327点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部付近から胴部の破片で，R.Lの単節縄文を地文とし，頸部に2本一組の隆帯を巡らして口縁部文様帯を形成している。口縁部には，隆帯により文様を描出している。2は深鉢の口縁部片で，L.R.Lの複節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。3は深鉢の口縁部片，6は深鉢の胴部片で，燕糸文を地文とし，沈線により文様を描出している。4・5は深鉢の胴部片で，R.Lの単節縄文を地文とし，4は沈線により，5は沈線と隆帯により懸垂文を施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E I～II式期）と考えられる。



第653図 第2687・2688号土坑，第2688号土坑出土遺物実測図

第2693号土坑（第654図）

位置 調査区の南部，G14a9区。

規模と平面形 長径1.74m，短径1.64mの楕円形で，深さは54cmである。

長径方向 N-6°-E

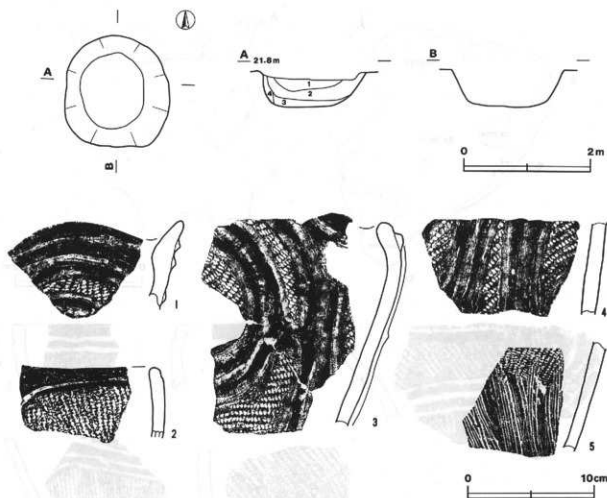
壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 4層に分層され，自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-------|---------------------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子微量，ローム小ブロック微量，炭化物少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，炭化物微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，炭化物少量 |



第654図 第2693号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片80点が覆土から出土している。1・3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、4は深鉢の胴部片で、同一個体である。隆帯により文様を描出し、文様内にRLの単節縄文を充填している。2は深鉢の口縁部片で、沈線により文様を描出し、RLの単節縄文を充填している。5は深鉢の胴部片で、RLの単節縄文と条線文を施している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。

第2698号土坑（第655図）

位置 調査区の南部，G14as区。

重複関係 本跡は第125号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

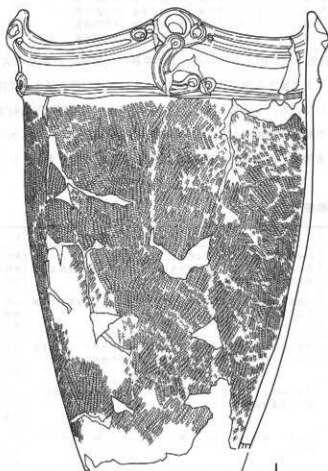
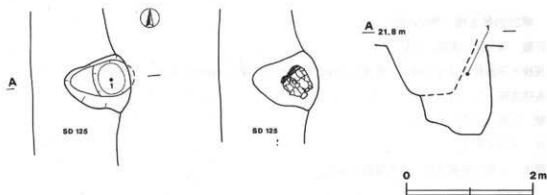
規模と平面形 長径1.04m，短径0.94mの楕円形で，深さは1.40mである。

長径方向 N-84°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

遺物 縄文土器片39点が出土している。1は4単位の小波状口縁を呈するほぼ完形の深鉢で，覆土中層から横位の状態で出土している。



第655図 第2698号土坑・出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉（堀之内Ⅰ式期）と考えられる。

第2698号土坑出土遺物観察表

図版番号	部 位	計測値(m)	部 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 655 図 1	深 鉢 縄文土部	A 30.2 B (49.0)	底部欠損。胴部はわずかに外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。4単位の波状口縁を呈し、波頂部直下に円形刺突文を施している。口縁部下部に隆帯を高め、口縁部文様帯を形成している。口縁部の波頂部下部には隆部に円形刺突文を有するCの字状の隆帯を施している。胴部にはL Rの半段縄文を施している。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P181 70% PL53 覆土中層 堀之内Ⅰ式

第2699号土坑 (第656図)

位置 調査区の南部, E1512区。

規模と平面形 長径2.94m, 短径2.12mの楕円形で, 深さは60cmである。

長径方向 N-24°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 4層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|--------|------------------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子中量, 炭化物中量 |
| 2 | にぶい赤褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子多量, 炭化物中量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子中量, 炭化物微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化物微量 |

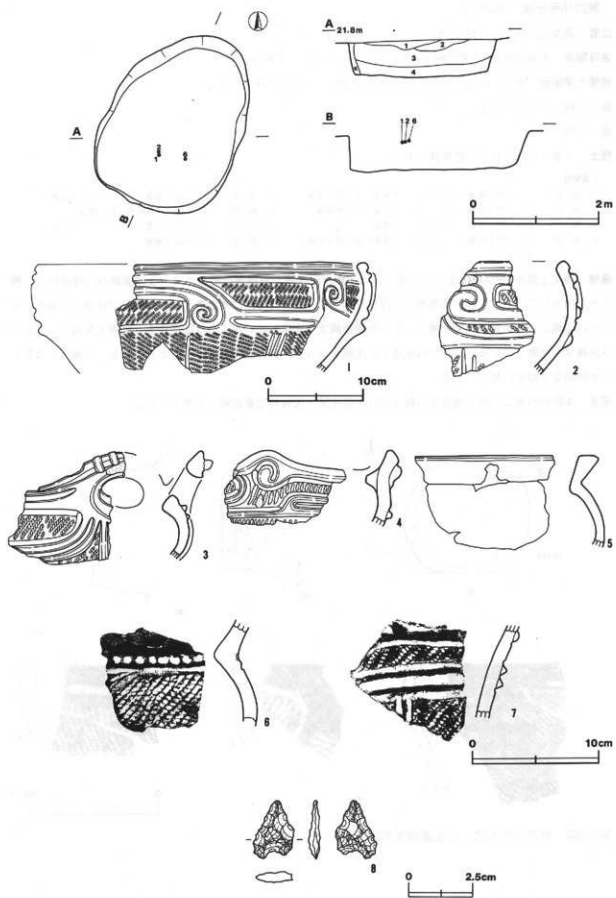
遺物 縄文土器片305点, 石鏃1点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片, 2は深鉢の口縁部片, 6は深鉢の胴部片で, 覆土上層から出土している。3・4は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片, 5は鉢の口縁部片で, 覆土から出土している。6はRLの単節縄文を地文とし, 頸部に円形刺突文を巡らしている。7は深鉢の頸部片で, RLの単節縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出している。8は石鏃である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。

第2699号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の詳説	胎土・色調・焼成	備考
第656図 1	深鉢 縄文土器	A (34.4)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾し, 口縁部はわずかに内彎する。口縁部には隆帯により単節文と区画文を交互に施している。胴部は沈線文を施している。地文はLとRの単節縄文である。	砂粒 黄褐色 良好	F182 10% 覆土上層 加曾利EⅡ式
		B (11.7)			
2	深鉢 縄文土器	B (9.1)	口縁部片。口縁部は内彎する。Rの単節縄文を地文とし, 隆帯により単節文と区画文を施している。	石英・長石・雲母 明褐色 普通	F183 5% 覆土上層 加曾利EⅡ式
3	深鉢 縄文土器	B (8.9)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。波頂部直下には凹孔を有する。LとRの単節縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出している。	石英・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	F184 5% 覆土 加曾利EⅠ式
4	深鉢 縄文土器	B (6.1)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。隆帯により文様を描出し, 隆帯の沈線を施している。	石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	F185 5% 覆土 加曾利EⅠ式
5	鉢 縄文土器	B (7.5)	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎し, 口縁部は短く外傾する。無文。内・外面赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	F186 5% 覆土 加曾利EⅠ式

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
第656図 8	石 鏃	2.3	(1.7)	0.4	(1)	チャート	Q53 覆土 F.L106



第656图 第2699号土坑·出土遗物实测图

第2710号土坑（第657図）

位置 調査区の南部，G14d6区。

重複関係 本跡は第126号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形 長径1.94m，短径1.88mのほぼ円形で，深さは94cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

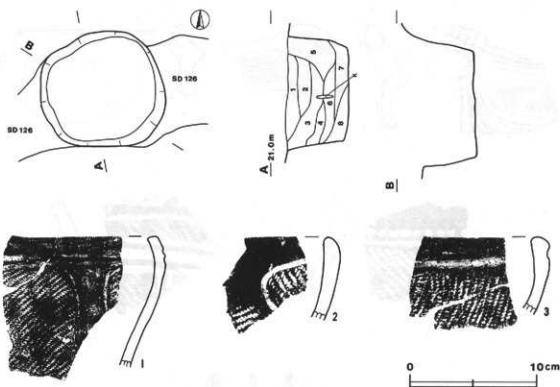
覆土 8層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1 褐色	ローム粒子微量，ロームブロック微量，焼土粒子微量	5 褐色	ローム粒子微量，ロームブロック微量
2 褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量，炭化物微量	6 褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
3 褐色	ローム粒子少量，ロームブロック微量	7 褐色	ローム粒子少量，ロームブロック微量
4 褐色	ローム粒子少量，ロームブロック微量，第3層より絡まりがある。	8 褐色	ローム粒子微量

遺物 縄文土器片139点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片，2・3は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。1は口唇部直下に沈線を巡らし，口唇部外面は無文帯としている。口縁部から胴部にかけては沈線により逆U字状文を施し，RLの単節縄文を充填している。2は沈線により区画文を施し，RLの単節縄文を充填している。3は口唇部直下に沈線を巡らし，口唇部外面は無文帯としている。口縁部にはRLの単節縄文を縦位に施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第657図 第2710号土坑・出土遺物実測図

第2723号土坑 (第658図)

位置 調査区の北東部, F15b7区。

規模と平面形 長径2.14m, 短径1.88mの楕円形で, 深さは58cmである。

長径方向 N-6°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

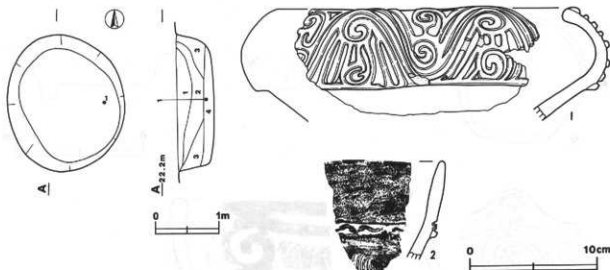
覆土 4層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック中量, 炭化物微量

遺物 縄文土器片46点が出土している。1・2は深鉢の口縁部から頸部の破片で, 1は覆土下層から, 2は覆土から出土している。2は口縁部下部に隆帯と交互刺突による連続口の字状文をを巡らし, 口縁部は無文帯としている。胴部は櫛歯状工具による多条沈線文により文様を描出している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第658図 第2723号土坑・出土遺物実測図

第2723号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第058図 1	深鉢 縄文土器	A [23.4] B (8.9)	口縁部から頸部の破片。胴部は外傾し, 口縁部は内彎する。口縁部は連続口の字状文をを巡らし, 胴部は櫛歯状工具により文様を描出している。胴部は無文である。	砂粒にふい褐色 普通	P187 5% P.L.93 覆土下層 加曾利E I式

第2724号土坑（第659図）

位置 調査区の中央部，F14d9区。

規模と平面形 長径2.00m，短径1.96mのほぼ円形で，深さは54cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ビット 1か所。P₁は，長径46cm，短径34cmの楕円形で，深さ29cmである。性格は不明である。

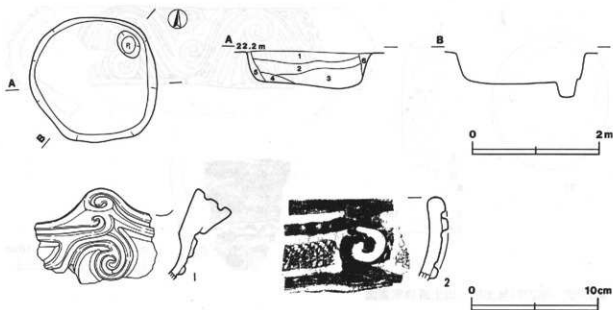
覆土 6層に分層され，自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，ロームブロック少量，炭化物微量
- 5 褐色 ローム粒子中量，ロームブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子多量，ロームブロック中量，炭化物微量

遺物 縄文土器片55点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。2はRLの単節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。



第659図 第2724号土坑・出土遺物実測図

第2724号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第659図 1	深鉢 縄文土器	B (7.1)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内響する。波頂部には沈線により兼手杖文を施している。RLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を攝出している。	石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P188 5% 覆土 加曾利E I式

第2727号土坑 (第660図)

位置 調査区の北東部, F15c s区。

規模と平面形 長径2.24m, 短径2.08mの楕円形で, 深さは32cmである。

長径方向 N-54°-E

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 1か所。P₁は, 長径44cm, 短径[36]cmの楕円形と推定され, 深さ35cmである。性格は不明である。

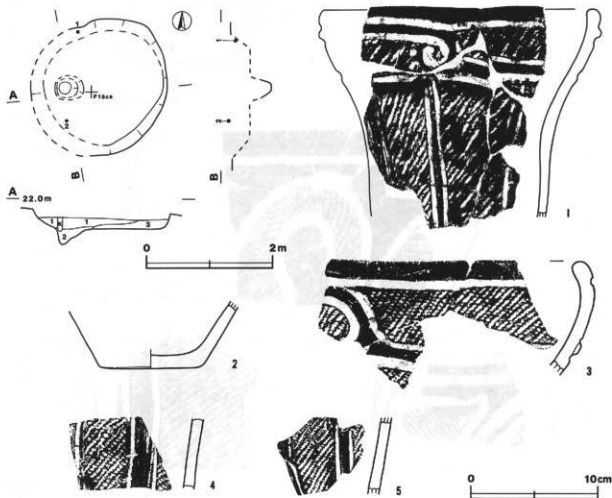
覆土 3層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量

遺物 縄文土器片102点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片, 2は深鉢の底部片で, 覆土上層から出土している。3は深鉢の口縁部片で, 口唇部直下と頸部に沈線を通らして, 口縁部文様帯を形成している。R Lの単節縄文を地文とし, 隆帯と隆帯に沿った沈線により文様を描出している。4・5は深鉢の胴部片で, R Lの単節縄文を地文とし, 沈線による懸垂文間を磨り消している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第660図 第2727号土坑・出土遺物実測図

第2727号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第660図 1	深鉢 縄文土器	A [21.0] B (16.4)	口縁部から胴部の破片。頂部はくびれ、口縁部は外傾する。口縁部には隆帯により裏手状文を飾している。胴部は2本一組の沈線を垂下させている。地文はR.Lの草筋縄文である。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	P189 20% 薄土上層 加曽利EⅡ式
2	深鉢 縄文土器	B (5.4) C 8.0	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P190 20% 薄土上層 加曽利E式

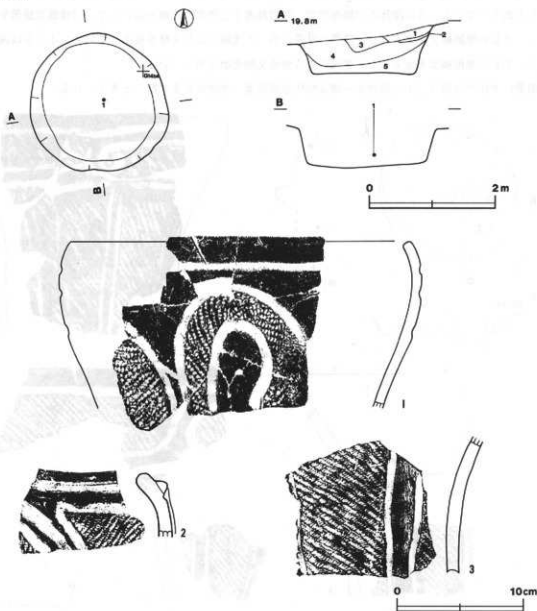
第2752号土坑 (第661図)

位置 調査区の南部, G14b3区。

規模と平面形 長径2.18m, 短径2.16mのほぼ円形で、深さは78cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。



第661図 第2752号土坑・出土遺物実測図

覆土 5層に分層され、自然堆積である。

土層解説

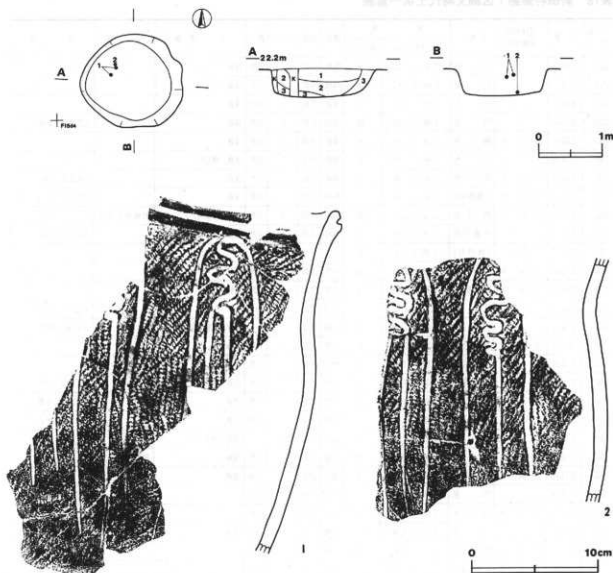
- | | | | |
|-------|----------------------|------|-------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子微量、ロームブロック微量 | 4 褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物少量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子少量、炭化物少量 | | |

遺物 縄文土器片77点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片、2は深鉢の口縁部片、3は深鉢の胴部片で、1は覆土下層から、2・3は覆土から出土している。2はRLの単節縄文を地文とし、隆帯により文様を描出している。3はLRの単節縄文を地文とし、沈線による懸垂文間を磨り消している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉（加曾利EⅣ式期）と考えられる。

第2752号土坑出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第061区 1	深鉢 縄文土器	A (27.0) B (5.4)	口縁部片。口縁部は内彎する。口唇部直下に沈線を高らしている。口縁部は沈線により文様を描出し、文様内にRLの単節縄文を充填している。	砂粒 黒褐色 普通	P191 5% P.L.93 覆土下層 加曾利EⅣ式



第662図 第2757号土坑・出土遺物実測図

第2757号土坑 (第662図)

位置 調査区の北東部, F15c3区。

規模と平面形 長径1.54m, 短径1.52mのはほぼ円形で, 深さは44cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 3層に分層され, 自然堆積である。

土層解説

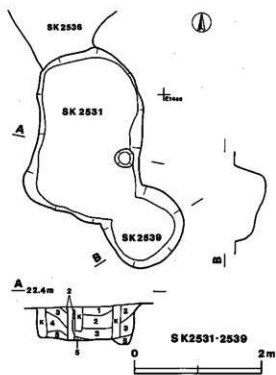
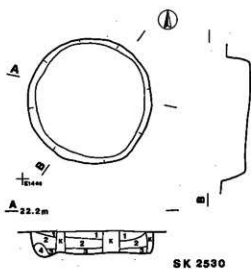
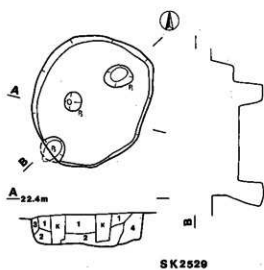
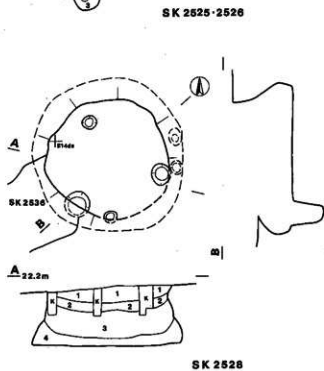
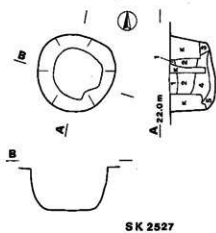
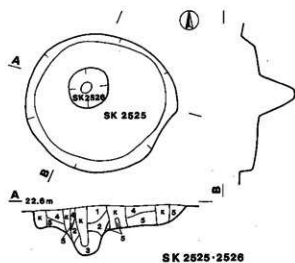
- 1 暗赤褐色 ローム粒子微量, 炭化物少量 3 暗赤褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量
 2 暗赤褐色 ローム粒子微量, 炭化物少量, 第1層より色調が明るい。

遺物 縄文土器片82点が出土している。1・2は同一個体と考えられる深鉢の口縁部から胴部の破片で, 1は覆土上層から, 2は覆土下層から出土している。小波状口縁を呈し, 口唇部直下に沈線を巡らしている。胴部はLRの単筋縄文を地文とし, 沈線により蕨手状文を施している。

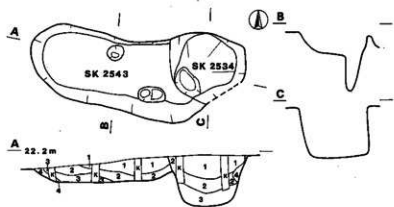
所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代後期前葉(堀之内I式期)と考えられる。

表18 前田村遺跡I区縄文時代土坑一覽表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	ビッド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)							
2525	C14c7	-	円形	2.40 × 2.22	30	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		
2526	C14c7	-	円形	0.64 × 0.62	76	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		
2527	E14d7	-	円形	1.22 × 1.22	70	垂直	平坦	-	自然	漆鉢		
2528	E14d8	-	円形	1.96 × 1.80	94	袋状	平坦	6	自然	漆鉢		SK2536と重複
2529	E14d9	N-42°-E	楕円形	2.14 × 1.92	54	垂直	平坦	3	自然	漆鉢		
2530	E14d8	-	円形	1.96 × 1.94	36	垂直	平坦	-	自然	漆鉢, 磨石片		
2531	E14e7	N-8°-E	楕円形	2.70 × 1.66	52	垂直	平坦	1	自然	漆鉢		SK2536, 2539
2532	E14f8	N-82°-W	不整形円形	4.30 × 3.46	20	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		SK2536, 2561より古
2533	E14e6	N-10°-E	楕円形	2.52 × 2.24	32	袋状	平坦	4	自然	漆鉢, 磨石片	加曾野Ⅱ式	
2534	E14g6	-	不整形円形	1.18 × 1.16	80	外傾	平坦	1	自然	漆鉢		SK2543より新
2536	E14d7	(N-38°-E)	(楕円形)	(1.46) × 1.28	36	外傾	平坦	-	-	-		
2537	E14g6	N-52°-W	楕円形	3.48 × 2.94	54	外傾	平坦	2	自然	漆鉢		
2538	E14d7	N-40°-E	不整形円形	(2.70) × 1.84	46	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		
2539	E14e7	-	円形	(1.30) × 1.22	50	外傾	段状	-	-	-		SK2531と重複
2540	E14f7	-	不定形	(3.00) × 2.70	24	外傾	平坦	-	-	漆鉢, 磨石片	中時式	SI446と重複
2541	E14c8	N-60°-W	長楕円形	2.24 × 1.44	40	外傾	平坦	1	自然	漆鉢		
2542	E14d6	-	不整形円形	1.80 × (1.72)	38	外傾	平坦	2	自然	漆鉢		
2543	E14g6	N-76°-W	長楕円形	(3.00) × 1.20	34	外傾	平坦	2	自然	漆鉢		SK2534より古
2544	E14e9	N-74°-E	楕円形	(1.44) × 1.10	28	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		SK2541より新
2545	E14c8	N-84°-W	楕円形	(3.40) × 2.14	30	外傾	平坦	1	自然	漆鉢		SK2541より古
2546	E14f8	-	円形	2.10 × 2.00	90	外傾	平坦	2	-	漆鉢, 磨石	加曾野Ⅱ式	
2548	E14e6	N-65°-E	楕円形	2.86 × 2.60	48	外傾	平坦	-	自然	漆鉢	加曾野Ⅱ式	SI441より新
2550	E14b5	N-84°-W	楕円形	1.86 × (1.60)	96	袋状	平坦	-	人為	漆鉢	加曾野Ⅱ式	
2551A	E14f8	-	円形	2.00 × 1.84	124	外傾	平坦	-	自然	-		SK2551と重複
2551B	E14f8	N-22°-E	楕円形	(1.60) × 1.40	60	外傾	平坦	-	自然	-		
2552	E14b5	-	円形	1.14 × 1.06	144	外傾	平坦	-	自然	漆鉢	堀之内I式	SK2556より新
2554	E14b6	N-41°-W	楕円形	2.32 × 1.98	48	外傾	平坦	9	自然	-		
2555	E14d7	N-83°-W	(楕円形)	(1.40 × 1.24)	104	外傾	平坦	-	自然	-		SK2538より新
2556	E14b5	-	円形	2.44 × 2.36	66	外傾	平坦	1	自然	-		SK2552より古



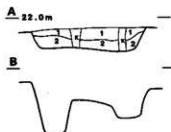
第663圖 縄文土坑夷測圖(1)



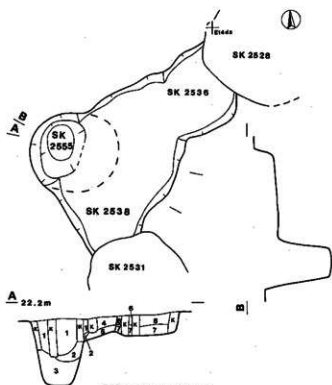
SK 2534 . SK 2543



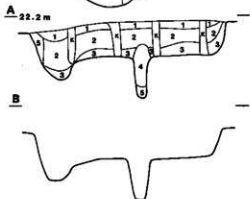
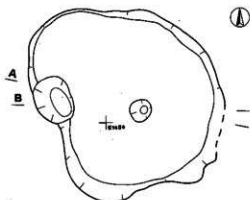
SI 411



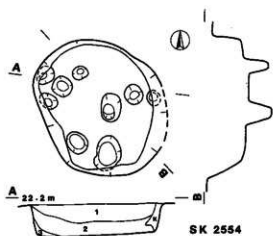
SK 2542



SK 2538 . SK 2555



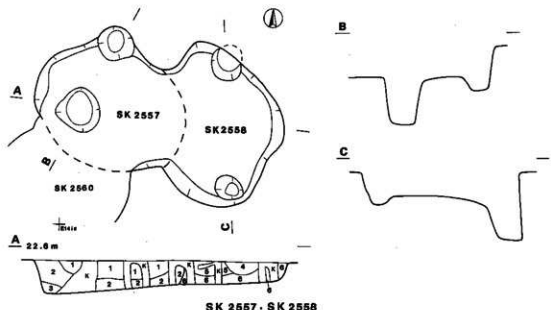
SK 2537



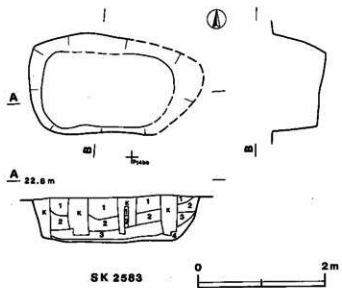
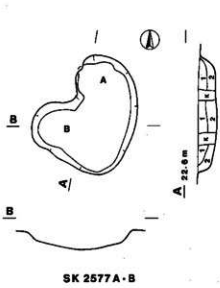
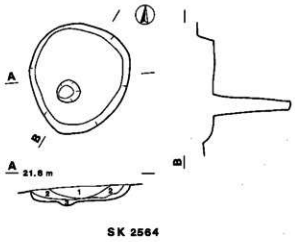
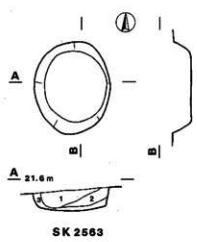
SK 2554



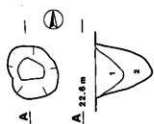
第664图 縄文土坑夷洲图(2)



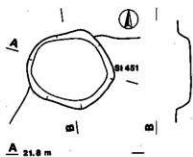
SK 2557・SK 2558



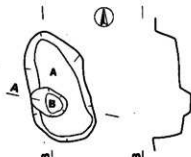
第665図 縄文土坑実測図(3)



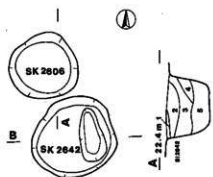
SK 2591



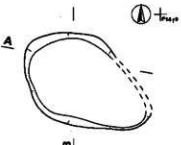
SK 2593



SK 2598A-B



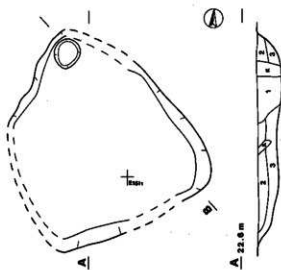
SK 2606-SK 2642



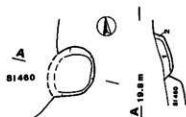
SK 2609



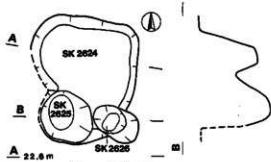
SK 2621



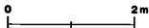
SK 2613

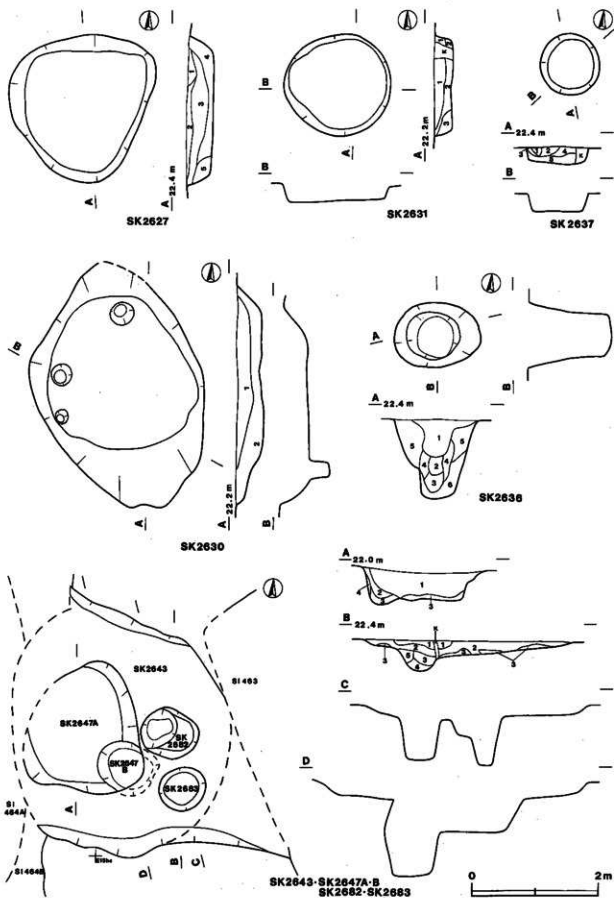


SK 2623

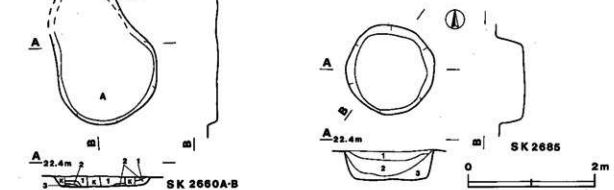
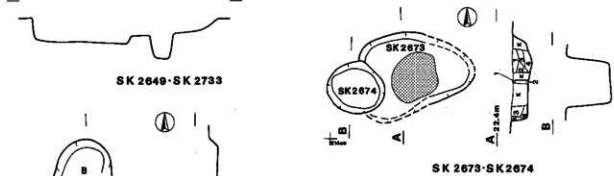
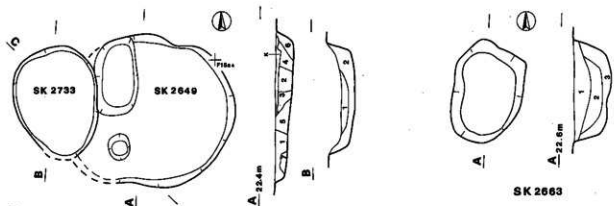
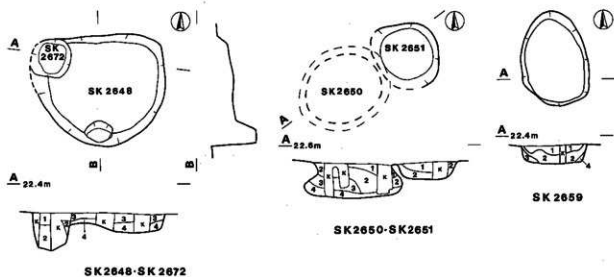


SK 2624-SK 2625-SK 2626

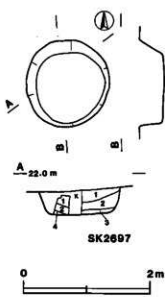
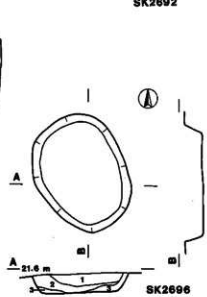
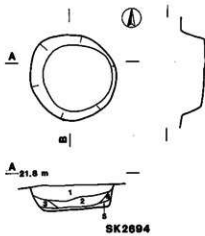
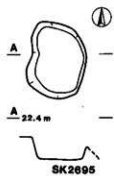
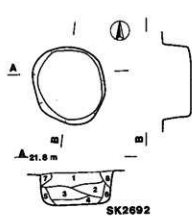
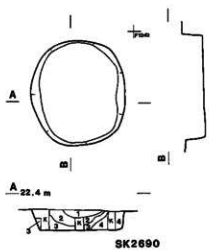
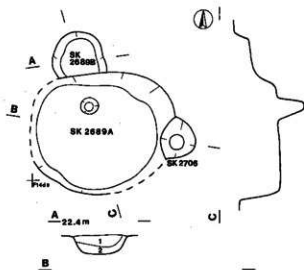
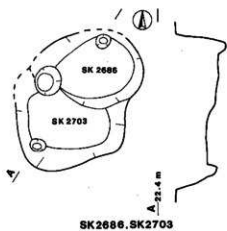




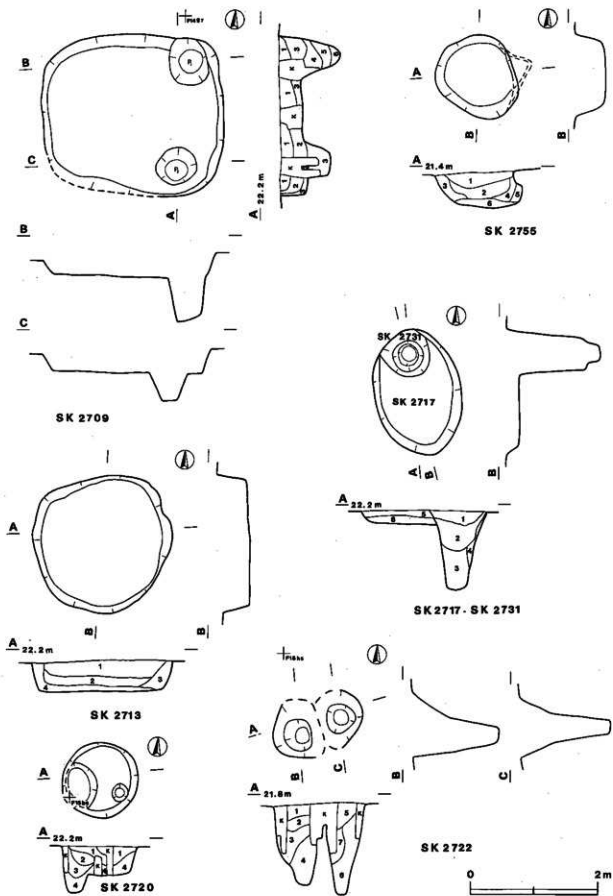
第667圖 縄文土坑突測圖(5)



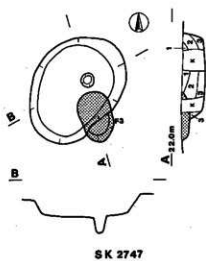
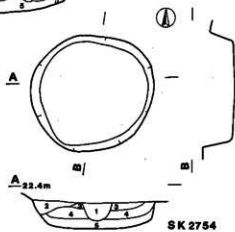
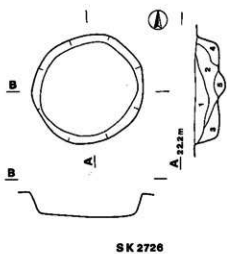
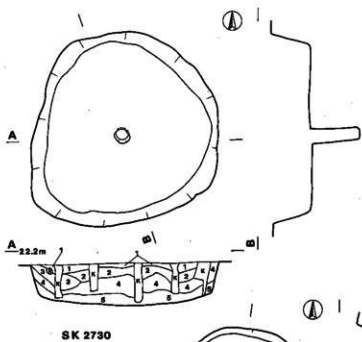
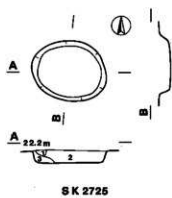
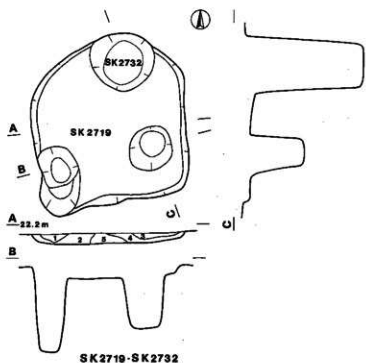
第668圖 縄文土坑実測図(6)



第669圖 縄文土坑実測図(7)



第670图 縄文土坑突洞図(8)



第671图 縄文土坑実測図(9)

土 坑 号	位 置	長径方向 (長轴方向)	平面形	規 模		壁面	底面	ビツト	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
2527	E14b8	N-78'-W	楕円形	2.44×(2.18)	54	外傾	平直	2	自然			SK2528より新
2528	E14b8	N-10'-W	楕円形	2.66×(1.96)	34	外傾	平直	2	自然			SK2528より古
2529	E14b7	-	円形	1.86×1.80	74	外傾	平直	-	自然	磨製石器, 縄文土器片	加曾利E式	SK2520より新
2530	E14b8	N-45'-W	(楕円形)	2.05×(1.64)	34	外傾	平直	-	人爲	漆鉢	加曾利EⅡ式	SK2529より古
2531	E14b8	N-84'-W	(楕円形)	(1.70)×1.30	104	袋状	平直	-	人爲		加曾利EⅠ式	SI447と重複
2532	E14b8	-	円形	0.98×0.92	50	外傾	平直	-	自然	漆鉢	堀之内Ⅰ式	SI471より新
2533	E14b4	N-12'-W	楕円形	1.42×1.20	34	外傾	平直	-	自然			
2534	E14i4	N-16'-E	楕円形	1.75×1.56	24	外傾	平直	1	自然			
2535	E14g4	N-24'-E	楕円形	1.44×1.14	138	垂直	平直	-	自然	漆鉢, 磨製石器	堀之内Ⅰ式	SI448より新
2539	E14j7	N-36'-E	楕円形	(2.28)×2.00	42	外傾	平直	-	-	漆鉢	加曾利EⅠ式	SK2570と重複
2570	E14j7	N-64'-W	楕円形	2.58×2.14	70	外傾	平直	-	自然	漆鉢, 土器片片類	加曾利EⅠ式	SK2569と重複
2571	E14f5	N-3'-W	楕円形	1.22×0.98	74	垂直	平直	-	自然	漆鉢	加曾利EⅡ式	SI448より新
2574A	E14j6	-	円形	1.90×1.74	60	外傾	平直	1	自然			SK2574Bと重複
2574B	E14j6	-	円形	0.98×0.90	75	外傾	平直	-	自然			SK2574Aと重複
2575	E14f9	N-85'-E	楕円形	2.38×1.94	48	外傾	平直	-	自然			SK2576と重複
2576	E14f9	N-54'-E	不整形円形	3.98×2.80	14	外傾	平直	3	自然	漆鉢	堀之内Ⅰ式	SK2569より古
2577A	E14g9	N-10'-E	楕円形	1.34×1.04	38	外傾	平直	-	自然			SK2577Bと重複
2577B	E14g9	-	(円形)	0.74×0.70	24	外傾	平直	-	自然			SK2577Aと重複
2578	E14j5	N-62'-E	(楕円形)	1.66×(1.44)	38	外傾	平直	-	自然	漆鉢	加曾利EⅠ-Ⅱ式	SK2574Aより古
2579	F14b8	N-8'-E	楕円形	2.24×1.90	94	袋状	平直	2	自然	漆鉢, 磨石	阿玉合冢式	
2580	F14a8	N-18'-E	楕円形	1.24×1.10	98	外傾	二段	-	-	漆鉢	堀之内Ⅰ式	
2581	F14a8	N-68'-E	楕円形	1.14×1.04	36	外傾	平直	-	自然	漆鉢, 土製陶輪片	堀之内Ⅰ式	
2582	F14a9	N-30'-E	楕円形	2.26×1.56	42	外傾	平直	2	自然	漆鉢, 打製石器	堀之内Ⅰ式	
2583	F14a8	N-88'-E	楕円形	2.76×1.60	70	外傾	平直	-	自然			
2584	F14c8	-	円形	2.92×2.70	50	外傾	平直	1	自然	漆鉢	加曾利EⅠ式	
2585	F14c7	-	円形	2.18×2.14	18	外傾	平直	-	自然	漆鉢	中 埜 式	
2586A	F14c5	N-84'-E	楕円形	2.16×1.66	70	外傾	平直	2	自然	漆鉢, 磨石	加曾利EⅠ-Ⅱ式	SK2596より古
2586B	F14c5	N-84'-E	楕円形	0.80×0.70	100	垂直	平直	-	自然			SK2596Aと重複
2589	E14i9	N-4'-E	(楕円形)	2.28×(1.50)	92	外傾	平直	-	-	漆鉢片, 磨石, 石皿片	縄 文 中 期	SK2590と重複
2590A	E14i9	N-34'-W	楕円形	1.52×0.94	92	外傾	平直	-	自然	漆鉢片, 土器片片類	中 埜 式	SI436より新
2590B	E14i9	N-44'-E	不整形円形	1.62×1.74	78	外傾	平直	1	自然			SK2590Aと重複
2591	E14i9	N-8'-W	楕円形	0.84×0.76	90	外傾	四段	-	自然			
2592	E14b5	N-38'-E	楕円形	1.50×1.56	78	外傾	平直	-	自然	漆鉢片, 磨石片	加曾利EⅡ式	SI451より新
2593	E14g4	N-78'-W	楕円形	1.40×1.24	20	外傾	平直	-	自然			SI451より新
2595	E14d7	-	(円形)	1.72×(1.72)	16	外傾	平直	-	自然	漆鉢, 土口土器片	縄文後期前期	SI441より新
2596	C14c5	-	円形	1.12×1.04	130	垂直	平直	-	自然			SK2596Aより新
2597	F14c4	-	(楕円形)	3.98×(2.60)	28	外傾	平直	-	自然	縄文土器片, 磨石片	加曾利BⅠ式	西部調査区域外
2598A	E14e6	N-18'-W	楕円形	1.80×0.96	43	外傾	平直	-	自然			SK2598Bより古
2598B	E14e6	-	楕円形	0.58×0.38	50	外傾	平直	-	自然			SK2598Aより新
2599	E14f7	-	円形	1.74×1.68	44	垂直	平直	1	自然	漆鉢, 磨石, 石皿, 石鏝	加曾利EⅡ式	
2600	E14b9	N-20'-W	楕円形	2.96×2.54	68	袋状	平直	5	自然	縄文土器片, 磨石片	縄 文 中 期	SI450より古
2601	E14f9	N-34'-E	不整形円形	1.60×1.12	38	外傾	平直	2	自然	漆鉢片	堀之内Ⅰ式	SK2575より新
2603	E14e7	-	不整形円形	0.78×0.72	80	外傾	平直	-	-	縄文土器片, 磨石	縄 文 後 期	SI446より新
2604A	E14i0	N-10'-E	楕円形	0.96×0.80	132	垂直	平直	-	自然	漆鉢	実 行 Ⅰ 式	SK2604Bより新
2604B	E14i0	-	楕円形	1.88×1.56	46	外傾	平直	-	-			SK2604Aより古
2605	E15i1	-	不整形円形	(2.74)×2.66	78	外傾	平直	2	-	漆鉢	加曾利EⅠ式	SK2623と重複

土 坑 号	位 置	方位方向 (長径方向)	平面形	規 模		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	時 期	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)							
2606	E1511	-	円形	1.06 × 1.04	64	外傾	平坦	-	自然			
2607	E1417	[N-57°-W]	[楕円形]	(1.36 × 1.20)	70	垂直	平坦	1	自然	漆鉢、シナブ、瓦、石、灰石	堀之内Ⅰ式	
2608	F1449	-	円形	1.85 × 1.70	34	外傾	平坦	2	自然	漆鉢	加曾利EⅡ式	
2608	F1449	N-56°-W	楕円形	2.22 × 2.45	38	外傾	平坦	-	自然			
2611	E1457	N-4°-W	[楕円形]	(1.74) × 1.48	50	外傾	平坦	-	自然	漆鉢	中 幹 式	北條調査区域外
2613	E1450	N-25°-W	不整形	3.34 × 2.90	38	外傾	平坦	1	自然			
2616	E1440	N-84°-W	楕円形	2.40 × 2.16	32	外傾	平坦	-	自然			SK2622より古
2618	E1448	[N-16°-W]	[楕円形]	(1.72 × 1.48)	76	袋状	平坦	-	漆鉢		加曾利EⅠ式	
2619	E1440	N-20°-W	楕円形	2.16 × 1.64	28	外傾	平坦	2	自然			SK2635と重複
2620	E1440	N-84°-E	楕円形	2.92 × 1.80	14	外傾	平坦	4	自然			SK2635と重複
2621	E1449	-	不整形	1.92 × (1.48)	50	袋状	平坦	1	自然			北條調査区域外
2622	E1440	-	円形	1.44 × 1.40	148	垂直	平坦	-	人為	漆鉢、石、石碇、石塊、土、灰石	堀之内Ⅰ式	SK2629跡、ツバクツブ
2625	E1340	-	[円形]	0.78 × (0.58)	16	外傾	平坦	-	自然			第4号方壺と重複
2624	E1419	N-4°-E	楕円形	1.94 × 1.70	48	外傾	平坦	-	自然			SK2625、2626と重複
2627	E1542	-	不整形円形	2.36 × 2.24	42	外傾	平坦	-	自然			
2628	E1541	-	円形	2.66 × 2.52	58	外傾	平坦	5	自然	漆鉢	加曾利EⅡ式	
2629	E1418	N-3°-E	楕円形	1.34 × 0.88	52	外傾	平坦	-	自然			SI466、SK2629と重複
2630	E1543	N-13°-W	楕円形	4.00 × 2.68	42	外傾	平坦	3	自然			
2631	E1544	-	円形	1.70 × 1.64	28	外傾	平坦	-	自然			
2633	E1511	N-13°-W	楕円形	1.80 × 1.56	132	外傾	平坦	1	自然	漆鉢	加曾利EⅠ式	SK2605と重複
2635	E1449	[N-44°-W]	[楕円形]	(3.10 × 2.30)	9	外傾	平坦	5	自然	鉢(赤彩)、漆鉢	加曾利EⅡ式	SK2619、2620と重複
2636	E1544	N-88°-E	楕円形	1.38 × 1.04	132	垂直	平坦	-	自然			
2637	E1541	-	円形	0.96 × 0.94	28	垂直	平坦	-	自然			
2639	E1513	N-18°-W	楕円形	2.54 × 2.18	58	外傾	平坦	5	自然	漆鉢、磨石	加曾利EⅠ式	
2640A	E1414	-	円形	1.26 × 1.20	264	垂直	平坦	1	人為	縄文土器片、土器、灰石	安行3a式	SK2603跡、ツバクツブ
2640B	E1414	N-94°-E	[楕円形]	(2.30) × 1.64	66	外傾	平坦	-	自然	鉢、漆鉢	安行Ⅰ式	SK2640Aより古
2641A	E1514	N-2°-E	楕円形	0.94 × 0.78	106	垂直	平坦	-	自然	縄文土器片	安行Ⅱ式	SK2641Bより新
2641B	E1514	N-70°-W	楕円形	(1.20) × 1.02	32	外傾	平坦	-	自然			SK2641Aより古
2642	E1511	-	円形	1.32 × 1.28	39	外傾	平坦	1	自然			
2643	E1544	N-10°-W	[楕円形]	4.04 × (3.48)	28	外傾	平坦	-	自然			SI64 SK267、SK2682と重複
2645	E1511	-	不整形	1.92 × 1.86	34	外傾	平坦	-	自然			
2646	E1542	N-44°-W	(不整形円形)	(1.36) × 1.24	18	外傾	平坦	-	自然			SK2662と重複
2647A	E1543	N-10°-E	楕円形	2.08 × 1.84	50	外傾	平坦	-	自然			SK2647B、2643と重複
2647B	E1543	-	円形	0.74 × 0.72	120	垂直	平坦	-	自然			SK2647と重複
2648	E1542	N-84°-W	楕円形	2.14 × 1.76	30	外傾	平坦	-	自然			SK2672より古
2649	F1543	-	円形	(2.54) × 2.34	20	外傾	平坦	2	自然			SK2733と重複
2650	E1419	N-53°-E	[楕円形]	(1.24 × 1.04)	54	袋状	平坦	-	自然			
2651	E1419	-	円形	1.03 × 0.98	26	外傾	平坦	-	自然			
2652	E1541	-	円形	2.34 × 2.28	42	外傾	平坦	6	自然	漆鉢	加曾利EⅠ式	SI464より古
2659	F1541	N-6°-W	楕円形	1.48 × 1.04	28	外傾	平坦	-	自然			
2660A	F1541	N-20°-W	[楕円形]	(2.12) × 1.60	14	外傾	平坦	-	自然			SK2660Bと重複
2660B	F1541	N-8°-E	[楕円形]	(1.08) × 0.90	12	外傾	平坦	-	自然			SK2660Aと重複
2661	F1541	N-40°-E	[楕円形]	1.82 × (0.98)	84	袋状	平坦	-	自然	漆鉢	中 幹 式	SK2664、2665、2666跡
2662	E1541	-	円形	1.18 × 1.10	146	垂直	平坦	2	-	漆鉢、磨石、磨石	安行Ⅱ式	SK2646と重複
2663	E1440	N-4°-E	楕円形	1.52 × 1.12	58	外傾	平坦	-	自然			
2664	E1541	N-12°-W	楕円形	0.54 × 0.49	146	垂直	平坦	-	自然	漆鉢	安行Ⅰ式	SK2661より新

土番 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	敷 積		壁面	底面	ピット	覆土	出土遺物	時 期	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
2665	E15a1	N-26°-W	楕円形	1.24 × 0.96	100	外傾	平皿	-	-	深鉢	安 行 1 式	SK2661より新
2666	E151a	N-5°-E	楕円形	2.02 × 1.02	54	外傾	平皿	4	自然	深鉢、浅鉢	加賀利E1式	SK2668と重複
2667	E151d	-	円形	1.24 × 1.20	188	垂直	平皿	1	-	深鉢、台付鉢	安 行 2 式	SK2640と重複
2668	E151e	N-53°-W	楕円形	2.34 × 2.12	130	外傾	平皿	-	-	深鉢	安 行 1 式	SK2640、2666と重複
2669	E151z	N-64°-W	楕円形	1.22 × 1.04	72	外傾	平皿	-	自然	深鉢、土塊	安 行 2 式	
2670	E15a1	N-76°-E	楕円形	3.16 × 2.36	46	外傾	平皿	-	自然	深鉢	堀之内I式	SK2671より古
2671	F15b2	-	円形	2.72 × 2.72	20	外傾	平皿	3	自然			SK2670新、SK2684古
2672	E15c1	-	円形	0.62 × 0.62	60	垂直	平皿	-	自然			SK2648より新
2673	E14d9	N-84°-E	楕円形	1.86 × 1.32	30	外傾	平皿	-	自然			SK2679と重複、伊藤可成跡
2674	E14d9	-	円形	0.90 × 0.82	43	垂直	平皿	-	-			SK2679と重複
2681	F15a1	N-66°-W	円形	0.48 × 0.44	62	垂直	平皿	-	-	台付鉢	安 行 2 式	SK2661より新
2682	E15g4	N-74°-W	楕円形	0.90 × 0.74	80	外傾	平皿	-	自然			SK2643と重複
2683	E15g4	-	円形	0.76 × 0.66	66	垂直	平皿	-	自然			SK2643と重複
2684	F15a1	N-88°-E	楕円形	1.16 × 0.84	234	垂直	平皿	-	-	台付鉢	安 行 1 式	SK2661より新
2685	F14c9	-	円形	1.40 × 1.38	46	垂直	平皿	-	-			
2686	F14d8	N-64°-E	楕円形	1.60 × 1.26	66	外傾	平皿	1	自然			SK2703と重複
2687	F15e1	N-60°-W	楕円形	1.64 × (1.26)	46	外傾	平皿	1	自然			SK2683と重複
2688	F14e9	N-50°-W	楕円形	4.84 × 2.16	50	外傾	平皿	2	自然	深鉢	加賀利E1-I式	SK2687、2705と重複
2689A	F14c8	N-86°-W	楕円形	2.68 × 1.94	66	外傾	平皿	1	自然			SK2686、SK2689と重複
2689B	F14c8	N-10°-W	(楕円形)	(0.90) × 0.82	26	外傾	平皿	-	自然			SK2689Aと重複
2690	F15d1	N-6°-W	楕円形	1.66 × 1.48	32	外傾	平皿	-	自然			
2692	F14j7	N-18°-W	楕円形	1.24 × 1.12	50	垂直	平皿	-	自然			
2693	G14a9	N-6°-E	楕円形	1.74 × 1.64	54	外傾	平皿	-	自然	深鉢	加賀利E1式	
2694	F1418	N-50°-W	楕円形	1.94 × 1.30	38	外傾	平皿	-	自然			
2695	F15a2	N-12°-E	楕円形	1.18 × 0.88	36	外傾	平皿	-	-			
2696	F1417	N-31°-W	楕円形	1.84 × 1.44	40	外傾	平皿	-	自然			
2697	F1417	-	円形	1.36 × 1.34	38	外傾	平皿	-	自然			
2698	G14a8	N-84°-E	楕円形	1.04 × 0.94	140	垂直	平皿	-	-	深鉢	堀之内I式	SD125より古
2699	E151z	N-24°-E	楕円形	2.94 × 2.12	60	外傾	平皿	-	自然	深鉢、石敷	加賀利E1式	
2703	F14d9	N-85°-E	楕円形	1.74 × 1.64	48	外傾	平皿	1	自然			SK2686と重複
2706	F14c8	N-5°-E	楕円形	0.66 × 0.56	50	垂直	平皿	-	自然			SK2689Aより古
2709	F14g6	N-88°-W	楕円形	2.88 × 2.56	36	外傾	平皿	2	自然			
2710	G14d6	-	円形	1.94 × 1.88	94	外傾	平皿	-	自然	深鉢	加賀利E1式	SD126より古
2713	F14d8	-	円形	2.16 × 2.14	48	外傾	平皿	-	自然			
2717	F15b5	N-12°-W	楕円形	2.00 × 1.36	22	外傾	平皿	-	自然			SK2701より古
2719	F15c5	-	不整形円形	2.58 × 2.42	18	外傾	平皿	2	自然			SK2732と重複
2720	F15a6	-	円形	1.26 × 1.18	44	外傾	平皿	2	自然			
2722A	F15b5	N-6°-E	楕円形	0.92 × 0.78	134	垂直	平皿	-	自然			SK2722Bと重複
2722B	F15b5	N-6°-E	楕円形	0.94 × 0.76	141	垂直	平皿	-	自然			SK2722Aと重複
2723	F15b7	N-6°-E	楕円形	2.14 × 1.88	58	外傾	平皿	-	自然	深鉢	加賀利E1式	
2724	F14d9	-	円形	2.00 × 1.96	54	外傾	平皿	1	自然	深鉢	加賀利E1式	
2725	F14d8	N-72°-W	楕円形	1.22 × 0.94	18	外傾	平皿	-	自然			
2726	F15d6	N-52°-E	楕円形	1.74 × 1.66	38	外傾	平皿	-	自然			
2727	F15c8	N-54°-E	楕円形	2.24 × 2.08	32	外傾	平皿	1	自然	深鉢	加賀利E1式	
2730	F151z	N-42°-E	楕円形	3.24 × 3.18	66	外傾	平皿	1	自然			
2731	F15b5	-	円形	0.78 × 0.74	146	垂直	平皿	-	自然			SK2717より新

土 坑 番 号	位 置	長短方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	ピット	覆土	出 土 遺 物	時 期	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)							
2732	F15c5	N-22°-E	楕円形	1.02 × 0.92	186	垂直	平坦	-	-			S K2719と重複
2733	F15a1	N-10°-W	楕円形	1.80 × 1.32	36	垂直	平坦	-	自然			S K2649と重複
2747	F14e7	N-30°-E	楕円形	1.80 × 1.32	36	外傾	平坦	1	自然			F3より古
2752	G14b5	-	円形	2.18 × 2.16	78	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		加曾利EⅡ式
2754	F14b9	-	円形	2.00 × 1.84	42	外傾	平坦	-	自然			
2755	F14a4	N-32°-W	楕円形	1.35 × 1.22	54	外傾	平坦	-	自然			
2757	F15c3	-	円形	1.54 × 1.52	44	外傾	平坦	-	自然	漆鉢		題之内Ⅰ式

(5) 遺物包含層

I区では、縄文時代の遺物包含層2か所を調査した。遺物包含層は、谷津に面する北西部と東部の傾斜地に位置している。第3号遺物包含層は標高20mより下位に、第4号遺物包含層は標高21mより下位に堆積している。遺物の記述については種別に行い、縄文土器の分類は第3節4のG区遺構外出土遺物で分類した基準を使用する。

第3号遺物包含層(第672～674図)

位置 調査区の北西部, E13区。

確認状況 大部分は調査区域外にあり, 西部だけを確認した。本跡の東側にある舌状台地上面には, 縄文時代中期から晩期にかけての遺構が集中して分布している。

重複関係 本跡は, 平安時代の第459・461・462号住居跡に掘り込まれていることから, 本跡が古い。第461・462号住居跡については第2層上面から掘り込んでいる。

規模 堆積範囲は, 調査区内において東西16m, 南北25mに及んでいる。厚さは最大で60cmである。

土層 3層に分層される。第1層は, ローム粒子を少量, ロームブロックを微量含む黒褐色土である。第2層は, ローム粒子を微量含む黒褐色土である。第3層は, ローム粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物 縄文土器片1822点, 土師器片6点が出土しており, 遺物の多くは第3層から出土している。縄文土器は, 中期中葉の第Ⅲa群阿玉台式が23点, 第Ⅲe群中幹式が5点, 中期後葉の第Ⅳa群加曾利E式が1646点, 第Ⅳc群加曾利式が1点, 後期の第Ⅴ群1・2類の称名寺式が1点, 第Ⅴ群3類堀之内Ⅰ式が63点, 第Ⅴ群5類加曾利B式が64点, 第Ⅴ群6～8類安行式が19点出土している。土師器は混入したものと考えられる。

縄文土器

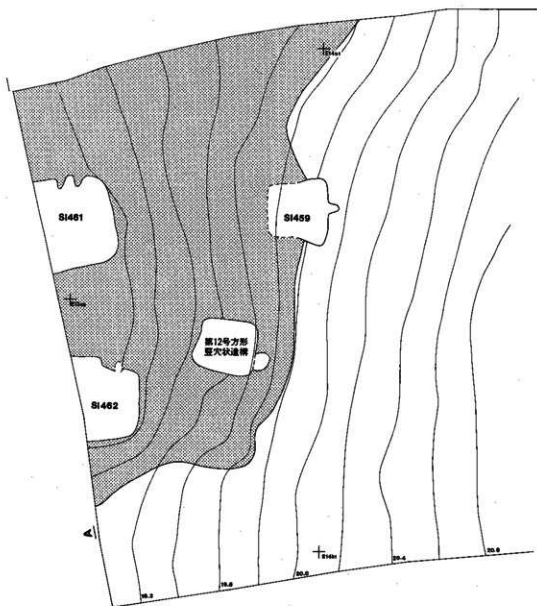
第Ⅳ群 中期後葉

第Ⅴa群 加曾利E式

1類 加曾利EⅠ式(1) 1は深鉢の口縁部片で, Lの無節縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出している。

2類 加曾利EⅡ式(2・4・5) 2は深鉢の口縁部片で, RLの単節縄文を地文とし, 2本一組の隆帯により文様を描出している。隆帯の両側には沈線を施している。4は深鉢の胴部片で, 懸垂文を地文とし, 懸垂する沈線間を磨り消している。5は深鉢の胴部片で, LRの単節縄文を地文とし, 沈線による懸垂文間を磨り消している。

3類 加曾利EⅢ式(3・6) 3は深鉢の口縁部片で, 口縁に沿って隆帯を巡らし, 沈線により区画文を施



第672图 第3号遺物包含層実測図

している。区画文内には条線文を充填している。6は深鉢の胴部片で、微隆帯により区画文を施し、RLの単節縄文を充填している。

4類 加曾利EⅡ式(7~9) 7は小波状口縁を呈する深鉢で、口縁に沿って沈線を巡らしている。RLの単節縄文を地文とし、沈線による区画文外を磨り消している。8・9は口縁に沿って微隆帯を巡らす深鉢の口縁部片で、8はRLの単節縄文を、9はLRの単節縄文を縦位に施している。9は口縁を巡る微隆帯の下部に円形刺突文を施している。

第Ⅵ群 後期前葉

3類 堀之内Ⅰ式(10~13) 10・11は深鉢の口縁部片で、LRの単節縄文を地文とし、口唇部直下に沈線を巡らしている。10は条線文、11は沈線により文様を描出している。12は深鉢の胴部片で、RLの単節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。13は胴部が算盤玉形を呈すると考えられる注口土器の口縁部から頸部の破片である。小波状口縁を呈し、波頂部直下には縦位の橋状把手を有している。

第Ⅶ群 後期中葉

1類 加曾利BⅠ式(15・16・21) 15は鉢の口縁部片で、Lの無節縄文を地文とし、5条の沈線文を巡らしている。16は鉢の口縁部片で、横位に巡らした沈線間にLの無節縄文を充填している。21は口縁部から胴部の一部が欠損する鉢で、LRの単節縄文を地文とした縄文帯を施している。区切り文は、対向する鉤状文である。

4類 加曾利BⅡ式(14・17・18) 14は深鉢の口縁部片で、押圧を施した隆帯を巡らしている。地文はLRの単節縄文で、沈線により文様を描出している。17は小波状口縁を呈する粗製深鉢の口縁部片で、押圧を施した隆帯を巡らし、波頂部から同じ隆帯を垂下させている。地文としてRLの単節縄文を施し、口唇部には刻みを施している。18は深鉢の底部片で、無文である。

第Ⅷ群 後期後葉

1類 安行Ⅰ式(19) 19は深鉢の口縁部片で、帯縄文を施している。帯縄文は肥厚が著しく、RLの単節縄文を施している。

土製品(20)

20は土器片円盤である。縄文時代後期中葉から後葉のものと考えられる。

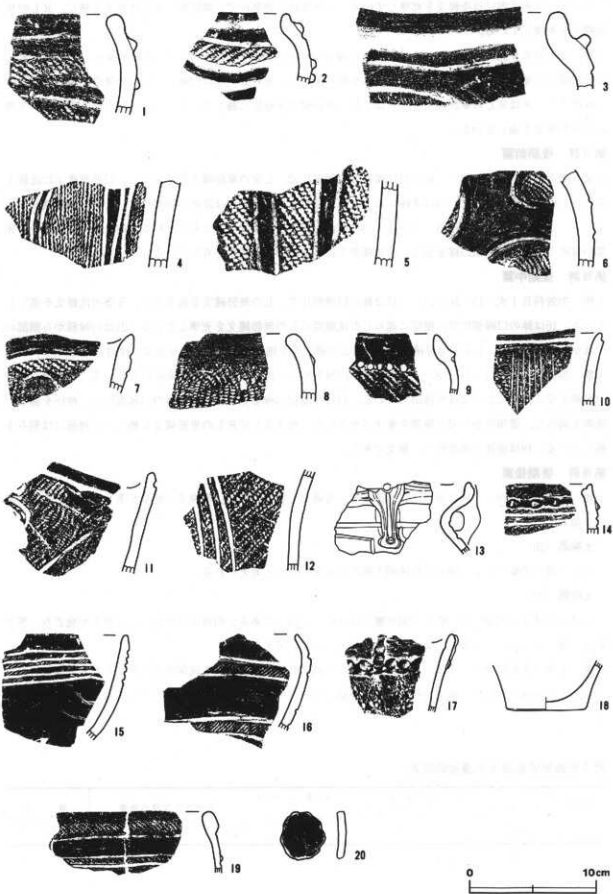
土器器(22)

22は高台付杯の底部片で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面は放射状のヘラ磨きが施され、黒色処理が施されている。9世紀末葉から10世紀初頭のものと考えられる。

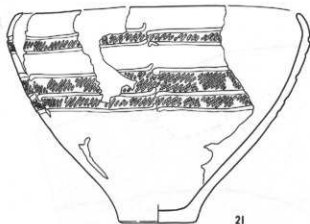
所見 本跡の堆積時期は、主体となる出土遺物から縄文時代中期中葉から後期中葉と考えられる。本跡の東側にある舌状台地上面には、縄文時代中期から晩期にかけての遺構が集中して分布しているが、関係は不明である。

第3号遺物包含層出土遺物観察表

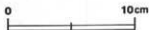
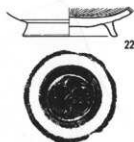
図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
		長さ	幅	厚さ				
第673図	土器片円盤	3.8	3.6	0.6	11	100	無文。	D P 29



第673图 第3号遺物包含層出土遺物実測図(1)



21



第674図 第3号遺物包含層出土遺物実測図(2)

第4号遺物包含層(第675~691図)

位置 調査区の南東部, F16・F17・G16・G17区に位置する。

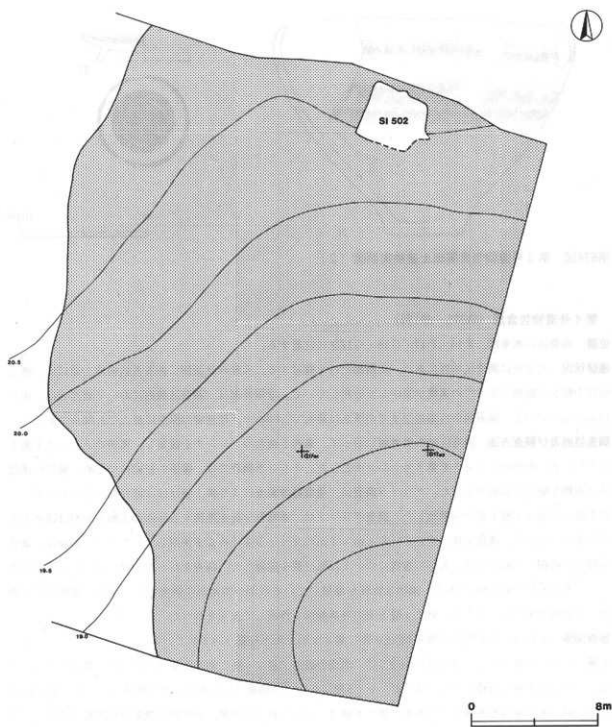
確認状況 大部分は調査区域外にあり, 北西部だけを確認する。本跡の北西側にある舌状台地上面には, 縄文時代中期から晩期にかけての遺構が集中して分布している。堆積範囲は, 調査区域内において東西40m, 南北14mに及んでいる。地表面から基底面までの厚さは最大で2.60mで, 包含層の厚さは最大で2.08mである。

調査経過及び調査方法 調査区域の境界線に沿って, 東西と南北のトレンチを設定し, 東西のトレンチを第1号トレンチ, 南北のトレンチを第2号トレンチとした。トレンチ調査では, 層序の把握につとめ, 層序の確認後は遺物を層ごとに取り上げた。グリッド調査は, 遺構確認調査により第1層はほぼ取り除いていたため, 一部を除いて第2 a層上面から開始した。調査グリッドは, 遺物包含層が堆積する谷津の軸方向がほぼ南北方向にあることから, 遺跡全体に用いている4m×4mのグリッドをそのまま使用した。グリッド調査は, 遺物を層別に把握して取り上げ, 大形の遺物については原位置を記録した。調査を行ったのは, 2トレンチと11グリッドを合わせた約228m²である。遺物包含層が堆積している谷部の微地形の調査については, 基底面まで調査した面積が少なかったため, 第2 a層上面の等高線図を作成して復元を行った。

重複関係 本跡は, 平安時代の第502号住居跡に第2 a層上面から掘り込まれている。

土層 6層に分層される。第2層については, 調査の段階で第2 a層と第2 b層とに分けた。第1・2 a・3層については全域に堆積するが, 第2 b・4・5層については標高の低い南部にのみ堆積している。第1層は, ローム粒子を少量含む黒褐色土である。第2 a層は, ローム粒子を少量, 炭化物を微量含む黒色土である。第2 b層は, ローム粒子を微量含む黒褐色土である。第3層は, 砂粒を少量, 炭化物を微量含む暗褐色土である。第4層は, 砂粒を中量, 炭化物を微量含む褐色土である。第5層は, 砂粒を多量含む灰褐色土である。

遺物 縄文土器49,115点, 土製品16点, 石器109点, 土師器54点, 土師質土器22点, 陶器2点が出土している。第3層から出土した土師器・土師質土器・陶器については, 混入したものと考えられる。縄文土器は, 中期中葉の第Ⅲ a群阿玉台式が145点, 第Ⅲ b群勝坂式が23点, 第Ⅳ群1類中鉢式が298点, 中期後葉の第Ⅴ a群加曾利E式が36,286点, 第Ⅴ b群曾利式が62点, 後期前葉の第Ⅵ群1・2類の称名寺式が303点, 第Ⅵ群3・4類堀之内式が7,501点, 後期中葉の第Ⅶ群1~4類加曾利B式が4,331点, 後期後葉の第Ⅷ群安行式が19点, 晩期前葉の第Ⅸ群2類の安行3 b式が2点出土している。層ごとの出土量は, 第3層からの出土量が最も多く, 第4・5層については, トレンチ調査で分層できなかったため不明であるが, 出土量は微量である。第2層の遺



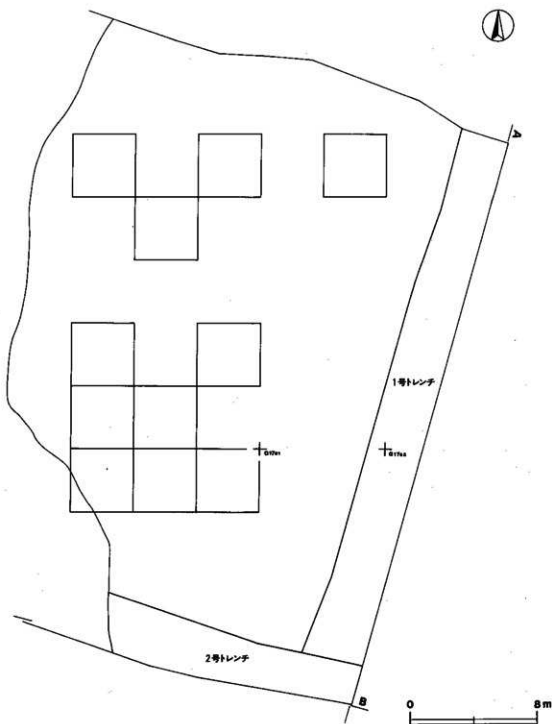
第675図 第4号遺物包含層実測図(1)

物は、各時期の土器が出土しており、破片が多い。第3層の遺物は、縄文時代中期後葉の加曾利E式が多いが、接合して個体資料となる土器は後期前葉から後期中葉のものである。以下、遺物を層位ごとに分類基準に従って記述する。

第1層出土遺物(第678図)

縄文土器

第VI群 後期前葉

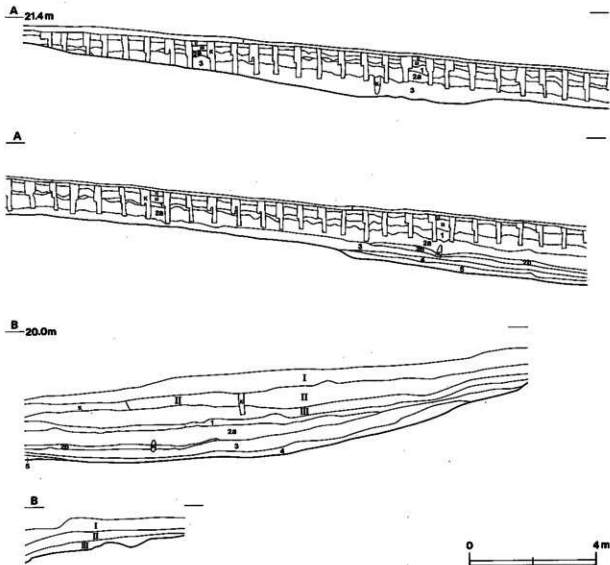


第676図 第4号遺物包含層実測図(2)

3類 堀之内I式(1~3) 1は小形深鉢の底部から胴部の破片で、底部直上に円形刺突文を施した隆帯を巡らし、4単位の隆帯を底部直上まで垂下させている。区画内には、沈線文を充覆している。2は深鉢の口縁部片で、Rの無節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。3は深鉢の頸部から胴部の破片で、頸部に端部が蔗手状となる沈線を巡らし、口縁部は無文帯としている。Lの無節縄文を地文としている。

第2層出土遺物(第678・679図)

縄文土器



第677図 第4号遺物包含層実測図(3)

第VI群 後期前葉

3類 堀之内I式(4) 4は深鉢の胴部片で、Lの無節縄文を地文とし、沈線による蒙手状のモチーフを施している。

第VII群 後期中葉

2類 加曾利B2式(5・6) 5は粗製深鉢の口縁部から胴部の破片で、条線により格子状文を施している。6は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、口唇部は鈎状に突出している。波頂部は欠損するもの、隆帯を鉢巻き状に廻らしている。

3類 加曾利B3式(7~10) 7は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、波底部には瘤状の貼付文を施している。RLの単節縄文を地文とし、口縁に沿ってキザミを施している。8は鉢の口縁部から頸部の破片で、頸部にキザミを廻らしている。9は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、口唇部直下にキザミを有する隆帯を廻らし、口縁部には斜位の条線文を施している。10は深鉢の口縁部片で、入り組み弧線文内にRLの単節縄文を充填している。口唇部直下にキザミを施している。

4類 加曾利B式 (11~16) 11は香炉形土器の胴部片で、横位の橋状把手を有している。口縁に沿ってキザミを有する隆帯を巡らしている。12は吊り手土器の吊り手部片で、欠損はしているが横位の橋状把手を有することが考えられる。沈線と円形刺突文を施している。13は粗製深鉢の口縁部片で、押圧文を有する隆帯を巡らしている。L Rの単節縄文を地文とし、半截竹管による並行沈線文を施している。14~16は粗製深鉢の口縁部片で、L Rの単節縄文を地文とし、口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らしている。15・16は条線文を施している。

第Ⅵ群 後期後葉

3類 後期安行式 (17) 17は粗製深鉢の口縁部片で、口唇部にキザミを有し、条線文を施している。

第Ⅶ群 晩期

1類 大洞式 (18) 18は鉢の口縁部片で、浮線網状文を施している。大洞A式と考えられる。

土製品 (19・20)

19・20は土器片円盤で、後期中葉の土器片を利用してはいる。

須恵器 (21)

21は甕の胴部片で、外面には斜位に平行タキを施している。

第3層出土遺物 (第679~691図)

縄文土器

第Ⅰ群 前期

1類 関山式 (22) 22は深鉢の口縁部片で、組紐文を施している。

第Ⅱ群 中期前葉

第Ⅱa群 阿玉台式

1類 阿玉台I b式 (23) 23は扇状把手を有する深鉢の口縁部片で、キザミを有する隆帯により文様を描出している。隆帯に沿って単列の結節沈線文を施している。

第Ⅲ群 中期中葉

1類 中峠式 (24~26, 28) 24は深鉢の口縁部片で、貫通孔を有する把手を起点に、沈線を有する隆帯により文様を描出している。把手には、沈線間を交互刺突することによる連続コの字状文を施している。地文はR Lの単節縄文である。25は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で、把手を起点に2本一組の隆帯により文様を描出している。地文はR Lの単節縄文である。26は内傾する深鉢の口縁部片で、R Lの単節縄文を縦位に施している。28は口唇部外面に鐮状の隆帯を巡らした深鉢の口縁部片である。口唇部には半截竹管による平行沈線文を巡らし、胴部には歯歯状工具により条線文を施している。

第Ⅳ群 中期後葉

第Ⅳa群 加曾利E式 (27, 29~46)

1類 加曾利E I式 (27, 29~38) 27は深鉢の口縁部片で、口縁部直下に断面三角形の隆帯を巡らし、狭い口縁部文様帯を形成している。口縁部には沈線を巡らし、一部に交互刺突文を施している。胴部には、R Lの単節縄文を地文とし、3本一組の懸垂文を施している。29は深鉢の口縁部片で、口唇部直下に2本一組の隆帯を巡らし、口唇部は無文帯である。地文はR Lの単節縄文で、口縁部には沈線を有する隆帯により文様を描出している。30・31は深鉢の口縁部片で、2本一組の隆帯により文様を描出し、沈線を充實している。32・33は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で、隆帯により文様を描出し、沈線を充實している。34・35は深鉢の口縁部片で、2本一組の隆帯により文様を描出している。地文はR Lの単節縄文である。35は渦巻文を施している。

36は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、波頂部に沈線による渦巻文を施している。口縁部はR Lの単節縄文を地文とし、波頂部を起点に隆帯により文様を描出している。37は壺の口縁部片で、頸部に隆帯を巡らし、口縁部は無文帯である。胴部はR Lの単節縄文を施している。38は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で、波頂部に沈線により渦巻文を、把手部に沈線により逆S字文を施している。口縁部にはL Rの単節縄文を施し、隆帯により区画文を施している。

2類 加曾利EⅡ式(39~44, 46) 39は深鉢の口縁部片で、円形刺突文を起点に隆帯による区画文を施している。地文はL R Lの複節縄文で、胴部は懸垂する沈線間を磨り消している。40~42は深鉢の口縁部片で、R Lの単節縄文を地文とし、隆帯により渦巻文を施している。41の胴部には沈線による3本一組の懸垂文を施している。43は深鉢の口縁部片で、燃糸文を地文とし、沈線による波状文を巡らしている。44・46は深鉢の胴部片で、44はR Lの単節縄文、46はL Rの単節縄文を地文とし、沈線による懸垂文間を磨り消している。

3類 加曾利EⅢ式(45) 45は深鉢の口縁部片で、頸部と口唇部直下に沈線を巡らして、口縁部文様帯を形成している。口縁部には沈線による楕円区画文を施し、胴部には沈線による幅広い懸垂文間を磨り消している。

第Vb群 曾利式(47~50)

47は口唇部内面が肥厚する深鉢の口縁部片で、縦位の沈線文を施している。48は深鉢の口縁部片、49は深鉢の頸部片で、同一個体である。口縁部には半載竹管による平行沈線文を施し、頸部には押圧を施した隆帯を巡らし、胴部にも同様の隆帯を垂下させている。50は深鉢の頸部片で、頸部に刺突を施した隆帯を巡らしている。胴部には交互に押圧した隆帯を垂下させ、縦位の条線文を施している。

第VI群 後期前葉

1類 称名寺I式(51) 51は深鉢の口縁部片で、沈線による区画文を施し、Lの無節縄文を充填している。

2類 称名寺Ⅱ式(52~54) 52は深鉢の口縁部片で、沈線による区画文を施し、区画文内に刺突文を充填している。53は深鉢の上半部で、口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。胴部には沈線により逆U字状の区画文内に佛歯状工具による刺突文を充填している。54は浅鉢の口縁部片で、沈線による区画文を施し、区画文内に円形刺突文を施している。

3類 堀之内I式(55~97) 55は円形刺突文を有する貼付文が施される深鉢の口縁部片で、口唇部直下に2条の沈線文を巡らし、沈線間に縄痕文を施している。地文はLの無節縄文で、沈線により文様を描出している。56は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、頸部に隆帯を巡らし、口縁部は無文である。波頂部直下には端部に円形刺突文と沈線を有する逆C字状の貼付文を施している。57は浅鉢の口縁部片で、頸部に隆帯を巡らし、口縁部は無文である。口縁部には円形刺突文と沈線を有する逆C字状の貼付文を施し、胴部にはR Lの単節縄文を施している。58は浅鉢の口縁部片で、胴部は無文である。口縁部には円形刺突文を有する貼付文を施し、沈線によりC字状文を施している。59・60は深鉢の口縁部片で、沈線による曲線的な文様を描出している。地文は、59がR Lの単節縄文、60がRの無節縄文である。61~63は深鉢の口縁部片で、沈線による直線的な文様を描出している。地文は、61がL R Lの複節縄文、62・63がR Lの単節縄文である。64は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、波頂部直下に円形刺突文を有する貼付文を施している。地文はL Rの単節縄文で、沈線により文様を描出している。65・66は深鉢の口縁部片で、半載竹管による平行沈線により文様を描出している。地文は、65がLの無節縄文、66がL Rの単節縄文である。67は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、口唇部直下に沈線を巡らし、波頂部直下に円形刺突文を施している。地文はL Rの単節縄文で、沈線により文様を描出している。68は深鉢の口縁部片、69は深鉢の胴部片で、68は沈線による同心状の逆S字状文を、69は沈線に

よる半同心円文を施している。地文は、いずれもLRの単節縄文である。70は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で、LRの単節縄文を地文とし、波頂部を起点に蕨手状文を施している。71は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で、LRの単節縄文を地文とし、口唇部直下に沈線を巡らしている。波頂部を起点に沈線による波状文を懸垂させ、波底部を起点に沈線による逆V字状文を巡らせて施している。72は小突起を有する壘の口縁部から胴部の破片で、頸部がくの字状に外反する。口唇部直下と頸部には沈線を巡らし、口縁部下部は無文である。頸部の円形刺突文を起点に沈線により文様を施している。73は深鉢の口縁部から胴部の破片で、LRの単節縄文を地文とし、口唇部直下の円形刺突文を起点に沈線を巡らしている。口縁部から胴部にかけては、沈線により蕨手状文を施している。74は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で、RLの単節縄文を地文とし、波頂部直下の円形刺突文を起点に口唇部直下に沈線を巡らしている。口縁部から胴部にかけては、波頂部と波底部を起点に沈線による懸垂文を施している。75は深鉢の口縁部から胴部の破片で、頸部に隆帯を巡らし、口縁部は無文である。胴部はLの無節縄文を地文とし、頸部の8の字状の貼付文を起点に、沈線により蕨手状文を施している。76は深鉢の口縁部片、77は深鉢の胴部片で、LRの単節縄文を地文とし、沈線により蕨手状文を施している。78は深鉢の胴部片で、LRの単節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。79は波状口縁を呈する深鉢の口縁部破片で、LRの単節縄文を地文とし、波頂部を起点に連続渦巻文を施している。80は深鉢の胴部片で、胴部にキザミを有する隆帯を巡らし、沈線により文様を描出している。81は把手を有する浅鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部には短く内傾する。口縁部には横位に巡る沈線間に短沈線を施し、胴部はLRの単節縄文を施している。82は双孔のある突起を有する深鉢の口縁部片で、突起の内・外面には円形刺突文を施している。LRの単節縄文を地文とし、口縁部直下に沈線を巡らしている。突起の双孔を起点にキザミを有する隆帯を垂下させ、隆帯に沿って沈線により文様を描出している。83は橋状把手を有する浅鉢の口縁部から胴部の破片で、把手の頂部は渦巻き状となる。口縁部はRLの単節縄文を地文とし、沈線により区画文を施している。84・85は瓢形の注口土器の上半部で、4単位の波状口縁を呈し、波頂部直下の円孔ないし円形刺突文を起点に口唇部直下に沈線を巡らしている。注口部は、短く筒状である。口縁部の注口部軸線上には、一対の縦位橋状把手を付けている。84は、注口部と反対側の橋状把手は双孔となり、胴部には沈線により文様を描出している。86は瓢形の注口土器の注口部片で、注口と把手が接続している。注口は筒状で、把手は縦位の橋状把手である。87・88は注口土器の胴部片である。87は隆帯を巡らした胴部に横位の橋状把手を施し、縦位の隆帯と連結している。88は胴部が算盤玉状を呈し、胴部上半に沈線により文様を描出している。地文はLRの単節縄文である。89は粗製深鉢の上半部で、口縁部直下に2条の条線を巡らし、胴部には縦位の条線文を施している。90・92は小波状口縁を呈する粗製深鉢の上半部で、90はLRの単節縄文を、92は無文で波頂部直下に貫通孔を有している。91は粗製深鉢の上半部で、Lの無節縄文を施している。93は深鉢の口縁部片、94・95は深鉢の胴部片で、同一個体である。櫛齒状工具により縦位の波状文を施している。96・97は深鉢の底部から胴部の破片で、96はRLの単節縄文を、97は懸垂文を施している。

第Ⅱ群 後期中葉

1類 加曾利B 1式 (101~105) 101~105は鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部は内傾している。胴部には沈線による横帯文を巡らし、101・102は鉤状の区切り文、103・104はの字状の区切り文を施している。

2類 加曾利B 2式 (98~100, 106~109, 117・118) 98は鉢の口縁部から胴部の破片、99・100小形の鉢で、口縁部は内傾して無文としている。98は口縁部に沈線による対弧文を施し、口縁部直下の屈折部にはキザミを巡らしている。胴部には沈線を巡らし、口縁部の対弧文の下部に一対のキザミを縦位に連ねている。99は胴部にLRの単節縄文を地文とした横帯文を巡らし、区切り文は対弧文である。100は中心に円形刺突文を有する

円文を口縁部に施し、胴部には磨消弧線文を施している。107は深鉢の口縁部片、108は深鉢の頸部から胴部の破片で、頸部にキザミを巡らし、格子状文を施している。109は口縁部が外傾する小形の鉢で、格子状文を施している。117は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で、口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。頸部は無文帯で、口縁部と胴部には条線文を施している。118は浅鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部は短く内傾する。頸部にはキザミを巡らしている。

3類 加曾利B3式(110~114) 110は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、111は口縁部が内傾する深鉢の口縁部片で、口唇部直下にキザミを施している。口縁部にはRLの単節縄文を充填した縄文帯を施し、頸部は無文帯となる。112は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、口縁部直下の沈線間にキザミを施している。口縁部にはRLの単節縄文を施している。113は深鉢の頸部片で、頸部には沈線間にキザミを施し、RLの単節縄文を充填した入り組み弧線文を巡らしている。114は深鉢の口縁部片で、口縁部はくの字状に外傾する。口縁部には条線による斜線文を施し、頸部は無文帯である。

4類 加曾利B式(115・116, 119~131) 115は台付土器の台部片で、RLの単節縄文を充填した横帯文を施している。116は吊り手土器の吊り手部片で、吊り手部にはキザミを有する2条の隆帯を施している。119は底部が欠損する粗製深鉢、120~122は粗製深鉢の口縁部片で、LRの単節縄文を地文とし、口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らしている。123・127は粗製深鉢の口縁部片で、LRの単節縄文を施している。124は粗製深鉢の口縁部片で、無文である。125は粗製深鉢の口縁部片で、条線により格子状文を施している。126・128は粗製深鉢の口縁部片で、口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らしている。LRの単節縄文を地文とし、126は沈線文を、128は半截竹管の平行沈線により縦位の矢羽状文を施している。129は粗製深鉢の胴部片、130は粗製深鉢の底部から胴部の破片で、LRの単節縄文を施している。131は粗製深鉢の底部片で、無文である。底面には網代痕がある。

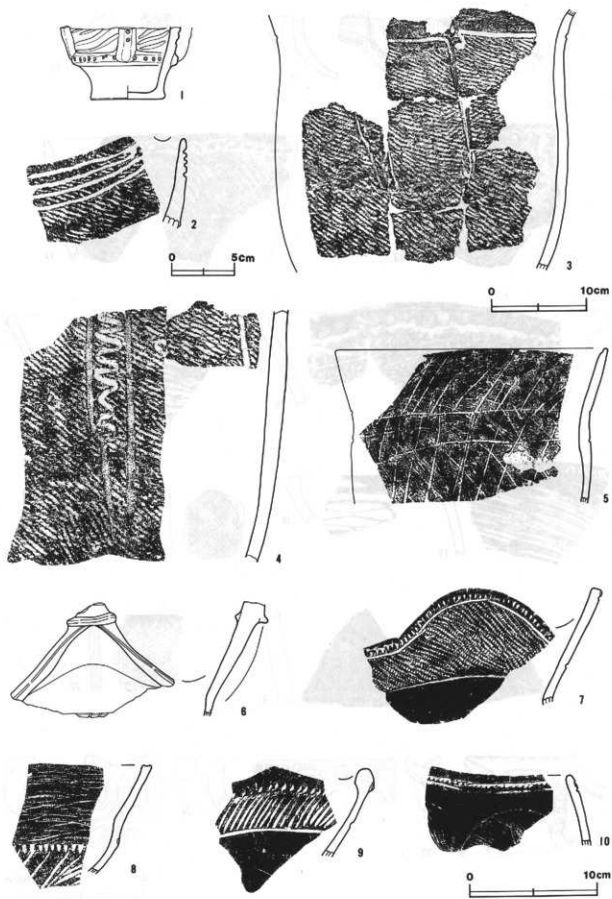
土製品(132~156)

132・133は蓋で、132は堀之内式期、133は加曾利B式期のものである。134・135は腕輪で、堀之内式期のものである。136は三角筒形土製品で、無文である。中心に貫通孔がある。137は中空の亀形土製品である。頸部と左後ろ足部が欠損し、腹部に孔がある。138は山形土器の腹部から右足部の破片である。腹部は膨れ、キザミを有する隆帯を垂下させている。139~156は土器片円盤である。139~143は中期、144~156は後期のものである。

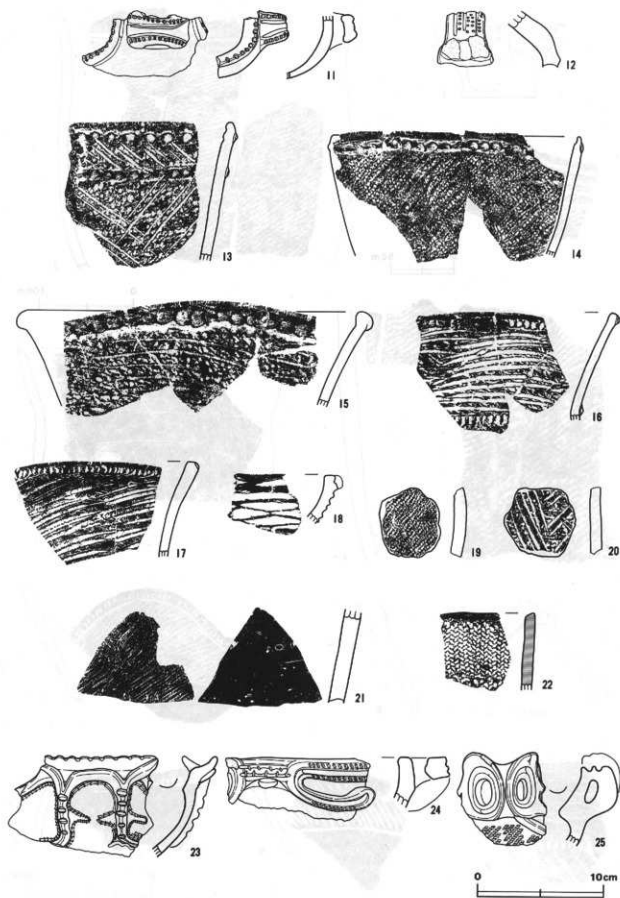
石器(157~162)

157・158は緑色凝灰岩製の打製石斧で、157は撥形、158は分銅形である。159は安山岩製の打製石斧で、分銅形である。160は安山岩製の磨石で、円盤形である。161は安山岩製の磨石で、角柱形を呈し、片面に凹がある。162はチャート製の石錐で、無蓋である。

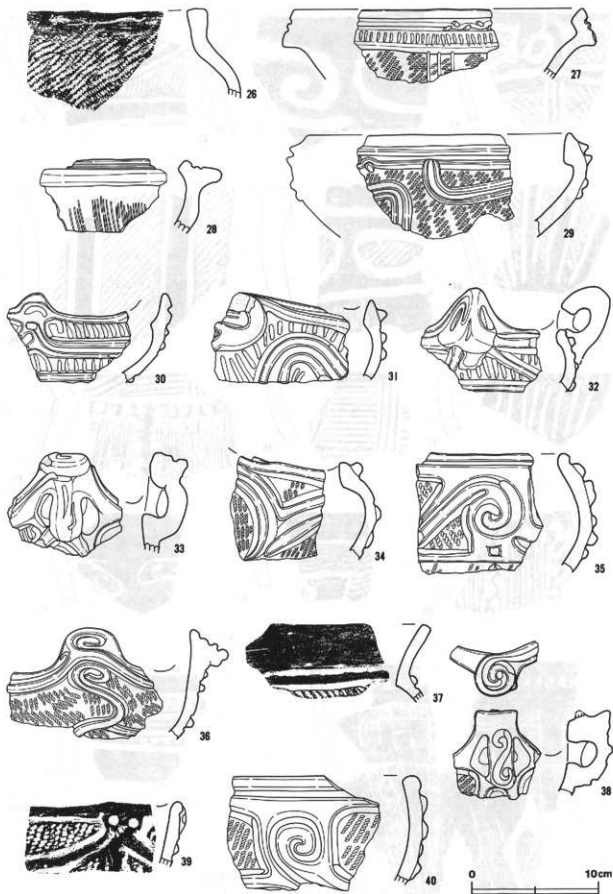
所見 本跡の堆積時期は、第1層が、第2a層上面から平安時代の第502号住居跡に掘り込まれていることから、平安時代以降、第2層が縄文時代晩期以降から平安時代、第3層が出土遺物から縄文時代後期前葉から後期中葉と考えられる。本跡の北西側にある舌状台地上面には、縄文時代中期から晩期にかけての遺構が集中して分布しているが、関係は不明である。



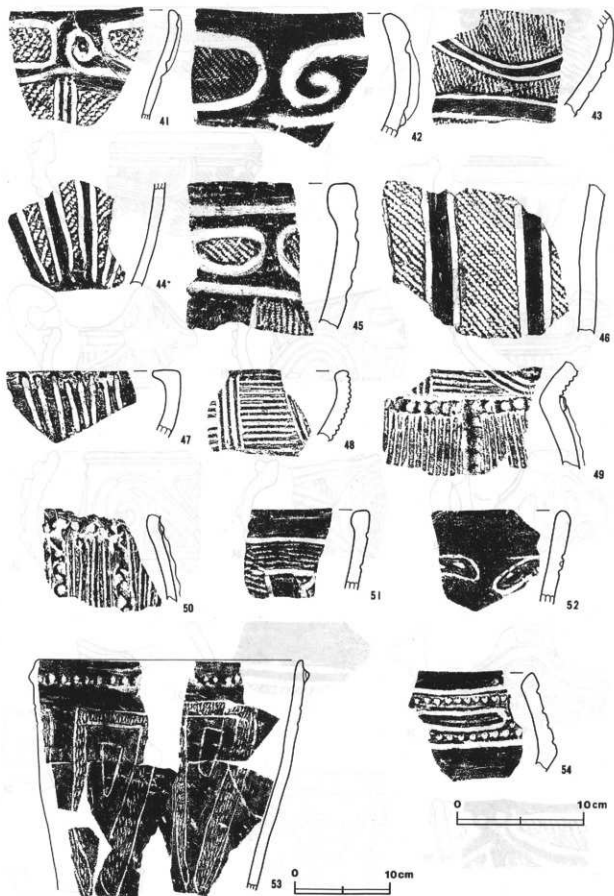
第678图 第4号遺物包含層出土遺物実測図(1)



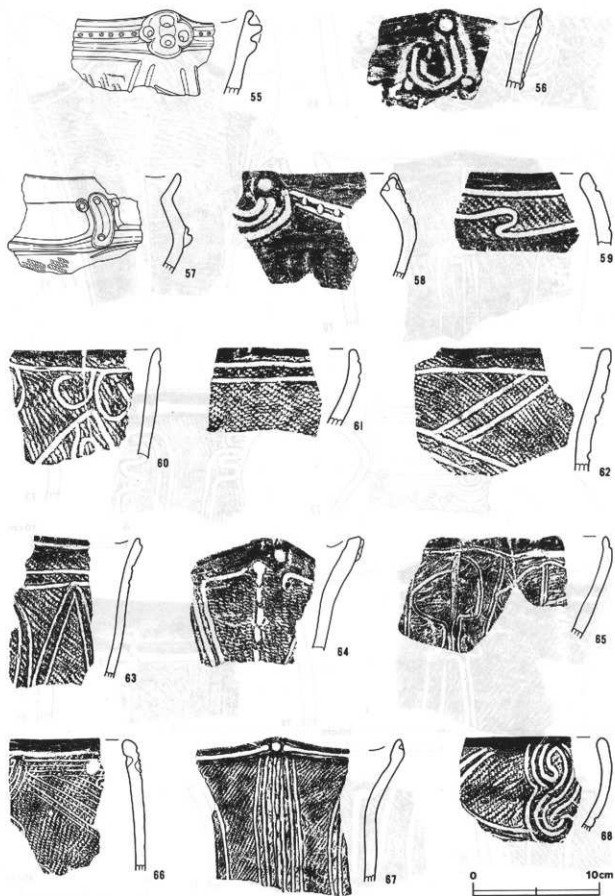
第679图 第4号遺物包含層出土遺物実測図(2)



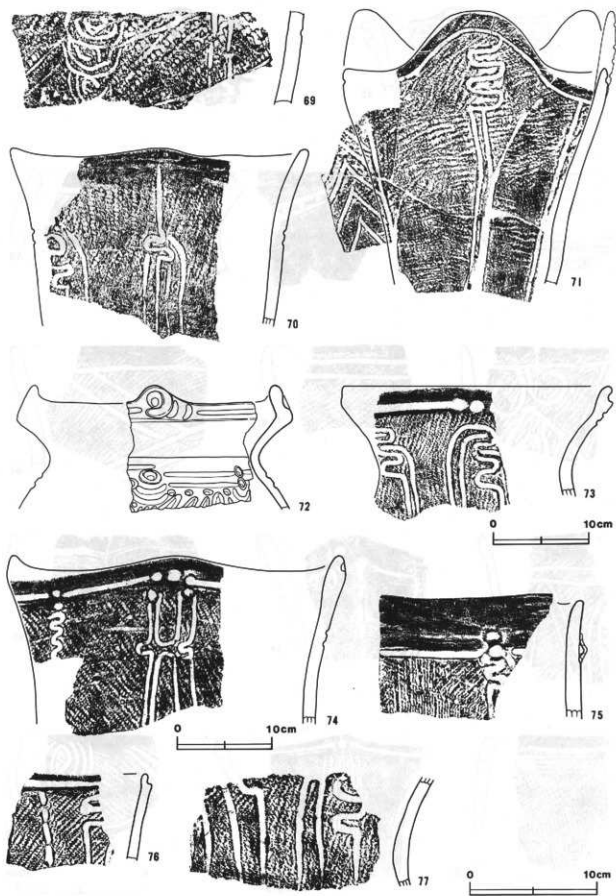
第680图 第4号遺物包含層出土遺物実測図(3)



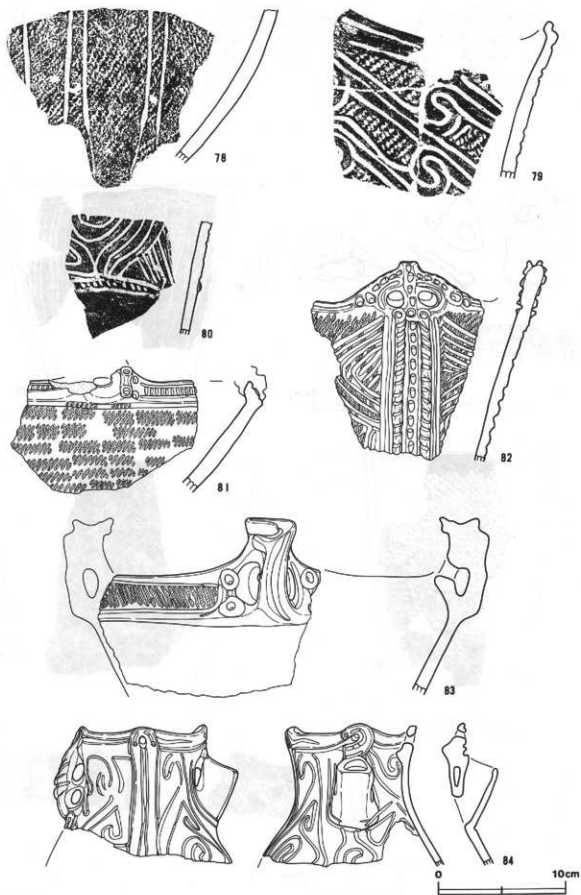
第681图 第4号遗物包含层出土物实测图(4)



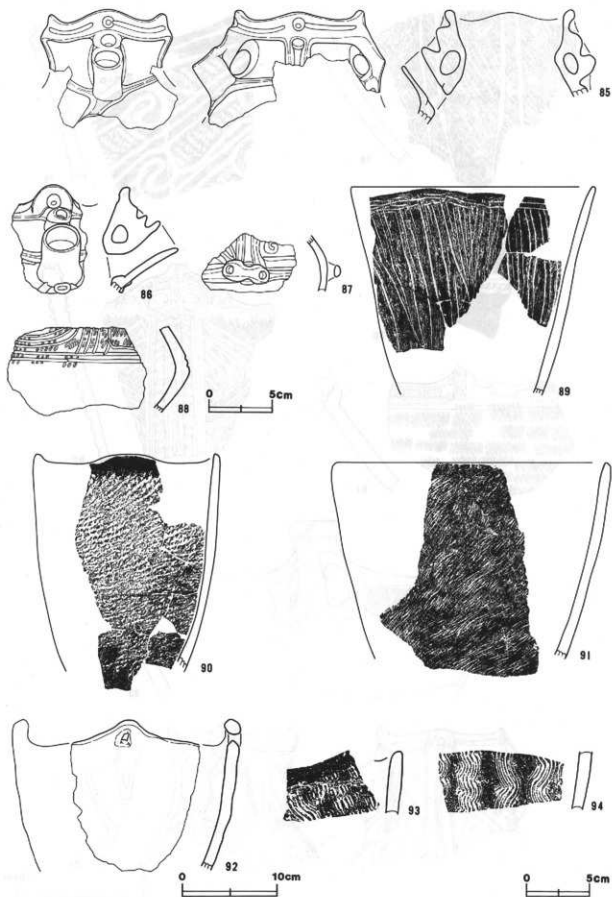
第682图 第4号遗物包含层出土物实测图(5)



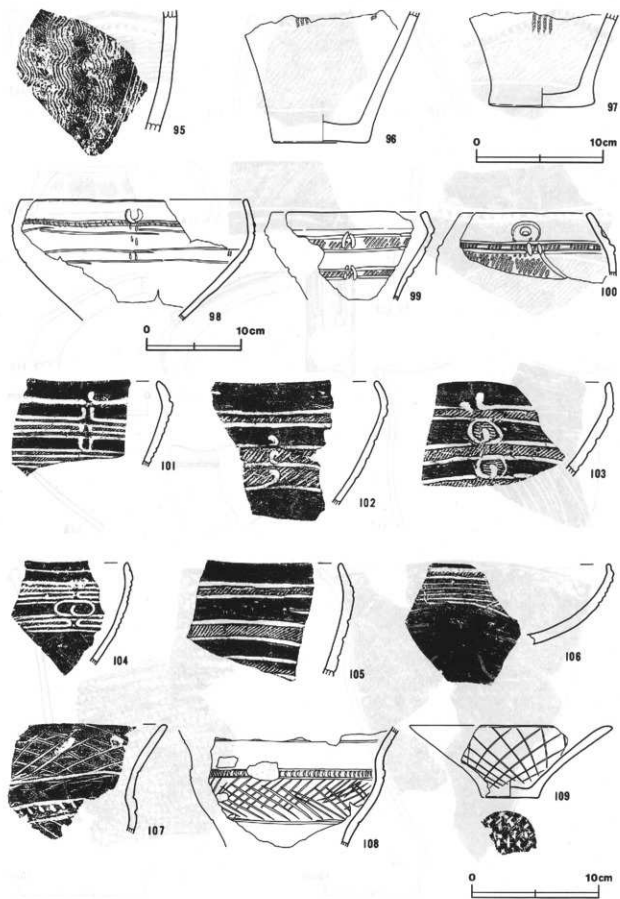
第683图 第4号遺物包含層出土遺物実測図(6)



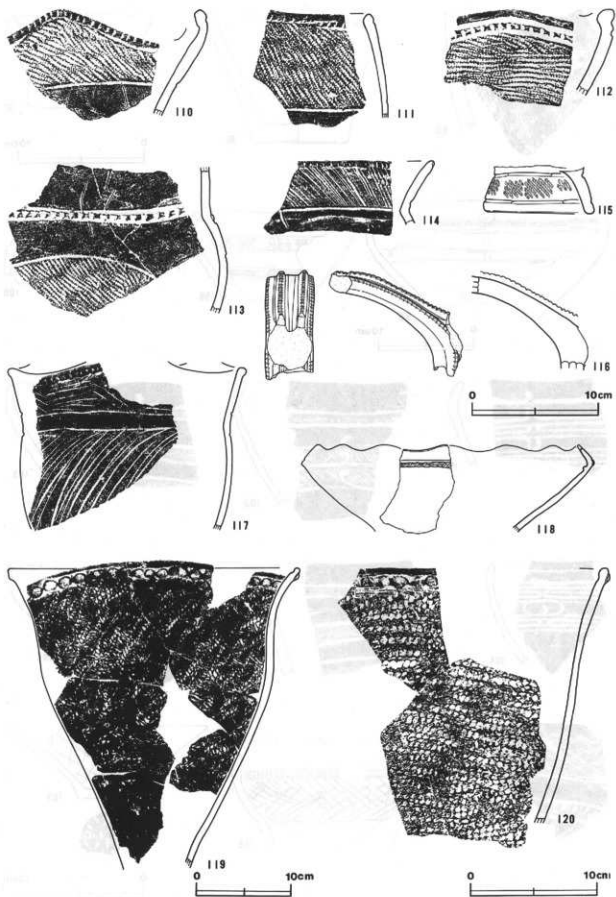
第684图 第4号遗物包含层出土遗物实测图(7)



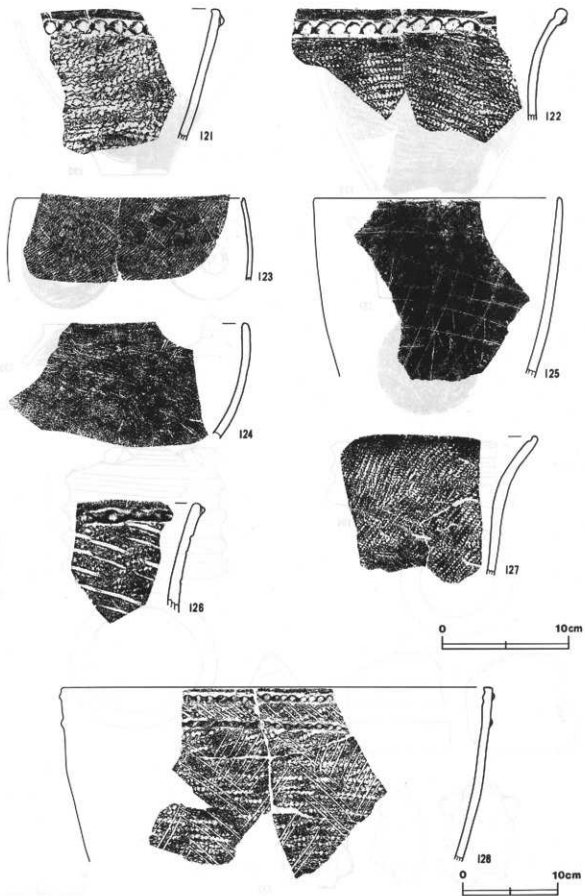
第685图 第4号遺物包含層出土遺物実測図(8)



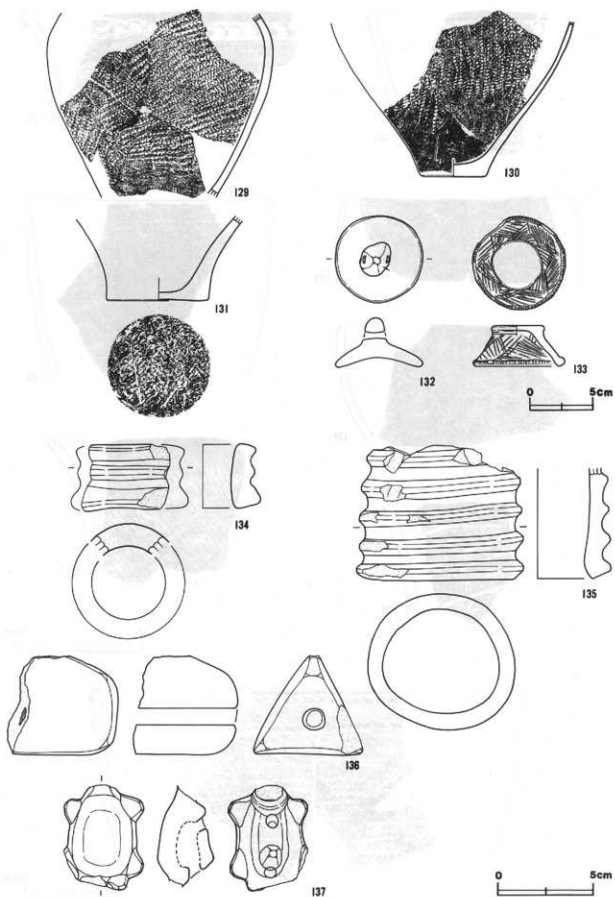
第686图 第4号道物包含层出土遗物实测图(9)



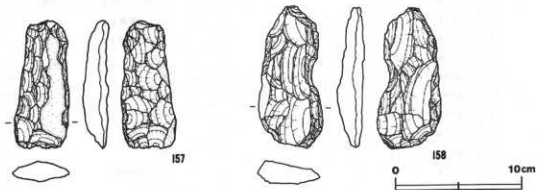
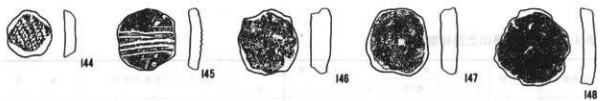
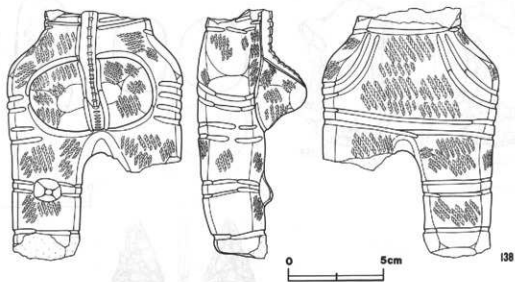
第687图 第4号遗物包含层出土遗物实测图(10)



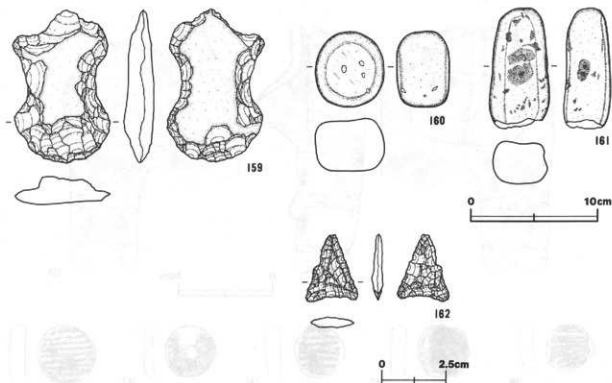
第688图 第4号遺物包含層出土物实测图(11)



第689图 第4号遗物包含层出土遗物实测图(12)



第690图 第4号遗物包含层出土遗物实测图(13)



第691図 第4号遺物包含層出土遺物実測図(14)

第4号遺物包含層出土遺物観察表

図取番号	部 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現 存 率 (%)	形 状 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		長さ(高さ)	幅(径)	厚 さ				
第689図 132	蓋	3.9	6.8	1.1	70	100	孔があるつまみを有する。無文。	D P 32 P L 99
133	蓋	3.3	7.3	0.5	(68)	90	糸織による縦歯状集合沈線文。	D P 37
134	土製陶輪	3.6	(6.0)	1.6	(21)	25	線帯文。	D P 36 P L 100
135	土製陶輪	(7.1)	8.9	1.2	(212)	70	線帯文。	D P 35
136	三脚器土製品	(5.4)	(5.5)	5.8	(127)	60	長軸方向に孔がある。無文。	D P 37 P L 100
137	亀形土製品	(5.6)	4.2	2.7	(33)	70	頭部欠損。中空。	D P 38
第690図 138	土 鍋	(13.2)	9.2	5.7	(465)	40	頸部から足部の破片。山形土質。	D P 39 P L 100
139	土器片円盤	3.9	3.7	1.1	19	100	R Lの単筋縄文。	D P 40
140	土器片円盤	4.2	4.1	1.1	26	100	無文。	D P 41
141	土器片円盤	4.3	4.1	1.2	26	100	R Lの単筋縄文。	D P 42
142	土器片円盤	4.2	4.1	0.8	18	100	中央部に孔がある。L Rの単筋縄文。	D P 43
143	土器片円盤	4.8	4.7	1.3	35	100	R Lの単筋縄文。	D P 44
144	土器片円盤	4.6	3.8	1.3	14	100	R Lの単筋縄文。	D P 45
145	土器片円盤	4.9	4.6	0.9	27	100	糸織文。	D P 46
146	土器片円盤	5.3	4.8	1.6	48	100	無文。	D P 47
147	土器片円盤	5.3	4.9	1.3	42	100	無文。	D P 48
148	土器片円盤	6.2	6.1	0.9	41	100	無文。	D P 49
149	土器片円盤	5.8	5.6	0.9	35	100	Lの無筋縄文。	D P 50
150	土器片円盤	4.3	5.6	1.1	19	100	無文。	D P 51
151	土器片円盤	3.5	3.2	0.6	8	100	L Rの単筋縄文。	D P 52
152	土器片円盤	4.5	4.3	0.5	14	100	無文。	D P 53
153	土器片円盤	4.8	4.3	0.6	16	100	縄文を地文とした糸織文。	D P 54

図版番号	部 種	計 画 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	形状及び文様の特徴	備 考	
		長さ(高さ)	幅(径)	厚 さ					
第690図 154	土器片片莖	4.6	4.1	0.7	18	100	縄文を地文とした条線文。	DP55	
	155	土器片片莖	4.8	4.5	0.6	17	100	L.R.の草部縄文を地文とした条線文。	DP56
	156	土器片片莖	4.1	3.8	0.6	24	100	L.R.の草部縄文。	DP57

図版番号	部 種	計 画 値				石 質	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第690図 157	打製石斧	10.2	4.4	2.0	120	斑 巖 岩	Q56 P.L.102	
	158	打製石斧	11.1	5.1	2.1	120	緑泥片岩	Q55 P.L.102
第691図 159	打製石斧	12.2	7.7	2.3	237	安 山 岩	Q54 P.L.102	
	磨 石	6.0	5.5	4.1	210	安 山 岩	Q57 P.L.104	
	161	磨 石 (9.6)	4.8	3.7	(217)	安 山 岩	Q58 P.L.106	
	162	石 鏃	2.6	2.0	0.4	1.6	チャート	Q59 P.L.106

2 平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

I区では、平安時代の竪穴住居跡6軒を調査した。平安時代の住居跡は、台地上面の平坦部にはなく、標高の低い傾斜地に立地している。

第459号住居跡 (第692図)

位置 調査区の北西部、E13c0区。

重複関係 本跡が第3号遺物包含層を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.12m、短軸2.90mの隅丸方形である。

主軸方向 N-89°-E

壁 壁高は16cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

竈 東壁のほぼ中央に、竈を52cm掘り込んで、白色粘土を使用して構築している。規模は、長さ87cm、幅90cmである。住居跡内には長さ19cmの袖部が残存しているだけで、大半は壁外に造られている。燃焼部の両壁には、白色粘土が貼られており、被熱により赤変している。火床面はほぼ平坦で、わずかに赤変している。燃焼部奥の中央には土製支脚を設置しており、煙道は傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土粒子少量、焼土ブロック少量、砂粒少量	5 暗褐色	焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、白色粘土粒子中量、第4層より色調が暗い
2 暗褐色	焼土粒子中量、焼土ブロック微量	6 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化物少量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、白色粘土粒子中量	7 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子中量、砂粒少量、炭化物少量
4 暗褐色	焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、白色粘土粒子中量	8 明赤褐色	焼土粒子中量、白色粘土粒子中量
		9 暗赤褐色	焼土粒子多量、砂粒少量、炭化物少量

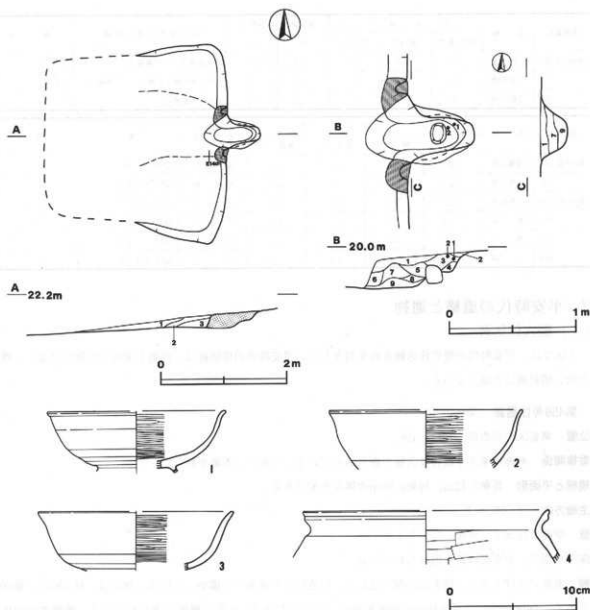
覆土 3層に分層され、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量、ロームブロック微量	3 暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量、灰白色粘土粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子中量		

遺物 土器片14点、縄文土器片135点が出土している。縄文土器片は混入したもので、図示した第692図1～4はすべて土器である。1は高台付碗、2は碗の口縁部から体部の破片で、土製支脚の上部から出土している。3は碗の口縁部から体部の破片、4は甕の口縁部から体部の破片で、覆土から出土している。

所見 本跡は、東壁に竈を有する住居跡である。時期は、出土遺物から平安時代(10世紀前半)と考えられる。



第692図 第459号住居跡・出土遺物実測図

第459号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第692図 1	高台付碗 土師器	A [14.0] B (5.1) E (0.6)	口縁部から底部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は高く。	外面ロクロナデ。内面ミガキ。高台貼り付け痕。ナデ。	砂粒・雲母にふい褐色 良好	P19 60% PL107 甕内土製支脚上部
2	碗 土師器	A [15.2] B (4.6)	口縁部から体部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	外面ロクロナデ。内面ミガキ。	砂粒・雲母にふい褐色 良好	P20 20% 甕内土製支脚上部
3	碗 土師器	A [15.6] B (4.4)	口縁部から体部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	外面ロクロナデ。内面ミガキ。	砂粒にふい褐色 良好	P21 20% 覆土
4	壺 土師器	A [19.4] B (4.3)	口縁部から体部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘクロナデ。	石英・長石・雲母にふい褐色 普通	P22 5% 覆土

第461号住居跡 (第693・694図)

位置 調査区の北西部, E1348区。

確認状況 本跡の西壁部は調査区域外にあり, 西壁は確認できなかった。

重複関係 本跡が第3号遺物包含層を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.20m, 短軸(3.50)mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N-6°-W

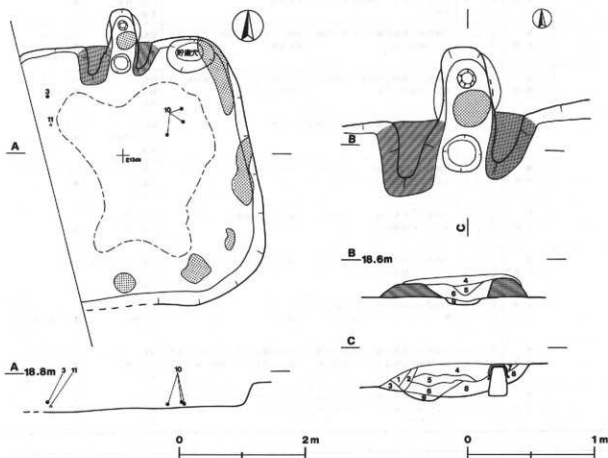
壁 壁高は34cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部は踏み固められている。

竈 北壁のほぼ中央に, 壁を56cm掘り込み, 砂まじりの白色粘土を使用して構築している。規模は, 長さ114cm, 幅130cmである。両袖が残存している。両袖の内側には, 径30cmのほぼ円形で, 深さ6cmの凹みがあり, 第9層が堆積している。燃焼部の両壁には, 白色粘土が貼られており, 被熱により赤変している。火床面は壁外に位置し, ほぼ平坦で, 被熱により赤変硬化している。燃焼部奥の中央には, 小形甕をかぶせた土製支脚を設置しており, 煙道は傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土粒子少量, 砂粒少量, 炭化粒子少量	6 灰褐色	焼土粒子少量, 白色粘土粒子多量, 砂粒多量
2 褐色	焼土粒子中量, ローム粒子中量, 砂粒中量	7 にぶい赤褐色	焼土粒子多量, 白色粘土粒子多量, 砂粒少量
3 灰褐色	焼土粒子中量, ローム粒子中量, 砂粒中量	8 にぶい赤褐色	焼土粒子多量, 白色粘土粒子多量, 砂粒中量
4 黒色	ローム粒子微量, 砂粒微量	9 暗赤褐色	焼土粒子多量, 焼土小ブロック多量, 砂粒中量, 炭化粒子中量
5 黒褐色	焼土粒子中量, 白色粘土粒子中量, 砂粒中量		



第693図 第461号住居跡実測図

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。長径76cm、短径52cmの楕円形で、深さ28cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 第1～5層が覆土で、第6層が粘床である。第4・5層は壁際に傾斜して堆積しており、焼土粒子と焼土ブロックを多量に含んでいる。

土層解説

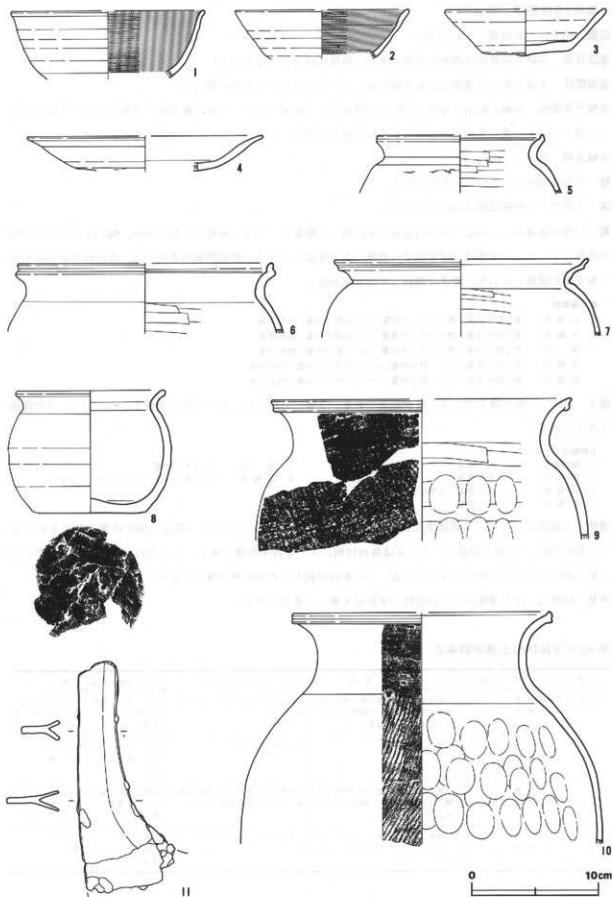
- | | | | |
|--------|------------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量、第1層より粘性や締まりが弱い | 6 極暗褐色 | ローム粒子微量、第5層より締まりがある |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子多量、焼土ブロック少量 | | |

遺物 土師器坏片16点、土師器皿片1点、土師器甕片64点、須恵器甕片3点、鉄製鋤先片1点、縄文土器片277点が出土している。縄文土器片は混入したものである。1～8は土師器で、1・2は碗の口縁部から体部の破片、3は口縁部から体部が一部欠損する坏、4は皿の口縁部から底部の破片、5～7は甕の口縁部片、8は小形甕である。9・10は須恵器で、甕の口縁部から胴部の破片である。11は鉄製鋤先片である。8の小形甕は竈に設置された土製支脚にかぶせた状態で、3の坏と10の須恵器甕と11の鉄製鋤先片は覆土下層から出土している。所見 本跡は、焼土の堆積状況から、焼失家屋と考えられる。時期は、出土遺物から平安時代（9世紀末葉）と考えられる。

第461号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第694図 1	碗 土師器	A (15.2) B (5.4)	口縁部から体部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	外歪ロクロナデ。内面ミガキ。内面黒色処理。	砂粒・雲母にふい白色 普通	P23 10% 覆土
	碗 土師器	A (13.6) B (3.5)	口縁部から体部の破片。体部は外傾し、口縁部に至る。	外歪ロクロナデ。内面ミガキ。内面黒色処理。	砂粒にふい褐色 良好	P25 5% 覆土
3	坏 土師器	A (12.4) B 3.7 C 7.0	口縁部から体部一部欠損。体部は外傾し、口縁部に至る。	内・外歪ロクロナデ。底部回転へう切り痕、ナデ。	砂粒・スコリア 褐色 良好	P26 50% 覆土下層
	皿 土師器	A (18.8) B (2.8)	口縁部から体部の破片。体部は外傾し、口縁部に至る。	内・外歪ロクロナデ。	砂粒にふい黄褐色 普通	P34 5% 覆土
	甕 土師器	A (14.0) B (4.8)	口縁部から体部の破片。口縁部は外反する。口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外歪横ナデ。体部内面へラナデ。	石英・長石・雲母 灰褐色 良好	P28 10% P.L107 覆土
6	甕 土師器	A (20.2) B (5.0)	口縁部から体部の破片。口縁部は外反する。口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外歪横ナデ。体部内面へラナデ。	石英・長石・雲母にふい白色 普通	P29 5% 覆土
7	甕 土師器	A (20.0) B (4.5)	口縁部から体部の破片。口縁部は外反する。口縁端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外歪横ナデ。体部内面へラナデ。	石英・長石・雲母にふい白色 普通	P30 5% 覆土
8	小形甕 土師器	A (12.0) B 9.7 C 9.0	口縁部から体部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	内・外歪ロクロナデ。口縁部内・外歪横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	P27 60% P.L107 竈内土製支脚上部
9	甕 須恵器	A (23.8) B (11.2)	口縁部から体部の破片。胴部は内彎し、口縁部は外反する。口唇部は断面三角形を呈している。	体部外置能位の格子目状印。体部内面はほぼ行形の当て具痕（無文）。	砂粒にふい白色 普通	P32 10% P.L107 覆土
10	甕 須恵器	A (20.4) B (18.4)	口縁部から体部の破片。胴部は内彎し、口縁部は外反する。口唇部は断面三角形を呈している。	体部外置能位の平行印。体部内面はほぼ行形の当て具痕（無文）。	砂粒 褐色 普通	P31 30% P.L107 覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考
		長さ	幅	厚さ			
第694図 11	鉄製鋤先	(17.3)	(7.7)	0.5	(190)	鉄	M 1 覆土下層 P.L107



第694图 第461号住居跡出土遺物実測図

第462号住居跡 (第695図)

位置 調査区の北西部, E13f8区。

確認状況 本跡の西壁部は調査区域外にあり, 西壁は確認できなかった。

重複関係 本跡が第3号遺物包含層を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.82m, 短軸(2.76)mの隅丸方形と推定される。北壁は竈を挟んで東と西とは42cmほど
くいている。竈の東側部分はロームを掘り残し, 棚として使用していた可能性がある。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は29cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部は踏み固められている。

竈 北壁の東寄りに, 砂まじりの白色粘土を使用して構築している。規模は, 長さ78cm, 幅72cmである。両袖
が残っている。火床面はほぼ平坦で, 被熱により赤変している。燃焼部奥の中央には, 高台付坪をかぶせた
土製支脚を設置しており, 煙道は傾斜して立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|-------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量, 焼土ブロック少量, ローム粒子少量, 砂粒少量 |
| 2 灰褐色 | 焼土粒子少量, 焼土ブロック多量, ローム粒子少量, 砂粒多量 |
| 3 褐色 | 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子中量, 砂粒中量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子中量, ロームブロック少量, 砂粒中量 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子中量, ロームブロック少量, 砂粒中量 |

覆土 第1~5層が覆土で, 第6層が貼床である。5層に分層され, レンズ状に堆積することから, 自然堆積
と考えられる。

土層解説

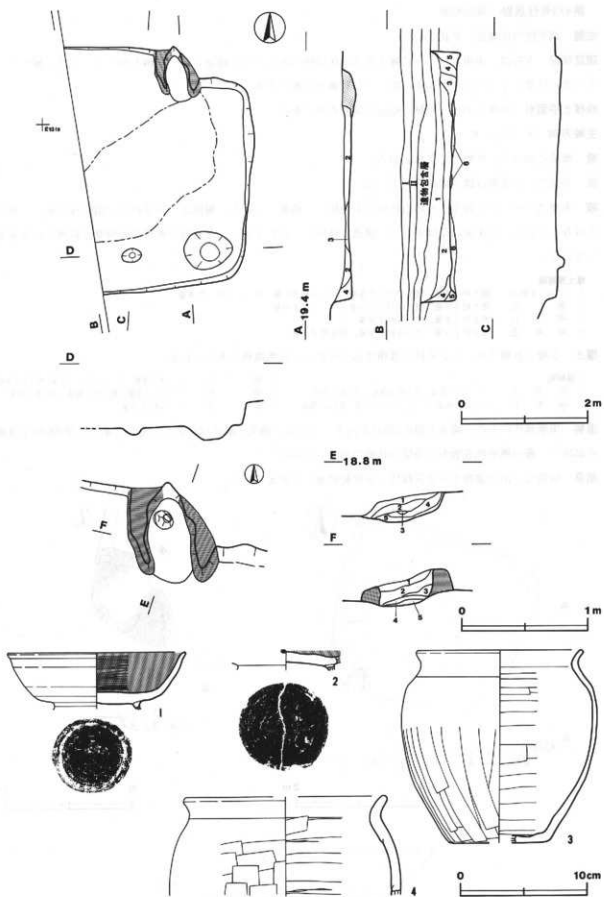
- | | | | |
|--------|-----------------|-------|--------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量, ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量, 炭化粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物 土師器破片8点, 土師器壺片17点, 縄文土器片76点が出土している。縄文土器片は混入したものであ
る。第695図1~4は土師器で, 1・2は高台付碗, 3・4は小形壺である。1の高台付碗は竈に設置された
土製支脚にかぶせた状態で出土している。2の高台付碗と3の小形壺は覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土遺物から平安時代(9世紀末葉)と考えられる。

第462号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第695図 1	高台付碗 土師器	A [14.0] B (4.3) E 0.6	口縁部から底部一部欠損。体部は内 彎して立ち上がり, 口縁部はわずか に外反する。高台は開く。	外面ロクロナデ。内面ミガキ。高台 貼付付後, ナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P38 70% PL107 竈内土製支脚上部
2	高台付碗 土師器	B (1.5)	底部片。高台は開く。	底部面転赤塗り後, ナデ。	石英・長石・雲母 にふい橙褐色 普通	P34 20% 覆土下層
3	小形壺 土師器	A [12.8] B (15.3) C (8.0)	口縁部から底部一部欠損。体部は内 彎して立ち上がり, 口縁部は短く外 反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下 端ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P35 60% PL107 覆土下層
4	小形壺 土師器	A [16.0] B (7.3)	口縁部から体部の破片。体部は内彎 して立ち上がり, 口縁部は短く外反 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面ヘラナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P36 5% 覆土



第695图 第462号住居跡・出土遺物実測図

第473号住居跡 (第696図)

位置 調査区の南東部, F1613区。

確認状況 本跡は, 南東コーナーに竈を有する住居跡であることを確認した。主軸方向については, 竈がコーナー部に位置することから, 本跡に限っては長軸を主軸とする。

規模と平面形 長軸3.00m, 短軸2.82mの隅丸方形である。

主軸方向 N-75°-E

壁 壁高は24cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部は踏み固められている。

竈 南東コーナーに, 砂まじりの白色粘土を使用して構築している。規模は, 長さ49cm, 幅95cmである。両袖が残存している。火床面はほぼ平坦で, 煙道は外傾して立ち上がる。煙道及び燃焼部の両壁は被熱により赤変している。

竈土層解説

- | | | |
|---|--------|--------------------------------------|
| 1 | に濃い赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土ブロック多量, ローム粒子中量, ロームブロック多量 |
| 2 | 褐色 | 焼土粒子中量, 焼土ブロック中量, ローム粒子中量 |
| 3 | 褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子少量, 炭化粒子少量 |

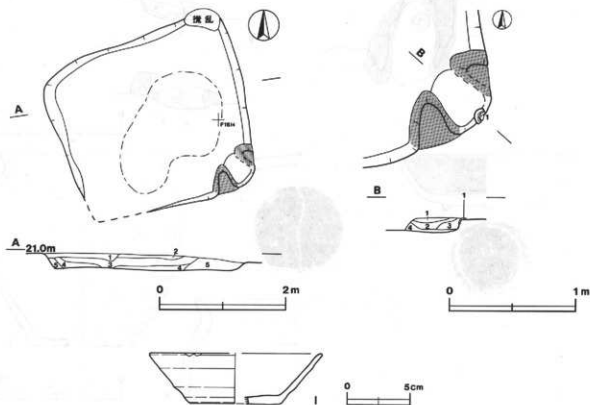
覆土 5層に分層され, レンズ状に堆積することから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------------|---|----|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 | 3 | 褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量 | 4 | 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 |
| | | | 5 | 褐色 | ローム粒子多量 |

遺物 須恵器坏片1点, 縄文土器片128点が出土している。縄文土器片は混入したものである。第696図1は須恵器坏で, 竈の煙道部底面から逆位の状態で出土している。

所見 時期は, 出土遺物から平安時代(9世紀前葉)と考えられる。



第696図 第473号住居跡・出土遺物実測図

第473号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	寸法(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色澤・焼成	備 考
第 696 図 1	坏 須恵器	A [13.4] B 4.0 C [7.0]	口縁部から底部一部欠損。体部は外傾して、口縁部にいたる。	内・外置ロクロナデ。底部回転ヘウ切り残、ナデ。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	P59 30% 甕淵通部底面

第474号住居跡 (第697図)

位置 調査区の北東部, F1549区。

確認状況 本跡には竈が2か所あることを確認した。主軸方向は、北竈が本跡に本来付設された竈と推定されるので、これを通る軸線を主軸とした。

重複関係 本跡は第121号溝に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.72m, 短軸3.20mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は22cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁下と北壁下の一部にある。上幅23cm, 下幅6cmで、深さ6cmである。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

竈 2か所あり、東竈を竈A、北竈を竈Bとした。残存状況は、掘り込みも浅く、不良である。竈Aは、東壁のほぼ中央に、壁を46cm掘り込んで構築している。規模は、長さ80cm, 幅90cmである。袖は、砂まじりの灰白色粘土ブロックが竈A付近の覆土に含まれてはいるものの、残存していない。火床面はほぼ平坦で、被熱による赤変はわずかである。煙道は傾斜して立ち上がる。竈Bは、北壁の中央やや東寄りに、壁を32cm掘り込んで構築している。規模は、長さ65cm, 幅46cmである。袖は残存していない。火床面はほぼ平坦で、被熱による赤変はわずかである。煙道は傾斜して立ち上がる。竈Aと竈Bとの新旧関係は、竈A付近に竈構築材と考えられる灰白色粘土ブロックが確認されていることから、竈Aが造り替えられた新しい竈であると推定される。

竈A土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子多量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック少量, 灰白色粘土粒子微量, 炭化粒子微量
- 3 蒸褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子少量

竈B土層解説

- 1 褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 2 灰褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子中量, ロームブロック多量

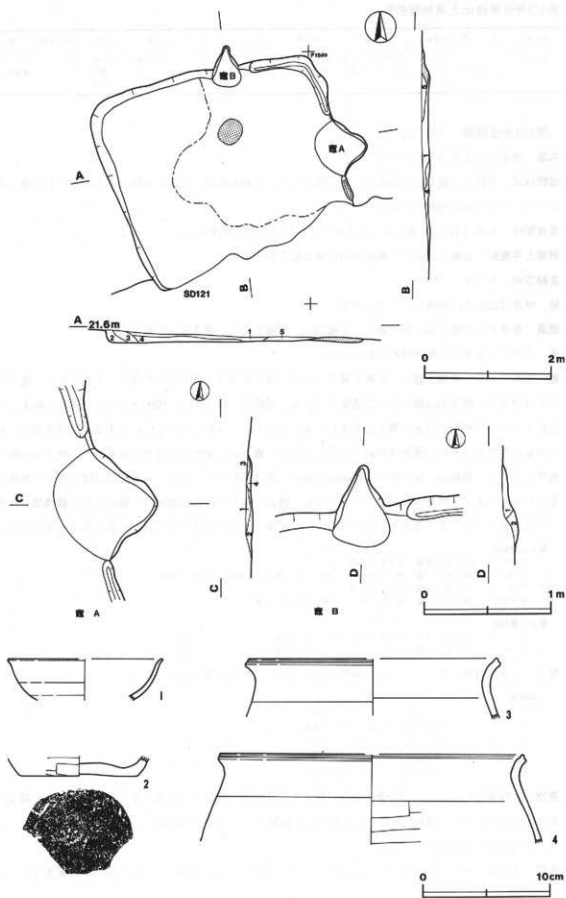
覆土 5層に分層され、レンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック中量

遺物 土師器坏片7点, 土師器壺片41点, 縄文土器片69点, 鉄滓2点が覆土から出土している。縄文土器片は混入したものである。第697図1~4はすべて土師器で、1は碗の口縁部片, 2は小形甕の底部片, 3・4は甕の口縁部から体部の破片である。

所見 本跡は、竈が造り替えられた住居跡である。時期は、出土遺物から平安時代(10世紀前葉)と考えられる。



第697图 第474号住居跡・出土遺物実測図

第474号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第697図 1	甕 土器器	A [12.4] B (3.3)	口縁部から体部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・炭母にふい黄褐色	P60 5% 覆土
2	小形甕 土器器	B (1.5) C [9.2]	底部から体部の破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリアにふい黄褐色	P63 5% 覆土
3	甕 土器器	A [19.6] B (4.3)	口縁部から体部の破片。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 褐色 良好	P62 5% 覆土
4	甕 土器器	A [24.0] B (6.9)	口縁部から体部の破片。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒 にふい褐色 普通	P61 5% 覆土

第502号住居跡 (第698図)

位置 調査区の南東部、F17e2区。

確認状況 本跡には竈が2か所あることを確認した。北竈が本跡に本来付設された竈と考えられるので、これを通る軸線を軸とした。

重複関係 本跡が第4号遺物包含層の第2b層上面から掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.78m、短軸3.30mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-30°-E

壁 壁高は22cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部はわずかに踏み固められている。

竈 2か所あり、東壁にある竈を竈A、北壁にある竈を竈Bとした。竈Aは、東壁の中央やや南寄りに、壁を50cm掘り込んで砂まじりの灰白色粘土ブロックを使用して構築している。南袖は確認できず、北袖の残存状況も不良である。規模は、長さが78cmで、幅は推定で90cmである。火床面はほぼ平坦で、被熱による赤変はわずかである。煙道は傾斜して立ち上がり、両壁は被熱により赤変している。土層断面については、残存状況が不良であったため、記録することができなかった。竈Bは、北壁の中央やや東寄りに、半円形の掘り方だけが残存している。規模は、長さ44cm、幅36cmである。煙道は傾斜して立ち上がり、被熱の痕跡は認められない。覆土は3層に分層され、第1・2層は住居跡の覆土で、竈の覆土は第3層だけである。竈Bは、残存状況から、本跡の旧竈と考えられる。

竈B土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子中量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 2 灰褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子中量、炭化粒子少量 | | |

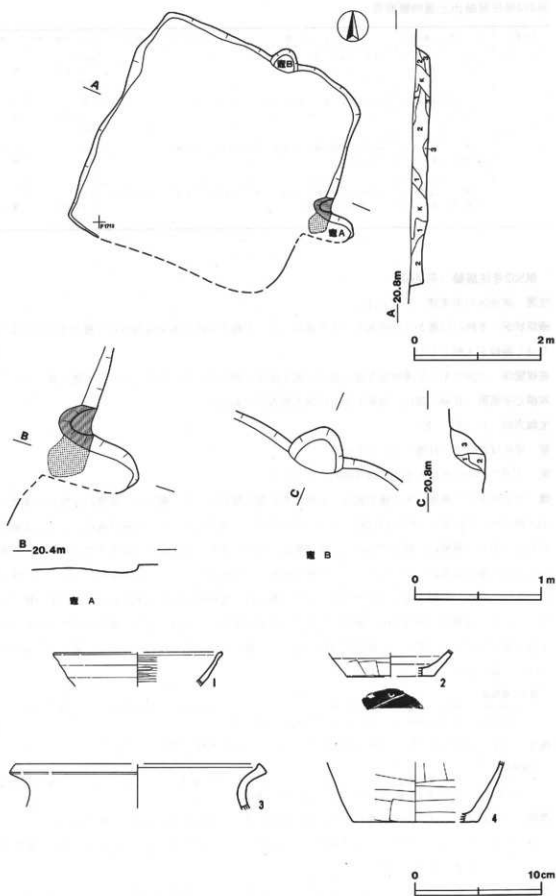
覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、灰白色粘土粒子中量、砂粒中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、灰白色粘土粒子少量、砂粒少量 | | |

遺物 土師器坏片2点、土師器甕片6点、須恵器坏片1点、縄文土器片520点が覆土から出土している。縄文土器片は混入したものである。1は土師器坏の口縁部片、2は須恵器坏の口縁部片、3は土師器甕の口縁部片、4は土師器甕の底部片である。

所見 本跡は、竈が造り変えられた住居跡である。時期は、出土遺物が少量であるため明確でないが、住居跡の形態から平安時代(9世紀末葉から10世紀前葉)と考えられる。



第698图 第502号住居跡・出土遺物実測図

第502号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第698図 1	坏 土 甕 罎	A [13.3] B (2.6)	口縁部片。口縁部は外傾する。	外面ロクロナゲ。内面ミガキ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P74 5% 覆土
2	坏 須 意 器	B (2.0) C [7.0]	底部から体部の破片。体部は外傾して 立ち上がる。	体部外面下端へう崩り。底部一方 向へう崩り。	砂粒 黄灰色 普通	P75 10% 覆土
3	美 土 器 器	A [19.2] B (3.5)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部 は断面三角形を呈する。	口縁部内・外面横ナゲ。	石英・灰石・黒砂 にぶい褐色 普通	P104 5% 覆土
4	美 土 器 器	B (5.0) C [10.0]	底部から体部の破片。体部は外傾して 立ち上がる。	体部外面下端へう崩り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P76 5% 覆土

表19 前田村遺跡Ⅰ区平安時代住居跡一覧表

住居 番号	位置	主軸方向	平面形	長さ(m) (主軸長×短)	幅 (cm)	柱礎	内 部 設 置				電	覆土	出土遺物	特 異 (重要遺物)		
							庭 溝	主柱穴	ピット	出入口					貯蔵穴	
439	F131a	N-80°-E	横 九 角 形	2.80×3.12	16	平 基	-	-	-	-	1	自然	灰	10世紀前半	第3号遺物包含層より新	
461	F131ab	N-8°-W	横 九 角 形	4.20×3.50	34	平 基	-	-	-	-	1	1	自然	灰 瓦 美濃焼瓦	9世紀後半	第3号遺物包含層より新
462	F131b	N-2°-W	横 九 角 形	3.82×2.70	29	平 基	-	-	-	-	1	自然	灰	9世紀後半	第3号遺物包含層より新	
473	F131c	N-75°-E	横 九 角 形	3.89×2.82	24	平 基	-	-	-	-	1	自然	灰	9世紀前半	コーナー遺	
474	F131d	N-8°-E	横 九 角 形	3.20×2.80	22	平 基	-	-	-	-	2	自然	灰	10世紀前半		
502	F171a	N-75°-E	横 九 角 形	3.76×2.70	22	平 基	-	-	-	-	1	自然	灰 瓦	10世紀前半	第4号遺物包含層より新	

3 中・近世の遺構と遺物

I区では、中・近世の墳墓1基、地下式横3基、土坑1基、井戸2基、溝7条を調査した。以下、調査した遺構と遺物について記載する。

(1) 墳墓

第1号墳墓 (第699図)

位置 調査区の中央部、F14a0・F14b0区。

確認状況 楕円形状に巡る周溝と、周溝のほぼ中心部に位置する主体部を確認した。盛土は確認できなかったが、周溝の覆土が中世遺構の覆土と類似することから、中世の墳墓と判断した。

重複関係 本跡が第467号住居跡を掘りこんでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 周溝の内側上端で計測すると、長径6.34m、短径4.44mの楕円形である。

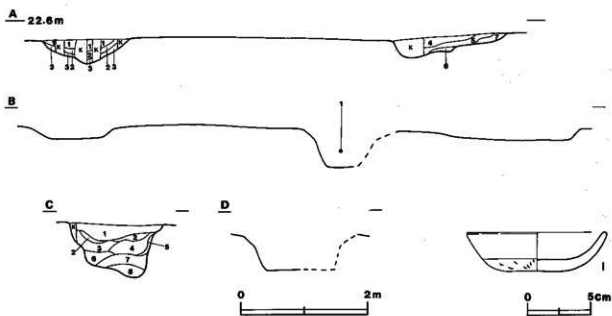
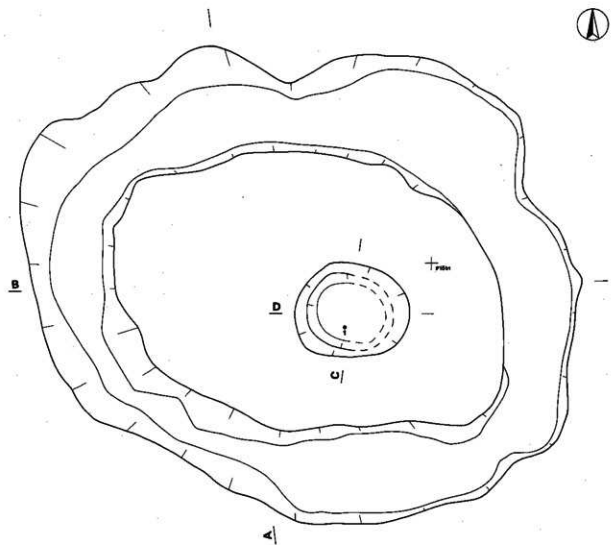
長径方向 N-80°-W

周溝 上幅1.00~1.94m、下幅0.24~1.60mで、深さ34cmである。覆土は3層に分層され、レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量

- 3 褐色 ローム粒子少量、ロームブロック少量



第699图 第1号墳墓・出土遺物実測図

主体部 中央やや東寄りに位置し、長径1.80m、短径1.50mの楕円形で、深さ80cmである。主体部と墳墓全体の長径方向はほぼ一致する。底面はほぼ平坦である。覆土は8層に分層され、第6～8層はロームブロックを多量に含み、締まりがある。周溝覆土にくらべローム粒子やロームブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

土層解説		5	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量	
1	暗褐色	ローム粒子少量	6	暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量	7	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック多量
3	暗褐色	ローム粒子少量	8	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック多量、第7層より色調が暗い
4	黒褐色	ローム粒子微量、ロームブロック微量			

遺物 縄文土器片2216点、土師器片8点、土師質土器1点が出土している。縄文土器片と土師器片は混入したものである。1は土師質土器の小皿で、主体部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と覆土が中世のものと類似することから中世（13世紀代）と考えられる。

第1号墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第699図 1	小皿 土師質土器	A [10.8] B 3.1	丸底。口縁部は外傾する。	口縁部ナデ。	赤粒 褐色 普通	P251 40% 主体部覆土下層

(2) 土坑

第2729号土坑（第700図）

位置 調査区の南東部、F16g4区。

規模と平面形 長軸3.06m、短軸1.12mの隅丸長方形で、深さは30cmである。

主軸方向 N-78°-W

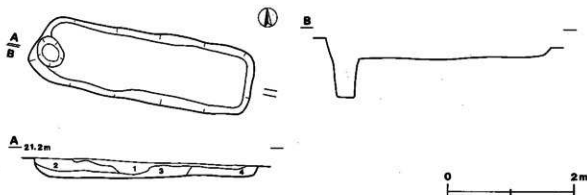
壁 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。

ピット 1か所。西壁際に位置し、長径50cm、短径40cmの楕円形で、深さ66cmである。本跡に伴うピットかどうかは不明である。

覆土 4層に分層され、ロームブロックを多量に含むことから人為堆積と考えられる。

土層解説		3	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック中量	
1	暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック多量	4	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック多量
2	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック多量			



第700図 第2729号土坑実測図

所見 本跡は、平面形の特徴、覆土が中世遺構の覆土と類似すること、人為堆積をすることから、中世の土坑墓と考えられる。

(3) 地下式墳

第29号地下式墳〔SK2708〕(第701図)

位置 調査区の南部、G14c7区。

確認状況 本跡と後述する第30・31号地下式墳とは、ほぼ同じ主軸方向で、約16mの距離にあり、一群の遺構とみられる。天井部は崩落している。

主軸方向 N-6°-W

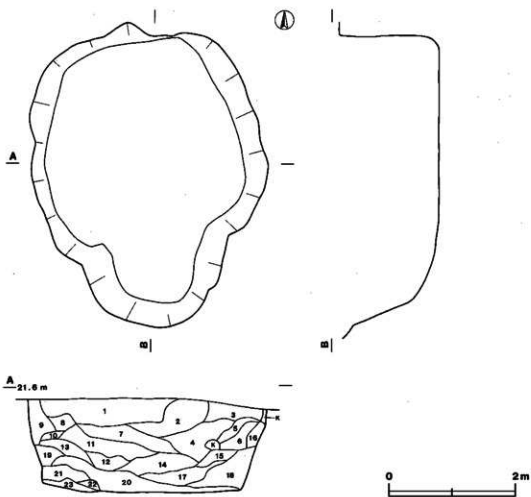
竪坑 底面形は、長軸1.44m、短軸1.10mの半円形で、確認面からの深さは1.44mである。主室へ向かって深くなるスロープ状となる。

主室 底面形は、長軸3.70m、短軸3.60mの胴の張る隅丸方形で、確認面からの深さは1.58mである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

底 平坦である。

覆土 主室は23層に分層され、第16~23層は天井部の崩落土と考えられる。



第701図 第29号地下式墳実測図

主室土層解説

1	褐色	ローム粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量
3	褐色	ローム粒子少量
4	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
5	褐色	ローム粒子多量
6	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量
7	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
8	褐色	ローム粒子微量
9	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量
10	暗褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量
11	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック多量
12	暗褐色	ローム粒子微量、ロームブロック微量

13	暗褐色	ローム粒子少量
14	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
15	褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック少量
16	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
17	暗褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
18	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、第19層より跡まりがない
19	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、第16層より跡まりがない
20	極暗褐色	ローム粒子微量、ローム大ブロック微量
21	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
22	暗褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック少量
23	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック少量

遺物 縄文土器片1679点、土師器片4点、土師質土器片23点、陶器片4点が覆土から出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 時期は、類例から中世と考えられる。

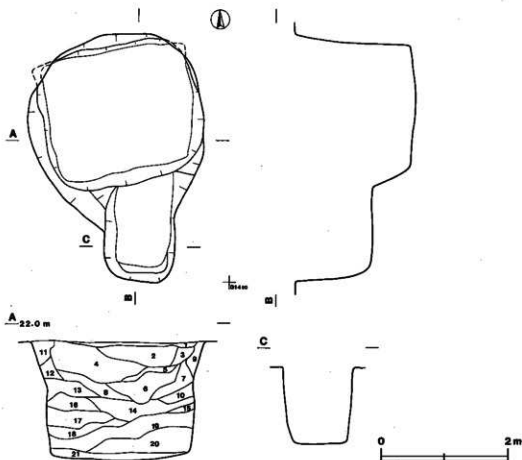
第30号地下式墳〔SK2707〕(第702図)

位置 調査区の南部，F14j9区。

主軸方向 N-18°-W

竪坑 確認面における平面形は、長軸1.70m、短軸1.12mの隅丸長方形で、深さは1.22mである。底面は、長軸1.40m、短軸0.90mの隅丸長方形で、平坦である。

主室 底面形は、長軸2.32m、短軸1.90mの長方形で、深さは1.90mである。竪坑底面との比高は56cmで、段となる。底面は平坦である。



第702図 第30号地下式墳実測図

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 主室は21層に分層され、第18~21層は天井部の崩落土と考えられる。

主室土層解説

1	褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
3	褐色	ローム粒子中量
4	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
5	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量、第4層より締まりがない
6	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量、第2層より締まりがない
7	褐色	ローム粒子少量
8	褐色	ローム粒子微量、ロームブロック微量
9	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック中量
10	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量
11	褐色	ローム粒子中量
12	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量、第10層より締まりがある
13	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック少量
14	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
15	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量
16	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック中量
17	褐色	ローム粒子少量
18	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック中量、第19層より締まりがない
19	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック少量、第16層より締まりがない
20	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
21	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック微量、第14層より締まりがある

遺物 縄文土器片348点が覆土から出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 時期は、類例から中世と考えられる。

第31号地下式墳〔SK2718〕(第703図)

位置 調査区の南部、F1511区。

主軸方向 N-14°-W

堅坑 確認面における平面形は、長径1.76m、短径1.26mの楕円形で、深さは1.56mである。南部は深さ10cmで、テラス状となる。底面は、長径0.86m、短径0.74mの楕円形で、平坦である。底面の西部には、長径50cm、短径44cmの楕円形で、深さ10cmの浅いピットがある。堅坑から主室への通路は一部天井部が残存しており、トンネル状になる。

主室 底面形は、長軸3.30m、短軸2.28mの長方形で、深さは1.54mである。底面は平坦である。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、西壁の一部は内傾して立ち上がる。

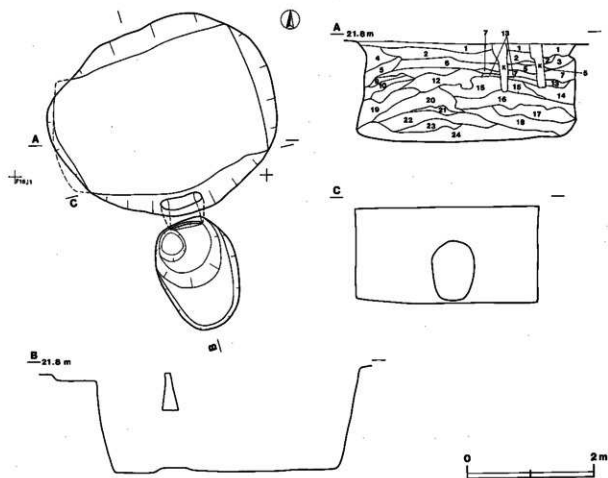
覆土 主室は24層に分層され、第24層は天井部の崩落土と考えられる。

主室土層解説

1	褐色	ローム粒子微量、炭化粒子少量	13	暗褐色	ローム粒子微量、ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子微量、ロームブロック微量、炭化粒子微量	14	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
3	褐色	ローム粒子多量	15	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
4	褐色	ローム粒子少量	16	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量
5	暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	17	褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック中量
6	暗褐色	ローム粒子微量	18	褐色	ローム粒子少量、ロームブロック中量
7	暗褐色	ローム粒子少量	19	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック少量
8	暗褐色	ローム粒子微量、ローム小ブロック微量	20	褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
9	褐色	ローム粒子少量、第4層より締まりがある	21	褐色	ローム粒子微量
10	暗褐色	ローム粒子微量、第6層より締まりがある	22	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量
11	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量	23	暗褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量
12	暗褐色	ローム粒子微量、ローム小ブロック微量	24	褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック多量

遺物 縄文土器片101点が覆土から出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 時期は、類例から中世と考えられる。



第703図 第31号地下式墳実測図

(4) 井戸

I区では、井戸2基を調査した。調査では第24・25号井戸としたが、D・F区の整理で井戸としたものが増加したため、それぞれ第31・32号井戸と改称して報告する。

第31号井戸〔SE24〕(第704図)

位置 調査区の北東部、F15es区。

重複関係 第121号溝に掘り込まれており、本跡が古い。

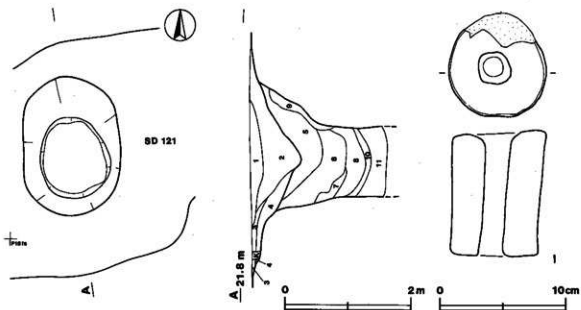
規模と形状 平面形は、長径2.20m、短径1.54mの楕円形である。深さ2.30mまで調査したが、底面は確認できなかった。確認面から下約1mまでは漏斗状を呈するが、それ以下は径1.28mの円筒状である。

長径方向 N-5°-W

覆土 第1～4層は第121号溝の覆土で、第5～11層が本跡の覆土である。7層に分層され、自然堆積と考えられる。

土層解説

5 暗褐色	ローム粒子微量、ロームブロック少量	9 暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック中量
6 暗褐色	ローム粒子微量、ロームブロック微量	10 褐色	ローム粒子多量
7 褐色	ローム粒子多量	11 暗褐色	ローム粒子少量
8 暗褐色	ローム粒子中量		



第704図 第31号井戸・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片29点, 土師器片3点, 土師質土器片1点, 管状土錘1点が出土している。1は管状土錘である。縄文土器片と土師器片は混入したものである。

所見 本跡は, 索掘りの井戸である。時期は, 覆土が中世遺構の覆土と類似することと, 遺構の形態から中世と考えられる。

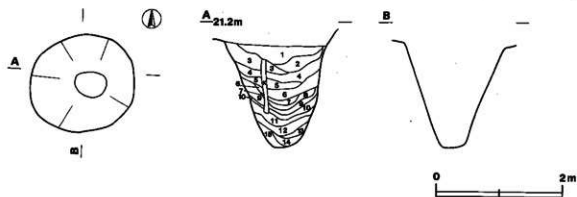
第31号井戸出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	形状及び文様の特徴	備 考
		長さ	径	孔径				
第704図 1	管状土錘	6.6	5.1	1.5	(200)	95	無文。	DP58 覆土

第32号井戸 [SE25] (第705図)

位置 調査区の南東部, F16f2区。

重複関係 第122号溝と重複するが, 新旧関係は不明である。



第705図 第32号井戸実測図

規模と形状 長径1.66m、短径1.54mのほぼ円形で、深さ1.62mである。形状は漏斗状である。

覆土 15層に分層される。レンズ状に堆積するが、ロームブロックを多量に含むことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|----|-----|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量、炭化粒子中量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量、炭化粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック多量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、炭化粒子少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、第3層より締まりがない |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック多量 |
| 8 | 褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量 |
| 9 | 褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック多量 |
| 10 | 褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量、第8層より粘性がある |
| 11 | 褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック中量 |
| 12 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック多量 |
| 13 | 灰褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| 14 | 灰褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量 |
| 15 | 灰褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量、第14層より締まりがある |

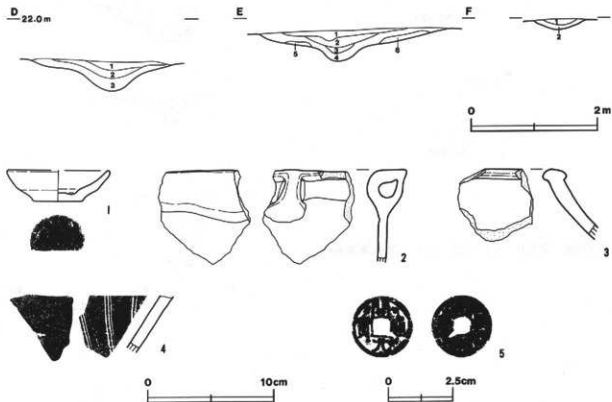
遺物 縄文土器片97点、土師器片8点、土師質土器片2点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、素掘りの井戸である。時期は、覆土が中世遺構の覆土と類似することと、遺構の形態から中世と考えられる。

(5) 溝

I区では溝7条を調査した。ここでは遺構に伴う遺物が出土している第121号溝について記述し、その他は一覧表に記載する。溝については土層断面図を掲載するが、位置や形状については付図を参照されたい。

第121号溝 (第706図, 付図3)



第706図 第121号溝・出土遺物実測図

位置 調査区の北東部，F15区。

重複関係 本跡が第31号井戸を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と形状 長さ37.0m，幅3.70m，深さ0.48mである。断面形は，中央部がわずかに深く，壁が緩やかに立ち上がる形状である。

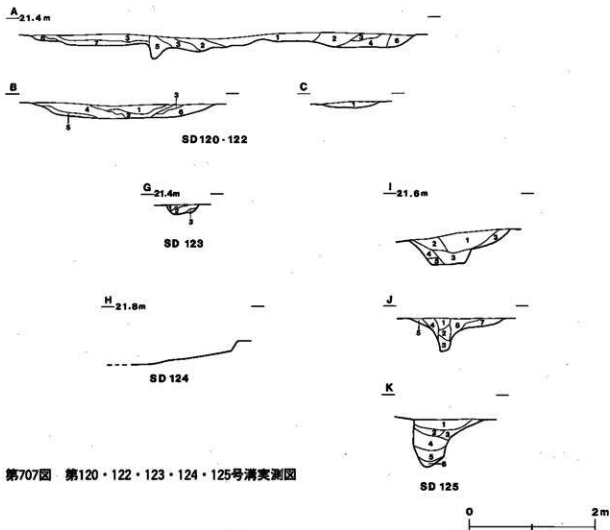
方向 東西方向（N-76°-E）にはほぼ直線的に延びている。

底 ビットが不規則ながらも，連続して並んでいる。

覆土 自然堆積と考えられる。

遺物 縄文土器片390点，土師器片38点，土師質土器片43点が覆土から出土している。縄文土器片と土師器片は混入したものである。1は小皿，2は内耳鍋の口縁部片，3は壺の口縁部片，4は摺鉢の体部片，5は銅銭（開元通寶）である。

所見 本跡の時期は，出土遺物から中世（15世紀）と思われる。



第707図 第120・122・123・124・125号溝実測図

第121号溝出土遺物観察表

図版番号	部 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第706図 1	小 皿 土師質土器	A (7.7) B 2.5 C 4.0	平底。底部回転糸切り。口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。	ロクロナデ。	砂粒・雲母にふいば色普通	P259 50% 覆土
2	内 耳 鍋 土師質土器	B (7.4)	口縁部から胴部の破片。胴部はほぼ直立し、口縁部は外傾する。内耳を有する。	内・外面ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P257 5% 覆土
3	皿 土師質土器	B (6.3)	口縁部破片。口縁部は内傾する。口唇部の内・外面は突出する。	内・外面ナデ。	砂粒・雲母にふいば色普通	P258 5% 覆土

図版番号	器 種	直径 (cm)	重量 (g)	初 鋳 年		備 考
				時代	年号	
第706図 5	開元通寶	2.4	(2.14)	唐	621年	M2 覆土

表20 前田村遺跡Ⅰ区中・近世溝一覧表

遺 跡 番 号	位 置	方 向	規 模 (m)			平面形	壁	底	覆土	出土遺物	時 期	備 考
			長さ	幅	深さ							
120	F16	—	(27.8)	6.60	0.20	L 字 状	緩斜	平 坦	自然	—	—	SD122と重複
121	F15	N-76°-E	37.0	3.70	0.48	直 線 状	緩斜	ピツ列	自然	小皿 内耳鍋 煮古鉄	15世紀	SE31より新
122	F16	—	19.8	1.20	0.24	L 字 状	緩斜	平 坦	自然	—	—	SE32・SD120と重複
123	F14	N-84°-E	3.3	0.60	0.14	直 線 状	外傾	平 坦	自然	—	—	SD124と重複
124	F14	N-8°-W	(8.0)	(1.90)	0.30	直 線 状	緩斜	平 坦	自然	—	—	SI454・SD123と重複
125	G14	—	(40.0)	1.80	0.76	クランク状	外傾	平 坦	自然	—	—	SD126と重複
126	G14	—	11.8	1.40	0.30	L 字 状	外傾	平 坦	自然	—	—	SD126と重複

4 その他の遺構と遺物

I区では、時期不明の方形竪穴状遺構2基、土坑4基、焼土遺構2基を調査した。以下、調査した遺構と遺物について記載する。

(1) 方形竪穴状遺構

第460号住居跡については、ピットがないことから第12号方形竪穴状遺構と改称し、第468号住居跡についてはピットが直線的に位置し、南西コーナー壁際に炉がある特異な形態から、第13号方形竪穴状遺構と改称して報告する。

第12号方形竪穴状遺構 [SI460] (第708図)

位置 調査区の北西部、E13e9区。

重複関係 本跡は第2623号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.02m、短軸2.62mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-80°-W

壁 壁高は26cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた部分は認められない。

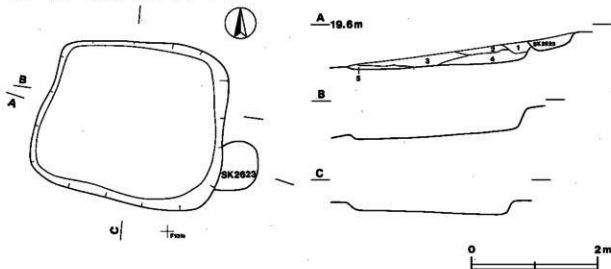
覆土 5層に分層され、自然堆積と考えられる。

主室土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック中量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック中量 | | |

遺物 縄文土器片147点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格は不明である。



第708図 第12号方形竪穴状遺構実測図

第13号方形竪穴状遺構 [SI 468] (第709図)

位置 調査区の南部、G14e6区。

規模と平面形 長軸3.56m、短軸3.48mの不整形である。

主軸方向 N-98°-W

壁 壁高は22cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、わずかに踏み固められた部分がある。

炉 南西コーナー壁際に位置し、長径93cm、短径62cmの楕円形で、深さ9cmである。炉床面はほぼ平坦で、被熱により赤変硬化している。覆土は3層に分層される。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|-------|--------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子微量、炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | 焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | | |

ビット 3か所。主軸線上に直線的に位置し、長径18~36cm、短径18~24cmの円形及び楕円形で、深さ30~59cmである。柱穴と考えられる。

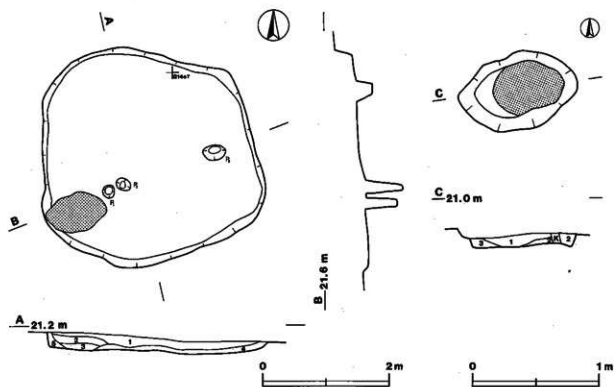
覆土 5層に分層され、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | | |

遺物 縄文土器片69点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、炉や柱穴と考えられるビットがあることから居住施設と考えられるが、時期は不明である。



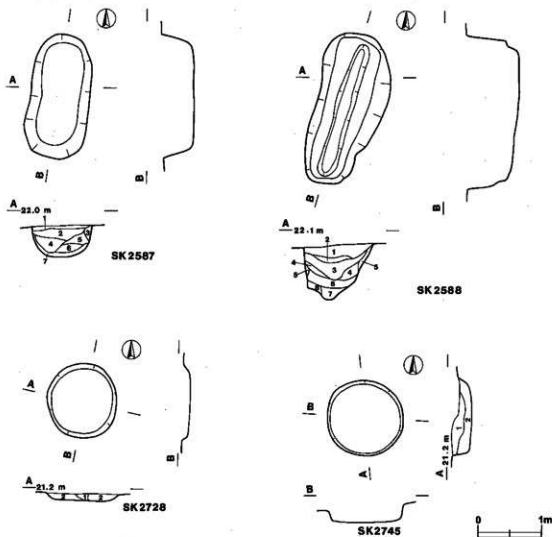
第709图 第13号方形竖穴状遗构实测图

(2) 土坑

I区では、時期不明の土坑を4基調査した。土坑については、実測図と一覧表で記載する。

表21 前田村遺跡I区その他の土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
2587	F1446	N-10°-E	楕円形	1.96×1.00	50	外傾	平坦	-	-	
2588	F1447	N-15°-E	長楕円形	2.44×1.10	84	外傾	平坦	-	-	底面主軸上に溝あり
2728	F16e5	-	円形	1.16×1.08	11	外傾	平坦	-	-	
2745	F16f2	-	円形	1.22×1.18	30	垂直	平坦	-	-	



第710図 その他の土坑実測図

(3) 焼土遺構

I区では、時期不明の焼土遺構2基を調査した。焼土遺構は、周辺に掘り込みやピットを確認していないことから、屋外施設と考えられる。

第3号焼土遺構 (第711図)

位置 調査区の中央部、F14e7区。

確認状況 第2747号土坑と重複して、ローム層上面で確認した。

重複関係 本跡は第2747号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長径80cm, 短径52cmの楕円形である。

底 わずかに赤変硬化している。

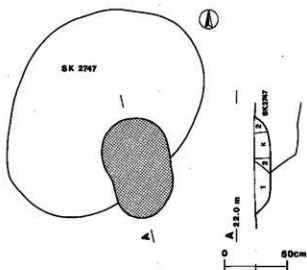
覆土 2層に分層される。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量
- 2 におい赤褐色 焼土粒子多量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。



第711図 第3号焼土遺構実測図

第4号焼土遺構 (第712図)

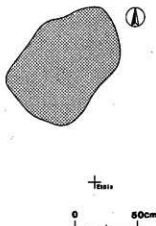
位置 調査区の北東部、E15i2区。

規模と平面形 長径100cm, 短径66cmの不整楕円形である。

底 赤片硬化している。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。



第712図 第4号焼土遺構実測図

5 遺構外出土遺物

I区の遺構外からは、旧石器時代、縄文時代、中世の遺物が出土している。遺構外出土遺物は、遺構の覆土に混入したと判断したものも含め、時代別に報告する。縄文土器については、G区の遺構外出土遺物で分類した基準に準じ、解説する。

旧石器時代

第713図1は搔器である。石材は黒曜石で、縦長の剥片を素材にしている。2～5は縦長の剥片である。石材は3が頁岩、2・4・5が黒曜石で、いずれも表面に残された剥離方向は裏面と一致している。

縄文時代

縄文土器（第713～716図）

第I群 早期

- 1類 井草式土器（第713図6・7） 6・7は口唇部が肥厚する深鉢の口縁部片で、熱糸文を施している。
3類 野島式土器（第713図8） 8は深鉢の胴部片で、微隆起線文により文様を描出している。内面には貝殻条痕文を施している。

第Ⅲ群 中期前葉

第Ⅲa群 阿玉台式

- 1類 阿玉台Ib式（第713図9） 9は深鉢の口縁部片で、断面形が三角形の隆帯により文様を描出し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。
4類 阿玉台IV式（第713図10） 10は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、隆帯に沿って沈線文を施している。RLの単節縄文を施している。

第Ⅳ群 中期中葉

- 1類 中峙式（第713図11・12、第714図13） 11は把手を有する深鉢の口縁部から胴部の破片で、口唇部外面と頸部に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。口縁部には隆帯により波状文を施し、沈線間にキザミを施した文様を描出している。地文はRLの単節縄文である。12は深鉢の口縁部から胴部の破片で、口唇部外面と頸部に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。口縁部にはキザミと沈線を有する隆帯により、文様を描出している。13は深鉢の口縁部から胴部の破片で、熱糸文を地文とし、口唇部直下には沈線間を交互刺突による連続コの字状文を巡らしている。胴部は沈線により文様を描出し、沈線間にキザミを施している。

第Ⅴ群 中期後葉

第Ⅴa群 加曾利E式

- 1類 加曾利EⅠ式（第714図14～19） 14・15は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で、沈線を有する隆帯により文様を描出している。区画文内には縦位の沈線を充填している。14の把手頂部は環状となる。16は鑿状把手を有する深鉢の口縁部から頸部の破片で、把手を起点に沈線を有する隆帯を巡らしている。頸部には縦位の沈線を施している。17・19は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、波頂部直下に隆帯により渦巻文を施している。17の区画文内には縦位の沈線を充填し、19はRLの単節縄文を地文としている。18は深鉢の口縁部片で、渦巻文が施される突起を有している。突起を起点に隆帯により区画文を施し、LRの単節縄文を横位に施している。

2類 加曾利EⅡ式(第714図20) 20は深鉢の胴部片で、LRLの複節縄文を地文とし、沈線間を磨り消している。

第Vb群 曾利式(第714図21・22)

21は深鉢の胴部片、22は深鉢の頸部から胴部の破片で、縦位の沈線を地文とし、押圧文を有する隆帯を垂下させている。22の頸部には、半截竹管による刺突文を施した隆帯を巡らしている。

第VI群 後期前葉

3類 堀之内I式(第714図23, 第715図24~26) 23・24は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で、波頂部直下に円形刺突文を施している。23はLRの単節縄文を地文とし、沈線により蕨手状文を施している。24は口縁部が無文で、頸部に沈線を巡らしている。25は鉢の胴部片で、LRの単節縄文を地文とし、沈線により文様を描出している。26は深鉢の底部片で、無文である。

第VII群 後期中葉

1類 加曾利B1式(第715図27・28) 27は鉢の口縁部から胴部の破片で、沈線間にLRの単節縄文を施している。区切り文は、弧状の短沈線である。28は鉢の口縁部から胴部の破片で、沈線による長楕円形の区画文と弧状文を重層させて施している。

2類 加曾利B2式(第715図29・33・34) 29は鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部は無文帯とし、沈線間にLの無節縄文を施している。33は鉢の口縁部から底部の破片で、沈線による横帯文にはLRの単節縄文を施している。34は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頸部の破片で、沈線により文様を描出し、LRの単節縄文を充填している。

3類 加曾利B3式(第715図30~32) 30は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頸部片で、口唇部直下にキザミを巡らしている。口縁部の沈線による区画内にはLRの単節縄文を充填し、頸部は無文帯にしている。31は頸部がくびれる深鉢の頸部から胴部の破片で、頸部にはキザミを巡らしている。胴部には沈線による弧線文を施し、RLの単節縄文を充填している。32は深鉢の胴部片で、沈線による弧線文を施し、LRの単節縄文を充填している。

4類 加曾利B式(第715図35・36, 第716図37~40) 35は槌状把手を有する小形鉢で、無文である。36は粗製深鉢の口縁部から胴部の破片で、口縁部下部にキザミを巡らしている。37は粗製深鉢の口縁部片で、口唇部直下に集合沈線文を施している。38~40は粗製深鉢の口縁部片で、RLの単節縄文を地文とし、押圧文を有する隆帯を口唇部直下と口縁部下部に巡らしている。沈線文を施している。

第VIII群 後期後葉

1類 安行1式(第716図41~44) 41は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、肥厚した帯縄文を巡らしている。波頂部直下に円孔と楕円形の貼付文を施している。42は深鉢の口縁部片で、肥厚した帯縄文を巡らし、縦に連なる楕円形の貼付文を施している。43は小形鉢の口縁部片で、帯縄文を巡らし、楕円形の貼付文を施している。44は深鉢の口縁部片で、肥厚した帯縄文を巡らしている。

2類 安行2式(第716図46) 46は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部片で、口唇部に沿って肥厚した帯縄文を巡らしている。波頂部直下にはキザミを有する楕円形の貼付文とブタ鼻状の貼付文を施している。

3類 後期安行式(第716図45・47) 45・47は粗製深鉢の口縁部片で、口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らしている。いずれも条線文を地文とし、47は縦位の沈線文を施している。

第IX群 晩期

1類 安行3a式(第716図48~50) 48は鉢の口縁部片で、沈線による相対する半円文と三叉文を交互に施

している。半円文の区画内にはL Rの単節縄文を充填している。49は深鉢の口縁部片で、沈線による弧状文と三叉文を施している。50は深鉢の口縁部片で、沈線による玉抱き入組文を施している。

4類 晩期安行式(第716図51~54) 51・52は粗製深鉢の口縁部片で、沈線による区画文内に細密沈線文を施している。53は小形の鉢で無文である。丸底で、口唇部に瘤状の貼付文を施している。54は注口土器の注口部片で、L Rの単節縄文を施している。

5類 大洞式(第716図55) 55は注口土器の口縁部から胴部の破片で、胴部はくの字状に屈折している。胴部の屈折部には羊歯状文を施している。

土製品(第717図)

56~73は土器片円盤で、56・57は中期後葉の加曾利E式期、58~65は後期前葉の堀之内式期、66~71は後期中葉の加曾利B式期と考えられる。72・73は有孔の土器片円盤で、72は中期後葉の加曾利E式期、73は後期中葉の加曾利B式期と考えられる。74は土器片錘で、後期中葉の加曾利B式期である。75は土製腕輪片で、沈線文を施している。後期前葉の堀之内式期と考えられる。76は大形土偶の右足部片で、先端に5本の指を作出している。裏面は扁平で、表面には沈線により文様を描出している。

石器(第718~721図)

77~80は打製石斧で、77が短冊形、78~80が分銅形である。81~84は磨製石斧で、83は定角式磨製石斧、84は小形の磨製石斧である。85は凹石で、両面に凹みがある。86~107は磨石で、86~92、97~101、103は凹石を兼用するものである。108~110は円柱状の磨石である。111は小形の石棒である。112は石皿で、裏面には凹みがある。113は石核で、自然面を打面とし、不規則な剥離を行っている。114は搔器で、剥片を素材にしている。115・116は石錘で、115は短軸・長軸方向ともに切れ目が全周し、116は長軸方向に切れ目が全周する。115は縄文時代以降の石錘である可能性がある。117は石錘である。118~121は石鏃で、118は無茎石鏃、119~121は有茎石鏃である。

石製品(第721図122)

122は勾玉で、頭部に貫通孔がある。

中世

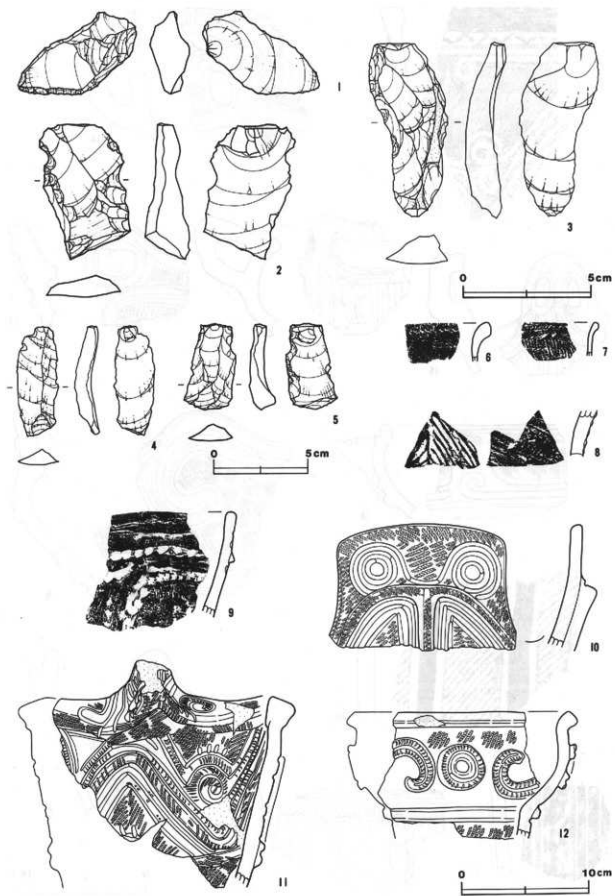
土師質土器(第722図123~127)

123は小皿である。非クロコ系で、丸底である。124~126は搔鉢で、124・125は口縁部片。126は底部から胴部の破片である。口唇部の内・外面はつまみ上げたように突出している。127は壺の口縁部から胴部の破片で、口唇部内・外面がつまみ上げたように突出している。

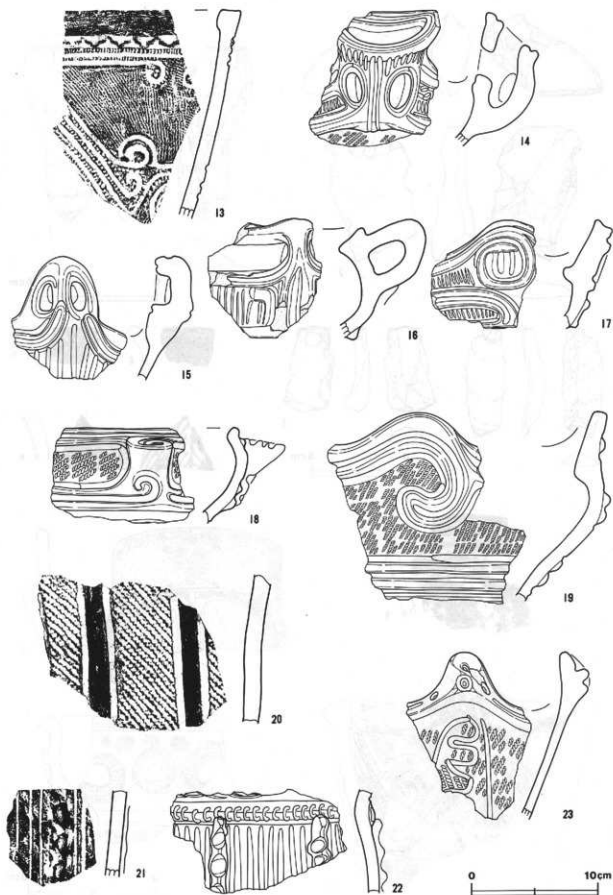
中世以降

石器(第722図129)

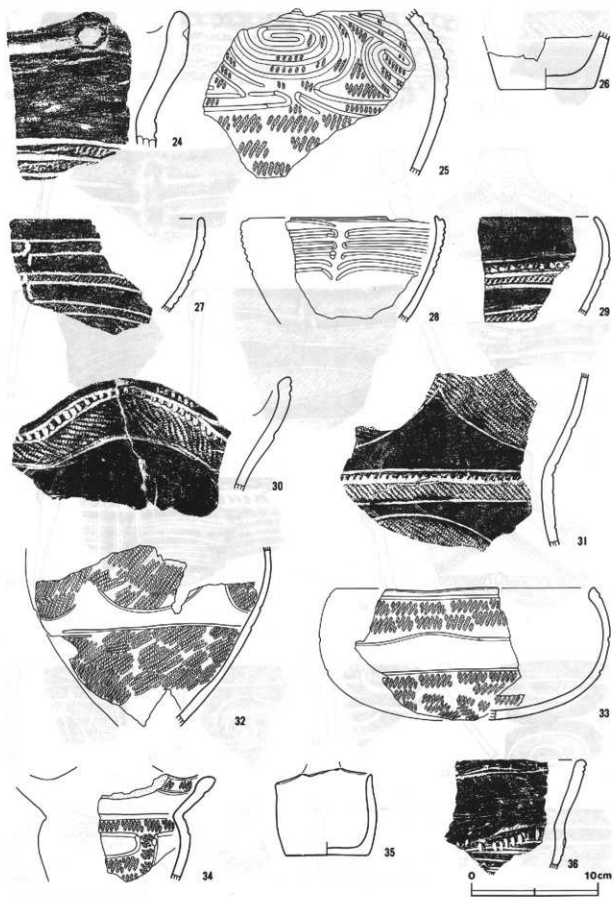
129は火打石で、頁岩製で、剥片を素材にしている。端部には細かな敲打痕があり、稜線がつぶれた状態である。



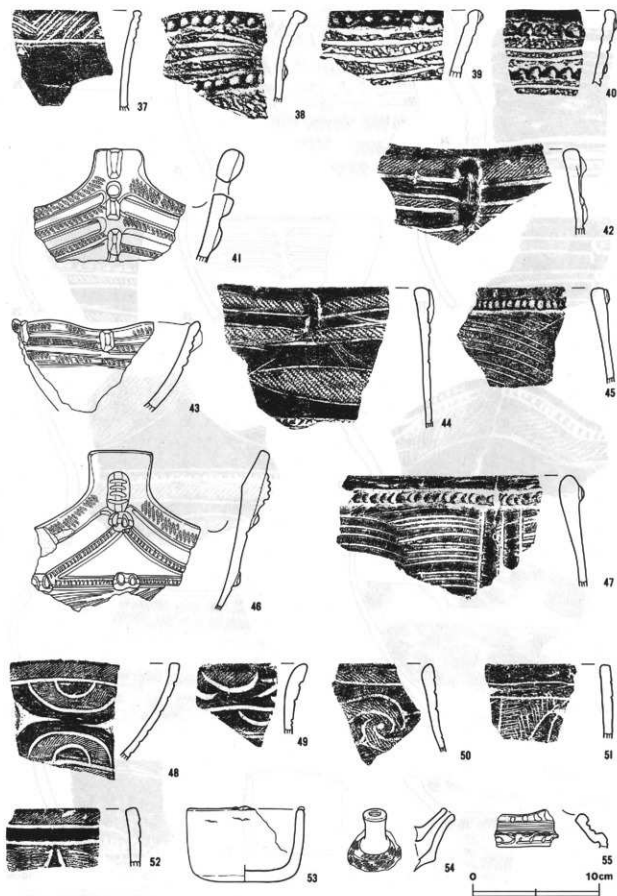
第713图 遗物出土物实测图(1)



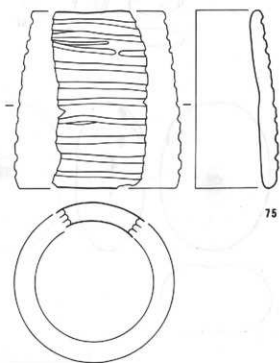
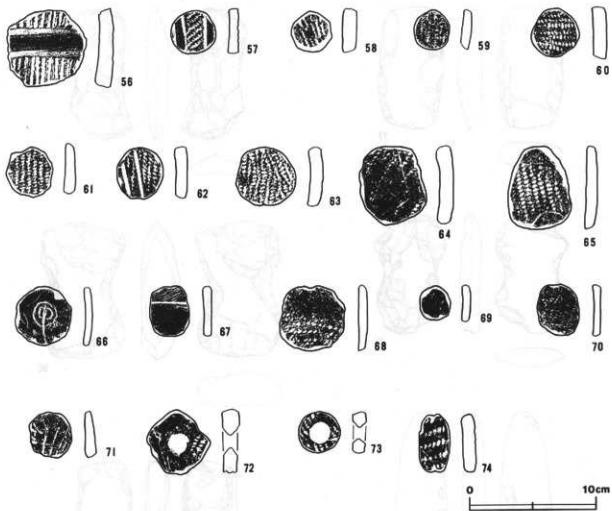
第714图 遗物外出土遺物実測图(2)



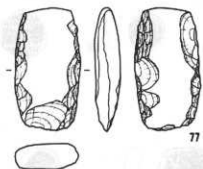
第715图 遗物出土物实例图(3)



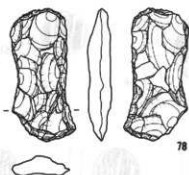
第716图 遗物出土物实测图(4)



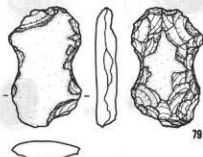
第717图 遗構外出土遺物実測図(5)



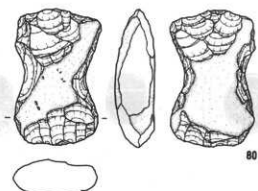
77



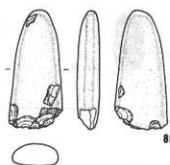
78



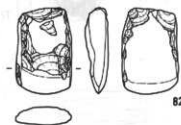
79



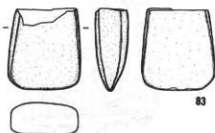
80



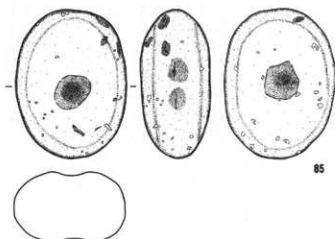
81



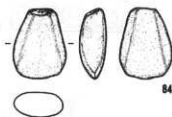
82



83



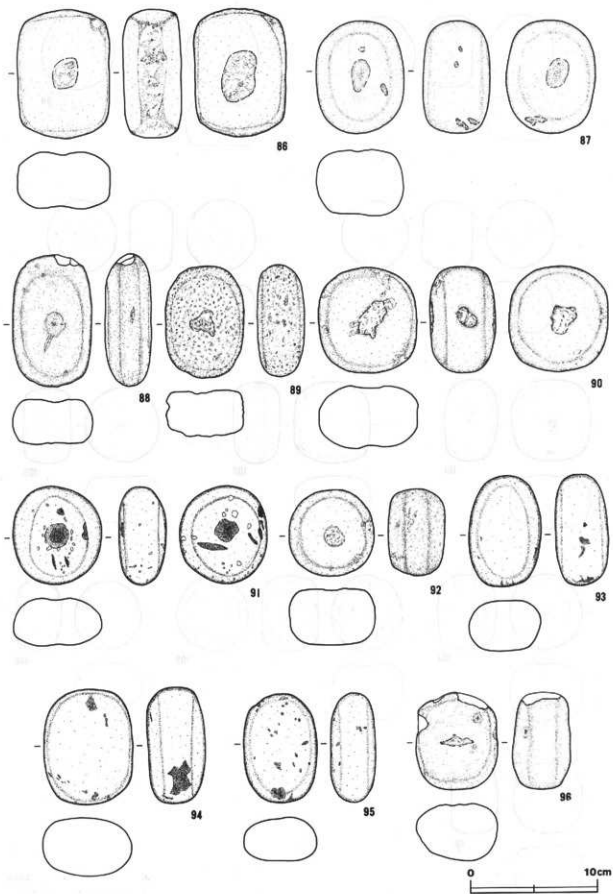
85



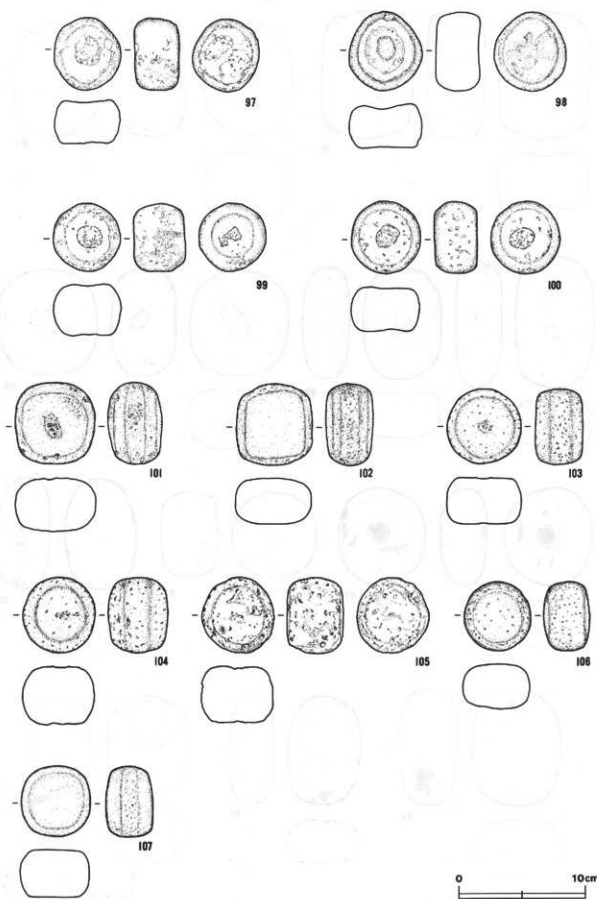
84



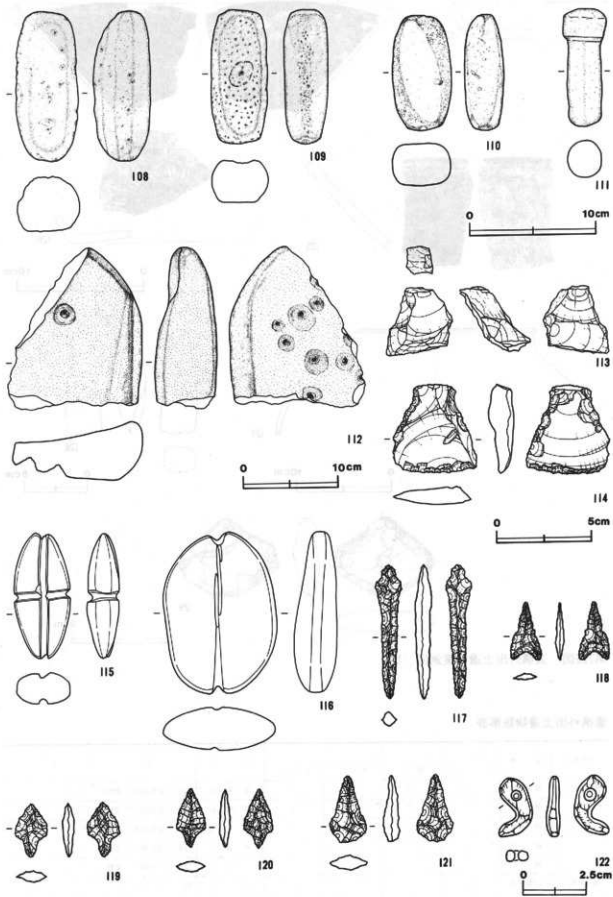
第718图 遺構外出土遺物実測図(6)



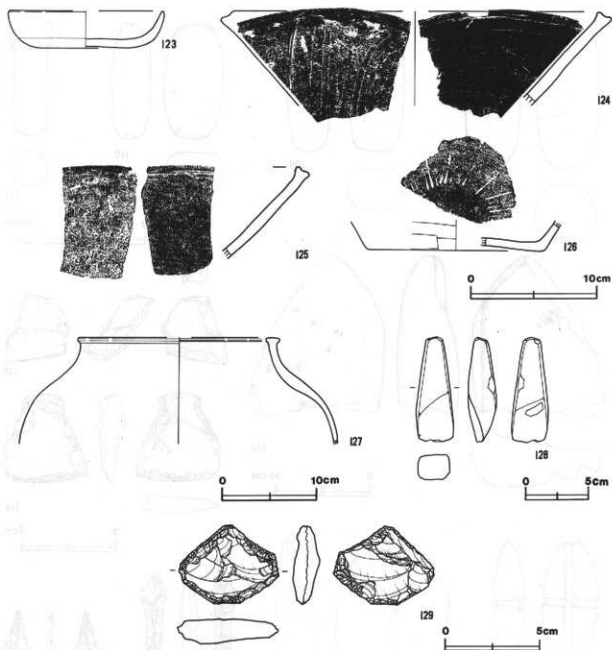
第719图 遗物出土土遺物実測図(7)



第720图 遗構外出土遺物実測図(8)



第721图 遗構外出土遺物実測図(9)



第722図 遺構外出土遺物実測図 (10)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第713図	1 瓶 部	3.3	4.6	1.6	13	黒曜石	Q64 縦長側片を素材にしている。
	2 側片	5.4	3.3	0.8	18	黒曜石	Q30 縦長側片を素材にしている。
	3 側片	7.1	3.0	2.0	25	頁岩	Q111 縦長側片を素材にしている。
	4 側片	5.8	2.2	1.2	9	黒曜石	Q63 縦長側片を素材にしている。
	5 側片	4.5	2.7	1.2	9	黒曜石	Q62 縦長側片を素材にしている。
第718図	77 打製石斧	9.8	5.1	2.3	166	ホルンフェルス	Q76 P.L102
	78 打製石斧	10.5	5.2	1.9	109	ホルンフェルス	Q75 P.L102
	79 打製石斧	9.5	5.8	1.8	111	花崗岩	Q77 P.L102

図版番号	品 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第718図 80	打製石斧	10.9	6.8	3.0	270	安 山 岩	Q78 P L102
81	磨製石斧	(9.5)	4.2	1.7	(113)	緑色凝灰岩	Q42 P L103
82	磨製石斧	6.8	4.5	1.8	84	ホルンフェルス	Q79
83	磨製石斧	(6.5)	5.9	2.7	(185)	緑色凝灰岩	Q81 P L103
84	磨製石斧	6.8	4.2	2.1	71	緑色凝灰岩	Q80 P L103
85	凹 石	11.9	8.8	5.7	859	安 山 岩	Q105 P L103
第719図 86	磨 石	10.2	7.3	4.7	640	安 山 岩	Q104 凹石兼用 P L106
87	磨 石	9.1	7.0	5.4	564	安 山 岩	Q101 凹石兼用 P L105
88	磨 石	10.5	6.3	2.7	360	安 山 岩	Q103 凹石兼用 P L106
89	磨 石	8.9	6.3	3.8	311	安 山 岩	Q100 凹石兼用 P L105
90	磨 石	8.4	7.8	5.1	508	安 山 岩	Q99 凹石兼用 P L105
91	磨 石	7.8	7.0	3.8	281	安 山 岩	Q109 凹石兼用
92	磨 石	6.9	6.8	4.6	343	安 山 岩	Q94 凹石兼用 P L105
93	磨 石	8.9	5.7	4.2	345	安 山 岩	Q97 P L105
94	磨 石	9.2	7.0	4.6	549	安 山 岩	Q102 P L105
95	磨 石	8.7	5.9	3.5	279	安 山 岩	Q96 P L106
96	磨 石	7.7	6.6	4.6	330	安 山 岩	Q98 P L105
第720図 97	磨 石	5.7	5.3	3.6	166	安 山 岩	Q85 凹石兼用
98	磨 石	6.2	5.8	3.5	206	安 山 岩	Q92 凹石兼用 P L104
99	磨 石	5.4	5.4	4.2	186	安 山 岩	Q86 凹石兼用 P L104
100	磨 石	5.7	5.5	3.5	176	安 山 岩	Q84 凹石兼用 P L104
101	磨 石	6.5	6.4	4.5	284	安 山 岩	Q95 凹石兼用 P L105
102	磨 石	6.5	6.1	3.8	258	安 山 岩	Q93 P L104
103	磨 石	6.0	5.9	3.9	234	安 山 岩	Q89 P L104
104	磨 石	5.0	5.7	4.8	217	安 山 岩	Q90
105	磨 石	6.0	5.7	4.4	231	安 山 岩	Q91 P L104
106	磨 石	5.5	5.3	3.6	174	安 山 岩	Q87 P L104
107	磨 石	5.6	5.5	3.8	209	安 山 岩	Q88 P L104
第721図 108	磨 石	11.9	5.0	4.5	341	安 山 岩	Q108
109	磨 石	10.7	4.5	3.5	234	安 山 岩	Q107 凹石兼用
110	磨 石	9.2	4.7	3.2	237	安 山 岩	Q106
111	石 棒	9.4	3.5	3.5	134	ホルンフェルス	Q83 P L106
112	石 皿	(17.2)	(14.1)	6.5	(1170)	安 山 岩	Q110 凹石兼用
113	石 槌	3.8	3.4	2.5	24	チャート	Q66
114	環 器	4.8	4.4	1.3	23	鉄 石 英	Q67
115	石 鏃	5.0	2.3	1.3	14	凝 灰 岩	Q8 環鏃・環鏃方向ともに刃が全周する。
116	石 鏃	6.4	4.5	1.7	68	ホルンフェルス	Q82 環鏃方向に刃が目全周する。
117	石 鏃	5.2	1.1	0.6	3	チャート	Q73 P L106
118	石 鏃	2.2	1.2	0.3	1	チャート	Q72 P L106
119	石 鏃	2.0	1.3	0.4	0.87	チャート	Q69 P L106
120	石 鏃	2.3	1.1	0.4	0.89	チャート	Q70 P L106
121	石 鏃	(2.6)	1.5	0.6	2	チャート	Q71 P L106
122	勾 玉	2.4	1.4	0.6	2.1	滑 石	Q74 P L106
第722図 128	砥 石	8.3	2.9	2.2	59	凝 灰 岩	Q60
129	火 打 石	4.1	5.3	1.3	29	頁 岩	Q61 磨縁がつぶれている。

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	形 状 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		長さ	幅	厚さ				
第717図	56 土器片円盤	6.3	5.9	1.3	(54)	90	熟赤文。	D P 59
	57 土器片円盤	3.5	3.3	0.8	12	100	R Lの単筋縄文。	D P 60
	58 土器片円盤	3.2	3.1	0.8	12	100	R Lの単筋縄文。	D P 61
	59 土器片円盤	3.2	2.8	0.8	7	100	R Lの単筋縄文。	D P 62
	60 土器片円盤	3.9	3.9	1.1	20	100	R Lの単筋縄文。	D P 63
	61 土器片円盤	4.0	3.7	1.0	15	100	R Lの単筋縄文。	D P 64
	62 土器片円盤	4.1	3.7	1.0	19	100	L Rの単筋縄文。	D P 65
	63 土器片円盤	4.7	4.7	1.2	31	100	直溝段合部縄文。	D P 66
	64 土器片円盤	6.2	5.4	7.4	48	100	R Lの単筋縄文。	D P 67
	65 土器片円盤	6.6	5.0	0.9	33	100	R Lの単筋縄文。	D P 68
	66 土器片円盤	4.7	4.5	0.8	20	100	沈積による同心円文。	D P 69
	67 土器片円盤	4.1	3.2	0.7	13	100	R Lの単筋縄文。	D P 70
	68 土器片円盤	5.2	5.2	0.8	29	100	L Rの単筋縄文。	D P 71
	69 土器片円盤	2.8	2.5	0.7	6	100	無文。	D P 72
	70 土器片円盤	4.1	3.3	0.6	11	100	無文。	D P 73
	71 土器片円盤	3.7	3.4	0.9	14	100	赤縄文。	D P 74
	72 土器片円盤	5.1	4.9	1.4	31	100	R Lの単筋縄文。	D P 75
	73 土器片円盤	3.3	3.3	1.1	11	100	R Lの単筋縄文。	D P 76
	74 土器片鉢	4.6	2.5	1.1	16	100	L Rの単筋縄文。	D P 77
	75 土製陶輪	7.4	(9.4)	1.0	(73)	20	沈積文。	D P 79
	76 土 鍋	(8.3)	7.2	2.1	(126)	5	右足跡。5本の指を作出している。沈積文。	D P 78 P L 100

第6節 ま と め

前田村遺跡G・H・I区で検出した遺構は、縄文時代の堅穴住居跡121軒、炉跡3基、集石遺構1基、土坑872基、焼土遺構4基、遺物包含層2か所、古墳時代の堅穴住居跡11軒、平安時代の堅穴住居跡6軒、土坑1基、中世の掘立柱建物跡3棟、方形堅穴状遺構11基、墳墓1基、土坑26基、地下式竈8基、井戸12基、堀2条、溝54条である。遺物は、遺構の時期以外に旧石器時代と近世のものが遺構外から出土している。ここでは、主に遺構内出土土器から時代別の変遷を検討してまとめとする。縄文土器の編年については、『日本土器事典』⁽¹⁾を参考にした。

1 旧石器時代

G区では、ナイフ形石器2点と石核1点が遺構外から出土している。ナイフ形石器は、頁岩製で、小形である。石核はガラス質黒色安山岩製で、打面は1回の剝離で作出している。I区では、掻器1点と剥片4点が遺構外から出土している。掻器と剥片3点は黒曜石製で、剥片1点は頁岩製である。いずれも縦長剥片を素材にしている。これらの石器は、遺構外からの出土であるため一括性を求めることはできないが、ナイフ形石器が小形であること、剥片等を見ると石刃技法が顕著であることから、下総編年のⅢc期⁽²⁾に相当すると考えられる。

2 縄文時代

中期から晩期にかけて断続的に営まれており、大まかな分類により14期に分けることができる。4期とした中峙式期は、阿玉台Ⅳ式期から加曾利EⅠ式期にかけて重複する時期であるが、中峙式期とした遺構を阿玉台Ⅳ式期と加曾利EⅠ式期に明確に区分できないこと、いわゆる中峙式土器が主体を占める遺構が多数あることから、中峙式期という段階を設定した。以下、各期の特徴についてふれてみたい。

1期 中期前葉 阿玉台Ⅰb式期(第723図)

土器は深鉢が主体を占める。扇状把手や山形把手を有し、断面が三角形の隆帯により文様を描出し、隆帯に沿っての1列の角押文や結節沈線文を施している。胴部には輪積痕を装状に残している。本期の遺構は、第350・365号住居跡である。遺構数は少なく、G区の南部に点在しているのみである。第365号住居跡からは、深鉢の土偶把手と土偶の胴部片が出土している。

2期 中期前葉 阿玉台Ⅲ式期(第723図)

土器は、深鉢と浅鉢である。阿玉台Ⅲ式土器は、主文様は隆帯により描出し、隆帯に沿って爪形文を施している。本期の主な遺構は、第345・500号住居跡で、少数である。

3期 中期前葉 阿玉台Ⅳ式期(第724図)

阿玉台Ⅳ式土器は波状口縁が発達し、深鉢・浅鉢ともに波状口縁の割合が多い。主文様は隆帯により描出し、隆帯に沿って沈線文や半截竹管による平行沈線文を施している。口縁部文様帯を区画する隆帯の断面形は、下方が突出する形態である。器面全体に縄文を施すことも阿玉台Ⅳ式土器の特徴である。本期の主な遺構は、第356・367・386・400号住居跡で、G区では弧状に巡ることから、環状集落の萌芽が認められる。

4期 中期中葉 中峙式期(第724図)

本期は、前述したように阿玉台Ⅳ式期から加曾利EⅠ式期にかけて重複する時期である。土器は、深鉢と浅鉢である。中峙式土器については、大村裕氏をはじめとする下総考古学研究会⁽³⁾が、中峙遺跡0地点出土土

器を標識とした〈中幹式〉系統を設定し、それに併行する各系統を示す見解を発表している。ここで使用する中幹式土器は、一時期を画する段階を示すために組成全体の呼称として用いている。本遺跡で出土した中幹式土器を大枠でみてみると、縄文を有する隆帯により文様を描出する阿玉台系土器、キザミを有する隆帯により文様を描出する勝坂系土器、縄文を地文として沈線により曲線的な文様を描出する大木系土器、沈線を有する隆帯や微隆帯により文様を描出する加曾利E系土器の4系統に分類することができる。大木系土器には、隆帯による横S字状文を有するものも含まれる。本期は、明確に細分することはできないが、阿玉台Ⅱ式期に併行すると考えられる古段階、加曾利EⅠ式期に併行すると考えられる新段階に細分することが可能である。古段階には、阿玉台系土器・勝坂系土器・大木系土器があり、新段階には、勝坂系土器・加曾利E系土器があると考えられる。大村氏が提示した各系統との対応や中幹式土器の細分は、今後の課題としたい。本期を代表する遺構は、第358・392・393・446号住居跡、第2147・2153・2945号土坑である。遺構数は増加し、G区では住居跡が環状に巡ることから、環状集落が形成されていたものと考えられる。

5期 中期後葉 加曾利EⅠ式期(第725図)

土器は、深鉢と浅鉢である。本期は古段階と新段階に細分することが可能である。古段階には、中幹式期で成立した眼鏡状把手が存続し、4単位あるいは3単位となる。口縁部は、横位の単節縄文を地文とし、沈線を有する隆帯によりクランク文を施すものが多い。また、口縁部の地文として、縦位の沈線文を施すものがある。胴部は、単節縄文を縦位に施すだけのものと、単節縄文の地文上に沈線による懸垂文を施すものがある。新段階には、眼鏡状把手がなくなり、波状口縁の頂部に渦巻文を施すものが多くなる。口縁部の隆帯は2本一組のものとなり、単隆帯のものになる。隆帯の端部は渦巻状となったり、波頂部の渦巻文と結合する。頸部に無文帯を持つ土器は少ない。本期を代表する遺構は、第342・385号住居跡、第2015・2016号土坑である。G区では、ほぼ中央部を広場とし、住居跡が環状に分布する。

6期 中期後葉 加曾利EⅡ式期(第725図)

本期は、口縁部に隆帯による渦巻文が発達し、胴部に沈線により磨消懸垂文が成立する段階である。また、これに燃糸文を地文とし、沈線による連弧文を巡らした連弧文系土器が伴出する。本期を代表する遺構は、第336・363号住居跡、第2727号土坑である。G区では、南東部を広場とし、住居跡が環状に分布する。5期の加曾利EⅠ式期と比べ、集落が南東部に移動したことが分かる。

7期 中期後葉 加曾利EⅢ式期(第726図)

文様の描出技法が隆帯から沈線へと変化する段階である。口縁部は渦巻文が精円区画文となり、隆帯によるものが減少し、沈線のものが増加する。胴部は、懸垂文の上端が連結して逆U字状となるもの、懸垂文の本数が増加するもの、磨消懸垂文間が幅広くなるものが出現する。また、微隆帯により渦巻文を施すものがある。特異な例として、口縁部に沈線による波状文を巡らしたものがある。本期を代表する遺構は、第347・375号住居跡、第1908号土坑で、G区では南部に集中している。

8期 中期後葉 加曾利EⅣ式期(第726図)

口縁部に幅狭の無文帯を有し、4単位の小波状口縁を呈するものと橋状把手を有するものが増加する。文様描出技法は、微隆帯によるものと沈線によるものとに大別される。微隆帯によるものは一帯構成で、小波状口縁の波頂部を起点に文様を施している。沈線によるものは二帯構成で、渦巻状・J字状・円形状の区画文を施している。本期を代表する遺構は、第362・380号住居跡、第1982号土坑で、遺構数は減少する。

9期 後期前葉 称名寺Ⅰ式期(第727図)

沈線によりJ字状やO字状の区画文を施し、区画文内に単節縄文を充填している。口縁部に巡らした隆帯に

は瘤状の突起が付く加曾利E式土器の系統を引くものが残存する。新しい段階になると、文様が複雑に入り組んだものとなる。第418号住居跡から出土した浅鉢は、キザミを有する隆帯を垂下させている。本期の遺構は、第343・418号住居跡で、遺構数はさらに減少する。分布はG区の西部に限られる。

10期 後期前葉 堀之内I式期(第727図)

土器は深鉢・浅鉢・壺・注口土器で、器種が豊富になる。深鉢は、頸部に隆帯を巡らして無文の口縁部文様帯を形成するものと、口縁部文様帯を形成しないものがある。モチーフは、古い段階では沈線による蕨手状のもので、新しい段階になると同心半円文を起点とした放射状の黒垂文となる。第684図84は第4遺物包含層から出土した瓢形の注口土器で、地文を施さないことから西関東地方から搬入したものと考えられる。類例としては、神奈川県清川村北原No9遺跡J2号埋設土器⁽⁴⁾がある。本期を代表する遺構は、第2266・2364・2552・2622・2698号土坑で、集落の中心が西へ移動する。

11期 後期中葉 加曾利B1・2式期(第728図)

土器は深鉢・浅鉢・注口土器・香炉形土器で、精製土器と粗製土器との区別が明瞭になる。加曾利B1式期の精製土器は口縁部に横帯文を巡らし、の字文や鈎状文の区切り文を施している。粗製土器は、単節縄文を地文とし、口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らすものが多い。加曾利B1式期の遺構は、第475号住居跡で、南部に出入り口と考えられる対ピットを有している。加曾利B2式期の遺構は、第2597号土坑で、香炉形土器が出土している。

12期 後期後葉 安行1式期(第728図)

土器は深鉢・浅鉢・台付鉢で、精製土器と粗製土器とがある。精製土器の深鉢には、大波状口縁を呈するものと平口縁を呈するものがある。いずれも口縁部に帯縄文を巡らし、縦長の貼付文を有する。平口縁を呈する深鉢の胴部には、入組縦線文を施すことが特徴である。粗製土器の深鉢は、口縁部がほぼ直立するか外反するものが多い。紐縄文は、押圧文を有する隆帯のもの、沈線間にキザミを施すもの、キザミだけのものがある。本期を代表する遺構は、第2604・2684号土坑で、H区の中央部に土坑が集中している。

13期 後期後葉 安行2式期(第729図)

土器の器種は安行1式と同じであるが、1式期で出現した異形台付土器が目立つようになる。精製土器に付けられる貼付文は、キザミを有する楕円形のものやブタ鼻状のものがセットになる。粗製土器の深鉢は、口縁部が内傾し、口唇部が肥厚する。押圧文を有する隆帯により区画された口縁部文様帯には、沈線間に縄文を充填する文様が出現する。本期を代表する遺構は、第463号住居跡、第2681号土坑で、第463号住居跡を中心にI区北部に集中している。第463号住居跡は、平面形が隅丸長方形を呈する住居跡である。また、本跡からは、ほぼ完形のミミズク形土偶が出土している。

14期 晩期前葉 安行3a・b式期(第729図)

土器は深鉢・浅鉢・台付鉢・注口土器に壺・広口壺・皿が加わる。安行3a式土器の代表的な文様は三叉文と玉抱き三叉文である。安行3b式土器になると、口唇部に瘤状の貼付文、いわゆるB突起がつけられる。文様は入組縦線文・棒状区画文・区画区内に充填された細密集合沈線文がある。本期を代表する遺構は、第464A・B号住居跡、第2640号土坑で、第464A・B号住居跡を中心にI区北部に集中している。第464A号住居跡の平面形は楕円形で、第464B号住居跡の平面形は隅丸長方形である。また、第464B号住居跡からは、ほぼ完形の無文の土偶が出土している。

3 古墳時代

古墳時代の遺構は堅穴住居跡が11軒で、すべてH区西部に分布している。時期は、前期の堅穴住居跡が10軒、後期の堅穴住居跡が1軒である。

前期の土器は、台付壺・壺・壺・高坏・小形器台・小形埴で構成される。台付壺・壺・壺については、ハケ目調整のものと、ハケ目調整後ミガキが施されるものがある。高坏は、第488号住居跡から元屋敷系高坏が出土しており、J区で出土している中実柱状の高坏は出土していない。小形器台は出土量が多く、器受け部が丸みを持つものや端部が内彎しているものがある。時期は、小形丸底埴が出土していないもの、元屋敷系高坏が出土していることと、小形器台の種類と量が多いことから、古墳時代研究班編年の第Ⅲ段階⁽⁵⁾と考えられる。

後期の堅穴住居跡からは、時期を特定する遺物は出土していない。しかし、J区における後期の堅穴住居跡と主軸方向がほぼ一致することから、TK209型式併行の6世紀末から7世紀初頭と推定される。

4 平安時代

平安時代の遺構は、堅穴住居跡6軒、土坑1基である。時期は、前期の堅穴住居跡が6軒、後期の土坑が1基である。

前期の堅穴住居跡は、I区の傾斜地に分布し、9世紀前葉の時期と9世紀末葉から10世紀前葉の時期に細分できる。第461号住居跡から出土した須器器臺は、赤井編年のX3段階⁽⁶⁾に比定され、現段階では窯跡が特定されていない時期の資料である。

後期の第1983号土坑からは、和鏡と短刀が共伴して出土している。和鏡は青銅鏡で、函柄から水草飛鳥鏡⁽⁷⁾と名付けられる。時期は、鏡式から11世紀末葉から12世紀初頭と考えられる。和鏡が土坑から出土した例は、茨城県南部と千葉県北部に集中している。茨城県では、取手市下高井向原I遺跡の第18号土坑⁽⁸⁾、つくば市熊の山遺跡の第7・45号土坑⁽⁹⁾、つくば市神田遺跡第453号土坑⁽¹⁰⁾等がある。千葉県では、八千代市井戸向遺跡P051号遺構⁽¹¹⁾、東金市久我台遺跡第263号土坑⁽¹²⁾、佐原市吉原山王遺跡第501号土坑⁽¹³⁾、袖ヶ浦町分脇遺跡第1・2号土坑⁽¹⁴⁾等がある。特に、吉原山王遺跡第501号土坑からは、和鏡とともに短刀・和鉄・毛抜き・合子・碗が出土している。これらの例をみても、出土した和鏡等の遺物は副葬品であり、土坑の周辺には同時期の遺構がないことから単独で造られたものであることがうかがえる。

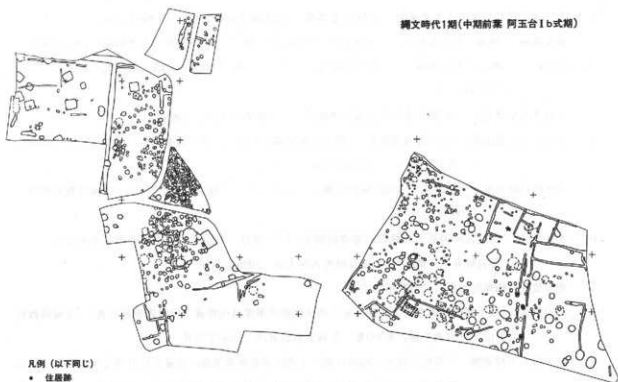
5 中世

中世の遺構は、掘立柱建物跡3棟、方形堅穴状遺構1基、墳墓1基、土坑26基、地下式竈8基、井戸12基、堀2条、溝54条である。H区南部の地下式竈2基と方形の堅穴状遺構等が集中する遺構群は、第3号遺構群という名称を与えた。このうち溝については、出土遺物から近世である可能性が高い。溝以外の遺構からの出土遺物を見ると、第3号掘立柱建物跡・第11号方形堅穴状遺構・第1号堀から小皿が出土している。特に、第1号堀からは、底部の切り離しが回転糸切りの小皿と丸底の小皿とともに4型式⁽¹⁵⁾と考えられる常滑産の甕の口縁部片が出土している。時期は13世紀前葉と考えられ、堀の存在から館が存在していた可能性がある。第3号遺構群については、出土遺物はないが、地下式竈の類例から15世紀と考えられる。

註

- (1) 大川清・鈴木公雄・工業普通編『日本土器事典』雄山閣出版株式会社 1996年12月
- (2) 橋本勝雄『茨城の旧石器時代』『茨城県考古学協会誌 第7号』茨城県考古学協会 1995年8月
- (3) 大村裕『中幹式土器の再検討』『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会1998年2月
下総考古学研究会『〈特集〉中幹式土器の再検討』『下総考古学15』1998年5月
- (4) 市川正史・恩田勇『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告21 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994年3月
- (5) 古墳時代研究班『茨城の「S」字状口縁台付甕について(3)』『研究ノート7号』茨城県教育財団 1998年6月
- (6) 赤井博之『古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究(1)―奈良・平安時代の須恵器編年を中心に―』『婆良岐考古 第20号』婆良岐考古同人会 1998年5月
- (7) 青木豊氏(國學院大學)の御教示による
- (8) 中山忠久『取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第107集 茨城県教育財団 1996年3月
- (9) 新井聡・川村満博『(仮称) 烏名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第120集 茨城県教育財団 1997年3月
- (10) 長岡正雄『(仮称) 葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第134集 茨城県教育財団 1998年3月
- (11) 藤岡孝司『八千代市井戸向遺跡』千葉県文化財センター 1987年3月
- (12) 萩原恭一・小林信一『東金市久我台遺跡』千葉県文化財センター 1988年3月
- (13) 栗田則久『佐原市吉原山王遺跡』千葉県文化財センター調査報告第178集 千葉県文化財センター 1990年3月
- (14) 青木豊・山本哲也『千葉県袖ヶ浦町文臨遺跡出土の和鏡について』『國學院大學考古学資料館紀要 第7輯』1990年
- (15) 赤羽一郎・中野晴久『生産地における編年について』『全国シンポジウム「中世常清焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994年

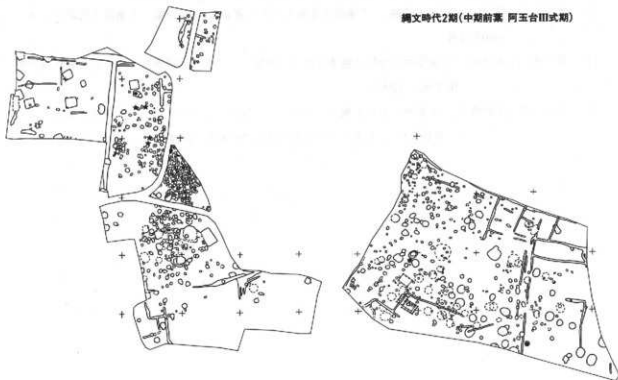
縄文時代1期(中期前葉 阿玉台1b式期)



凡例 (以下同じ)

- 住居跡
- ★ 土坑

縄文時代2期(中期前葉 阿玉台II式期)



第723図 縄文時代遺構変遷図(1)



縄文時代3期(中期前葉 阿玉台IV式期)



縄文時代4期(中期中葉 中時式期)



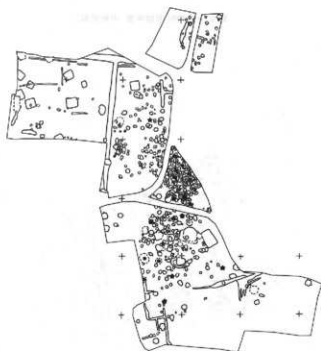
第724図 縄文時代遺構変遷図(2)



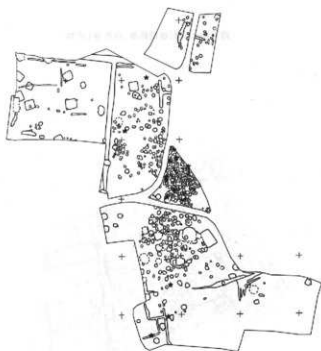
繩文時代5期(中期後葉 加曾利E I式期)



繩文時代6期(中期後葉 加曾利E II式期)



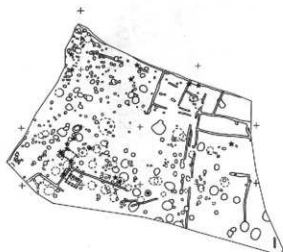
第725図 縄文時代遺構変遷図(3)



縄文時代7期(中期後葉 加普利EIII式期)



縄文時代8期(中期後葉 加普利EIV式期)



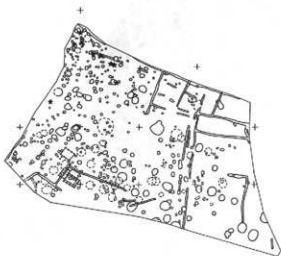
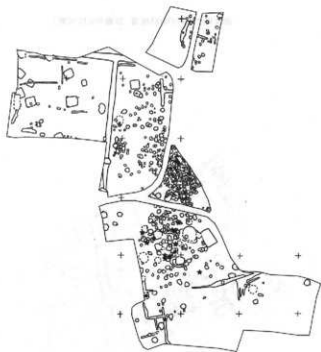
第726図 縄文時代遺構変遷図(4)



縄文時代9期(後期の葉 称名寺1式期)



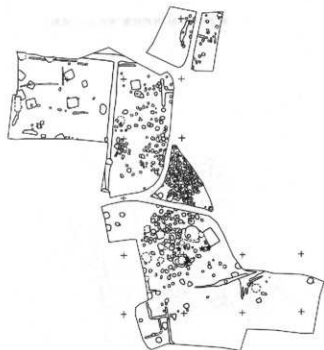
縄文時代10期(後期後葉 堀之内1式期)



第727図 縄文時代遺構変遷図(5)



縄文時代11期(後期中葉 加登利B1・2式期)



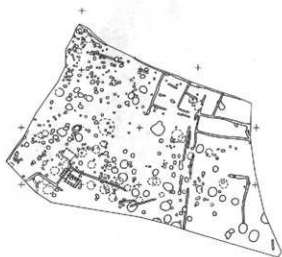
縄文時代12期(後期後葉 安行1式期)



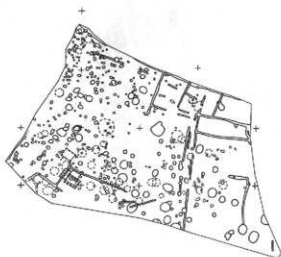
第728図 縄文時代遺構変遷図(6)



縄文時代13期(後期後葉 安行2式期)



縄文時代14期(晩期前葉 安行3a・b式期)



第729図 縄文時代遺構変遷図(7)

付 章

前田村遺跡D・G・H・I区出土の人骨と動物遺体

国立歴史民俗博物館 西本豊弘・姉崎智子

前田村遺跡G・H・I区の発掘調査で出土した人骨と動物遺体の内容と、前田村遺跡D区の補足調査で出土した動物遺体の内容を、出土遺構ごとに報告する(表1~4)。大部分は縄文時代の魚類・哺乳類であったが、中世のウマの遺体も含まれていた。その内容を簡単に説明する。なお、分類は西本と姉崎が行い、本文は西本がまとめた。

1 人骨

H区の第2463号土坑からは、縄文時代中期後葉の膝立屈葬の人骨1体が検出されている。

頭蓋骨は比較的保存がよかったが、四肢骨はもろくなっていた。それでも、左側の上腕骨・尺骨・橈骨と左右の大腿骨と脛骨・腓骨が残っていた。頭蓋骨は顔面部分で土圧でゆがみ、一部分が欠損していた。後頭部は左右に強く膨らんでいた。冠状縫合は癒着しており、矢状縫合も癒着しているようである。歯牙は上下顎とも1本も見られなかった。老年性および歯周症により、大部分の歯が抜け落ちてしまったのであろう。歯槽部分も大部分が埋まっていた。歯槽状態から見て歯が残っていたのは、下顎の左右の第2小臼歯・第1大臼歯だけであったと推測される。これらの縫合や歯の状態からこの個体はかなりの老年であったと思われる。

性別については、左側の寛骨の大坐骨切痕が残っていたが、一部分が欠損しており、確実には判別できなかった。乳様突起は少し小さいが、男性でないとはいえるほど小さくはない。しかし、眼窩上隆起は欠けていたが、前頭骨の形状から見て女性であろう。女性であっても、また歯が少なくても下顎部の枝部は外に張り出ししており、顎の筋肉をよく使う逞しい女性であったと思われる。

2 貝類

D区の第291号土坑と第761号土坑でオオクニシとヤマトシジミが採集されていた。この2種は縄文時代のこの村で、食料のひとつとして多量に利用されていたと推測される。

3 魚類

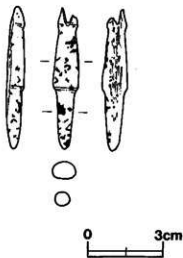
D区の第291号土坑では、覆土が採集されて水洗選別が行われていた。そのため、長さ1mm程度の小さな魚類椎骨まで採集されていた。その小さな椎骨の大部分はコイまたはフナであった。コイやフナは大きな椎骨主鰓蓋骨・咽頭骨も含まれており、コイやフナが盛んに獲られていたと推測される。また、ウナギの椎骨も多かった。ボラと思われる小さな椎骨やスズキの下顎骨のひとつである関節骨も見られた。なお焼骨がかなり多く、小さな椎骨がかなり多いので、種の同定が困難な骨が多かった。そのため、椎骨の数量は数えていない。その他の遺構では、H区の第2364号土坑からクロゲイの歯骨が1点採集されている。これらの魚類の内容から、河口域での漁労活動を行っていたと推測される。

4 哺乳類

シカ・イノシシ・ノウサギ・キツネ・カワウソ・ウマが見られた。縄文時代のものはシカ・イノシシ・ノウサギ・キツネであり、ウマは中世のものであろう。縄文時代の哺乳類でもっとも多いのはシカとイノシシであり、頭蓋骨や下顎骨をはじめ、全身の骨が出土している。ノウサギとキツネは出土量は少ないが、実際にはかなり盛んに捕獲されていたのであろう。

5 骨角器

この資料（第1図）はD区の第291号土坑から出土している。先端と尾部が少し欠けているが、ほぼ完存品である。現存長55.3mmで、鹿角製である。この加工品は、矢の先端の部品であり、石鏃を先端に扶むので「根ばさみ」と言われている。銚の先端に用いられる中柄と同じ役割である。おそらく、矢の先端部分を重くするために用いられるのであろう。かつてのアイヌ文化で用いられた矢でも中柄が伴っていた。縄文時代の根ばさみは、後期から晩期にかけて、東北地方と中部地方で多く出土している。関東地方はそれらの地域と比べて少ない。この遺跡でも1点だけであった。



第1図 第291号土坑出土遺物実測図

表1 前田村D区出土の動物遺体

遺体名	種名	部位	時期
SI-99	陸獣	骨片7	縄文時代後期前葉
SK-291	オオタニシ	多数	縄文時代中期前葉
	フナ	眶頭歯、主髁蓋骨左	
	コイ	眶頭歯	
	コイ科	椎骨多数	
	ウナギ	椎骨多数	
	ボラ	椎骨	
	スズキ	腕節骨左	
	ヤマトシジミ	少量	
	シカ	基節骨	
	イノシシ	切歯	
SK-761	製品	鹿角製ネバサミ	縄文時代中期後葉
	コイ科	椎骨少量	
	ウナギ	椎骨少量	
	オオタニシ	少量	
	ヤマトシジミ	多数	
	陸獣	骨片	
	イノシシ	上第3後臼歯右(成)	
	シカ	角破片	
	陸獣	骨片2	
表土	陸獣	焼骨片	
表土	シカ	中足骨焼骨破片	
表土	シカ	焼角破片	

表2 前田村G区出土の動物遺体

遺体名	種名	部位	時期
SK-1982	シカ	寛骨左(成)2	縄文時代中期後葉
	陸獣	寛骨右 骨片 焼骨片51 椎骨破片	
	陸獣	骨片5	
SE-22	陸獣	骨片3	中世

表3 前田村H区出土の動物遺体

遺体名	種名	部位	時期
SI-419	陸獣	下顎骨破片	縄文時代中期中葉
SI-421	イノシシ	上第2後臼歯(若) 最大長:23.0, 前幅:15.1, 後幅:14.8(mm) 角破片(加工痕有り?)	縄文時代中期後葉
	シカ	頸骨破片	
	シカ	指骨焼骨(成)2	
SI-428	陸獣	下顎骨破片	縄文時代中期後葉
	シカ	指骨上(成)	
SI-429	シカ	脛骨下右(成)	縄文時代中期後葉
	陸獣	歯破片 骨片29 下顎骨破片 椎骨破片	
	種不明	焼骨片	
SI-432	イノシシ	下第2後臼歯右(若)	縄文時代中期後葉

遺 構 名	種 名	部 位	時 期
SI-436	陸獣	最大長：23.0, 前幅：15.1, 後幅：14.8 (mm) 椎骨焼骨破片	縄文時代中期後葉 縄文時代晚期前葉
SI-464	陸獣 イノシシ	焼骨片 臼歯破片	
SI-495	陸獣 ウマ	焼骨片 上第2前臼歯左 上第3前臼歯左 上第4前臼歯左 上第2前臼歯右 上第3前臼歯右 上第4前臼歯右 下第2前臼歯左 下第2前臼歯右	古墳時代前期
SK-2358	陸獣	焼骨片	縄文時代
SK-2359	陸獣 シカ	骨片3 指骨	縄文時代
SK-2364	陸獣	中手骨破片 椎骨破片 焼骨片 骨片4	縄文時代後期前葉
	クロダイ	肱骨左	
	ウナギ	椎骨多数	
	コイ	椎骨多数	
	イワシ類	椎骨多数	
	ウサギ	寛骨左	
	イノシシ	下顎枝破片右? 上第3後臼歯右? (成) 最大長：19.9 (mm) 歯破片3 焼骨片 骨片2	
	陸獣	焼骨片4 骨片10	
	ヒト	頭骨焼骨破片 (頭蓋右) 頭骨破片 肩甲骨左 上腕骨左破片 下腕骨破片17 大歯破片 上第2後臼歯左 (成) 前幅：18.7 (mm) 中手中足骨 指骨破片	
	種不明 イノシシ	骨片91 焼骨片 下顎骨片3 椎骨破片	
	シカ	下顎骨 (連合部右) 寛骨右	
	キツネ	肩甲骨左 椎骨破片 中手中足骨破片6 第1頸椎破片 第2頸椎破片	
	イノシシ	頭骨破片 上顎骨左 (若) (P1234M12X) M3 放出開始 M1 最大長：17.2, 前幅：15.1, 後幅：14.7 (mm) M2 最大長：21.1, 前幅：17.8, 後幅：17.3 (mm) 上腕骨左 (若)	

遺 構 名	種 名	部 位	時 期
	イノシシ雌	下顎骨左 (成) (XXXXCXXXXX) 下顎骨右 (成) (XXXXCXXXXX)	
SK-2365	シカ鹿	頭骨破片 (1個体分, 落角鹿も含む)	縄文時代後期前葉
SK-2391	シカ	中足骨焼骨破片	縄文時代
SK-2397	陸獣	骨片	縄文時代中期後葉
	イノシシ	寛骨右 (成) 中手中足骨 中足骨 (成)	
	シカ	下顎骨破片	
	陸獣	脛骨破片 骨片5 焼骨片	
	イノシシ?	頭骨上右	
SK-2401	陸獣	骨片4	縄文時代後期前葉
	シカ	距骨左	
	陸獣	骨片	
SK-2404	種不明	骨片3	縄文時代
	シカ	中足骨下左 (成)	
	イノシシ	寛骨焼骨左 (成)	
SK-2410	陸獣	骨片4	縄文時代
	シカ鹿?	寛骨右 (成)	
SK-2412	陸獣	骨片	不明
	イノシシ	下第2後臼歯 (成) 最大長: 21.9, 前幅: 15.8, 後幅15.4 (mm) 上第2後臼歯左 (成)	
SK-2415	陸獣	臼歯破片 骨片8	縄文時代中期後葉
	イノシシ	上腕骨下左 (成)	
SK-2419	種不明	焼骨片	縄文時代
	陸獣	骨片 焼骨片	
SK-2420	イノシシ?	下顎骨焼骨破片	縄文時代
SK-2435	陸獣	骨片6 焼骨片	縄文時代
SK-2446	陸獣	骨片	縄文時代後期前葉
SK-2451	イノシシ	膝蓋骨左 上第3後臼歯左 (成) 最大長: 35.3, 前幅: 20.4 (mm)	縄文時代後期前葉
	種不明	骨片17	
	シカ	中手骨右 (成)	
SK-2459	陸獣	骨片31	縄文時代
	イノシシ	下第2後臼歯右 (成) 最大長: 19.9, 前幅: 13.6, 後幅14.1 (mm)	
	ウマ	切歯焼骨破片	
SK-2460	陸獣	骨片	縄文時代
SK-2463	陸獣	焼骨片2 骨片26	縄文時代中期後葉
	イノシシ	下顎骨左 (若) (XM2X) 最大長: 13.8 (mm)	
SK-2468	シカ	角破片2 上腕骨破片右 踵骨左 (成) 指骨焼骨2	縄文時代中期後葉
	イノシシ	下顎骨右 (P2-M1) 歯槽部のみ 上大歯右 (成) 上第3後臼歯右 (成) 最大長: 37.9, 前幅: 16.9 (mm)	
SK-2491	陸獣	骨片2	不明
	イノシシ	中手中足骨焼骨片 (成)	

遺 構 名	種 名	部 位	時 期		
SK-2493	陸獣	骨片	縄文時代中期後葉		
	イノシシ	上第2後臼歯左(成)			
		上第2後臼歯左(若)			
		頰骨破片右			
	シカ	臼歯破片8 下顎骨右(成)(P4 M123)			
		脛骨下左(成)			
SK-2499	陸獣	骨片42	縄文時代中期中葉		
		焼骨片4			
	イノシシ	歯骨片5 寛骨左(成)			
	陸獣	焼骨片5			
		骨片14			
	イノシシ	上顎骨右(若)(P4 M12)			
		M2最大長:21.4, 前幅:17.0, 後幅:16.7(mm)			
		上第4前臼歯右(若)			
		最大長:13.2(mm)			
		上第1後臼歯右(若)			
SK-2503	陸獣	骨片3	縄文時代		
	イノシシ	寛骨右			
	シカ	踵骨右			
		角製製品(磨き, 摺り切り, 穿孔)			
	陸獣	骨片72			
	ヒト	焼骨片			
	SK-2507	シカ		中手骨焼骨破片4 指骨焼骨2	縄文時代中期中葉
		イノシシ		焼骨片	
		カワウソ		下顎骨右(成)(XXM2X)	
		イノシシ		寛骨破片左(成) 大腸骨上左(若) 肋骨 椎骨破片	
SK-2508	シカ	骨片9	縄文時代		
	種不明	角破片(摺り切り痕有り)7			
		骨片5			
SK-2514	陸獣	焼骨片	縄文時代後期		
SK-2515	シカ	下第3後臼歯左(成)	縄文時代中期		
	イノシシ	臼歯破片			
SK-2517	種不明	骨片2	縄文時代		
	イノシシ	上顎骨右(成)(M2X)			
SK-2519	陸獣	焼骨片	不明		
	シカ	中手骨破片左			
SK-2541	陸獣	骨片2	縄文時代中期後葉		
	種不明	焼骨片			
SK-2541	陸獣	骨片17	縄文時代		
SK-2958	シカ	中手中足骨破片			
雑踏面	イノシシ	下第4前臼歯左(成)	縄文時代		
		下第1後臼歯左(成)			
表土	シカ	最大長:16.2, 後幅:11.2(mm) 距骨左			
	ウマ	とう骨上右(成)			
	陸獣	歯破片 骨片13			

遺構名	種名	部位	時期
第1号堀	イノシシ	下第1後臼歯左(若) 最大長:18.5, 前幅:10.5, 後幅:11.2 (mm)	中世
	イノシシ	下第2後臼歯右(若) 前幅:15.1 (mm) 下第2後臼歯右 下第3後臼歯左	
第2号堀	ウマ	下顎骨(連合部) 下第1切歯左(成) 下第2切歯左(成) 下第3切歯左(成) 下第1切歯右(成) 下第2切歯右(成) 下第3切歯右(成) 上第2後臼歯? 下第2後臼歯? 中手骨破片	中世

表4 前田村I区出土の動物遺体

遺構名	種名	部位	時期
SI-441	鹿獣	焼骨片	縄文時代中期後葉
SI-447	イノシシ	踵骨右	縄文時代中期後葉
	鹿獣	骨片2	
SK-2529	鹿獣	骨片	縄文時代
	ヒト	焼骨片	
SK-2533	ヒト	尺骨破片5	縄文時代中期後葉
	鹿獣	焼骨片8	
	イノシシ	切歯破片 下第2後臼歯右(若) 最大長:22.5, 前幅:14.3, 後幅:15.0 (mm)	
SK-2547	鹿獣	焼骨片	不明
SK-2551	鹿獣	骨片	縄文時代
SK-2569	イノシシ	臼歯破片8	縄文時代中期後葉
SK-2592	鹿獣	骨片8 下顎骨破片	縄文時代中期後葉
SK-2598	シカ	下顎骨右(成)(P234M123)	縄文時代
	イノシシ	臼歯破片	
SK-2604	鹿獣	焼骨片2	縄文時代後期前葉
	シカ	焼角破片2	
SK-2607	鹿獣	焼骨片2	縄文時代後期前葉
	鹿獣	焼骨片	
SK-2609	鹿獣	焼骨片	縄文時代後期前葉
	イノシシ	下第3後臼歯右(若) 前幅:17.8 (mm)	
	イノシシ	下第3後臼歯右(若)	
SK-2618	イノシシ	下第3切歯左(成)	縄文時代
	イノシシ雄	下犬歯破片右(成)	
SK-2676	イノシシ	臼歯破片	中・近世
	シカ	寛骨破片	
	シカ	指骨2(成)	
SD-123	鹿獣	肋骨破片3	不明
	鹿獣	焼骨片	
	シカ	角破片6	

前田村遺跡出土縄文土器の胎土分析

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表と第12・13図前田村遺跡胎土分析土器実測図に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-80 20X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40 kV, Current: 30 mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15 kV, 分析法: スプリント法, 分析倍率: 200倍, 分析有効時間: 100秒, 分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示しており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite), クリスタバライト (Cristobalite) 等の組成上の割合とによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont), 雲母類 (Mica), 角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mont} / (\text{Mont} + \text{Mica} + \text{Hb}) * 100$ でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb変形ダイアグラム

第2図に示すように変形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont), 雲母類 (Mica), 角閃石 (Hb), 緑泥石 (Ch) の内, a) 3成分以上含まれない, b) Mont, Chの2成分が含まれない, c) Mica, Hbの2成分が含まれない, の3例がある。

変形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/ Mont+Ch *100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

変形ダイアグラム内にある1~7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示す通りである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

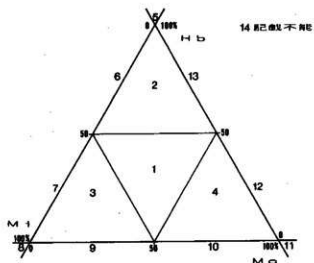
- 焼成ランクI: ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- 焼成ランクII: ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクIII: ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- 焼成ランクIV: ガラスのみが生成し、原土(窯地土)の組織をかなり残して。ガラスは微小な葉状を呈する。
- 焼成ランクV: 原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI~Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

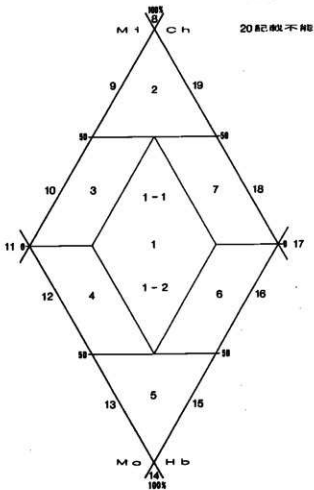
3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃図、Fe₂O₃-MgO図、K₂O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

第1図 三角ダイヤグラム
位置分類図



第2図 菱形ダイヤグラム
位置分類図



3 X線回折試験結果

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には前田村遺跡の縄文土器を記載してある。タイプ分類はこれらの土器でおこない、第3表タイプ分類一覧表を作成した。

第3表に示すように土器胎土はA～Fの6タイプに分類された。

Aタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み, Mont 1成分に欠ける。

Bタイプ：Mica, Hbの2成分を含み, Mont, Chの2成分に欠ける。

Cタイプ：Mica, Chの2成分を含み, Mont, Hbの2成分に欠ける。

Dタイプ：Mica 1成分を含み, Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Eタイプ：Mont, Hbの2成分を含み, Mica, Chの2成分に欠ける。

Fタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

主に, $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ (アロフェン質ゲル) で構成される。

最も多いタイプはDタイプで, 19個の土器のうち7個が該当する。次いで, Cタイプの4個, Fタイプの3個, AとBタイプの各2個, Eタイプの1個となる。中韓式土器はEタイプを除くA～D, Fの5タイプが検出され, 土器胎土の統一性に欠ける。同様の傾向は加曾利E I式土器でも認められ, 形式による胎土の統一性がない。阿玉台式土器はCとDタイプに集中する傾向があり, 胎土の統一性が覆われる。中韓式土器のうち大木系の土器はEタイプと異質なタイプである。

3-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質, 土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で, ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作ると言うことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり, 言い換えれば, 各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図Qt-P I図に示すようにI～Ⅳの4グループと“その他”に分類された。

Iグループ：斜長石(Pl)の強度が高い領域にあり, 阿玉台式土器で構成される。

Ⅱグループ：中韓式土器が集中する。前田村-2は阿玉台式の土器である。

Ⅲグループ：中韓式土器と加曾利E I式土器, 阿玉台式土器が集中し, 共存する。

Ⅳグループ：勝坂式土器と加曾利E I式土器が共存する。

“その他”：勝坂Ⅱ式土器で, 明らかにどのグループにも属さず, 異質である。

以上の結果から明らかのように中韓式は2種類あり明瞭に分類される。阿玉台式土器も2種類あり, 中韓式土器と同様に明瞭に分類される。加曾利E I式土器はⅢグループに集中する傾向がある。

4 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように, 前田村遺跡の土器を化学分析した。

分析結果に基づいて第6図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図, 第7図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図, 第8図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図を作成した。

4-1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について

第6図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図に示すようにの SiO_2 値の低い領域のIグループとの SiO_2 値の高い領域のⅡグル

ープとに分れる。Ⅰグループには中峠式土器のうち石英 (Qt) の強度が低い土器が集中し、阿玉台式土器もこのグループに集中する。Ⅱグループには中峠式土器と加曾利 E I 式土器が集中し、Qt-PI の相関とよく似た分類となっている。

4-2 Fe₂O₃-MgO の相関について

第7図 Fe₂O₃-MgO 図に示すように、MgO の値が 0 という土器が 5, 12 の 2 個以外の 17 個が該当する。Fe₂O₃ の値は 3~7% の領域には SiO₂-Al₂O₃ の相関のⅡグループ、7~12% の領域にⅠグループの土器が分布する傾向が認められる。前田村-5 と 12 は MgO が検出されており、異質である。

4-3 K₂O-CaO の相関について

第8図 K₂O-CaO 図に示すように、前田村遺跡の土器はⅠ~Ⅱの 2 グループと“その他”に分類される。Ⅰグループは CaO 値が高い領域にあり、勝坂Ⅱ式と阿玉台式土器が集中し、中峠式土器が混在する。Ⅱグループは CaO 値が低い領域にあり、中峠式土器と加曾利 E I 式土器が集中する。前田村-7 はいくぶん CaO の値が高いがⅠグループに近いのではなからうか。前田村-17 は K₂O の値が高く、異質である。

5 阿玉台式土器に含まれる黒雲母の分析

阿玉台式土器に含まれる黒雲母の分析を行った。

分析結果に基づいて第9図 SiO₂-Al₂O₃ 図 (黒雲母)、第10図 Fe₂O₃-MgO 図 (黒雲母)、第11図 K₂O-CaO 図 (黒雲母) を作成した。図に示すように花崗岩中の黒雲母と黒色片岩 (黒雲母片岩) の黒雲母と比較対比した。

5-1 SiO₂-Al₂O₃ の相関について

付第1図に示すように前田村遺跡の阿玉台式土器は Al₂O₃ が 25~40% と高い領域にあり、結晶片岩の黒雲母の領域と重複する。前田村-13 は白雲母で黒雲母とは異なり、異質である。

5-2 Fe₂O₃-MgO の相関について

花崗岩中の黒雲母は Fe₂O₃ が 20% 以上と高い領域にあるが、前田村の阿玉台式土器は Fe₂O₃ が 20% 以下の結晶片岩と同じ低い領域にある。

5-3 K₂O-CaO の相関について

K₂O が 2~10% の結晶片岩の領域に前田村遺跡の阿玉台式土器は共存する。

前田村-13 は花崗岩の黒雲母の領域にあり、異質である。

以上の結果から明らかなように、前田村の阿玉台式土器は前田村-3, 5, 12, 14 と前田村-13 と 15 の 2 タイプに分類される。前田村-13 は白雲母で組成が異なり、全体として 3 種類に分類されるように見受けられる。

6 まとめ

- 1) 土器胎土は A~F の 6 タイプに分類され、D タイプは 7 個、C タイプが 4 個、F タイプは 3 個、A と B タイプは各 2 個、E タイプは 1 個となる。
- 2) X 線回折試験に基づく Qt-PI 相関では前田村遺跡の中峠式土器は 5, 6, 7 と 1, 3, 4, 8, 9 の 2 タイプがある。加曾利 E I 式土器は 16, 17, 18 と 19 の 2 タイプに分かれる。阿玉台式土器は 12, 15 と 13, 14 の 2 タイプに分かれる。

- 3) 化学分析結果でも前田村遺跡の土器のうち中幹式土器は SiO_2 の値が低い領域にあって Fe_2O_3 の値が低く、 CaO の値が低い土器と SiO_2 の値が高い領域にあって Fe_2O_3 の値が高く、 CaO の値が高い土器の種類あり、Qt-P1の相関と関連する。加曾利E I式土器は前田村-18と19は同じ成分を示すが16と17はいくぶん成分が異なる。阿玉台式土器は前田村-12, 13, 15の3個は同じ成分の胎土で構成されるが14は成分が異なる。
- 4) 黒雲母の分析では結晶片岩の領域にあり、前田村-3, 5, 12, 14, 15は同じ組成の黒雲母であるが13は明らかに組成が異なる。この土器(13)は黒雲母ではなく白雲母で、異質である。

図表目次

- 第1図 三角ダイヤグラム位置分類図
 第2図 菱形ダイヤグラム位置分類図
 第3図 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム
 第4図 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム
 第5図 Qt-PI図
 第6図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図
 第7図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図
 第8図 $\text{K}_2\text{-CaO}$ 図
 第9図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図(黒雲母)
 第10図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図(黒雲母)
 第11図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図(黒雲母)
 第12図 前田村遺跡胎土分析土器実測図(1)
 第13図 前田村遺跡胎土分析土器実測図(2)
 第1表 胎土性状表
 第2表 化学分析表
 第3表 タイプ分類一覧表
 第4表 前田村遺跡胎土分析土器一覧表

第3表 タイプ分類一覧表

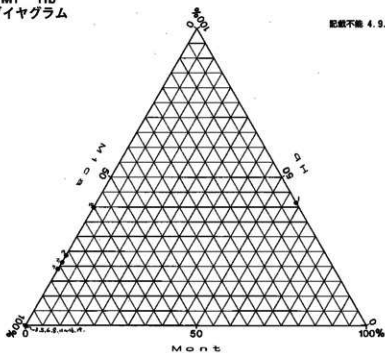
試料 №	タイプ分類	備 考	試料 №	タイプ分類	備 考
前田村-10	A	漆板Ⅱ式	前田村-16	D	加曽利EⅠ式
前田村-2	A	中峠式(阿玉台系)	前田村-19	D	加曽利EⅠ式
前田村-17	B	加曽利EⅠ式	前田村-3	D	中峠式(阿玉台系)
前田村-7	B	中峠式	前田村-6	D	中峠式
前田村-11	C	漆板Ⅲ式	前田村-8	D	中峠式
前田村-12	C	阿玉台Ⅱ式	前田村-1	E	中峠式(大木8a系)
前田村-15	C	阿玉台Ⅱ式	前田村-18	F	加曽利EⅠ式
前田村-5	C	中峠式	前田村-4	F	中峠式
前田村-13	D	阿玉台Ⅱ式	前田村-9	F	中峠式併行
前田村-14	D	阿玉台Ⅱ式			

第4表 前田村遺跡胎土分析土器一覧表

試料 №	図版番号	出土地点	試料 №	図版番号	出土地点
前田村-1	第241図	第2153号土坑	前田村-11	第224図	第2085号土坑
前田村-2	第240図	第2147号土坑	前田村-12	第49図	第356号住居跡
前田村-3	第237図	第2129号土坑	前田村-13	第211図	第2260号土坑
前田村-4	第237図	第2129号土坑	前田村-14	第467図	第2862号土坑
前田村-5	第233図	第2119号土坑	前田村-15	第467図	第2862号土坑
前田村-6	第240図	第2147号土坑	前田村-16	第171図	第1952号土坑
前田村-7	第240図	第2147号土坑	前田村-17	第190図	第2015号土坑
前田村-8	第486図	第2945号土坑	前田村-18	第192図	第2016号土坑
前田村-9	第486図	第2945号土坑	前田村-19	第203図	第2047号土坑
前田村-10	第485図	第2939号土坑			

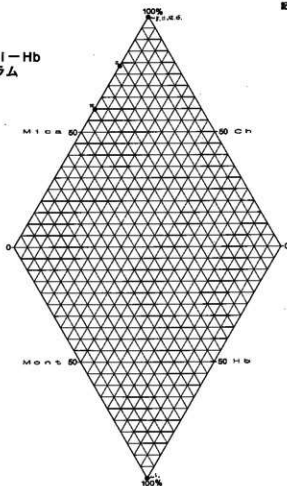
第3図 Mo-MI-Hb
三角ダイヤグラム

記載不能 4.9.18

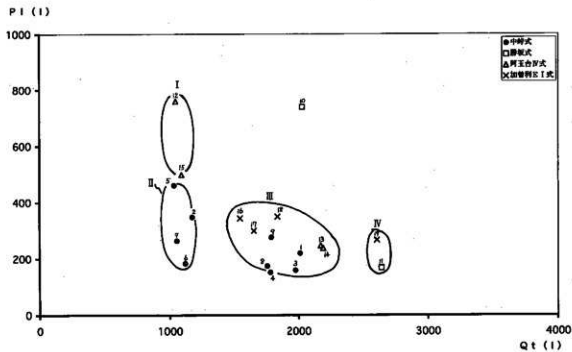


第4図 Mo-Ch, MI-Hb
菱形ダイヤグラム

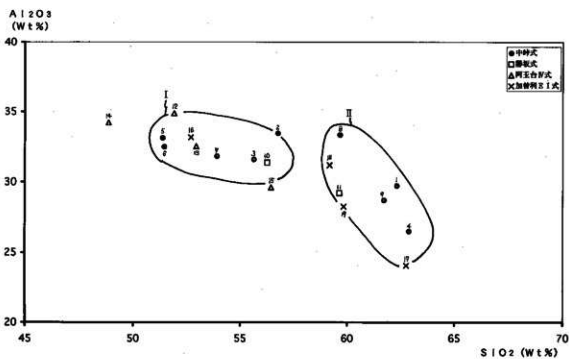
記載不能 3.4.5-9.13.14.15-19



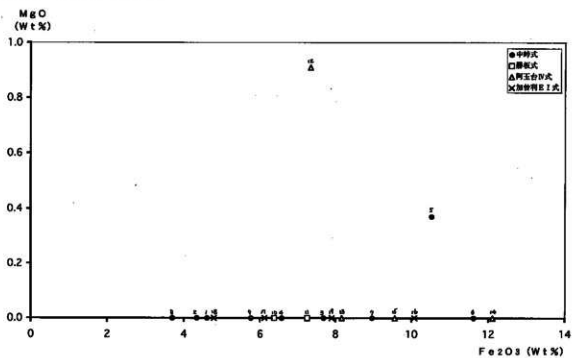
第5圖 Qt-PI圖



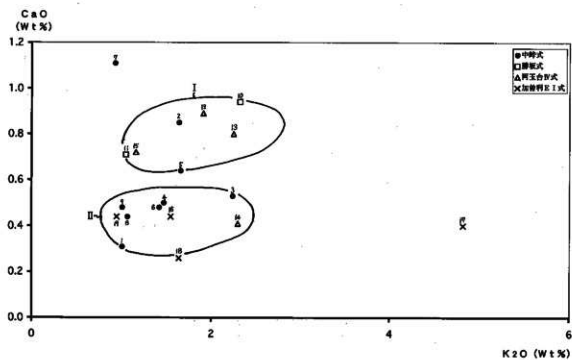
第6圖 SiO_2 - Al_2O_3 圖



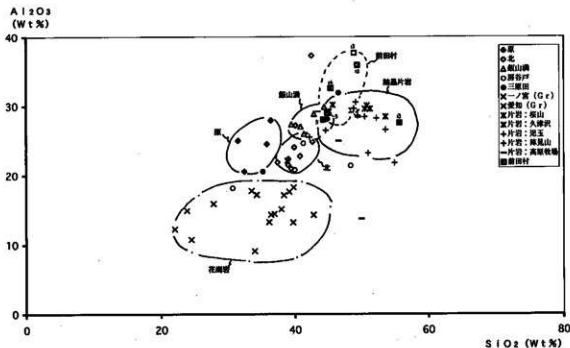
第7图 Fe₂O₃-MgO图



第8图 K₂-CaO图

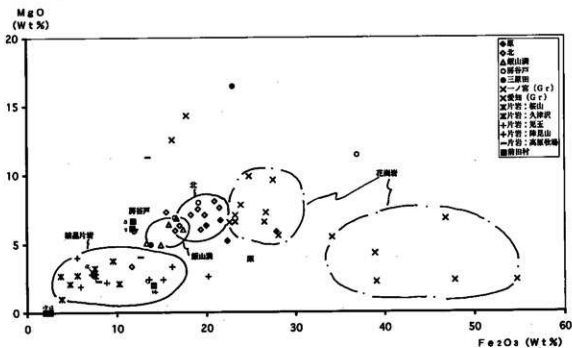


第9图 SiO₂-Al₂O₃图 (黑雲母)



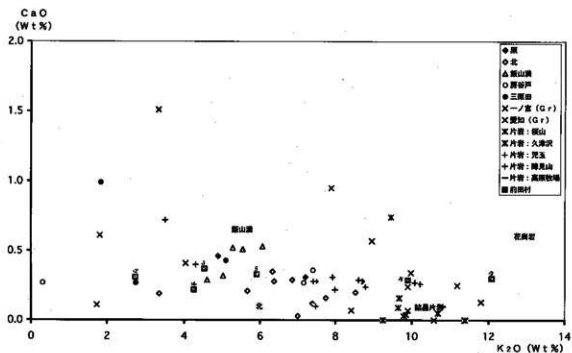
97阿玉台Bt: Si-Al圖表

第10图 Fe₂O₃-MgO图 (黑雲母)

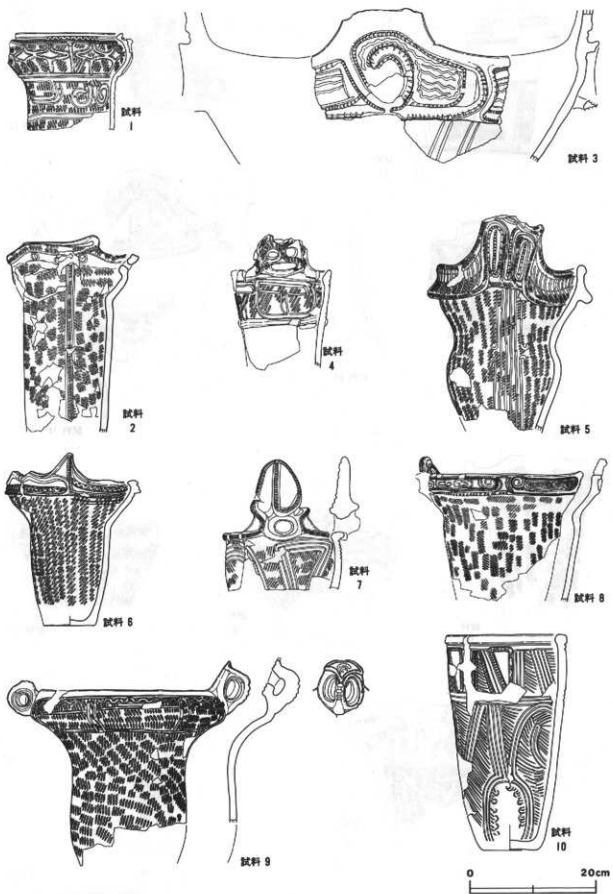


97阿玉台Bt: Fe-Mg圖表

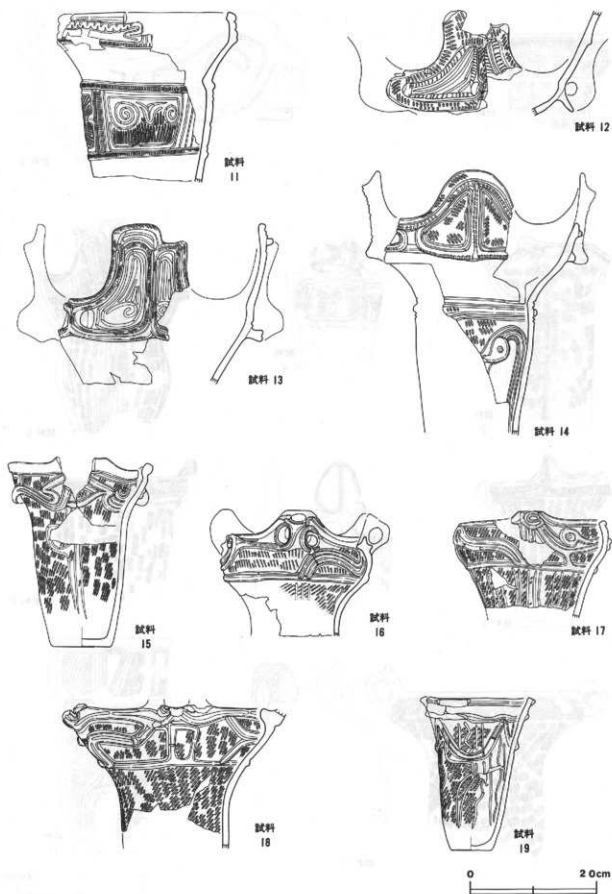
第11圖 K₂O—CaO圖 (黑雲母)



97阿玉台B t : K-Ca圖表



第12圖 前田村遺跡胎土分析土器実測圖(1)



第13圖 前田村遺跡胎土分析土器実測圖(2)

前田村遺跡から出土した和鏡の自然科学的研究

東京国立文化財研究所保存科学部 平尾 良光・早川 泰弘・榎本 淳子

1 はじめに

茨城県教育財団から前田村遺跡出土の和鏡に関して、自然科学的な方法による調査の依頼があった。本調査は当研究室における「青銅器の自然科学的調査」という研究の一環として、十分に研究協力する価値があった。そこで、鏡の化学組成を蛍光X線分析法で測定するとともに、資料中に含まれる鉛について鉛同位体比法による産地推定を行った。

なお、資料の保存処理を東京芸術大学文化財保存学の森純一氏に依頼して、通常の錆取りおよびベンゾリゾールによる強化処理を行った。

2 資料

資料は茨城県筑波郡谷和原村の前田村遺跡第1983号土坑から出土した和鏡である。試料の和鏡にはそれほど厚い錆は発生しておらず、修復作業は表面の泥取りと、剥落しやすい錆の除去に限って行った。その後、錆の進行防止処置を施した。

和鏡の製作年代は、鏡式から11世紀末から12世紀初頭と推定されている。

(1) 化学組成は次のように測定された。

修復処理前に、和鏡表面で錆が比較的少なく、通常の組成と考えられる部分を選び、直径約2cmの円形部分を波長分散型蛍光X線分析装置で測定した。

また、修復処理前に鏡面側に微小金属面を露出させて、エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置で化学組成を測定した。修復時にその部分を修復処理した。

(2) 鉛同位体比用の試料として和鏡の異なった2カ所から錆が採取された。

3 分析法

3-1 蛍光X線分析法

1) 波長分散型装置による広領域測定

資料の平均的な化学組成はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW2400で測定された。この装置のX線源はスカンジウム管球で、一次X線を60kV、50mAで発生させて資料に照射した。

資料を構成する元素はエネルギーの高い一次X線を受けると、元素毎に異なったエネルギー(あるいは波長)の二次X線を放出する。この二次X線のエネルギー(あるいは波長)を測定すれば、X線で照射された試料表面の化学組成に関する情報が得られる。この装置では二次X線の波長の違いを測定した。即ち、試料から発生した二次X線の波長は元素毎に異なった波長となるので、この波長を反射角度に変換し、10度から60度までを15分かけて走査してX線強度を測定した。

2) エネルギー分散型装置による微小領域測定

金属面を露出させた微小部分に関して、セイコーインスツルメンツ社製エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置SE A5230Eを用いて化学組成を測定した。X線源にはモリブデン管球を使用し、50kV、1mAの条件下で直径約0.2mmの円形部分に関して、一次X線を空気中で約5分間照射し、放出される二次X線のスペクト

ル強度を測定した。この装置では資料から発生する二次(蛍光) X線のエネルギーをそのままシリコン-リチウム半導体検出器で測定した。

3-2 鉛同位体比法

1) 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

使用されている材料の産地を推定するために鉛同位体比法を利用した⁽¹⁾。原理については付録2としてまとめた。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことがこれまでの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いが材料の産地を示す指標になると推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。この鉛に関して、同位体比法を用いた産地推定を行った。

鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、1 μ gの鉛があれば十分である。また、青銅の金属部分でも錆部分でも同位体比は不変であることが示されているので、資料からは錆を微量採取するだけで十分である。そこで、資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離して表面電離型質量分析計で同位体比を測定した⁽²⁾。

2) 鉛同位体比の測定

鉛同位体比を測定する際に鉛は純粋であればあるほど良い。それ故、試料に微量含まれている鉛を以下の方法で大部分の銅あるいはその他の元素から精製分離した。

微量(1mg以下)の錆を2箇所から採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。採取した試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いてDC 2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2 μ gの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト(株)製の全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200 $^{\circ}$ Cに設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

4 結果と考察

4-1 蛍光X線分析法による化学組成

波長分散型蛍光X線分析装置によって測定されたスペクトルを図1-a, -bに示す。この図から判断すると、鉛が非常に多く、スズとヒ素濃度も高い。この組成をそのまま化学組成として表すと、金属学では考えられないような化学組成となるので、%表示は控えた。これは錆の薄い場所を選んだつもりであるが、錆に鉛、スズ、ヒ素等の元素が濃縮していたためであると考えられる。化学組成を定量的に算出するには不適当であると判断されるが、鉛やヒ素が多い資料であることが、この結果から推定することができた。

一方、微小の金属部分を測定した蛍光X線スペクトルを図2-a, -bで示した。図2-bは小さなピークを検出できるように図2-aの縦軸を拡大したものである。スペクトル線の強度から、機器に付属している計算方法で、%濃度としたのが表1である。蛍光X線分析法では測定部表面から約10 μ mまでの深さの元素組成に関する情報を得ることができる。それ故、表面に錆などがあれば、その影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。今回の測定は、表面の錆をとり、金属面を露出させたつもりであるが、鉛やヒ素濃度がなお高く、まだ錆の影響が残っている可能性がある。

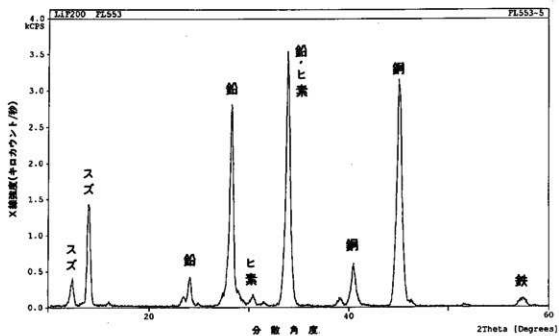


図 1-a 前田村遺跡から出土した和鏡鏡面を波長分散型蛍光 X 線分析装置で測定したスペクトル図

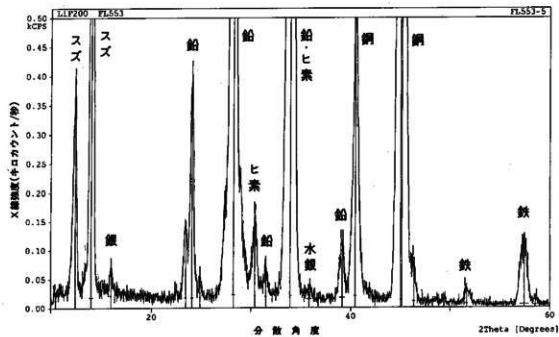


図 1-b 図 1-a のスペクトルの縦軸を拡大した図

この値から材料の化学組成についてまとめる。得られた化学組成から判断すると、スズが13%、鉛が29%、ヒ素が4.4%含まれている。ヒ素が4%以上も含まれていることは特徴的である。鉛入り青銅としても鉛量がスズよりもかなり多く、ヒ素も多いことから、合金として十分な機械的強度があるかどうか、また腐食に耐えるかどうか心配である。しかし、平安時代以来今まで残ったという事実は大切である。この化学組成からすると、健全な金属部分を測定したのではなく、まだ錆の部分が含まれていたのかもしれない。

表1 微小部蛍光X線分析法で測定された和鏡の蛍光X線強度と元素濃度

選択 X 線名	銅 (K α)	スズ (K α)	鉛 (L β)	鉄 (K α)	ヒ素 (K β)	銀 (K α)
蛍光 X 線強度 (cps)*	134 ± 1	13.2 ± 0.3	33.4 ± 0.4	3.1 ± 0.2	45.3 ± 0.4	0.1 ± 0.1
前田村和鏡 (wt %)**	51	13	29	1.5	4.4	0.0

* cps は毎秒あたりの X 線量 (カウント/秒) (counts per second)

± は放射線量のばらつき

** 放射線量から算出された元素の重量%濃度 (wt %)

表2 茨城県前田村遺跡から出土した和鏡の鉛同位体比

	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$
前田村和鏡 - 1 (K P 098)	18.327	15.677	38.791	0.8554	2.1166
和鏡 - 2 (K P 098*)	18.322	15.673	38.773	0.8554	2.1162
和鏡 (平均値)	18.325	15.675	38.782	0.8554	2.1164
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

4-2 鉛同位体比法による産地推定

測定された鉛同位体比を表2で示した。2箇所の値はほとんど一致しているため、この平均値を本資料の測定値として用いることとした。この値を今までに得られている資料の鉛同位体比の値と比較して示したのが図3-a, -bである。図3-aの縦軸は $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸は $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値であり、この関係図をA式図と呼ぶこととする⁽³⁻⁶⁾。これまでに当研究室で測定した結果を総合すると、東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として含まれ、華北産の鉛が分布する領域である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が含まれ、華南産の鉛が分布する領域である。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が分布する領域、Dは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示される。また、aは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。図3-bで示される図は縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値である。この関係図をB式図と呼ぶこととする。この図の中で、A' B' C' D' はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表している。

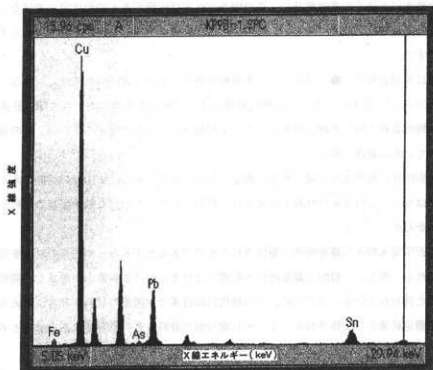


図 2-a 前田村遺跡から出土した和鏡鏡面の微小金属部分をエネルギー分散型蛍光X線分析装置で測定したスペクトル図

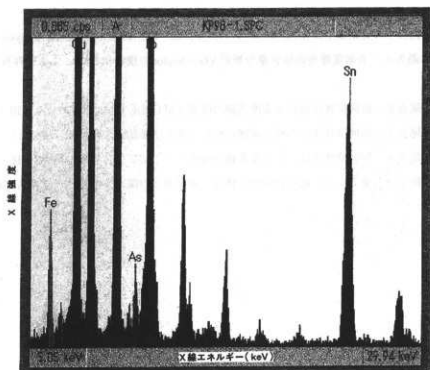


図 2-b 図 2-a のスペクトルの縦軸を拡大した図

これらの図は日本の弥生時代・古墳時代に相当する時代の青銅製品、特に青銅鏡に関して得られた。日本の平安時代から鎌倉時代にかけての青銅製品に、この図をどれだけ応用できるかは定かではない。しかしながら、今までに平安—鎌倉時代の資料に関して、このような図を作り得ていないので、とりあえずこの図を一つの試みとして利用する。

これらの図の中に本測定値を「●」で示した。本資料は図3—aのA式図でB領域に、図3—bのB式図でB'領域に含まれていることがわかった。平安時代以降になっても日本ではなお、A式図、B式図で分類される弥生時代・古墳時代資料と同じ系統の材料が主として利用されていると仮定できれば、この資料には中国産の材料が利用されている可能性が高い。

今回の資料は平安時代に製作された鏡であると推定されていることから、中国産の材料であることに矛盾はない。平安時代にはもちろん日本産の材料も生産され、利用されていたが、なお中国産の材料が経筒などに利用されていることがわかっている。

仮に、この資料が平安末期から鎌倉時代に製作されたものであるとすると、中国産の材料を用いた理由として次のよう考えられる。即ち、一般的に鎌倉時代の初期には日本における銅鉱山が激減し、同時に鉛生産量も大きく落ち込んだと言われている。このため、この時代には日本で中国産の材料が非常に増える傾向にあることが鉛同位体比の測定結果から支持されている。それ故今回の資料もその影響下にある材料と考えることができる。

化学組成から考えると、一般的な中国産の鉛入り青銅よりも鉛量が非常に多く、ヒ素量も非常に多い。この点に関しては、測定部位の錆の付着状況などを慎重に評価した上で、化学組成をさらに詳細に検討する必要がある。

引用文献

- (1) 平尾良光：古代日本の青銅器；MA・Cサイエンス，4，22—33（1990），Material Analysis Company
- (2) 平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計VG—Sectorの規格化について；保存科学28，17—24（1989）
- (3) 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM；No370，4—10（1982a）
- (4) 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌68，42—62（1982b）。
- (5) 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM；No382，16—26（1983）
- (6) 馬淵久夫，平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—；考古学雑誌73，199—210（1987）

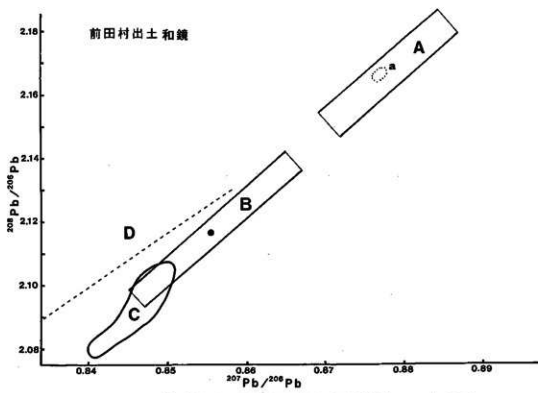


図3-a 前田村遺跡から出土した和鏡の鉛同位体比 (A式図)

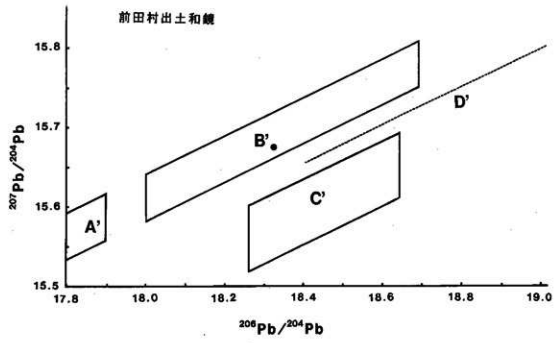


図3-b 前田村遺跡から出土した和鏡の鉛同位体比 (B式図)

鉛同位体比による産地推定の原理

1 同位体

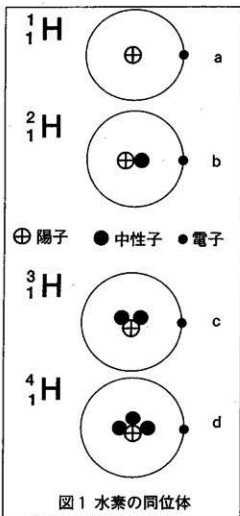
同位体という言葉を理解していただくために、原子の構造から説明します。一般的には物質を細かく細かく分解して行くと最後に原子に行き着く、と表現されています。この原子の中で最も簡単な形をしているのが水素です。この原子1個の大きさは1億分の1センチメートル程度です。水素原子は図1-aで示されますように、中心に陽子（ \oplus ）というプラスの電気を持った球が1個あります。そしてその周りに、電子（ \bullet ）というマイナスの電気を持った球が1個回っています。中心のプラスの電気と外側のマイナスの電気とで、外から見ると水素は全体としてプラスとマイナスの電気が中和するようにできています。

原子の中心核を作る物質としても一つ、中性子という名の球があります。中性子は電気の性質としてプラスでもマイナスでもないために、「中性の粒子」と言う意味でこう呼ばれます。中心の核に中性子が1個加えられると、図1-bのように陽子と中性子が重なった原子の中心核ができます。中心の核には陽子と中性子の2個がありますが、陽子の数は1個、外側を回っている電子数は1個なので、これも水素です。先の図1-aの水素と化学的には同じ性質を示します。

これら水素達の違いをはっきりさせる手段として、原子の中心核に集まっている粒子の数の違いを利用します。すなわち、図1-aで示される水素は「中心核に「1」個の粒子数を持った水素」と表現することができます。そうすると、図1-bの水素は「2

個の粒子を中心核を持った水素」です。これを質量2の水素と表現します。図1-cで示されるような中性子がもう一つ中心核に加えられると、これは3個の粒子を持った水素、即ち質量3の水素となるわけです。では図1-dで示される、3個の中性子と、1個の陽子でできた水素とは申しますと、質量4の水素となります。これらすべては互いに水素の同位体です。つまり、陽子が1個で中性子の数が異なる水素原子群を「水素の同位体」と称します。

図2-aのように、陽子2個と中性子1個で中心核を作る場合、外側を周回する電子の数は2個となります。陽子が2個ですから、プラスの電気は2個あります。この電気を打ち消すために2個のマイナスの電気を持った電子が周回するわけです。これは質量数3のヘリウムと呼ばれる原子です。ヘリウムには図2-bで示されるように質量4という「同位体」もあります。一般的にまとめると同位体とは陽子の数が同じで、中性子の数が異なる原子達のことです。水素、ヘリウムなどという元素の種類は中心に集まっている陽子の数によって決まります。陽子が1個ならば水素、2個ならばヘリウム、3個ならばリチウム……というぐあいに、陽子の数



の違いが元素の違いを意味します。

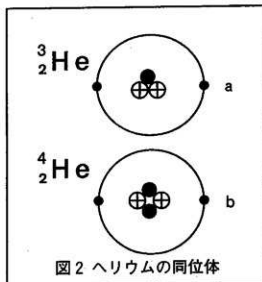
このことから鉛の同位体を類推すると図3で示されるようになります。すなわち、鉛は中心核に82個の陽子を含む元素です。鉛には約30の同位体が知られていますがほとんどは放射能を出して壊れてしまいます。その中で安定な鉛の“同位体”は中性子数が122, 124, 125, 126個の場合です。普通の鉛はこれら同位体の混合物です。この同位体同士は化学的にほとんど同じように反応、挙動しますので、ふつうの方法では一つの同位体種だけを分離することはできません。

2 鉛同位体比の変化

まず基本として、地球は45.6億年前に生まれたとされております(1・2)。この時にすべての元素の同位体組成は地球上では一定の値を持っていて、地球のどこでも同じであったと推定されております。鉛に関しては安定な4種(^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb)の同位体が存在しており、その比率は決まっていた。ほとんどの元素の同位体組成は変化せずに、そのままの値で45.6億年後の現在まで残っております。しかし、幾つかの例外的な元素はその同位体組成が変化しました。鉛はその例外的な元素の一つです。図4で示されるように、鉛の同位体である ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb はウラン(^{238}U , ^{235}U)とトリウム(^{232}Th)が放射壊変するために生成されるからです。

ここで放射壊変というのは原子が自分から原子の中を一部壊して、他の原子に変化してしまうことをいいます。即ち、陽子と中性子の数を変化させてしまうのです。例えば、ウラン-238 (^{238}U)は鉛-206 (^{206}Pb)となるために陽子数で10、中性子数で22減少します。この放射壊変は人間の力では変えられない、原子が持っている特別な性質なのです。なぜ原子が他の原子へ変換するかに対して難しい理論があります。でもここでは説明しなくてもよいでしょう。とにかく、ウラン-238 (^{238}U)は順次幾つかの原子に変換してゆき、最終的に鉛-206 (^{206}Pb)となるように運命付けられています。そしてウラン-235 (^{235}U)は鉛-207 (^{207}Pb)に、トリウム-232 (^{232}Th)は鉛-208 (^{208}Pb)となるように運命が決まっています。この変換には法則があり、現在ある量あるいは数が半分になるまでにかかる時間が各原子毎に一定です。これを半減期と呼んでいます。

ウラン・トリウムの放射壊変で生成された鉛は地球が生まれた時に既にあった鉛に付加されます。ここで仮想的な岩石を考えてみます。図5で示されるように、今から45.6億年前に地球ができた時、一片の“岩石”があり、これが現在まで残ったとします。そしてこの岩石中にウラン・トリウムと鉛が含まれていたと考えてみます。このままの状態では数億から10数億年が経ちますと、この時間のあいだにウランとトリウムは壊変し、 ^{238}U から ^{206}Pb が、 ^{235}U から ^{207}Pb が、そして ^{232}Th から ^{208}Pb が作られます。これら鉛の同位体が生成される量は岩石中のウラン・トリウムの量、そして共存していた10億年であるか40億年であるかという時間に



	^{204}Pb	^{206}Pb	^{207}Pb	^{208}Pb
陽子	82	82	82	82
中性子	122	124	125	126

図3 鉛の同位体

依存します。すなわち、この岩石の中にウラン・トリウムが多ければ多いほど鉛はたくさん作られます。また時間が経てば経つほど鉛は多く作られます。放射壊変で生成された鉛は岩石中に最初からあった鉛と化学的には同じ挙動を示します。それ故、この岩石から鉛がしぼり出されて鉛鉱山を形成するような変化のときには、最初からあった鉛とウランとトリウムから放射壊変で作られた鉛は一緒になって抽出されます。

さきほどの仮想的な“岩石”中に含まれている鉛の同位体が時間と共にどのように増加するかは ^{207}Pb を例とすると図6のように示されます。地球が45.6億年前に誕生し、そのときに存在していた ^{238}U 量を1とします。このウランが時間と共に壊れて ^{207}Pb が作られます。 ^{238}U の半減期は7.1億年ですから、地球が生まれてから7.1億年に半分、またその半分に減って行きます。この減ったウラン分が

^{207}Pb の増加分となるわけです。図で示されるように時間と共に ^{207}Pb が増えて行きます。 ^{238}U の場合は半減期45億年ですから、地球の年齢ほどの時間がかかって半分の量となります。その分だけ ^{206}Pb が増えてきます。この ^{207}Pb 、 ^{206}Pb の増え分の表し方として、 ^{204}Pb の量との比を利用します。これは ^{204}Pb が ^{206}Pb や ^{207}Pb のように ^{204}Pb を増加させる ^{238}U のような(親)原子を持たないので、時間が経っても岩石中での存在量は変わりません。それ故、他の鉛同位体が岩石の中でどれだけ増加したかの割合あるいは変化を ^{204}Pb との比で表すことができます。すなわち鉛同位体比の変化として表現することができます。時間毎に ^{207}Pb 、 ^{206}Pb の量がが増えて行きますから、この増加量をX軸、Y軸として表したのが図7です。

地球が生まれたときに既に存在していた鉛は始源鉛と呼ばれ、左下のP点という同位体比を持っていました。“岩石”の中で鉛はウランから漸次生成されるので、鉛の同位体比は時間と共に図8で示される曲線のように変化します。これを鉛の進化曲線と呼びます。図中の2本の曲線は岩石中のウランと鉛の比(正確には現在における $^{238}\text{U}/^{204}\text{Pb}$ 比)が大きい場合と小さい場合を示しています。0年等時線とは“岩石”が45.6億年の

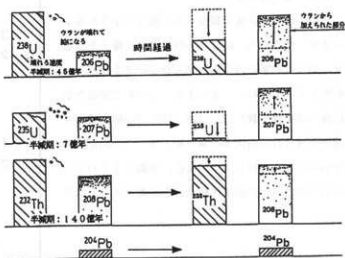
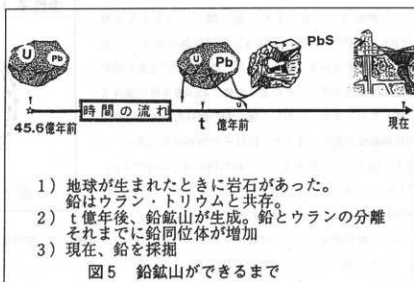


図4 ウラン・トリウムの壊変と鉛同位体比の変化の模式図



- 1) 地球が生まれたときに岩石があった。
鉛はウラン・トリウムと共存。
- 2) t億年後、鉛鉱山が生成。鉛とウランの分離
それまでに鉛同位体が増加
- 3) 現在、鉛を採掘

図5 鉛鉱山ができるまで

間、何の変化も受けない場合に示す同位体比の値でひとつの岩石で1つの値を示します。その点はウラン/鉛比の違いで直線 (m) 上に並ぶ事を示しています。

仮想的な“岩石”に、地殻変動など何らかの理由で、現在から t 年前 (例えば、13億年前) に変化が起き、岩石から鉛がしほり出されて鉛鉱山 (例えばブローケンヒルというオーストラリアの鉛鉱山) が図7で示されるように形成されたとし

ます。この過程で、鉛はウラン・トリウムから切り離されて鉛鉱山を形成するので、それ以上 ^{238}U 、 ^{235}U 、 ^{232}Th の付加はなくなり、鉛の同位体比は変化しなくなります。それ故、この値は現在までそのまま残り、現

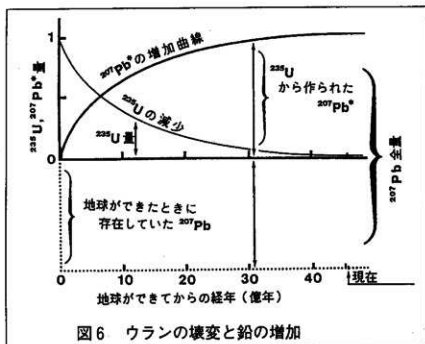


図6 ウランの壊変と鉛の増加

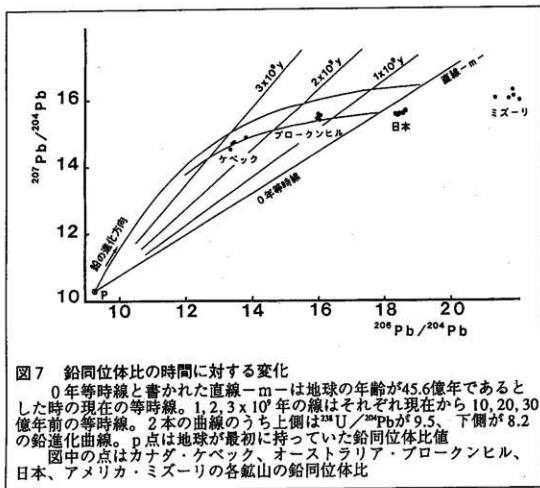


図7 鉛同位体比の時間に対する変化

0年等時線と書かれた直線-mは地球の年齢が45.6億年であるとした時の現在の等時線。1, 2, 3 $\times 10^9$ 年の線はそれぞれ現在から10, 20, 30億年前の等時線。2本の曲線のうち上側は $^{238}\text{U}/^{204}\text{Pb}$ が9.5、下側が8.2の鉛進化曲線。p点は地球が最初に持っていた鉛同位体比
 図中の点はカナダ・ケベック、オーストラリア・ブローケンヒル、日本、アメリカ・ミズーリの各鉱山の鉛同位体比

在測定できるわけです。図7ではカナダのケベック州の鉛鉱山、およびオーストラリアのプロークンヒル鉱山が日本の鉱山の示す鉛同位体比と大きく異なっているのがわかります。アメリカ、ミズーリ州の鉛鉱山も大きくかけ離れた値を示しております⁽³⁻⁶⁾。それ故、これら鉛鉱山ができるとき、3種の鉛同位体の混合割合は本質的には、

1. 共存していた [ウラン] / [鉛] と [トリウム] / [鉛] の比、
2. 鉛とウラン・トリウムが共存していた時間、

という2つの要素が決まります。これら要素の組合せは鉛鉱山毎に特別な値を持つと考えられますので、3つの鉛同位体比の組合せは鉱山に特有な値となります。地理的には近い鉛鉱山でも、地質学的な地下の岩石構造が異なれば、鉛同位体比にその違いは表れてきます。

3 産地推定

もし、銅の同位体比が鉛と同様に放射線あるいはその他の理由で変化するならば、古代銅製品の産地推定のために、銅の同位体比を利用できたでしょう。しかし、地球誕生以来、銅の同位体比を変化させる原因がなかったため、一定です。それ故、産地推定には使えないのです。でも鉛は違っておりまして、同位体比が変化します。それ故に鉛の同位体比を産地推定に利用できるのです。古代の銅製品には銅鉱石に付随した鉛が不純物として、あるいは鉛鉱山から採取した精錬鉛が意図的に加えられていることに着目しました。古代の青銅製品に含まれる鉛の同位体比は先に示した原理に従って変化してきたはずですから、鉛鉱石自身の生成過程を反映した固有の値です。即ち、古代銅製品に含まれる鉛の同位体比を測定できるならば、鉛鉱石の産地の特徴が同位体比で示されることになります。それは鉛の産地を意味します⁽⁷⁾。

ここでいくつかの疑問をしばしば受けます。古代の青銅に含まれる鉛の同位体比を分析しても銅と鉛の産地が全く別になっていれば、銅の産地とは関係ないのではないか。また混合したら、産地を示さないのではないかなどです。

まず第一に鉛同位体比法は鉛の産地を推定しているのであって、銅の産地を直接推定しているのではないということです。しかしながら、鉛はほとんどの場合、銅に微量の不純物として含まれています。鉛は銅と割合に似た性質を持っているので、鉛同位体比は銅鉱石を産出した場所あるいは経歴に特徴的な値を示すはずで、銅製品に鉛が不純物として含まれている場合、この同位体比は正に銅鉱山が持っている地質学的な情報ですから、銅の産地と言えるかも知れません。でも鉛の産地なのです。

二つ目として、銅の性質を変えるために鉛が5%とか20%意図的に加えられている場合です。この場合は鉛の産地と銅の産地は関係ないかも知れません。特に現代に近づけば近づくほど、原料の移動は激しく、広範囲となるので関係は薄くなります。

青銅生産の比較的早い時期には銅・スズ・鉛を消費地で混合したと見るよりも、金属材料の生産地で予め定まった組成の青銅を作り、材料として各地へ送っていたと考える方が理解しやすいです。もちろん消費地で混合した場合もあったでしょう。でも、青銅製品の化学組成から考えると、製品の種別というよりも時代で化学組成が異なっているように思えるので、金属の生産地で銅・スズ・鉛を混合し、所定の化学組成を持った青銅として、消費地へ送ったと考える方が矛盾が少ないと考えられます。

一般的に考えると鉛は銅と似た性質を持っているので、銅鉱山の近くには鉛の鉱山もある場合が多いと地球化学的に考えられます。すなわち、銅が採掘された鉱山の近くに鉛鉱山の存在する可能性が高いのです。古代においては、銅を生産した場合、おそらく鉛を近くから入手し、合金としていたと思われます。鉛は銅に比べ

れば簡単に精錬できるので、廉価に必要量が供給されたと思われます。廉価な鉛を遠くから運んでいたのではコストがかかり過ぎ、また鉛の生産を遠くの鉱山に依存していたら、(鉛入り)青銅生産の原料の入手先が不安定です。それ故、青銅に含まれる鉛の同位体比は銅鉱山に近い鉛鉱山の可能性が高いと思われます。しかしながら、鉛同位体比は直接的には鉛の問題点であり、銅の問題とはならないことを肝に銘じておかなければなりません。

三つ目として混合の問題は少し複雑です。むしろかなり可能性があると考えられます。原則として2種類の鉛を混合すればその同位体比は両者の平均値となります。ここで鉛同位体比は産地毎に特有な値をとりませんが、雑多な値を示すわけではありません。地球科学的に見て、一つの山脈とか、地質学的な構造とかに沿って系統的

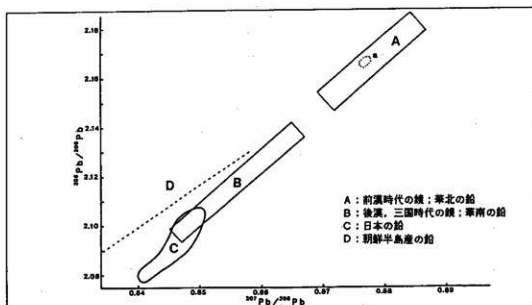


図8-a 東アジア地域における鉛同位体比分布の概念図 (A式図)

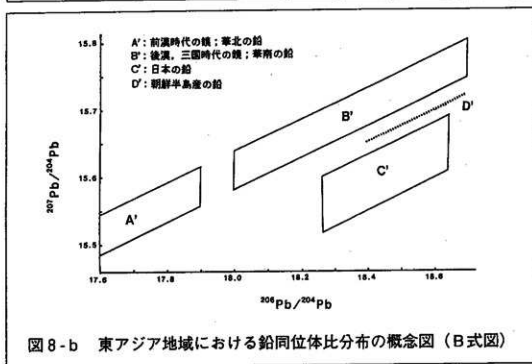


図8-b 東アジア地域における鉛同位体比分布の概念図 (B式図)

に変化します。それ故、鉛あるいは銅の採掘地が異なるとしても、同系統の銅と鉛を利用していけば、その値は地質学的にひとつの領域内であることが多いのです。それでも再溶解とか物資の移動で全く異なった産地の金属を混合する場合があります。この場合は混合として理解すればよいのです。

今までのところ、日本をめぐる東アジア地域においては図8-aとbのような概念図ができています⁽⁸⁻¹⁰⁾。

引用文献

- 1) Patterson, C. C., Tilton, G. and Inghram M. : Age of the Earth. Science, 121, p 69-75 (1955)
- 2) M. Tatsumoto, R. J. Knight, C. J. Allegre : Time differences in the formation of meteorites as determined from the ratio of lead-207 to lead-206. Science, 180, p 1279-1283 (1973)
- 3) R. D. Russell and R. M. Farquhar : 『Lead isotopes in geology』 Interscience Publishers Inc., p 243 (1960)
- 4) 木越邦彦 : 『年代測定法』 紀伊国屋書店 (東京), p 222 (1965)
- 5) Doe B. R. : 『Lead Isotopes』 Springer-Verlag (Berlin), (1970)
- 6) G. B. Dalrymple : 『The age of the Earth』 Stanford University Press, p 474 (1991)
- 7) Brill R. H. and Wampler J. M. : 『Museum of Fine Arts』 Boston, p 155 (1965)
- 8) Sato K. and Sasaki A. : 『Lead isotopic feature of the Besshi-type deposits and its bearing on the ore lead evolution』 Geochemical Journal 14, p 303-315 (1980)
- 9) 佐々木昭, 佐藤和郎, G. L. カミング : 『日本列島の鉱床鉛同位体比』 『鉱山地質32』 p 457-474 (1982)
- 10) 馬淵久夫, 富永健 : 『考古学のための化学10章』 東京大学出版会 (東京) p 219 (1981)
- 11) 馬淵久夫, 富永健 : 『続考古学のための化学10章』 東京大学出版会 (東京) p 246 (1986)
- 12) 馬淵久夫, 平尾良光 : 『鉛同位体比法による漢式鏡の研究』 『MUSEUM370』 p 4-10 (1982)
- 13) 馬淵久夫, 平尾良光 : 『鉛同位体比から見た銅鐸の原料』 『考古学雑誌』 68, p 42-62 (1982)
- 14) 馬淵久夫, 平尾良光, 佐藤晴治, 緑川典子, 井垣謙三 : 『古代東アジア銅貨の鉛同位体比』 『考古学と自然化学15』 p 23-39 (1982)
- 15) 馬淵久夫, 平尾良光 : 『鉛同位体比法による漢式鏡の研究(2)』 『MUSEUM』 382, p 16-30 (1983)
- 16) H. Mabuchi, Y. Hirao and M. Nishida : Lead isotope approach to the understanding of early Japanese bronze culture, Archaeometry, 27, p 131-159 (1985)
- 17) 馬淵久夫, 平尾良光 : 『東アジア鉛鉱石の同位体比-青銅器との関連を中心に-』 『考古学雑誌73』, p 199-210 (1987)
- 18) 平尾良光, 鈴木浩子 : 『弥生時代青銅器の産地推定』 『古代青銅の流通と製造』, p 165-208 (1999), アポロ社 (東京)

写 真 图 版



遺跡全景



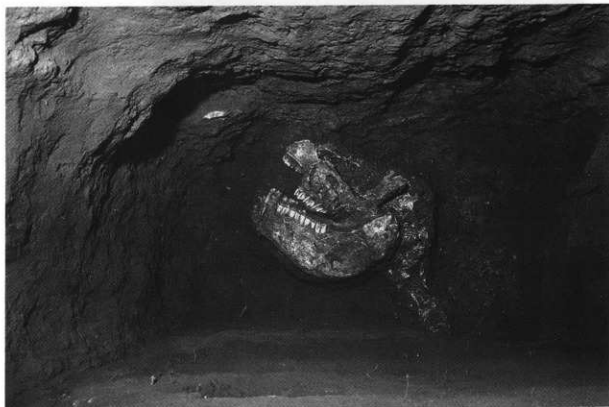
遺跡遠景（西から）



G区南西部全景



第2266号土坑遺物出土状況



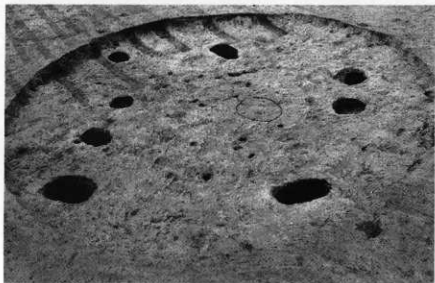
第27号井戸馬骨出土状況



テストピット土層断面



第354・355号住居跡



第356号住居跡

第357号住居跡

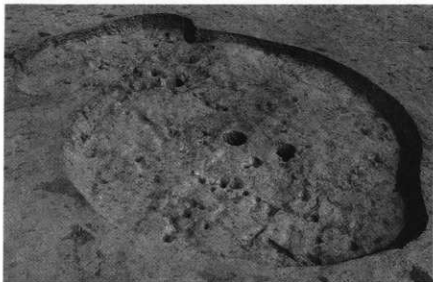


第358号住居跡



第385号住居跡





第386号住居跡



第389号住居跡
土器埋設炉



第397号住居跡



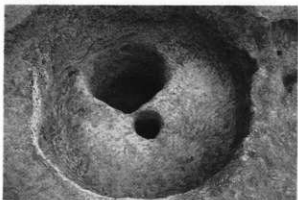
第399号住居跡



第400号住居跡
遺物出土状況



第407号住居跡



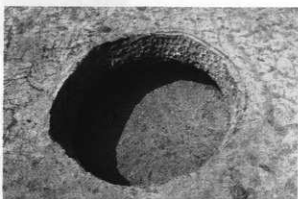
第1898号土坑



第2003号土坑遺物出土狀況



第2078号土坑



第2093号土坑



第2085号土坑土層断面・遺物出土狀況



第2085号土坑遺物出土狀況



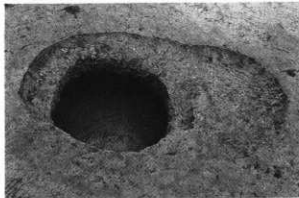
第2169号土坑土層断面・遺物出土狀況



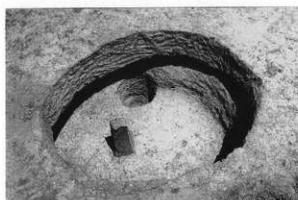
第2169号土坑



第2211号土坑遺物出土狀況



第2232号土坑



第2256号土坑遺物出土狀況



第2260号土坑遺物出土狀況



第2266号土坑土層断面



第2266号土坑3層遺物出土狀況



第2304号土坑遺物出土狀況



第2306号土坑



第1号掘立柱建物跡



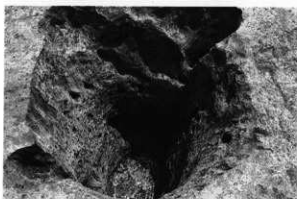
第3号掘立柱建物跡遺物出土状況



第2号方形竖穴状遺構



第3号方形竖穴状遺構



第23号井戸



第24号井戸



第26号井戸土層断面



第101号溝土層断面



S I 336-1



S I 338-1



S I 338-2



S I 340-1



S I 341-2



S I 341-1



S I 342-1



S I 343-1



S I 342-2



S I 344-2



S I 350-1



S I 350-2



S I 351-1



S I 350-3



S I 347-2



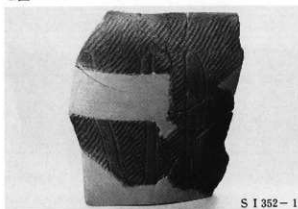
S I 351-2



S I 347-3



S I 347-1





S I 363-26



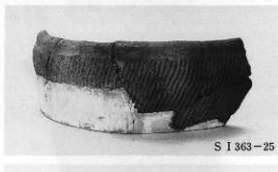
S I 364A-1



S I 365-2



S I 363-1



S I 363-25



S I 367-3



S I 367-1



S I 363-24



S I 365-1